



TITLE:

京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度. 京都大学構内遺跡調査研究
年報 2018, 2016: 1-184

ISSUE DATE:

2018-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/230858>

RIGHT:

京都大学構内遺跡調査研究年報

2016年度

京都大学文化財総合研究センター

京都大学構内遺跡調査研究年報

2016年度

京都大学文化財総合研究センター

序

本年報は、文化財総合研究センターがおこなった京都大学構内に残る遺跡の発掘調査のうち、2016年度に整理の終了したものについて、その研究成果をまとめたものである。

第Ⅰ部で報告する2件の調査のうち、病院構内の調査では、縄文時代早期の土器、中世や近世の土取り穴、近代の大学附属病院関連の遺物が見つかった。また、北部構内の調査では、終末期古墳の周溝である可能性が高い溝が見つかり、円筒埴輪の破片が多数出土した。近年の調査で、墳丘の削平された古墳が吉田南構内や本部構内で見つかってきており、古墳時代における吉田キャンパス一帯の土地利用を考える上で重要な成果となった。

第Ⅱ部の紀要では、5本の論考を掲載した。いずれの論考も、学内の発掘調査で得られた成果を関連資料などとの比較検討を進めて、さらに深めて考察した内容となっている。

第Ⅰ部・第Ⅱ部ともに、ご高覧いただき、ご批評いただければ幸いである。

当センターの前身である埋蔵文化財研究センターが1977年に発足してから、今年度で40周年を迎えた。この間の調査・研究成果は、本年報をはじめ、尊攘堂での資料展示などを通して、広く知ってもらえるように努めてきた。2014年度からは本学総合博物館と共催で、「文化財発掘」と題した展示も総合博物館で実施している。4回目となる今回は、「足もとに眠る京都—考古学からみた鴨東の歴史—」（会期：2月14日～6月24日）を企画した。この展示は、京都市考古資料館・京都市埋蔵文化財研究所とも連携して、京都市で旧石器～古墳時代、京都大学で飛鳥～室町時代を展示し、両者の展示を通して、吉田キャンパスの所在する鴨東地域を考古学から読み解くという新たな試みとなっている。

また今年度は、総合博物館と信濃川火焰街道連携協議会・新潟県立歴史博物館が主催した「火焰型土器と西の縄文」（2017年9月9日～10月22日、於総合博物館）にも共催として参加し、構内から出土した縄文時代資料の調査・研究成果を展示した。今後多方面と連携しつつ、社会的発信事業に継続的に取り組んでいきたい。

京都大学吉田キャンパスは、ほぼその全域が周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、発掘調査を終えた面積は全域の約15%である。当センターがおこなっている様々な取り組みの中で、基幹となるミッションは、学内における施設整備に伴う発掘調査や立合調査である。こうした事業を円滑に進めるためには、施設部をはじめとした関連部局からの多大なご協力が不可欠である。今後ともご支援ご協力をお願い申し上げる次第である。

2018年3月

京都大学文化財総合研究センター長
吉井秀夫

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2016年4月1日から2017年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学文化財総合研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系、 $x = -108,000$
 $y = -20,000$ ）が（ $X = 2,000$ $Y = 2,000$ ）となる京都大学構内座標により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：S E，土坑：S Kのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
I：京都大学病院構内A H18区の発掘調査
II：京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査
（例 I 1：京都大学病院構内A H18区出土遺物1番）
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のもの、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺物の撮影は、それぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、笹川尚紀が担当し、千葉豊、伊藤淳史、富井眞、内記理、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾玲、藤森良祐が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度

目 次

第 I 部 2016年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2016年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の経過	1
2 調査の成果	1
第 2 章 京都大学病院構内 A H18区の発掘調査	3
1 調査の概要	3
2 層 位	3
3 縄文時代の遺物	5
4 中世の遺跡	7
5 近世・近代の遺跡	10
6 小 結	33
第 3 章 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査	37
1 調査の経緯	37
2 調査の成果	38
3 1973年農学部総合館周辺発掘調査について	50
4 小 結	59
参 考 文 献	61
京都大学構内遺跡調査要項	64
報告書抄録	75

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要X X IV

弥生時代前期の吉田二本松町遺跡における土器の正面意識

1 はじめに	79
2 研究の背景	79
3 検討方法と対象資料	82
4 観察の結果	88
5 考察と課題	91
6 おわりに	95

京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬

—吉田南構内A O 22区出土資料の紹介—

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

1 はじめに	101
2 北部構内から出土した近世瓦の刻印	103
3 本部構内から出土した近世瓦	104
4 熊野構内から出土した近世瓦	108
5 吉田南構内から出土した近世瓦	112
6 病院構内・病院西構内から出土した近世瓦	114
7 京都に搬入された瓦	114
8 京都の瓦工と刻印	115
9 ま と め	118

蓮月焼を模倣した陶器について

—京都大学病院構内A E 19区S K 15出土資料—

1 はじめに	123
2 調査の概要と井戸S K 15	123
3 井戸S K 15出土資料	124
4 玉木良斉について	150

5 おわりに	153
--------	-----

土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書

1 はじめに	155
2 土佐藩白川邸の沿革	156
3 尾張藩吉田邸の沿革	167
4 おわりに	176

図 版	巻末
-----	----

図 版 目 次

- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 図版 2 京都大学病院構内 A H18区
- 1 表土・攪乱除去後の全景（北から）
 - 2 中世遺構掘りあげ後の全景（北から）
- 図版 3 京都大学病院構内 A H18区
- S X 6 出土遺物, S K 1 出土遺物, S E 1 出土遺物
- 図版 4 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
- 1 第 5 工区15地点北壁の層位（南から）
 - 2 第 5 工区15地点北壁の形象埴輪出土状況（南から）
 - 3 第 5 工区 A 地点の S X 1 断面（北東から）
 - 4 埋管掘削底面における S X 1 確認状況（南から）
 - 5 S X 1 の礫の集積（東から）
 - 6 S X 1 の礫・埴輪の出土状況（北から）
- 図版 5 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
- S X 1 出土遺物(1)
- 図版 6 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
- S X 1 出土遺物(2)
- 図版 7 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
- 1973年農学部総合館周辺の発掘調査
- 1 I トレンチ農学部正門付近（北から）
 - 2 A トレンチ平安層遺物出土状況（北から）
 - 3 I トレンチ溝状遺構甕出土状況（その 1・南から）
 - 4 I トレンチ溝状遺構甕出土状況（その 2・東から）
 - 5 I トレンチ拡張後溝状遺構完掘状況（南から）
- 図版 8 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
- 1973年農学部総合館周辺の発掘調査
- 土師器, 軒丸瓦

- 図版 9 京都大学北部構内 B C 30区ほかの立合調査
1973年農学部総合館周辺の発掘調査
軒平瓦
- 図版10 京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬
1 吉田南構内 A O 22区西半域の古代中世遺構全景（北東から）
2 平安時代中期の井戸 S E 28（北から）
- 図版11 京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬
1 S E 28出土
2 中世土坑 S K 29出土
3 中世井戸 S E 26出土
- 図版12 京都大学病院構内 A E 19区
1 S K 15上面（西から）
2 S K 15遺物出土状況（北から）
3 S K 15遺物出土状況（北東から）
4 S K 15遺物出土状況（北東から）
5 S K 15遺物出土状況（東から）
6 S K 15下底部（北から）
- 図版13 京都大学病院構内 A E 19区
S K 15出土遺物
- 図版14 京都大学病院構内 A E 19区
S K 15出土遺物
- 図版15 京都大学病院構内 A E 19区
S K 15出土遺物
- 図版16 京都大学病院構内 A E 19区
S K 15出土遺物
- 図版17 京都大学病院構内 A E 19区
S K 15出土遺物

挿 図 目 次

病院構内 A H18区の発掘調査		
図 1	調査地点の位置……………	3
図 2	調査区東西畔の層位……………	4
図 3	下層砂礫出土縄文土器, S X 6 出土縄文土器, 灰褐色土出土縄文土器……………	6
図 4	中世の遺構……………	7
図 5	S X 2 出土遺物, S X 6 出土遺物(1)……………	8
図 6	S X 6 出土遺物(2)……………	9
図 7	近世・近代の遺構……………	11
図 8	S X 3 出土遺物, S X 4 出土遺物 ……………	13
図 9	S X 1 出土遺物, S X 5 出土遺物 ……………	15
図10	小穴出土遺物, S D 1 出土遺物(1) ……………	16
図11	S D 1 出土遺物(2)……………	17
図12	S K 1 出土遺物(1)……………	19
図13	S K 1 出土遺物(2)……………	20
図14	S K 1 出土遺物(3)……………	21
図15	S K 1 出土遺物(4)……………	22
図16	S K 1 出土遺物(5)……………	23
図17	S K 1 出土遺物(6)……………	24
図18	S E 1 出土遺物(1)……………	26
図19	S E 1 出土遺物(2)……………	27
図20	灰褐色土出土遺物(1)……………	29
図21	灰褐色土出土遺物(2)……………	30
図22	灰褐色土出土遺物(3)……………	31
図23	表土・攪乱出土遺物……………	32
北部構内 B C 30区ほかの立合調査		
図24	調査地点の位置……………	37
図25	調査区配置と層序・主要遺構の 確認位置……………	38
図26	第 4・5 工区の層序模式図……………	41
図27	第 5 工区の主要遺構配置図……………	42
図28	第 5 工区 A 地点南壁の S X 1 の 層序……………	42
図29	第 7 工区の層序模式図……………	45
図30	第 8 工区の層序模式図……………	46
図31	第 5 工区の出土遺物(1)……………	47
図32	第 5 工区の出土遺物(2)……………	48
図33	第 7・8 工区の出土遺物……………	50
図34	1973年農学部総合館周辺調査 トレンチ配置図……………	51
図35	F トレンチ北壁・B トレンチ東壁 の層位……………	52
図36	I トレンチ西壁の層位 (農学部正門より北側) ……	54
図37	I トレンチ溝状遺構内の甕の 出土状況……………	55
図38	1973年農学部総合館周辺調査の 出土遺物(1)……………	56
図39	1973年農学部総合館周辺調査の 出土遺物(2)……………	57

図40 1973年農学部総合館周辺調査の 出土遺物(3)……………58	京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印
	図53 幕末における吉田周辺 ……101
弥生時代前期の吉田二本松町遺跡にお ける土器の正面意識	図54 北部構内出土の近世瓦 ……105
図41 赤羽古墳の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………81	図55 北部構内出土の近世瓦で確認され た刻印 ……105
図42 雪野山古墳の土器の展開写真 および実測図と出土情報……………83	図56 本部構内出土の近世瓦 ……107
図43 吉田二本松町遺跡における検討 対象個体の出土位置……………84	図57 本部構内出土の近世瓦で確認され た刻印 ……107
図44 事例1の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………85	図58 熊野構内出土の近世瓦で確認され た刻印 その1 ……109
図45 事例2の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………86	図59 熊野構内出土の近世瓦で確認され た刻印 その2 ……111
図46 事例3の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………87	図60 吉田南構内出土の近世瓦 ……113
図47 事例4の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………89	図61 吉田南構内出土の近世瓦で確認さ れた刻印 ……113
図48 事例5の土器の展開写真および 実測図と出土情報……………90	図62 病院構内出土の近世瓦 ……113
京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬	図63 病院構内・病院西構内出土の 近世瓦で確認された刻印 ……113
図49 調査地点（A O 22区）の位置…97	蓮月焼を模倣した陶器について
図50 A O 22区検出の平安時代中期の 主要な遺構……………98	図64 調査地点の位置 ……124
図51 平安時代中期の井戸 S E 28…99	図65 S K 15出土遺物(1) ……126
図52 A O 22区出土の平安時代土馬 ……………100	図66 S K 15出土遺物(2) ……127
	図67 S K 15出土遺物(3) ……129
	図68 S K 15出土遺物(4) ……130
	図69 S K 15出土遺物(5) ……131
	図70 S K 15出土遺物(6) ……132
	図71 S K 15出土遺物(7) ……133
	図72 S K 15出土遺物(8) ……135
	図73 S K 15出土遺物(9) ……136

図74	S K 15出土遺物(10) ……………	137	図81	S K 15出土遺物(17) ……………	150
図75	S K 15出土遺物(11) ……………	144	図82	頂妙寺墓地に所在する玉木氏の 墓石 ……………	151
図76	S K 15出土遺物(12) ……………	145			
図77	S K 15出土遺物(13) ……………	146			
図78	S K 15出土遺物(14) ……………	147		土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわ る覚書	
図79	S K 15出土遺物(15) ……………	148	図83	「吉田御屋敷之図」……………	173
図80	S K 15出土遺物(16) ……………	149			

表 目 次

表 1	第 4 ・ 5 工区の立合調査一覧…	40	表 4	蓮月焼・蓮月焼模倣陶器一覧 ……………	139
表 2	第 7 ・ 8 工区の立合調査一覧…	44			
表 3	京都大学構内遺跡のおもな調査 ……………	65			

第 I 部 2016年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2016年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学病院構内 A H 18 区の発掘調査

第 3 章 京都大学北部構内 B C 30 区ほかの立合調査

第1章 2016年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉井秀夫 千葉 豊 笹川尚紀

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2016年度には、以下のように立合調査6件、資料整理2件をおこなった（括弧内は図版1および表3の地点番号）。

立合調査	桂職員宿舍撤去（西京区下津林遺跡）	（第1章，448）
	iPS細胞研究所第3研究棟屋外消火栓埋設配管（病院西構内A H12区）	（第1章，図版1－449）
	基幹・環境整備（屋外ガス等）（北部構内B C30区ほか）	（第3章，図版1－450）
	基幹・環境整備（屋外ガス等）（病院東構内A K17区）	（第1章，図版1－451）
	屋外排水改修（本部構内A Y22区）	（第1章，図版1－452）
	基幹・環境整備（舗装等）（北部構内B F34区）	（第1章，図版1－453）
資料整理	熊野職員宿舍改築（熊野構内A A18区）	（整理中，図版1－435）
	総合高度先端医療病棟（Ⅱ期）新営（病院東構内A H18区）	（第2章，図版1－436）

2 調査の成果

以上のうち、2016年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、病院東構内A H18区の発掘調査、北部構内B C30区ほかの立合調査にかんしては、それぞれ第2・第3章において成果を詳記しているので、参照されたい。

病院構内A H18区 本調査区は、病院東構内の中央のあたりに位置している。

発掘調査の結果、下部のシルトならびに砂礫層から、縄文時代早期の押型文土器と、そして、それにとまなうと思われる無文土器とがいくつかひろいあげられた。前者は、本調査区より東ないしは北に所在していた、押型文期の遺跡から流水によってもたらされたものであると想定される。

中世にかんしては、その後期のものであるともくされる2つの土取り穴が検出された。いずれも、その大きさは分明にしえないけれども、黄灰色シルトを採取するためのものであったと考えられる。

近世の遺構としては、土坑・土取り穴・溝などがあげられる。土坑の1つは、不要物を捨てるためのものであったと思われ、また、2つの土取り穴は、江戸時代後期に、前にふれた黄灰色シルトをえることを目的にして掘られたと推測される。そして、溝については、幕末ごろにもうけられ、耕作のためにしばらくの間、使用されたと考えられる。

近代にかんしては、土坑と井戸がみついている。前者からは、「住瓦庄」という刻印銘を有する瓦が2点出土している。江戸時代の最末から明治時代の初頭にかけて、北部構内に所在していた土佐藩の白川邸において、同じ瓦が葺かれていた点が確認されているので、その瓦の一部が他所で再利用されたのち、本調査区の土坑に廃棄されるにいたった可能性が残されているといえる。いっぽう、後者からは、湯たんぽをはじめとする京都帝国大学附属病院関連の遺物が多くとりあげられており、その大規模な改修工事のことを考えるうえで、欠かすことのできない素材となるのではないかと推量される。

北部構内B C30区ほか 北部構内では、基幹・環境整備工事にともなう立合調査がひろく実施された。それらのなかで、とりわけ注目すべき成果としては、第5工区のA地点で認められた、溝状の落ち込みがあげられる。その埋土からは、円筒埴輪の破片が多くみつかり、ひっきょう、それは、古墳の周溝であるとも推察される。

くわえて、さような溝状の落ち込みからきわめて近いところに位置している、9地点（図版1を参照）における遺構や遺物などの洗いなおしがあわせておこなわれた。その結果、同地点のIトレンチから検出された、楕円形に近い形状を呈する溝状遺構は、その掘削が古墳時代終末期にさかのぼること、ひいては、墳墓の周溝にあたる可能性が指摘されるにおよんでいる。

以上のように、本年度は、とくに古墳時代・近代にかんして大きな成果がえられた。いづれについても、今後、十分に検討を深めていく余地が残されており、研究がさらに進展することで、あらたな事実が明らかになることが期待される。

第2章 京都大学病院構内A H18区の発掘調査

笹川尚紀 千葉 豊

1 調査の概要

本調査区は、京都大学病院東構内の中央やや西寄りに位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1，図1-436）。ここに、Ⅱ期病棟およびIPS等臨床試験センター棟の新営が計画されたため、遺跡がすでに壊されていると想定しうる範囲をのぞいて、発掘調査をおこなった。調査期間は2016年2月15日から4月15日まで、調査面積は480㎡である。

本調査区の周辺では、南西に近接する34地点において、中世前期の溝、近世の井戸・集石・溝、近代の柵列などがみつかった（泉1978）。また、南に位置する338地点からは、中世の井戸、近世の溝・石垣・集石・井戸・土坑などが検出されている（富井・笹川2010）。

かかる成果をふまえたうえで、それらの時代における土地利用の推移について明らかにするために、発掘調査を実施した。その結果、中世の土取り穴、近世の土坑・土取り穴・溝、近代の土坑・井戸などを確認するとともに、整理箱31箱分の遺物をえるにいった。

2 層 位

本調査区は、現代における工事にともない、約3/4の面積がすでに攪乱されていた。そこで、残存部分において、地層を観察するための畔を東西方向に設定した（図2）。

現地表の標高は約49mであり、表土は機械掘削によってとりのぞいた。第1層の灰褐色

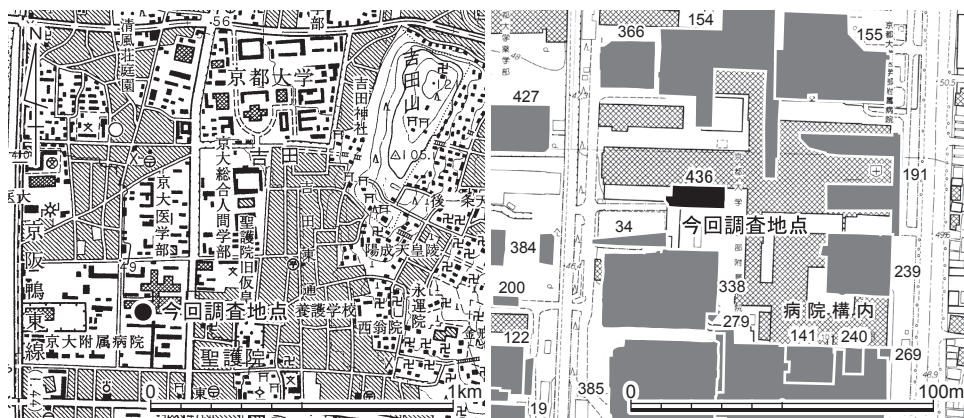


図1 調査地点の位置（左1/25000，右1/2500）

京都大学病院構内A H18区の発掘調査

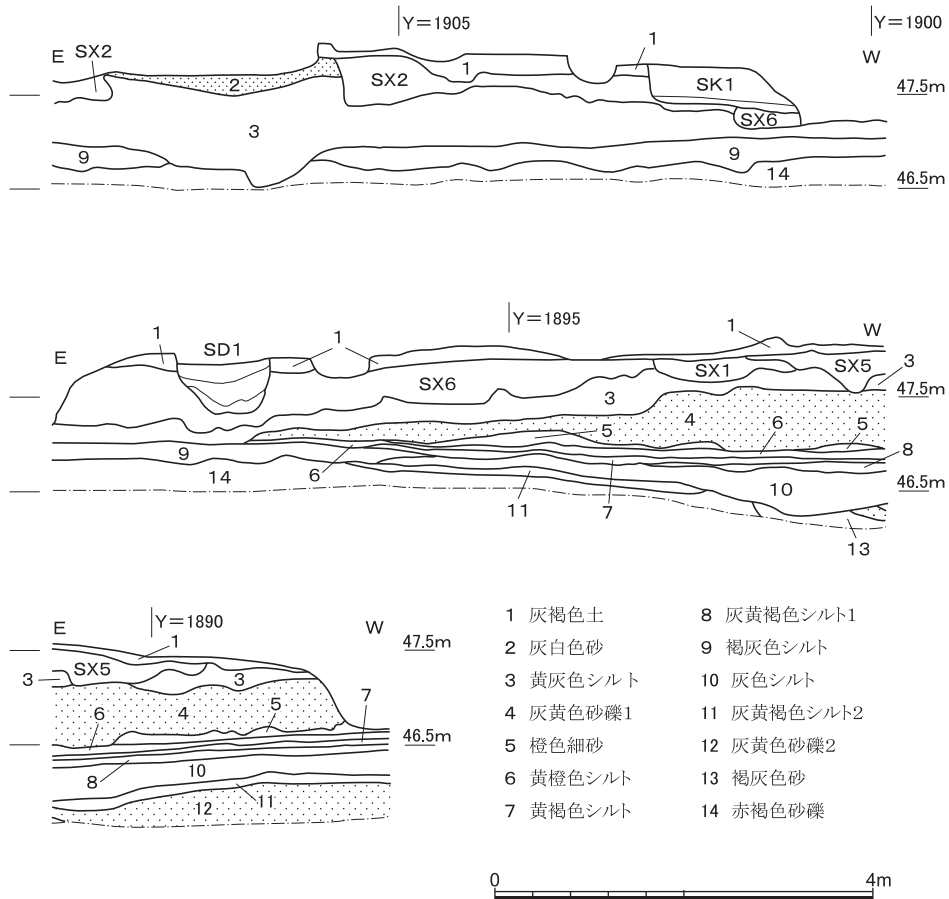


図2 調査区東西畔の層位 縮尺1/80

土は、近世後半の遺物包含層で、耕作土であるともくされる。

その下のSX1・SX5とSX2・SX6は、第3層の黄灰色シルトを採取する目的で掘られた、近世後期と中世後期の土取り穴であろう。

第2層の灰白色砂は、北の方角からの自然流路の堆積物であると考えられる。近世前半ごろに溜まったのではないかと推量される。

第4層以下は、シルト・砂・礫から構成される水成の堆積物で、いずれも白川系流路によって運搬されてきたものである。このうち、第9層～第14層のシルト・砂礫層から、縄文時代早期の押型文土器とそれに伴うとおぼしき無文土器が出土した。

3 縄文時代の遺物

第9層～第14層のシルト・砂礫を主体とする層群から出土した早期の土器と歴史時代の遺構・遺物包含層から混在して出土した中期～晩期の土器について解説する（図3）。

I 1～I 18は下層のシルト・砂礫を主体とする層群から出土した。I 1～I 7は山形押型文を施文している。I 1・I 2は口縁部の破片。I 3～I 7は体部の破片。いずれも山形押型文を横位に施文している。器壁の厚みは、I 2が7mmあるが、ほかは4～5mmと薄手の作りである。I 8は内面に左下がりの沈線を施している。凸部は丸く調整されている。外面は磨滅で判然としないが、楕円押型文が施文されている可能性もある。I 9も磨滅しているが、体部には楕円押型文を施文している。I 10～I 18は無文土器。器壁の厚みは、7mm～12mm。I 10とI 11は口縁端部で、丸く収めている。

第9層～第14層から出土した土器のうち、山形押型文を施文するI 1～I 7は、神並上層式～黄島式直前段階に、楕円押型文を施文するI 8とI 9は黄島式に型式比定することができよう。無文土器の編年の位置づけに関しては、黄島式に伴なうという通説に対して、出土状況の検討などから最近議論があるが〔兵頭2008〕、吉田二本松町遺跡で黄島式に伴なうような形で無文土器が出土している事例〔千葉・阪口2005〕を勘案すれば、今回の無文土器も押型文土器（黄島式）に伴出しているとみるのが自然であろう。

比叡山西南麓では、押型文土器を出土する遺跡が複数発見されており、北白川廃寺下層遺跡では山形文を主体とする黄島式直前段階の住居跡も見つかっている〔網1994〕。先述した吉田二本松町遺跡では黄島式に比定できる押型文土器がまとまって出土している。

病院構内ではA H19区から山形押型文土器が1点見つかったが、歴史時代の包含層から出土したものであった〔千葉1991〕。今回出土した押型文土器は、出土状況と磨滅の状況から判断して、より東あるいは北で展開していた押型文期の遺跡からの流れ込みであると理解してよいだろう。それとともに、下層の砂礫を中心とする堆積物から出土したことから、下層に堆積する砂礫の年代の一端を知る材料ともなった。

I 19・I 20は中世の土取り穴S X 6の埋土より混在して出土。I 19は口縁端よりやや下がった位置を沈線が横走する。中期末に属するか。I 20は無文土器で、内外面を撫でて仕上げている。口縁端部は丸く収めている。後期の無文粗製土器。

I 21は近世の包含層より出土した凸帯文土器。口縁端部に接するように、断面三角形の凸帯が貼り付く。凸帯には軽い刻みが加えられている。晩期末の長原式である。

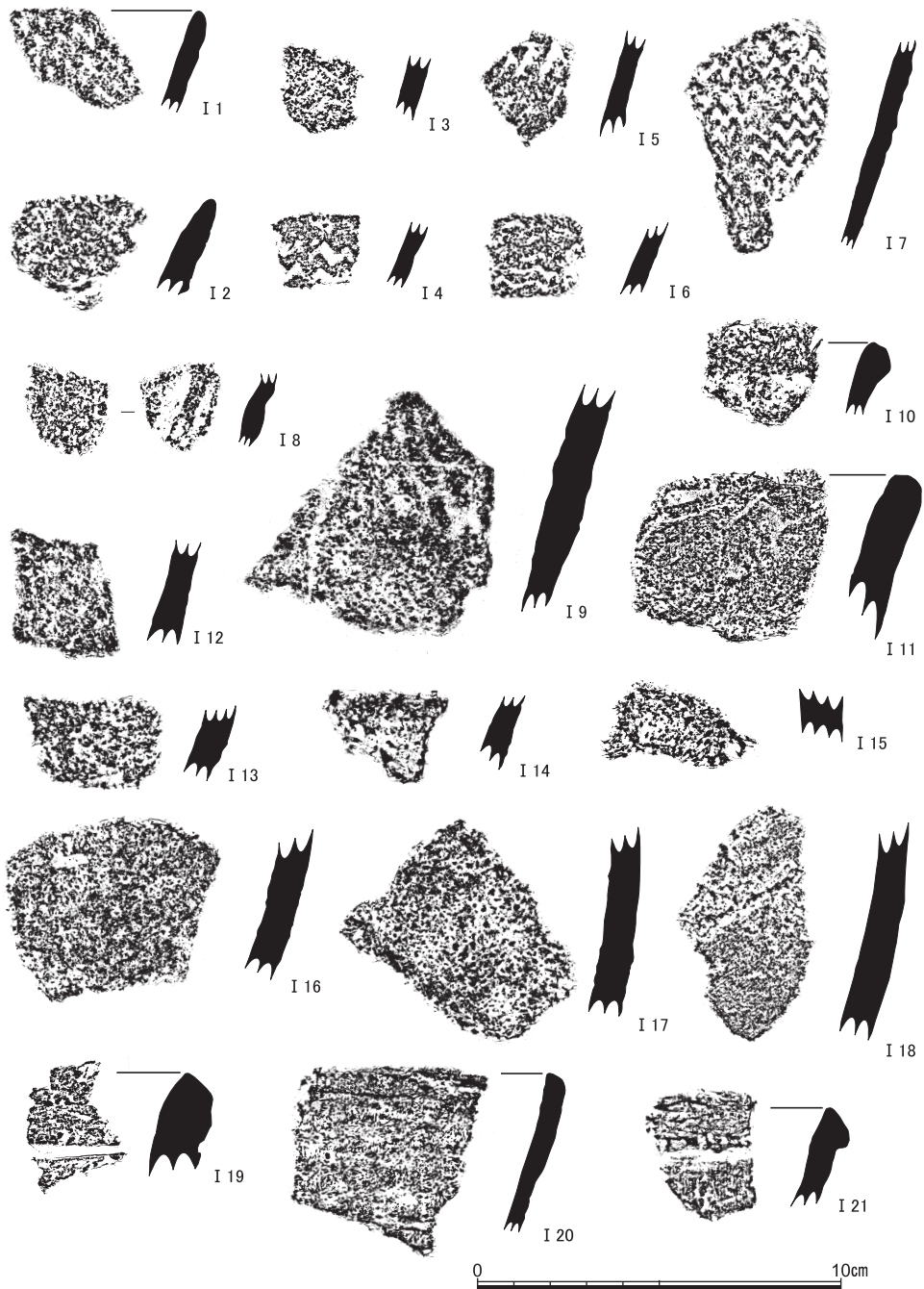


図3 下層砂礫出土縄文土器（I 1～I 18早期），S X 6出土縄文土器（I 19中期，I 20後期），灰褐色土出土縄文土器（I 21晩期）

中世の遺跡

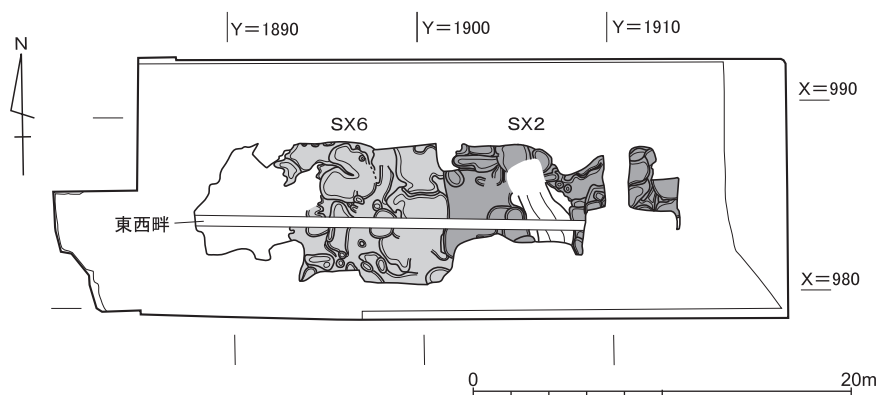


図4 中世の遺構 縮尺1/400

4 中世の遺跡

(1) 遺 構 (図版2, 図4)

この時期の遺構としては、SX2とSX6を検出した。これらの遺構は、第3層の黄灰色シルトを採取するための土取り穴であると考えられる。

それら土取りの時分にかんしては、SX2からF₁類とF₃類の土師器皿、SX6からF₁類とF₂類の土師器皿が出土しているので、中世後期、より具体的に述べると、16世紀代に求められると推測される。SX6よりもSX2の方が先行するものの、時期的に大きなへだたりはなかったのではないと思われる。

ちなみに、SX2やSX6の埋土には、茶褐色土・褐灰色土・黄灰色シルトなどにくわえて、黒褐色土が混ざり合っていた。また、それら2つの遺構からは、古代の遺物がいくつかとりあげられている。したがって、これら事柄を勘案すると、古代の遺物包含層である黒褐色土が、このあたりにおいて広がっていた可能性が存しているといえる。

(2) 遺 物 (図版3, 図5・6)

SX2出土遺物 (I22～I36) I22～I32は土師器皿。I22は「て」字状口縁手法のB₂類。I23～I26は2段撫で手法のC₃類。I23～I25は口径9.5～10cm, I26は口径13cmである。I27・I28は1段撫で手法で、前者は素縁のD₃類、後者は端部面取りのD₄類。I27は口径10cm, I28は口径16cmである。I29～I32は1段撫で手法で、I29はE₃類, I30はF₁類, I31・I32はF₃類。いずれも小片で、口径は不明である。I29は口縁端部

京都大学病院構内A H18区の発掘調査

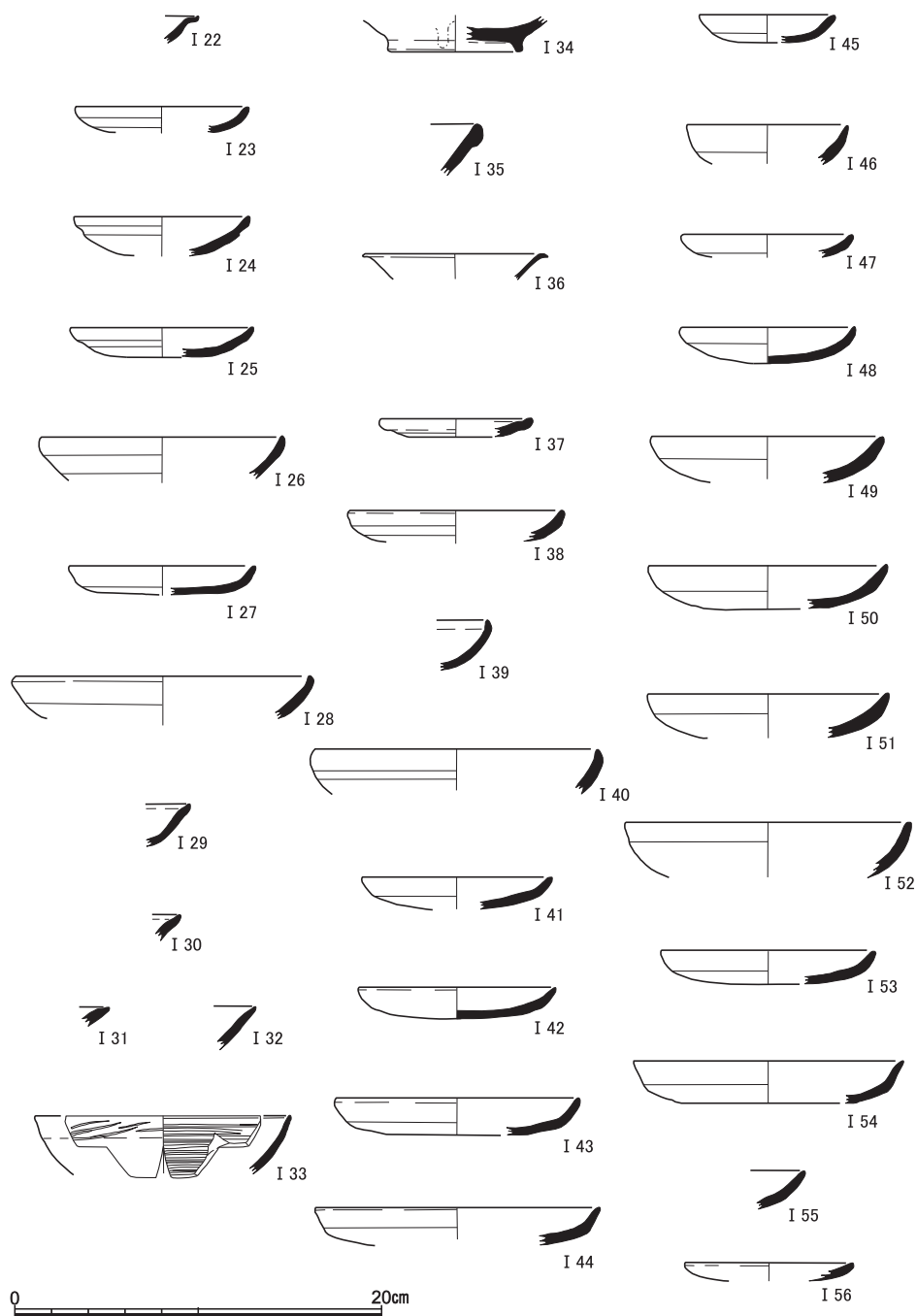


図5 S X 2出土遺物 (I 22～I 32土師器, I 33瓦器, I 34灰釉陶器, I 35・I 36白磁), S X 6 出土遺物(1) (I 37～I 56土師器)

中世の遺跡

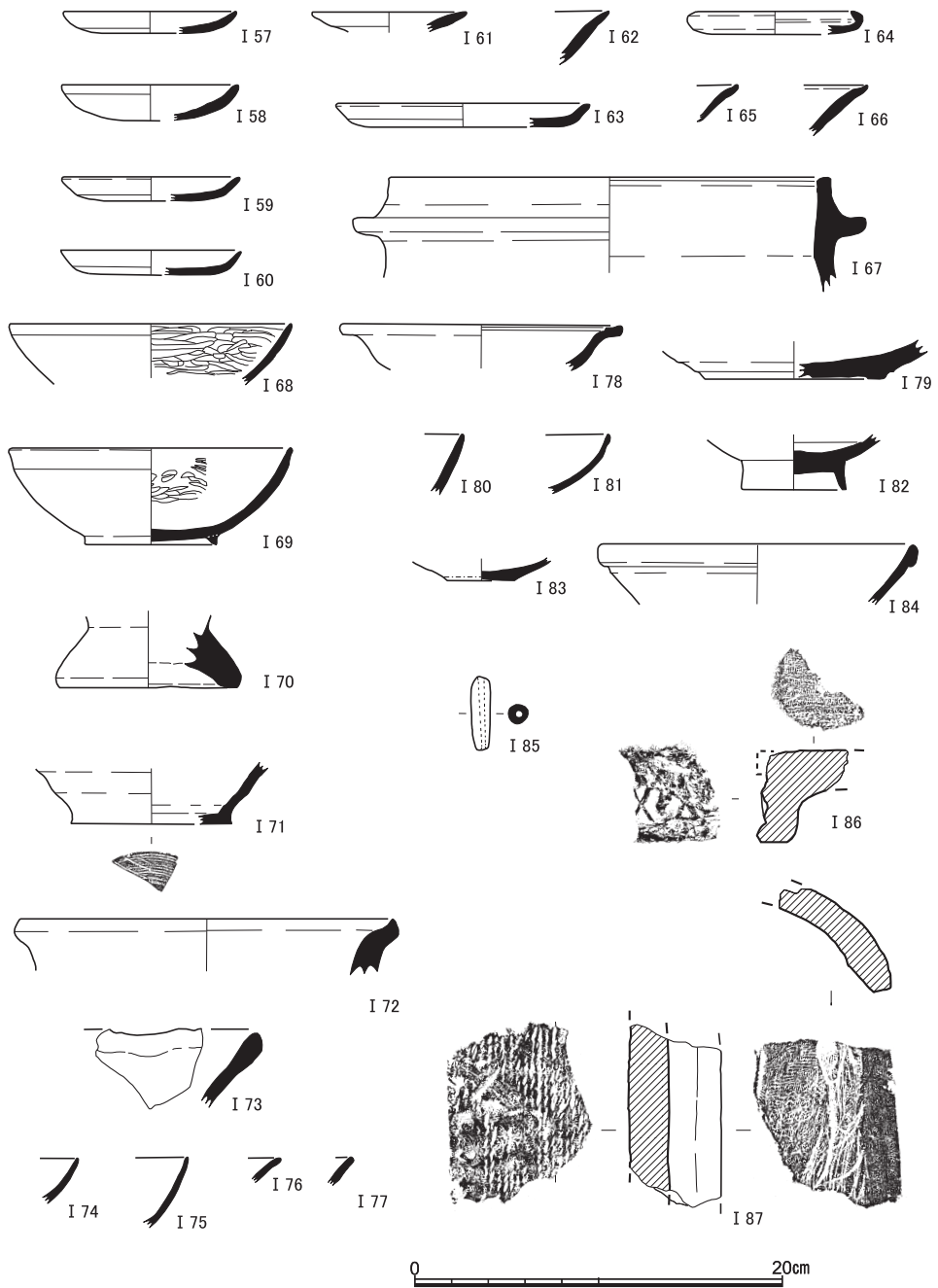


図6 SX6出土遺物(2) (I 57～I 67土師器, I 68・I 69黒色土器, I 70瓦器, I 71～I 73須恵器, I 74・I 75緑釉陶器, I 76・I 77灰釉陶器, I 78・I 79陶器, I 80青磁, I 81～I 84白磁, I 85土製品, I 86・I 87瓦)

に煤がわずかに付着している。

I 33は楠葉型の瓦器碗。体部はゆるやかに内湾し、端部はやや尖り気味となる。外面に篋磨き、内面に圈線篋磨きが認められる。

I 34は灰釉陶器の碗ないしは皿。底部内面に灰釉が施され、貼り付け高台を有する。

I 35は口縁部を玉縁とする白磁碗。I 36は白磁皿。口縁部が横方向に屈折する。

S X 6 出土遺物 (I 37～I 87) I 37～I 63は土師器皿。I 37はB₄類, I 38はC₃類, I 39・I 40はC₄類, I 41～I 44はD₂類, I 45～I 52はD₃類, I 53・I 54は乙訓在地形, I 55～I 60はE₁類, I 61はF₁類, I 62・I 63はF₂類である。I 64は土師器受皿。I 65は灰白色を呈する土師器くぼみ底小碗。I 66は灰白色の土師器皿で、口縁部が外反し、端部を内側へつまんでいる。I 67は土師器羽釜。口径は24cmである。

I 68・I 69は黒色土器碗。いずれも内面のみを黒色に仕上げるA類にあたる。前者は内面に緻密な篋磨きがみうけられる。後者は断面三角形の貼り付け高台を有する。どちらも口径は15cmである。

I 70は器種不明の瓦器の底部片。底径11cm前後で、脚部は外側へ開いている。

I 71は須恵器壺。底部外面に回転糸切り痕が認められる。I 72・I 73は須恵器片口鉢。前者は口縁部が強く外反し、その端部はつまみあげられている。

I 74・I 75は緑釉陶器碗。I 76・I 77は灰釉陶器の碗ないしは皿。

I 78・I 79は古瀬戸。前者は折縁中皿。後者は底部の破片で、外面を露胎とし、低い高台を削り出している。

I 80は青磁碗。I 81～I 84は白磁碗・皿。I 81・I 84は口縁部が玉縁となる。I 82は見込みに段が存し、外面は露胎で、高く直立する高台を有している。

I 85は土鍾。長さ2cm, 幅0.5cmで、直径0.3～0.4cmの孔をもつ。

I 86は軒平瓦。斜格子文のなかに菱形文を配する。瓦当折り曲げ式で、凹面に布目痕が残されている。I 87は丸瓦。凸面には縦方向の縄叩き、凹面には布目の痕跡が認められる。

5 近世・近代の遺跡

(1) 遺 構 (図版2, 図7)

近世の遺構 この時期の遺構としては、土坑・土取り穴・小穴・溝があげられる。

S X 3は、第1層の灰褐色土を掘削したのち、検出された。現代において掘りうがたれているがゆえに、その平面形を把握することができない。底部の標高は約46.95mで、検

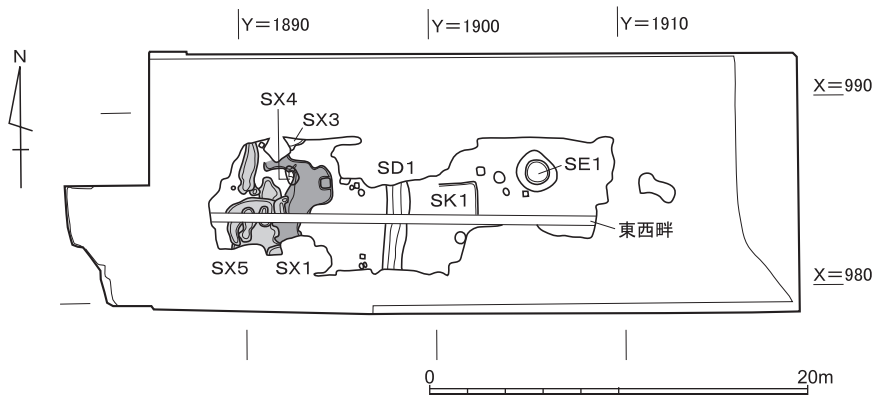


図7 近世・近代の遺構 縮尺1/400

出面からの深さは約43.5cmをはかる。第3層の黄灰色シルトが掘りぬかれており、かつ遺物が多くみつまっていることからすると、SX3は、不要物を廃棄するための土坑とみなすのが妥当であろう。

SX4は、土取り穴SX1の下部で確認された。検出面からの深さは約15cmをはかる。その埋土は細かな石で、土取り穴であるSX1やSX5の埋土とは異なっていることからすると、SX4は、土取り穴の一部ではなく、平面楕円形を呈する土坑と判断するのが妥当であろう。

SX1とSX5は、灰褐色土を掘削したのちにみつかった土取り穴。第3層の黄灰色シルトを採取するために掘られたもので、前者は後者よりも時期的にややさかのぼる。

以上の土坑SX3・SX4、土取り穴SX1・SX5は、出土遺物をふまえると、いずれも江戸時代後期のものであると想定される。

SD1は、灰褐色土の上面で確認された南北溝。幅は1mから1.2mくらい、深さは40cmから50cmくらいをはかる。

その埋土は3つの層に分けられ、一番下の層には灰白色砂が混じり、またまん中の層ではそれが筋状に入っているのがみうけられた。それゆえに、水が流れていたことは、まず否定しえないといえる。

出土遺物などから、幕末ごろに掘られ、そののちしばらくのあいだ、耕作のために用いつづけられていたのが察せられる。

近代の遺構 SK1は土坑で、その西側は現代の掘削によって破壊されていた。ただ

し、東西畔で観察したところ、平面で不定形となるのが判然となった。出土遺物は瓦が多く、それらを捨てるために掘られたと推量される。

S E 1 は井戸で、井筒は漆喰によって作られている。その底はあまりにも深いがゆえに、井筒上面から約 3 m のところで掘りあげを断念した。なお、そのときの標高は約 44.4 m をかぞえる。

埋土には、20 個を越えると思われる湯たんぽの多量の破片など、京都帝国大学附属病院関連の遺物が含まれていた。よって、それが使用していた井戸であったとみなしてよからう。

ちなみに、S E 1 からは、円筒に円板が付き、その中心部分を穿孔させる用途不詳の遺物が出土している。それには「PATENTED AUG.14,1900」とみえ、つまるところ、明治 33 年 8 月 14 日に特許をとった製品（の一部）であったことが知られる。くわえて、この遺物には、煤が厚く付着していることからすると、京都帝国大学附属病院において使われていたのが推測される。

これら事柄を勘案すると、それが S E 1 に捨てられたのは、明治 33 年 8 月 14 日からひさしくしてのちであり、ひいては、そこからの出土遺物の過半もまた、おおよそ同じ時期に廃棄されるにいったのではないかという点がくみとれよう。

(2) 遺 物（図版 3、図 8～23）

S X 3 出土遺物（I 88～I 117） I 88 は古代の土師器甕。口縁部内外面に横撫でを施し、その端部を内側へ折り返している。

I 89～I 94 は土師器皿。口径 9～10 cm で、いずれも見込みに圈線を有する。I 92・I 93 は口縁端部に煤が付着している。I 94 は煤によって全体が黒ずんでいる。I 95 は土師器。口縁部を外側に折り曲げ、体部外面中ほどを突出させる。I 96 は土師器焙烙。口径 22 cm で、口縁部と体部の境に段をもつ。体部外面は煤によって黒変している。I 97 は内面に布目痕を有する焼塩壺の蓋。I 98 は土師器のいわゆるつぼつぼ。I 99 は軟質施釉陶器の玩具。舟形で、内面中央に突起が存する。

I 100～I 103 は陶器碗。I 101 は京・信楽系で、銹絵をもち、透明の釉がかけられている。また、上絵が剥がれ落ちた痕跡が認められる。I 102 は体部外面にくぼみが存する。I 103 は腰折形。I 104 は軟質施釉陶器で、ままごと道具のすり鉢。

I 105 は青磁碗。輪高台で壘付を露胎とする。I 106～I 114 は磁器染付の盃・碗の類。I 107 は口縁端部内側の釉を剥ぎとっているもので、蓋をもつ可能性がある。I 112 は見込み

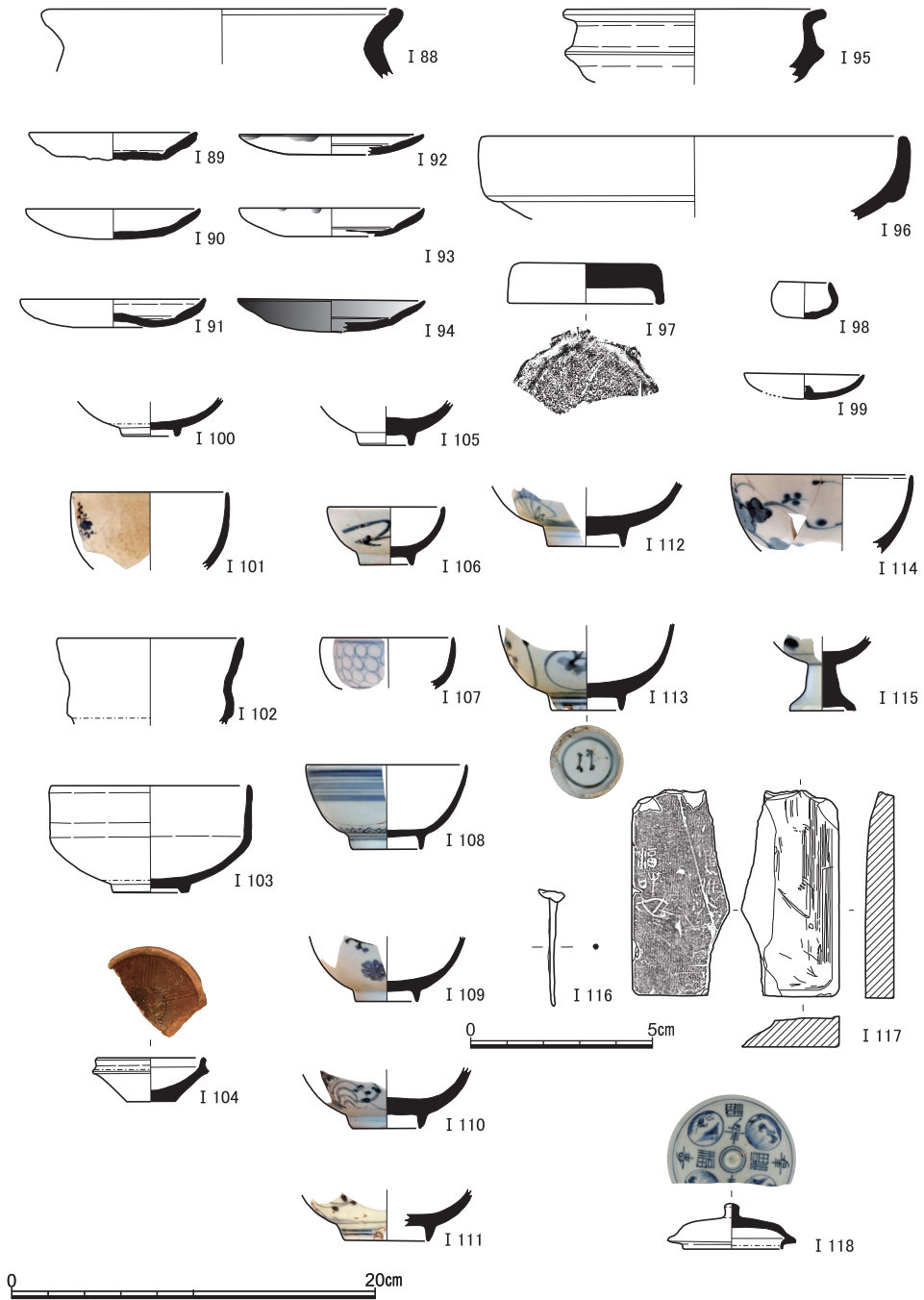


図8 S X 3 出土遺物 (I 88~ I 98土師器, I 99~ I 104陶器, I 105青磁, I 106~ I 115磁器, I 116青銅製品, I 117石製品), S X 4 出土遺物 (I 118磁器) I 116縮尺1/2

を蛇の目釉剥ぎし、畳付を露胎とする。これと I 114はいわゆるくらわんか茶碗である。

I 115は磁器染付の仏飯。畳付の釉を剥ぎとっている。I 116は青銅製の鉢。

I 117は石製の硯。裏面に刻書が存し、右端に5字ほど、左端に3字がみうけられる。前者の1・2文字目は「応」であろうか。

S X 4 出土遺物 (I 118) I 118は磁器染付の蓋。「福寿」「寿福」という吉祥句が、向かい合って2つつ存する。

S X 1 出土遺物 (I 119～I 145) I 119～I 122は中世の土師器。I 119はD₃類, I 120はE₁類, I 121はF₁類の皿である。I 122は受皿。I 123は焼塩壺の身。

I 124～I 126は陶器碗・皿。I 126は腰折形。I 127は灰釉を施す陶器灯明皿。口径12cmで、灯芯のすべりを防ぐ沈線を見込みに刻んでいる。I 128～I 130は陶器鍋の底部片。I 131は蓮月焼の小片。急須の蓋とみられ、把手の一部が残存している。内面の刻書は「蓮月」の可能性がある。I 132は陶器鍋の蓋か。白泥を用いていっちゃん描きしている。

I 133・I 134は磁器染付の碗。後者には草花文が描かれている。I 135は磁器染付の蓋。

I 136～I 138は泥面子。I 139・I 140は土製品。前者は灰白色の精良な胎土で作られた箱庭道具。塔の屋根をかたどったものであろう。後者は人形の類で、仏坐像と思われる。

I 141～I 143は青銅製の鉢。I 144・I 145は銭貨で、寛永通宝である。

S X 5 出土遺物 (I 146～I 149) I 146は陶器。I 147は磁器染付の猪口。見込みに五弁花を描く。I 148は泥面子。I 149は青銅製の鉢。

小穴出土遺物 (I 150～I 153) I 150は土師器皿。I 151は陶器の瓶の類。口縁端部外側を肥厚させる。I 152は陶器鍋の蓋。呉須で文様を描き、透明の釉をかけている。I 153は銅版刷りによる文様を有する磁器染付の筒形碗。明治時代の製品である。

S D 1 出土遺物 (I 154～I 190) I 154は土師器皿。口径は7.5cmである。

I 155～I 164は陶器。I 155は京・信楽系の煎茶碗。2羽の鶴の銕絵をもち、切高台のまわりをのぞいて透明釉が施されている。I 156は蓋物の蓋。I 157は土瓶の蓋で、白泥を用いていっちゃん描きしたのち、透明の釉がかけられている。I 158は焼締め焼成で、器種は不明である。端部においてほぼ等間隔に4ヵ所の切り込みを有する。I 159は瓶の類。外面は無釉で、内面に施釉している。底部に横位で刻印銘が存する。I 160は鉄釉を施す乗燭。I 161は蓮月焼。無釉焼締めで刻書しており、把手の剥落した跡が残る。蓋物の蓋になるとみられる。I 162は口径22cmの鉢。体部は丸みをもって立ちあがり、口縁部がやや外反する。内面および体部外面には、鉄釉で文様を描いており、後者のそれは蛸唐草文

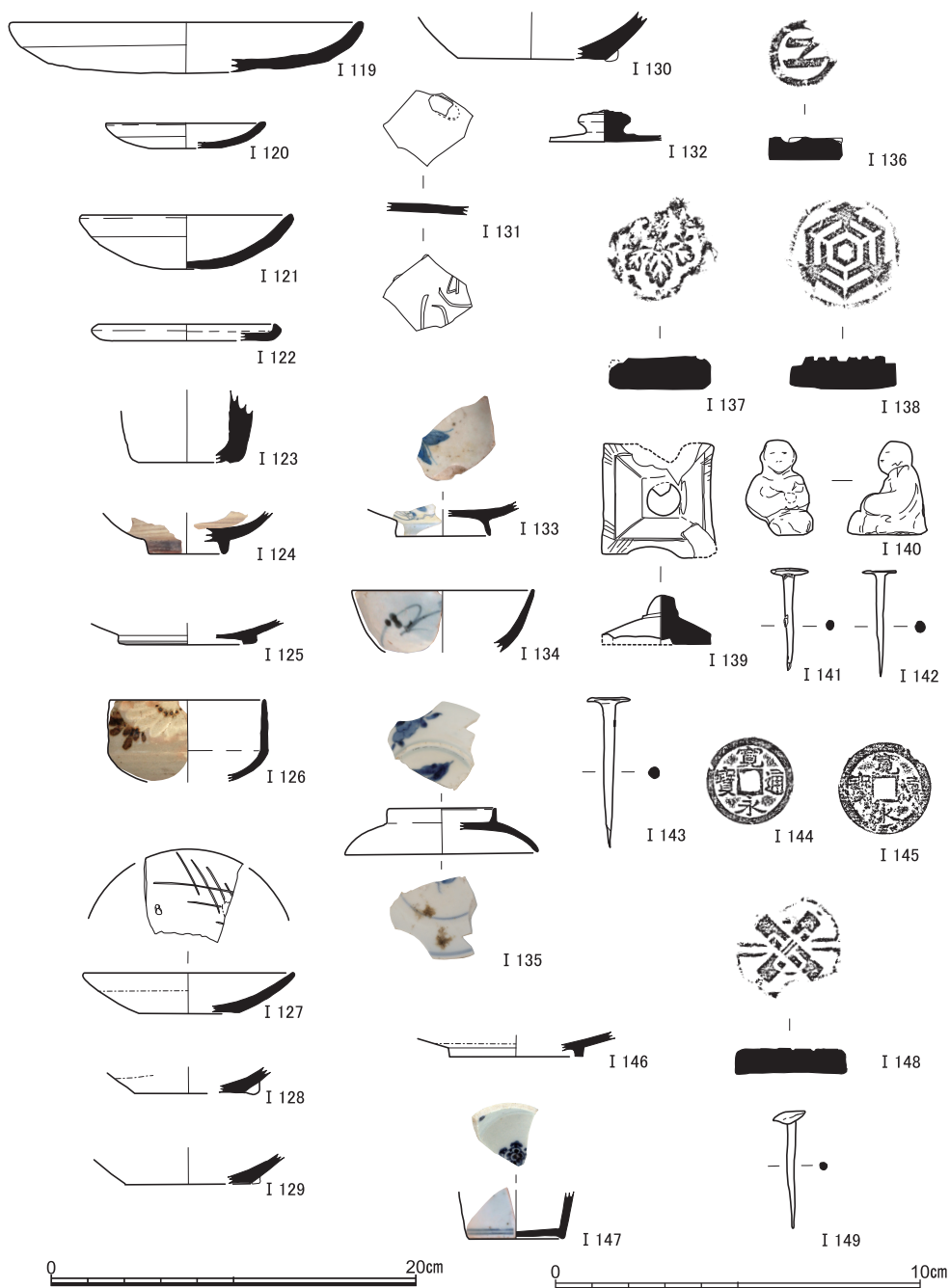


図9 S X 1 出土遺物 (I 119~ I 123土師器, I 124~ I 132陶器, I 133~ I 135磁器, I 136~ I 140土製品, I 141~ I 143青銅製品, I 144・I 145銭貨), S X 5 出土遺物 (I 146陶器, I 147磁器, I 148土製品, I 149青銅製品) I 131・I 136~ I 145, I 148・I 149縮尺1/2



図10 小穴出土遺物 (I 150土師器, I 151・I 152陶器, I 153磁器), S D 1 出土遺物(1) (I 154土師器, I 155～I 164陶器, I 165・I 166白磁, I 167～I 172磁器) I 159の拓本・I 161縮尺1/2

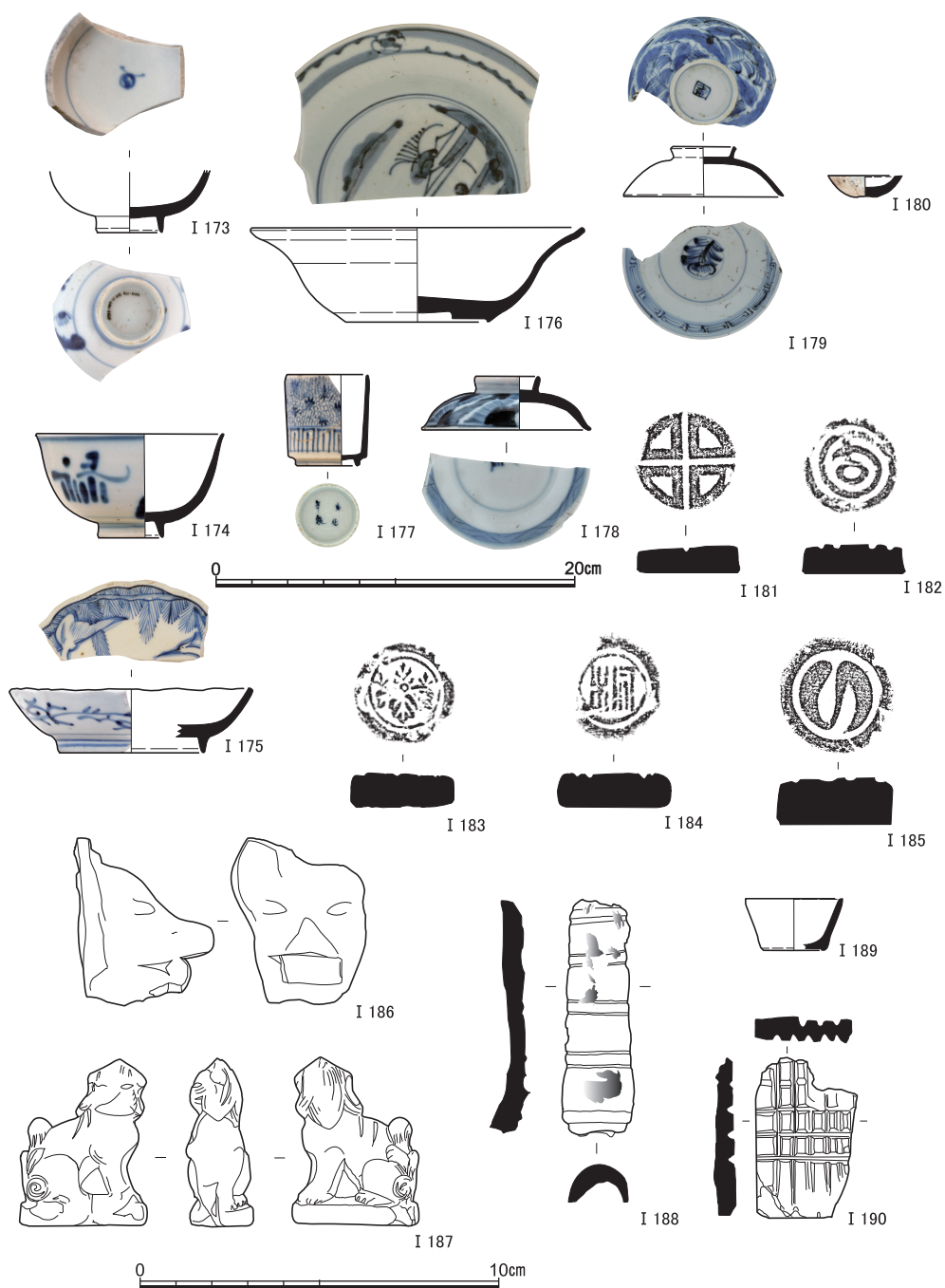


図11 S D 1 出土遺物(2) (I 173～ I 179磁器, I 180白磁, I 181～ I 188土製品, I 189陶器, I 190石製品) I 181～ I 188縮尺1/2

である。また、前者の文様は白化粧したのちに入れられている。I 163は鉄釉を施す仏花瓶。I 164は火鉢。体部は面をもち、円盤状の高台には半球状の足が付く。

I 165は白磁盃。体部外面に凸線をもつ。I 166は白磁そり皿。瀬戸・美濃系で、木型打ち込みにより成形されている。I 167～I 174は磁器染付の盃・椀。I 168・I 169は瀬戸・美濃系で、口縁部に鉄錆を施している。I 172には蟹が描かれている。I 175・I 176は磁器染付の皿。後者は口縁部が外反し、蛇の目凹形高台を有する。I 177は磁器染付の筒形の猪口で、焼継ぎがおこなわれている。底部外面に「成化年製」銘がみうけられる。I 178・I 179は磁器染付の蓋。I 180は白磁の紅皿。

I 181～I 185は泥面子。I 186・I 187は土人形の類で、前者は狐、後者は狢犬をかたどっている。I 188は墨痕が認められる土製品。半分ずつ型作りされたものの一方で、つなぎ合わせたのちに、その部分で割れてしまっている。I 189は軟質施釉陶器で、外面に透明釉と緑釉を薄く施している。ままごと道具であろう。I 190は砥石。両面ともに複数の筋が刻まれており、よく使い込まれている様子がみてとれる。

SK1 出土遺物 (I 191～I 227) I 191・I 192は土師器皿。口径7.5cmで、どちらも口縁端部に煤が付着している。I 193は土師器焙烙。型作り成形で、体部外面には離れ砂がくっついている。

I 194～I 201は陶器。I 194は京・信楽系の煎茶椀。2羽の鶴の銕絵が存し、切高台のまわりをのぞいて透明の釉がかけられている。I 195は皿。見込みに菊花文を型押しし、輪高台とその内側を露胎とする。I 196～I 198は蓋。I 198は土鍋のそれで、白泥を用いていっちゃん描きしている。I 199・I 200は土瓶。前者は無釉焼締め焼成で、球形の胴部に直線的な注口が付く。後者はそろばん玉形の体部に短い注口をもち、弦を通す耳が2つ存する。3つの足を添える底部は露胎とされ、煤が厚く付着している。I 201はいわゆる通い徳利。胴部には釉がかからない長方形の部分があって、そこに墨で文字を書き入れている。1字目は「河」、最後の字は「治」であろう。

I 202は瀬戸・美濃系の磁器染付の椀。I 203は花文などを描く上絵磁器の椀。赤を基調に、金・青・緑などの色釉が用いられている。I 204は蛇の目凹形高台の磁器染付の皿。I 205は上絵磁器の蓋。

I 206は回転台を用いて整形されている土師器皿。見込みに圈線を有する。ままごと道具であろう。I 207は土人形の類で、狐をかたどったもの。首から上を欠損する。型合わせで成形され、中が空洞になっている。

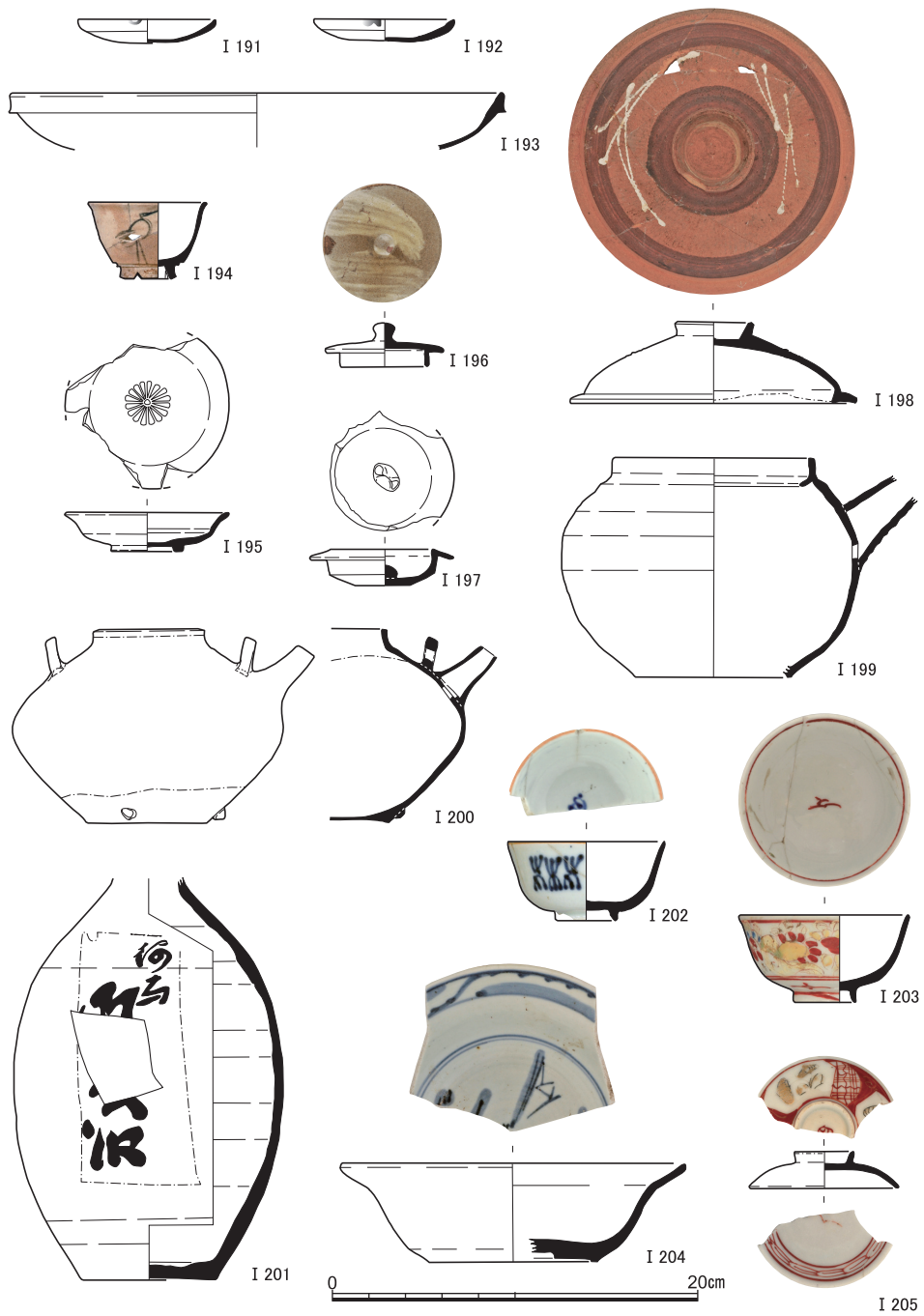


図12 SK 1 出土遺物(1) (I 191～I 193土師器, I 194～I 201陶器, I 202～I 205磁器)

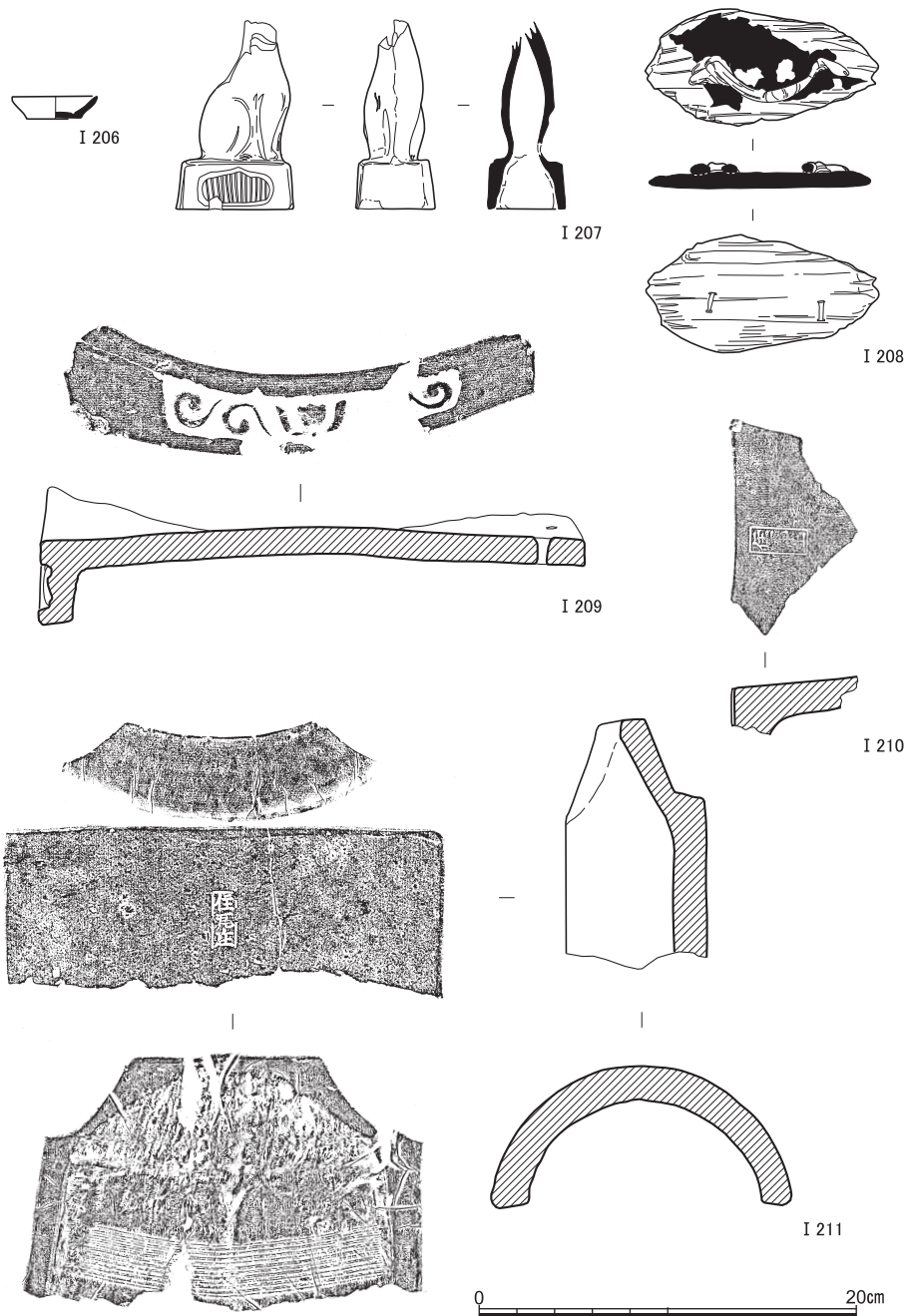


図13 S K 1 出土遺物(2) (I 206土師器, I 207土製品, I 208木製品, I 209~ I 211瓦)

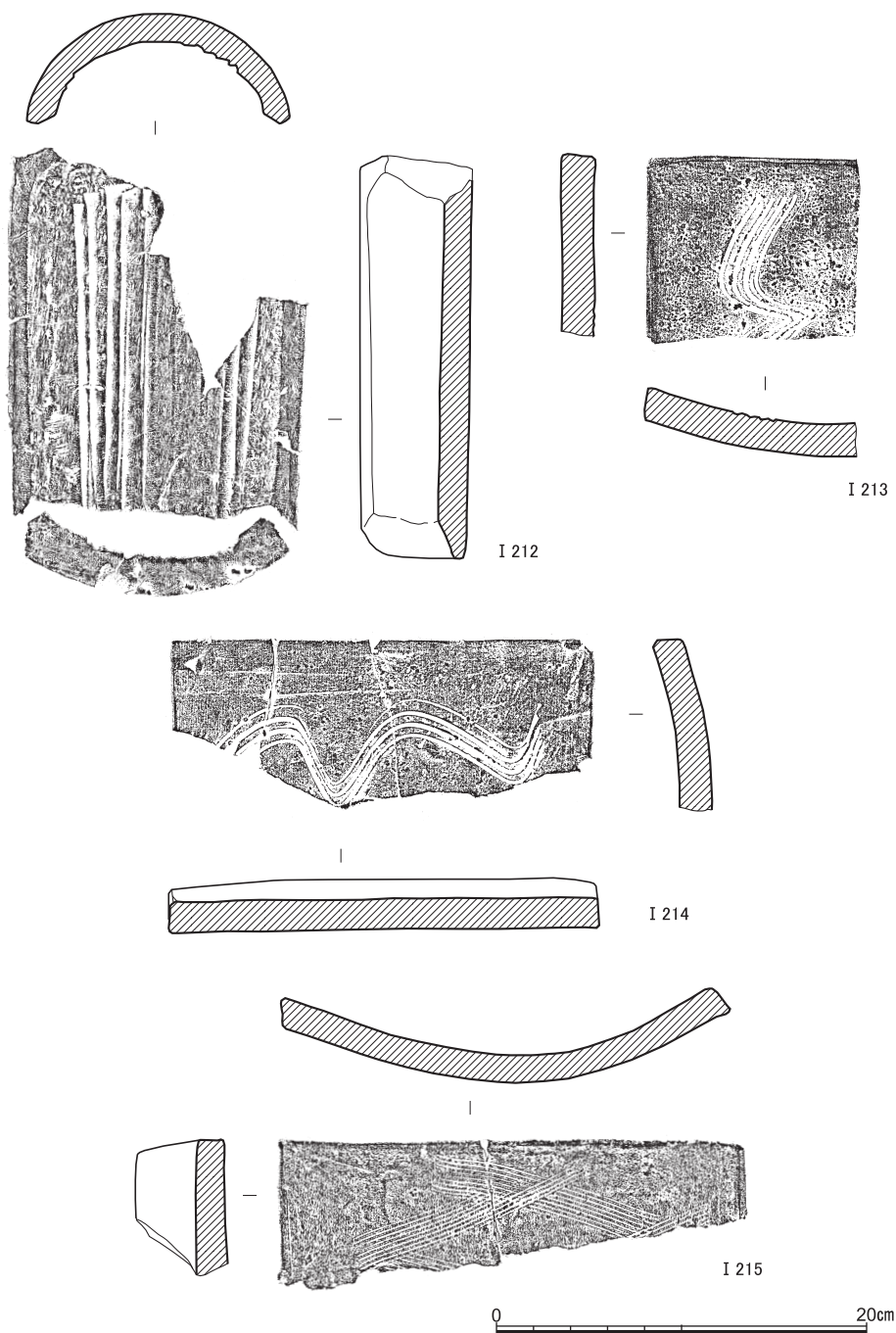


図14 S K 1 出土遺物(3) (I 212～I 215瓦)

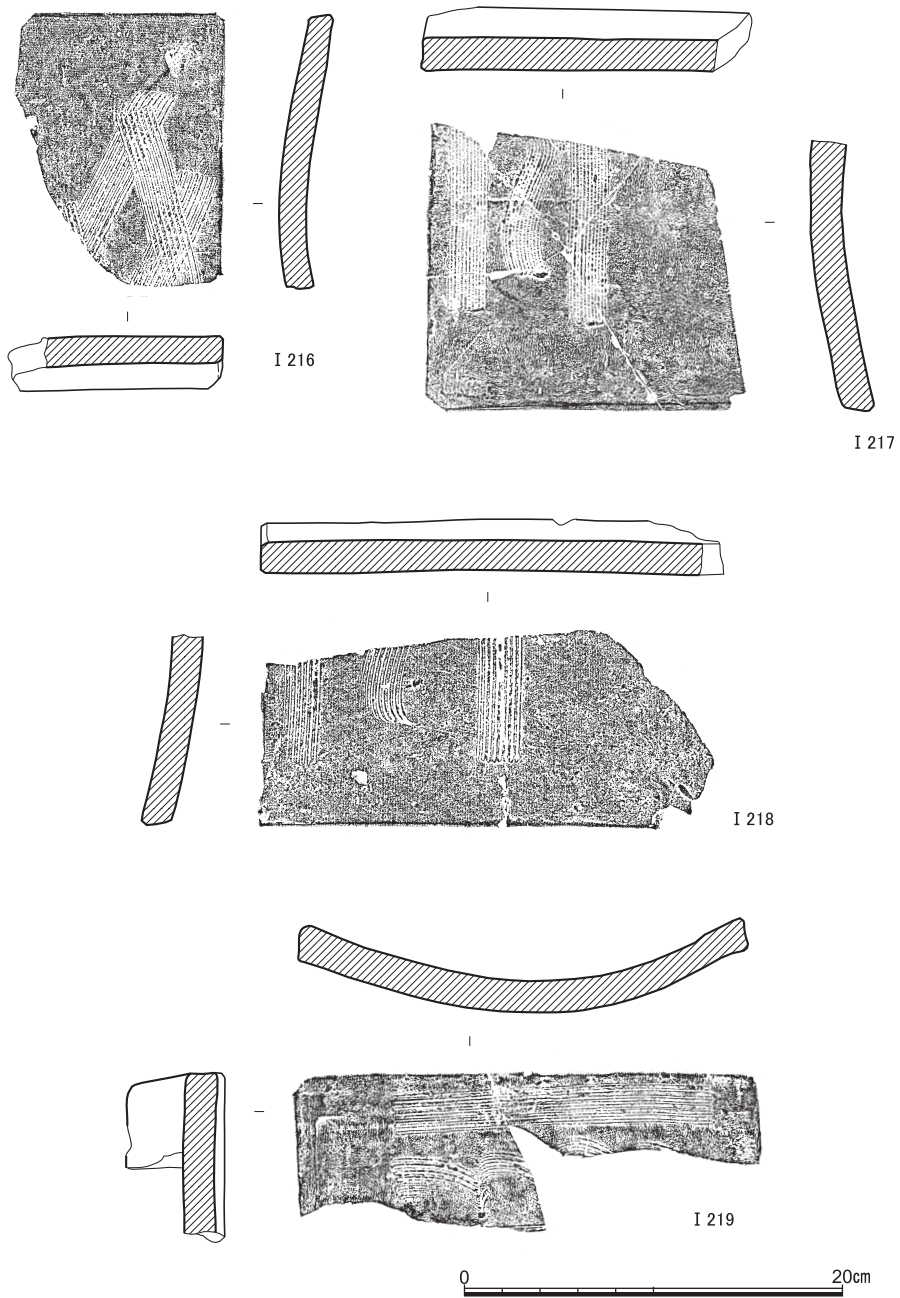


図15 SK 1 出土遺物(4) (I 216～I 219瓦)

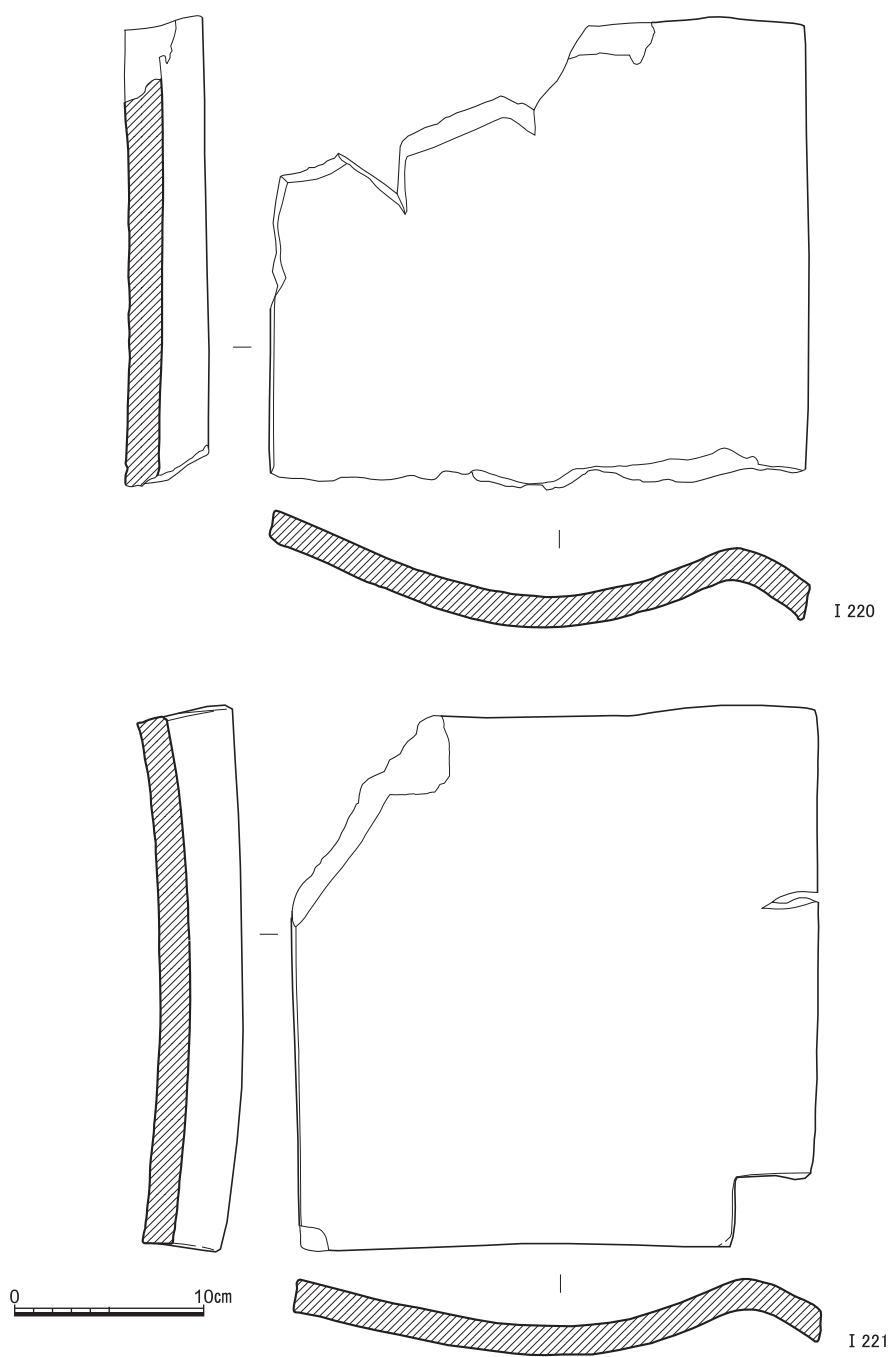


図16 S K 1 出土遺物(5) (I 220・I 221瓦)

京都大学病院構内A H18区の発掘調査

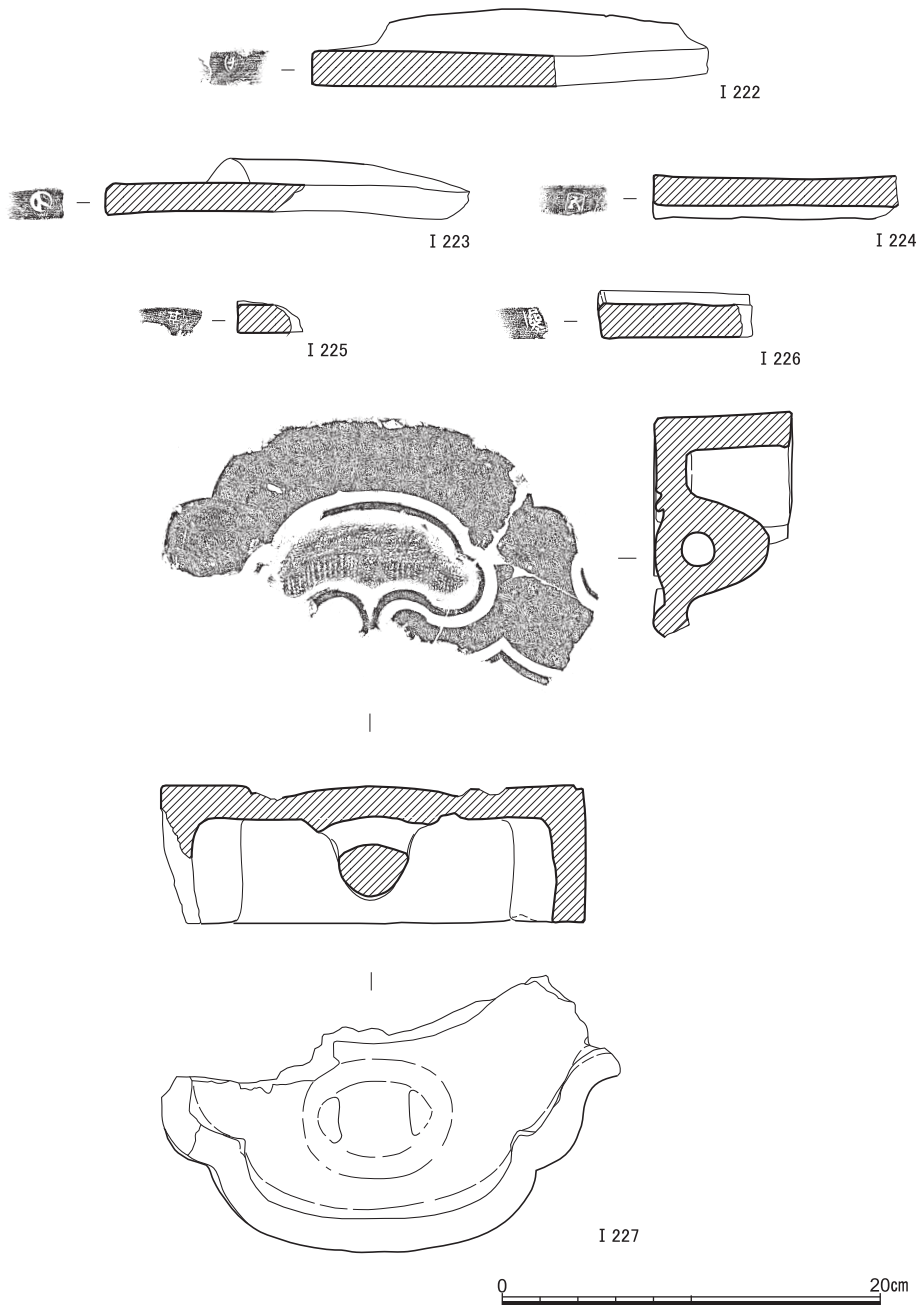


図17 SK 1 出土遺物(6) (I 222～I 227瓦)

I 208は把手の付いた漆が塗布されている木製品。簞笥の引出しの一部であろう。

I 209は凸型均整唐草文の軒平瓦。瓦当裏面に横撫で、平瓦部両面に撫でを施す。釘穴は端部において中心線と側縁の中間付近に1つ認められるので、向かって左側の欠損部分にもう1つ存していたことが推断される。

I 210は四角形で囲まれた「住瓦庄」という刻印をもつ瓦。軒平瓦ないしは平袖角瓦のいずれかの破片と思われる。「住瓦庄」は「住吉の瓦屋の庄兵衛」を省略したもので〔山路1996〕、現在の大阪市住吉区において作られた瓦である。

I 211は玉縁をもつ丸瓦。凸面に三方を直線で囲まれた「住瓦庄」の刻印を有する。側縁は面取りし、凸面は磨いて仕上げている。凹面には布目痕および直線状の11本の平行刻線が存する。

I 212は丸瓦。側縁は面取りし、凸面は磨いて仕上げている。凹面には棒状工具による刺突痕がみうけられる。

I 213～I 219は平行刻線をもつ瓦。I 213は熨斗瓦、それ以外は平瓦である。I 213・I 214は凹面に、それらのほかは凸面に平行刻線が施されている。波状のもの、直線状のそれを斜めに交差させたもの、直線状と波線状のそれとともに用いたものが認められる。

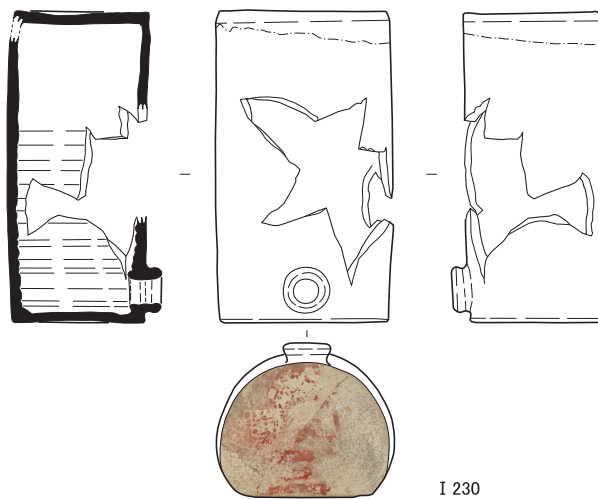
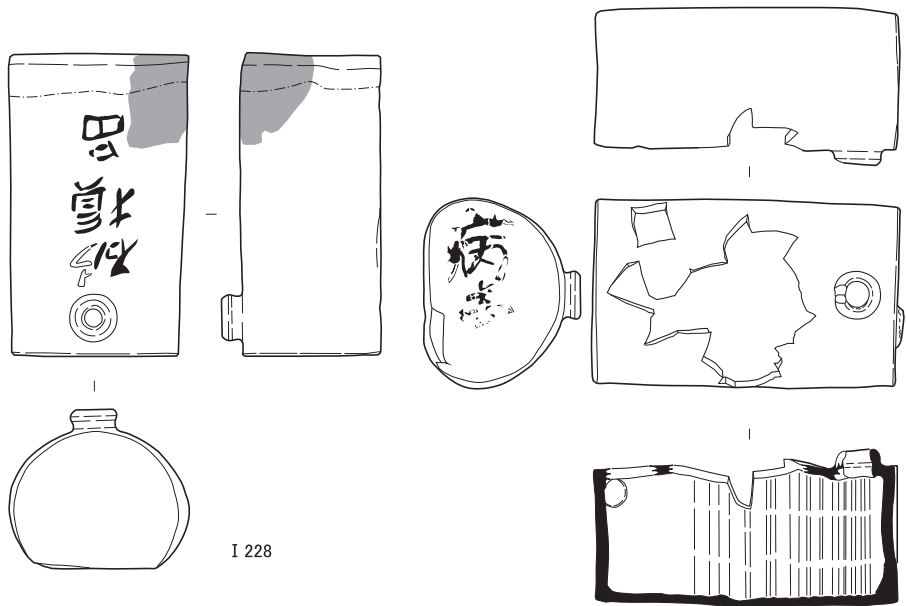
I 220・I 221は右棧瓦。前者の最大幅は約28.5cmで、凹面の大半が浅黄橙色を呈する。後者の法量は、最大幅約28cm、全長約28.5cmで、尻側棧部に切り込みをもつ。凹面側は丁寧に磨いて仕上げられている。

I 222～I 226は端面に刻印銘を有する瓦。I 223は右棧瓦で、円形にカタカナの「ト」ないしはうらないの「ト」のどちらかの刻印が存する。そのほかのものは棧瓦もしくは平瓦。I 224は四角形に「五」の刻印銘をもつ。I 226は四角形に「昆太」あるいは「日比太」で、その上寄りの押捺の位置から、上端が欠けてしまったと思われる。

I 227は棟端瓦。外面および外縁は丁寧に撫でて仕上げられている。裏面は粗い撫でを施し、箱状にくぼむ。また、山形の把手を有している。

SE1 出土遺物 (I 228～I 235) I 228～I 232は陶器の筒形の湯たんぽ。そのような形の湯たんぽは、明治時代に西欧からもたらされ、その中期以降、各地の窯場で多量に作製されたとされる〔伊藤紀之2010〕。いずれも2種類の釉を重ねがけし、個々の大半は白色ないしは灰白色を呈している。ここでは、墨書・朱書があるもののみを掲出した。

I 228は完形で、筒部上面に「破損品」と墨書する。そうした書き入れからすると、壊れたものとしてあつかわれていたことになる。なお、「品」の近く、筒部の隅のあたりに



0 30cm

図18 S E 1 出土遺物(1) (I 228～I 230陶器) 縮尺1/6

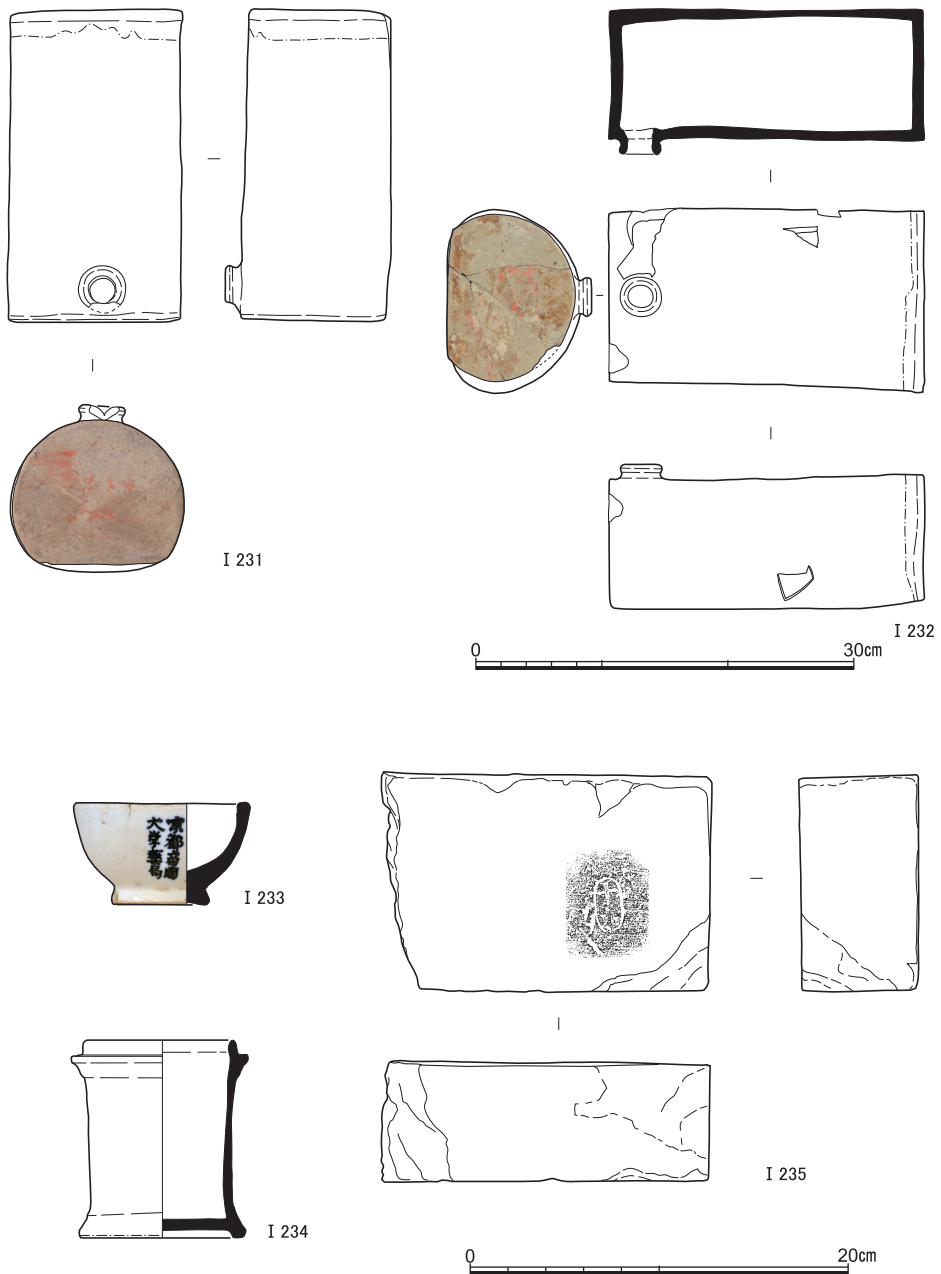


図19 SE 1 出土遺物(2) (I 231・I 232陶器, I 233・I 234磁器, I 235煉瓦) I 231・I 232縮尺 1/6

煤が付着している。I 229・I 230は筒部が轆轤によって成形され、2つの側部は貼り付けられている。前者には、湯を入れるところから離れた側部において墨書がみうけられ、1字目は「病」である。2字目にかんしては、下部が消えているけれども、「壺」とみなして、まずまちがいあるまい。要するに、「病壺」と判断される。いっぽう、後者には、湯を流し込む部分の近くの側部に「病三」という朱書が存する。I 231・I 232はほぼ完形で、どちらも湯を入れるところの近くの側部において朱書をもつものの、その内容を確定することはかなわないといえる。

I 233は磁器乳鉢。内面および底部外面を露胎とする。体部外面に「京都帝国大学薬局」と紺色で記されている。I 234は用途不明の磁器。台・卓などに接する部分が無釉とする。

I 235は煉瓦。平の面に楕円形で囲まれた「十^(九カ)□」という刻印がみえる。

灰褐色土出土遺物（I 236～I 308） I 236～I 239は土師器皿。I 238・I 239は見込みに圈線をもつ。I 240～I 242は土師器焙烙。

I 243～I 258は陶器。I 243～I 249は灰釉を施す灯明受皿および皿。I 245・I 247～I 249は口縁端部に煤が付着している。また、I 247・I 249は見込みに目跡が1つ存する。I 250は外面を露胎とする皿。口縁部を外側に折り曲げ、玉縁状にする。口径は15cmである。I 251は煎茶椀。I 252・I 253は椀。いずれも内面から体部外面上半にかけて白化粧を施したのち、呉須で文様を描いている。I 254は呉器手の椀。I 255は鉄釉を施す甕。I 256は筒形の底部片。高台に半円形のくぼみを2カ所有する。外面には黒釉がかけられている。底部に小孔を穿った痕跡がみられるので、植木鉢ではないかと考えられる。I 257は壺。胴部外面に「醤油」「町」「今出川下ル」と記されている。I 258は灰釉を施す台付の灯明受皿。底部外面に回転糸切り痕が認められる。

I 259は淡路系の磁器蓮華。竜の文様を木型で打ち込み、緑釉を全面にかけている。I 260・I 261は陶器蓋。前者は急須のそれで、穿孔が存する。I 262は土製の焜炉の口縁部片。外面に雷文がみえる。I 263は軟質施釉陶器。「楽」の刻印がある。

I 264は青磁の底部片。畳付に方形で囲まれた「朱山」という刻印がみうけられる。I 265・I 266は白磁の盃。体部外面に凸線がめぐる。

I 267は磁器染付の皿。I 268～I 273は磁器染付の椀。I 271は見込みに「□□年製」とみえる。I 272は外面に蛸唐草を施し、口禿とする。I 274・I 275は磁器染付の筒形の椀。I 276・I 277は磁器染付の鉢。前者は蛇の目凹形高台をもつ。I 278は磁器染付の蓋。I 279～I 281は磁器染付の段重。I 280は化学コバルトを用い、型紙摺りで文様を描いている。

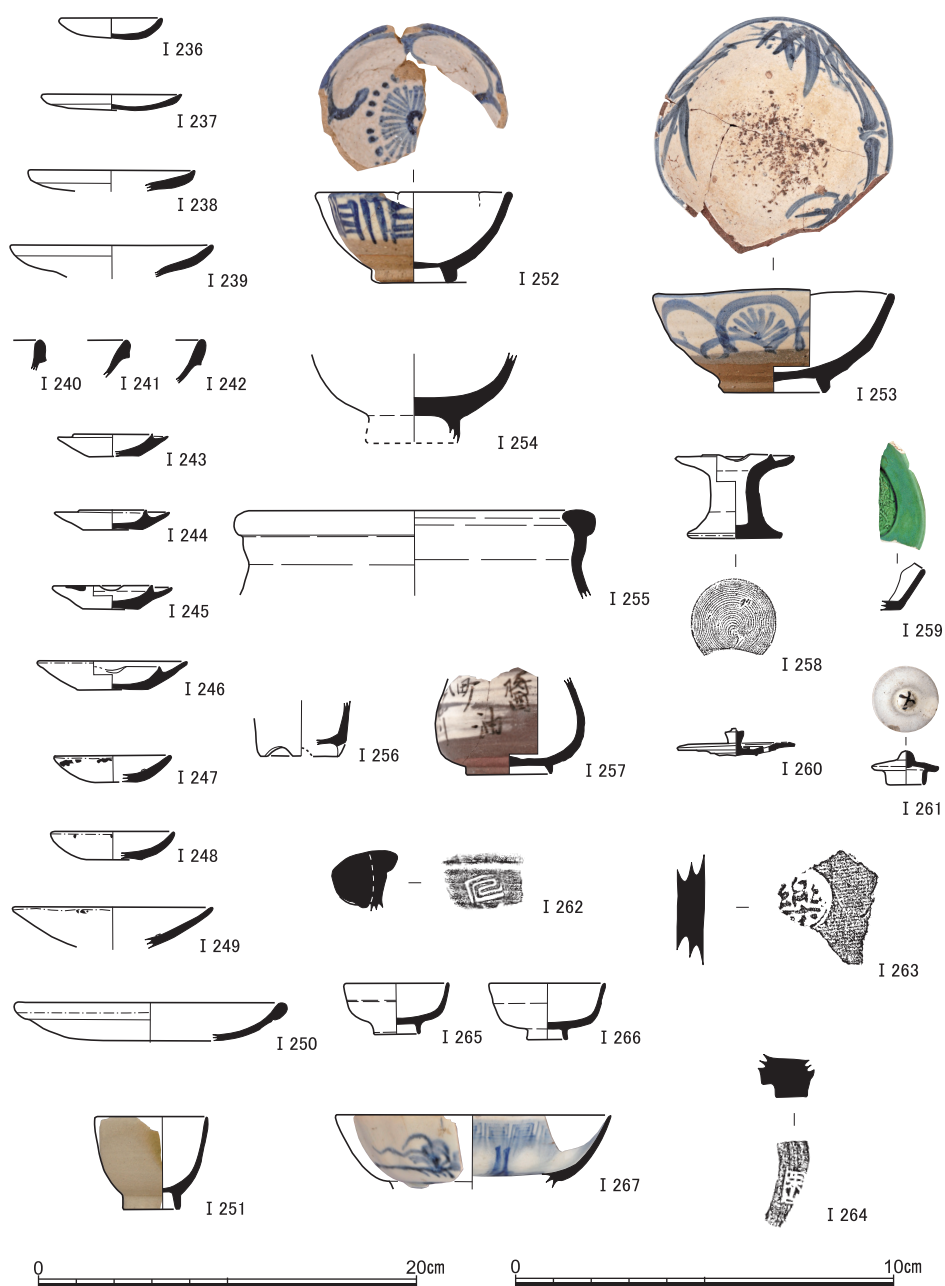


図20 灰褐色土出土遺物(1) (I 236～I 242土師器, I 243～I 258・I 260～I 263陶器, I 264青磁, I 265・I 266白磁, I 259・I 267磁器) I 263・I 264縮尺1/2

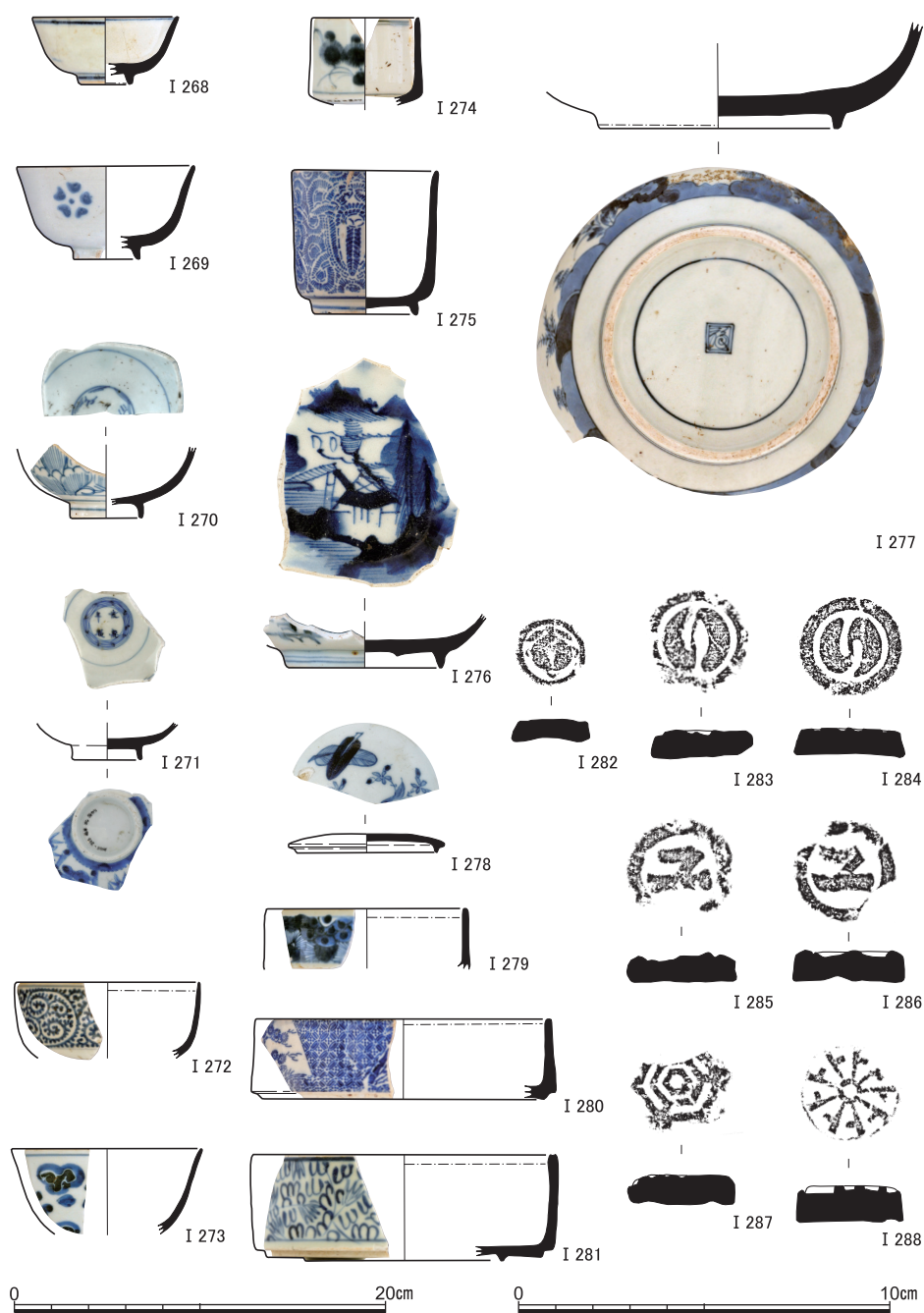


図21 灰褐色土出土遺物(2) (I 268～I 281磁器, I 282～I 288土製品) I 282～I 288縮尺1/2

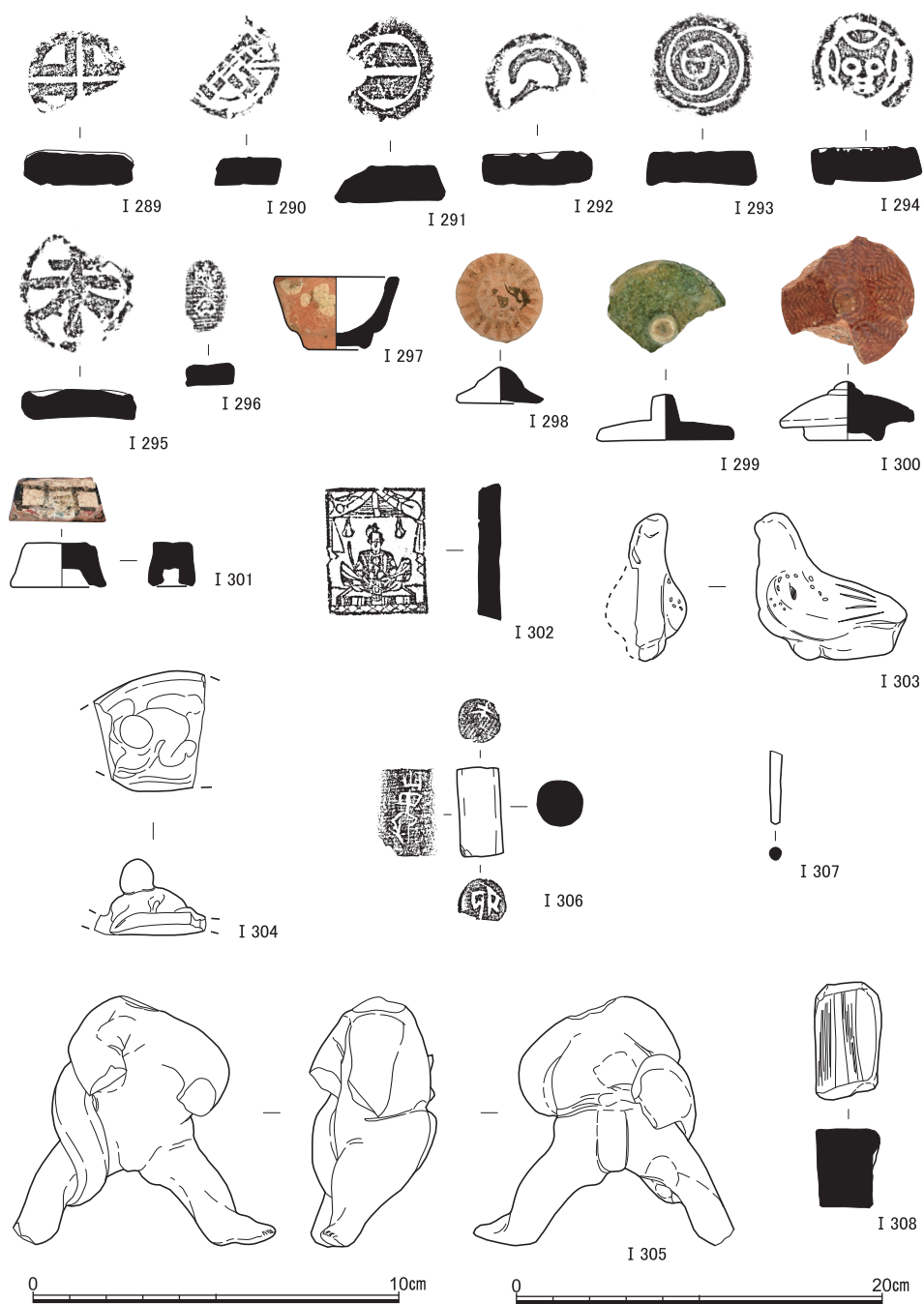


図22 灰褐色土出土遺物(3) (I 289～I 298・I 303～I 305土製品, I 299～I 301陶器, I 306～I 308石製品) I 289～I 305縮尺1/2



図23 表土・攪乱出土遺物（I 309～I 313陶器，I 314～I 321磁器，I 322～I 328土製品，I 329石製品，I 330～I 333瓦） I 322～I 328縮尺1/2

小 結

I 282～I 295は泥面子。I 296～I 301はままごと道具の類。I 299・I 300は軟質施釉陶器の蓋で、前者は全面に緑釉が、後者は外面に透明釉が施されている。I 301も軟質施釉陶器で、竈をかたどったものであろう。I 302は方形を呈する土製品。縹緗縁暈の上に座る武士が型押しされている。I 303～I 305は、土製品で人形の類。I 303は鳩笛。I 304は何かの上に乗っている童子をかたどったもの。I 305は瓦質で、まわしがみえることから、力士が何かをしている様子をあらわしているものと思われる。

I 306～I 308は石製品。I 306は印判。印面に「卯」、側面に「山中卯」と刻まれている。「卯」は名前の一部であろう。I 307はかんざし。I 308は砥石。

表土・攪乱出土遺物（I 309～I 333） I 309は灰釉がかけられている陶器灯明受皿。口縁端部に煤が付着している。I 310・I 311は灰釉を施す台付の陶器灯明受皿。後者の底部外面には回転糸切り痕が認められる。I 312は陶器蓋。白泥を用いたいっちゃん描きがなされている。I 313は陶器おろし金。多数の小突起がある面には、飴釉がかけられている。

I 314～I 320は京都帝国大学附属病院関係の遺物で、すべて磁器。I 314は皿と思われ、外面に円形の「医院」の意匠、口縁部内面に二重線を緑色の釉で施している。I 315は見込みに藍色で円形の「医院」のマークがあらわされている。また、輪高台の内側に楕円形で囲まれた「草珠」という刻印が認められる。I 316は体部外面に「帝国大学模範薬局」とみえる。また、体部外面から口縁部内面にかけて透明釉がかけられている。おそらく乳鉢であろう。I 317～I 320は井鉢の蓋および井鉢。I 317とI 318・I 319は、同一の染付の文様などから、組になるのがわかる。I 320は体部外面に緑色の「京」、口縁部外面に二重線がめぐるのがみうけられる。I 321は磁器染付の筒形の椀。口縁端部を口禿とする。

I 322～I 325は泥面子。I 326～I 328は土製品の玩具。I 328は蔵をかたどったもの。I 329は石製の硯。

I 330～I 333は刻印銘をもつ瓦。I 330・I 332・I 333は、それぞれ四角形ないしは楕円形で囲まれた「五」「安」「太」という刻印を有する。I 331は頭部側平部に切り込みをもつ右棧瓦。凸面に直線状の平行刻線が認められる。切り込み近くの頭部側端面に、井桁状のもので囲まれた「瓦」という刻印銘が存する。

6 小 結

今回の発掘調査では、縄文時代から近代にいたる遺構や遺物がみつきり、病院構内における土地利用の変遷の一端について明らかにすることができた。下層の砂礫層から出土し

た縄文早期の土器の意義にかんしては、第3節のなかですでにふれているので、ここでは、中世以降の遺構や遺物のいくつかに焦点をあてて、さらに考察を深めていくことにしたい。

(1) 中世・近世の土取り穴

中世・近世の遺構のなかから、とりわけ土取り穴についてとりあげておきたい。

本調査区からは、中世後期および江戸時代後期のものとおぼしきSX2・SX6、SX1・SX5という土取り穴が検出されている。それらはすべて、第3層の黄灰色シルトを採取するために掘られたものである。ただし、現代の工事にともなう掘削によって、いずれもその範囲を確定することができない。

本調査区の近辺に目を向けるに、病院東構内の北部に位置する154・155地点より、SX1～SX11という江戸時代中期の大規模な土取り穴がみつまっている。それらは黄灰色シルト、青灰色シルトあるいは黒灰色粘土を手に入れるために掘られたものである〔五十川ほか1989、五十川1991〕。

このような成果と本調査区で確認された土取り穴のことをふまえると、病院東構内の北半においては、少なくとも江戸時代中期から後期にかけて、断続的にシルトや粘土を採掘する作業がおこなわれていた可能性が考えられる。

なお、それぞれの時期において掘り出された黄灰色シルトの使途の究明にかんしては、文献史料の仔細な探索および検討が不可欠となることから、時間の都合上、後日に期したいと思う。

(2) 「住瓦庄」の刻印銘瓦

近代の土坑であるSK1から、「住瓦庄」という刻印銘をもつ瓦が2点出土している。

ここで、「住瓦庄」について、ややくわしく説明するに、それは「住吉の瓦屋の庄兵衛」を略したものにあたる。その瓦屋は、もともと現在の大阪市住吉区、住吉大社の東方において「摂州瓦屋庄兵衛」と称し、いぶし瓦を製作していた。すると、江戸時代末期から「住瓦庄」ととなえるようになり、明治時代初頭には、それが商号として定まるにいたった。その製品は、大坂（阪）はいうまでもなく、京都の神社や寺院にたいしても売りさばかれていたという〔山路1996〕。

このような事柄にもとづくと、幕末以降、ある時分に住吉から京都へと運ばれ、しばらくのあいだ使用されたのち、SK1に捨てられるにおよんだと考えられよう。

そこで、留意すべきは、京都大学北部構内の南西隅、208地点から「住瓦庄」という刻印銘を有する右棧瓦が2点みつまっている点である。それらは、土佐藩の白川邸の南を画

する堀 S D 1 から出土しており〔浜崎ほか1995〕,そこから多量にとりあげられた瓦と同様,白川邸の建物に葺かれていたのは,まずまちがいないといえよう。

土佐藩の白川邸は,慶応2年(1866)の冬ごろに,摂津の住吉陣屋の建物を移築してもうけられたものである〔笹川2018〕。要するに,土佐藩が造営した住吉陣屋では,「住瓦庄」の瓦が用いられており,それらが白川村の地所へと搬入されたことになる。

如上の点をふまえると,SK1から出土した先の2点の瓦は,土佐藩の白川邸において使われていた可能性が残されているといえる。そして,さらに敷衍すると,白川邸がなくなったのち,他所における建物で葺かれるにおよんだとも憶測されよう。

よく知られているように,幕末には,白川村・吉田村・聖護院村・岡崎村のあたりに多くの藩邸が設置されるにいたった。もとより,それらの建物には,たくさんの瓦が用いられていたに相違あるまい。だからこそ,明治時代のはじめに諸藩邸がとり壊されたのち,それらがどのようにあつかわれたのか,こうした点について,できるかぎり検討していくことが求められているといえる。

前にふれた,208地点のSD1から出土した多量の瓦にかんしては,白川邸の廃絶にとまって投棄されたものであったのは,おそらくあやまりあるまい。むしろ,そのほかの藩邸でも,さような措置がとられた点は,否定することができない。けれども,諸般の事情から,ちがう場所に移されて再利用されたものもまた,少なからず存していたのではなかろうか。

残念ながら,SK1からとりあげられた「住瓦庄」という刻印銘をもつ2点の瓦,およびそれら以外の多くの瓦が,土佐藩の白川邸のものであったのか,決め手に欠ける。しかしながら,諸藩邸における瓦のゆくえを気にかけるきっかけをあたえてくれた点で,それらは大きな意義を有するものであるといえよう。

(3) SE1の出土遺物について

近代の井戸であるSE1からは,湯たんぽや乳鉢・煉瓦にくわえて,用途不明のものなど,あまたの遺物がとりあげられている。先に説明したように,それらは京都帝国大学附属病院に関係するもので,明治33年(1900)8月14日からかなりのときをへて捨てられるにいたった蓋然性が高い。

ここで,京都帝国大学附属病院の建物に着目するに,本調査区が位置している地区には,南から第2・第4・第6・第8という,東西に長い4棟の病舎が存していた。そして,その東側の地区には,南から第1・第3・第5・第7という,同様・同数の病舎がもうけら

れていた。

それらのうち、第1・第2病舎が明治32年、第8病舎が明治35年、残りの病舎が明治34年に竣工している。察するに、SE1はこのころ、すなわち明治30年代前半に設置されたのであろう。そののち、昭和13年（1938）に第2・第4・第6・第8病舎が、昭和11年に第3・第5・第7病舎が作りかえられるにおよんだ。また、昭和15年には、第1病舎の一部が病院西構内に移し建てられている〔宮本1977〕。

こうした点をおさえたうえで、I 229・I 230の墨書・朱書に目を転じるに、前者の「病壺」は第1病舎、後者の「病三」は第3病舎のことを指すと考えられる。したがって、これらの湯たんばは、それぞれの病舎において使われていたとみなして大過なからう。

「病壺」、すなわち第1病舎をのぞくもろもろの建物は、昭和10年代前期において改築がおこなわれている。かような大がかりな工事の過程で、おのおのの病舎における湯たんばなどが処分され、その結果、SE1が廃絶してしまった可能性が残されているのではなかろうか。I 229の「病壺」の湯たんばにかんしては、I 228の「破損品」という墨書にもとづくと、そうであったがゆえに、ほかのものといっしょに投棄されるにおよんだとも推量される。

もとより、以上に述べきったことは、憶測の域を出るものではない。さような理解が妥当であるかどうかは、今後の発掘調査の成果をふまえたうえで、慎重に考察をめぐらせていくことが肝要になるといえよう。

本章は、第2節を千葉・笹川、第3節を千葉、残りの部分を笹川が執筆した。発掘調査と遺物の整理作業は、千葉と笹川が担当し、長尾玲が補佐した。また、磯谷敦子・西田陽子・岩永玲・高野紗奈江・柴田晶子の助力をえた。

第3章 京都大学北部構内BC30区ほかの立合調査

伊藤淳史 富井 眞

1 調査の経緯

調査地点は京都大学北部構内に広がるが（図版1－450）、いずれの地点も北白川追分町遺跡に含まれる（図24）。この北部構内に、広く基幹・環境整備工事が計画され、ガス等の埋管により掘削をとまなう工事が実施されることになった。そのため、遺構や遺物の発見に備えるとともに、各時代の地層の堆積状況を記録するべく、掘削の機会に随時立ち会った。調査期間は、2016年12月1日～2017年4月18日で、回収した遺物は整理箱1箱分である。埋管工事は第1～8工区におよぶが、このうち新たな知見がえられた第4・5・7・8工区について報告する（図25）。また、第5工区で確認できた古墳時代～古代の遺構は、1973年度に実施された発掘調査（9地点）での成果と関連する可能性があるが、当時の発掘調査については十分に報告できていないため、今後の活用を図るために第3節において出土遺物を中心に図示することとした。

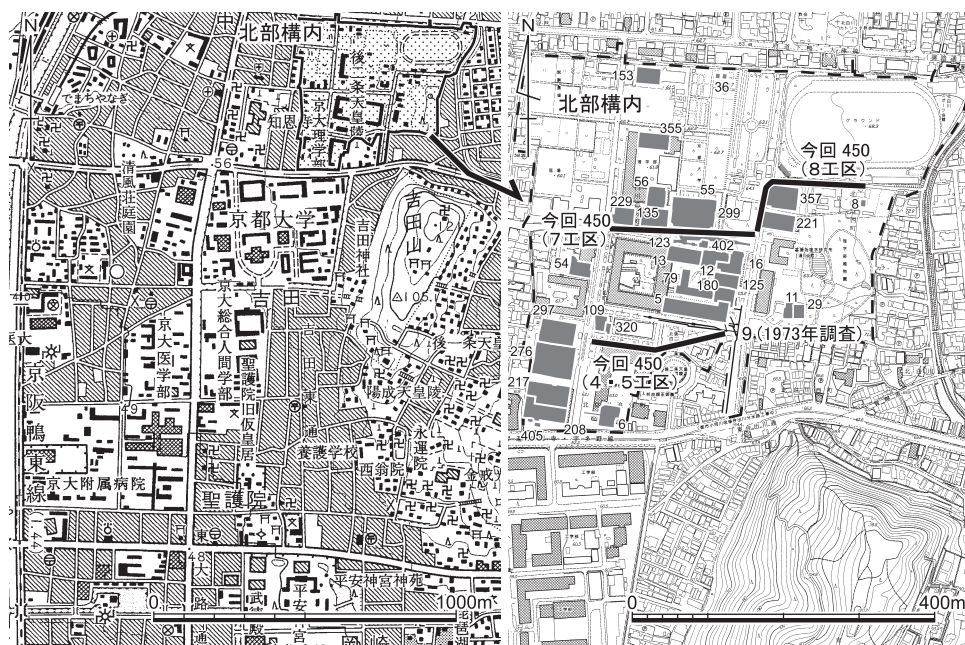


図24 調査地点の位置 縮尺：左1/25000、右1/10000

2 調査の成果

(1) 層位と遺構（図版4，図26～30，表1・2）

北部構内をはじめ吉田キャンパスの京都大学構内遺跡の堆積は，弥生時代前期末中期初頭の土石流堆積である黄色粗砂の確認される地点の場合，その黄色砂の上位では，黒みの強い古代，茶色みの強い中世，灰色みの強い近世，となるのがこれまでの発掘調査から導

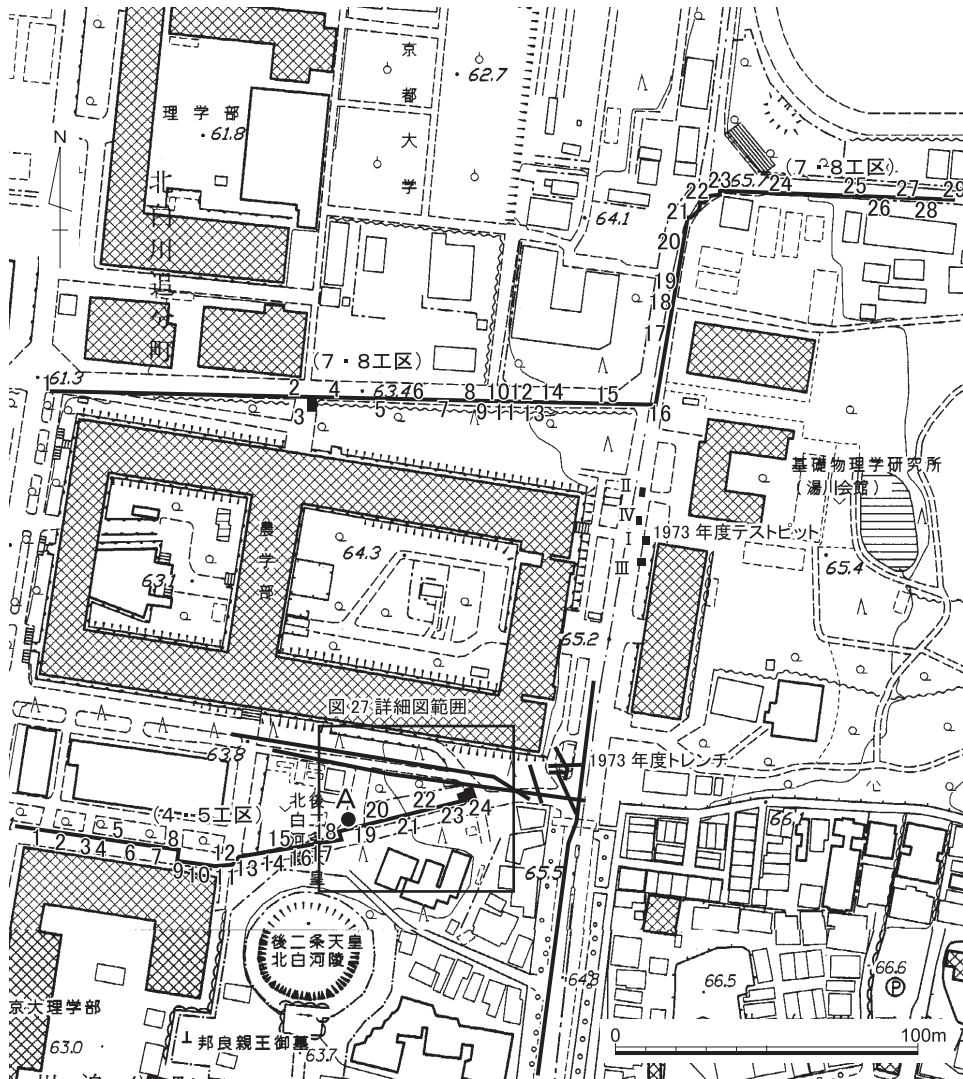


図25 調査区配置と層序・主要遺構の確認位置 縮尺1/2500

調査の成果

き出されている基本的なパターンである。立合調査では、包含遺物を確認できないときには、こうした基本層序をよりどころにして時期を推測することが通常である。今回の北部構内の立合調査においては、第4・5工区では黄色砂を確認できたが、第7・8工区では確認できなかった。

第4・5工区 現地表は西下がりの緩斜面で標高は、1地点ではおよそ62mで24地点ではおよそ65mをはかる。この両工区の堆積は、上記の基本層序どおりと言える（表1、図26）。また、黄色砂の堆積が厚いことがわかり、いずれの地点でも、その下位の弥生前期初頭の旧地表面を確認できなかった。とりわけ、4地点と7地点では、層厚が1mを超えており、さらには、4地点と13地点では、掘削底面に粒径が300mmを優に超える巨礫が包含されていることを確認した。B D30区（図版1-109地点）・B C30区（図版1-320地点）・B D28区（図版1-297地点）の黄色粗砂中で確認された巨礫と一連のものと推定できる。黄色砂の肉眼観察によれば、今回の立合調査では粒径の垂直変動に上方組粒化の傾向を指摘できず、粒径が1mmより小さい砂層は15地点の最上部で確認されたのみである。これらのことから、黄色砂に覆われて残存しているだろう弥生時代の旧地表面は、現在の掘削深度よりも数十cmは下位にあることが予測できる。なお、15地点の最上部の黄色細砂は、土石流の最後ないし終わりに近い段階の堆積であろう。

黄色砂の上部については、第4工区の西辺では近接するB D30区（図版1-109地点）・B C30区（図版1-320地点）の発掘調査で確認されているよりも高い標高で黄色砂の残存を確認できた。また、土壌化して漸次的に黒褐色土に移行している状況がうかがえるのは3・15～18地点だけで（図版4-1・2）、多くの地点の断面観察によれば、後世に直線的に削平されている。

第5工区A地点で、古墳の周溝の可能性のある黒褐色土の溝状の落ち込みS X 1を確認している（図版4-3～6、図27・28）。しかし、溝状のラインは管路に斜行しているので周溝だとしても幅が判然とせず、また掘削深度底面にまで達しているので深さも40cm以上ということしかわからない。埋土からは、4個体はあると思われる円筒埴輪の小片およそ100点を、検出面から20cmほど下がったあたりで回収できた。これらの埴輪は、こぶし大の角礫の集積のすぐ上で、破片どうしが比較的まとまった状態で出土している。掘削底面より下位にさらに埴輪が包含されている可能性は否定できないが、現状で確認できる限りは、礫の集積より下位からは埴輪は出土していない。

埴輪の下位に認められる角礫については、葦石が転落してきた可能性も否定はできない

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

表1 第4・5工区の立合調査一覧

工区	地点	調査日	概 要
4区	1	20170112	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.55m灰褐色土（近世）、以下は黄色砂。
4区	2	20170116	GL-1.0mまで掘削。-0.25~-0.3m灰褐色土（近世）、~-0.45m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	3	20170117	GL-0.9mまで掘削。-0.35~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.5m茶褐色土（中世）、~-0.7m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黒褐色土から瓦破片。
4区	4	20170117	GL-2.15mまで掘削。-0.4~-0.45m灰褐色土（近世）、~-0.55m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。最下部に30cm大の花崗岩角礫あり。
4区	5	20170106	GL-1.3mまで掘削。-0.6~-0.65m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	6	20170118	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.6m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。茶褐色土下に掘削底面以深へ続く直径30~40cmの黒褐色土ビット2基。黄色砂は東では粒径1mm以下の黄色細砂。
4区	7	20170123	GL-2.2mまで掘削。-1.1m~黄色砂。
4区	8	20170123	GL-1.0mまで掘削。-0.4~-0.7m灰褐色土（近世）、~-0.8m茶褐色土（中世）、~-0.9m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黄色砂上面は黒褐色土により削平。
4区	9	20170125	GL-1.1mまで掘削。-0.35~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.5m茶褐色土（中世）、以下は黄色砂。
4区	10	20170127	GL-1.1mまで掘削。-0.2~-0.35m灰褐色土（近世）、~-0.4m灰赤褐色土（近世）、~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.65mマンガング着層（中世か）、以下は黄色砂。
4区	11	20170130	GL-1.4mまで掘削。-0.55~-0.8m茶褐色土（中世）、~-0.95m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。
4区	12	20170124	GL-1.0mまで掘削。-0.5~-0.75m茶褐色土（中世）、~-0.95m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。黒褐色土は北へ落ちていく。
5区	13	20170131	GL-1.4mまで掘削。-0.9~黄色砂。最下部に30cm以上の花崗岩巨礫あり。
5区	14	20170131	GL-1.4mまで掘削。-0.25~-0.4m灰赤褐色土（近世）、-0.4~-0.6m灰褐色土（近世）、-0.6~-0.7m灰茶褐色土（近世か）、-0.7~-0.8m茶褐色土（中世）、-0.8~-1.15m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。
5区	15	20170131	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.45m灰褐色土（近世）、~-0.6m灰茶褐色土（近世か）、~-0.75m茶褐色土（中世）、~-0.8mマンガング着層（中世か）、~-0.9m黒茶褐色土（古代）、~-1.1m黒褐色土（古代）、~-1.15m黒灰色粗砂質土（弥生か）、以下は黄色細砂。黒褐色土から形象埴輪。黄色細砂の下位に黄色粗砂が続く。
5区	16	20170201	GL-1.2mまで掘削。-0.7~-0.9m灰茶褐色土（近世か）、-0.9~-1.0m茶褐色土（中世）、-1.0~-1.1m黒褐色土（古代）、以下は黄色細砂。黒褐色土は東へ薄くなる。
5区	17	20170201	GL-1.1mまで掘削。-0.4~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.6m灰赤褐色土（近世）、~-0.9m灰茶褐色土（近世）、~-1.05m茶褐色土（中世）、~-1.1m黒褐色土（古代）、以下は黄色細砂。
5区	18	20170202	GL-1.15mまで掘削。-0.8~-0.9m灰茶褐色土（近世）、~-1.0m茶褐色土（中世）、~-1.05m黒褐色土（古代）、以下は黄色砂。茶褐色土の西への落ち込みあり。
5区	A	20170203	図30参照
5区	19	20170206	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m黒褐色土（古代）、以下は黄色粗砂。黒褐色土は西へ落ちていくSX1の埋土で、埴輪1点出土。
5区	20	20170206	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m黒褐色土（古代）、以下は黄色粗砂。土坑埋土は黒灰色砂質土。
5区	21	20170207	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.75m暗灰色土（古代）、以下は黄色粗砂。SD2埋土は暗灰色土。
5区	22	20170208	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.7m茶褐色土（中世）、~-0.8m暗灰色土（古代）、以下は黄色粗砂。茶褐色土は東へ厚みを増す。SD3埋土は暗灰色土。
5区	23	20170208	GL-1.0mまで掘削。-0.45~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.85m茶褐色土（中世）、以下は黄色粗砂。SX2埋土は黒褐色土。
5区	24	20170210	GL-1.3mまで掘削。-0.4~-0.5m明灰褐色土（近世）、~-0.8m灰褐色土（近世）、~-0.9m灰茶褐色土（中世か）、以下は黄色砂。東落ちのSD4は茶褐色埋土で暗茶褐色土に切られる。
5区	25	20170110	GL-1.1mまで掘削。四周攪乱
5区	26	20170110	GL-1.0mまで掘削。四周攪乱

調査の成果

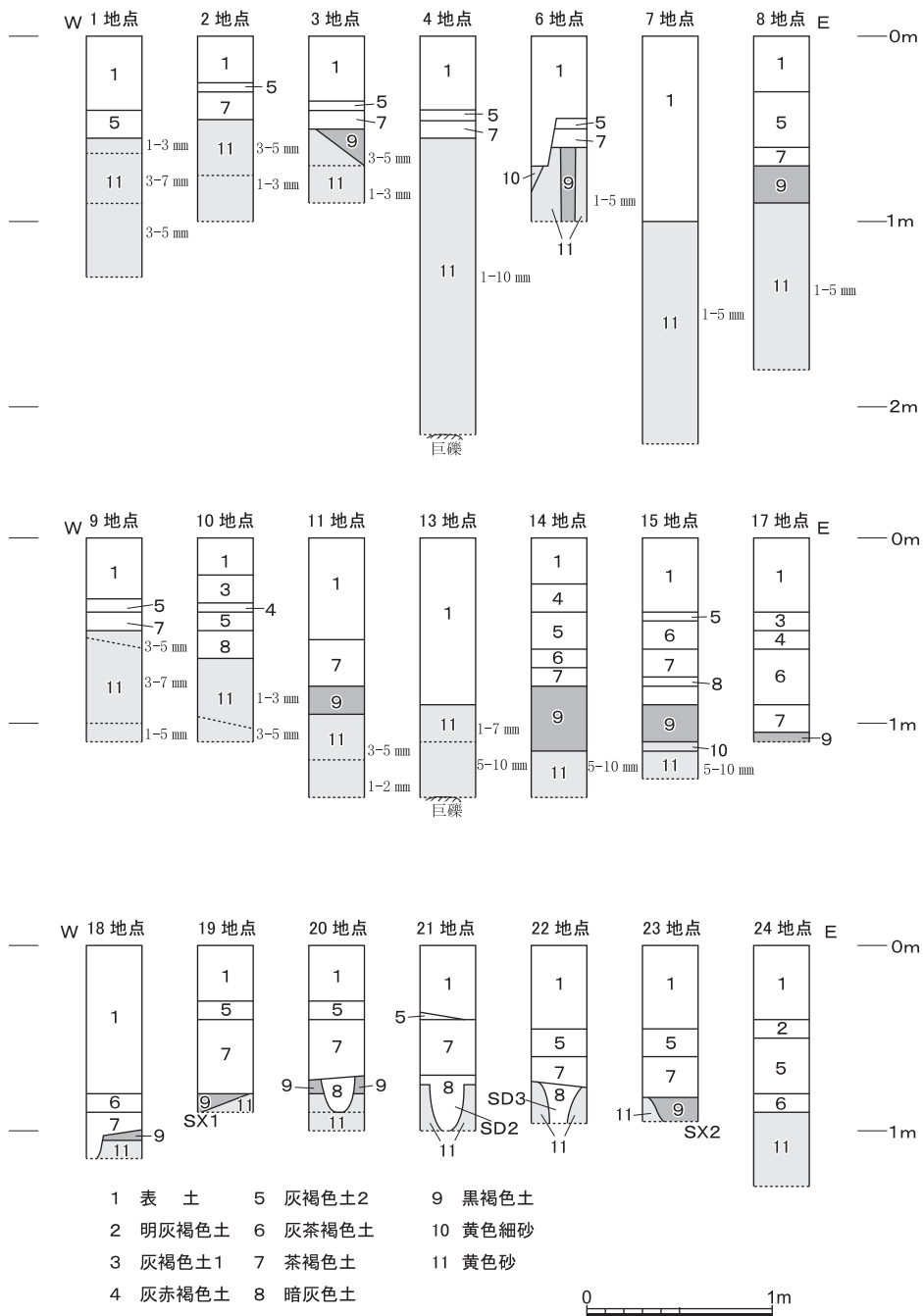


図26 第4・5工区の層序模式図 縮尺1/40

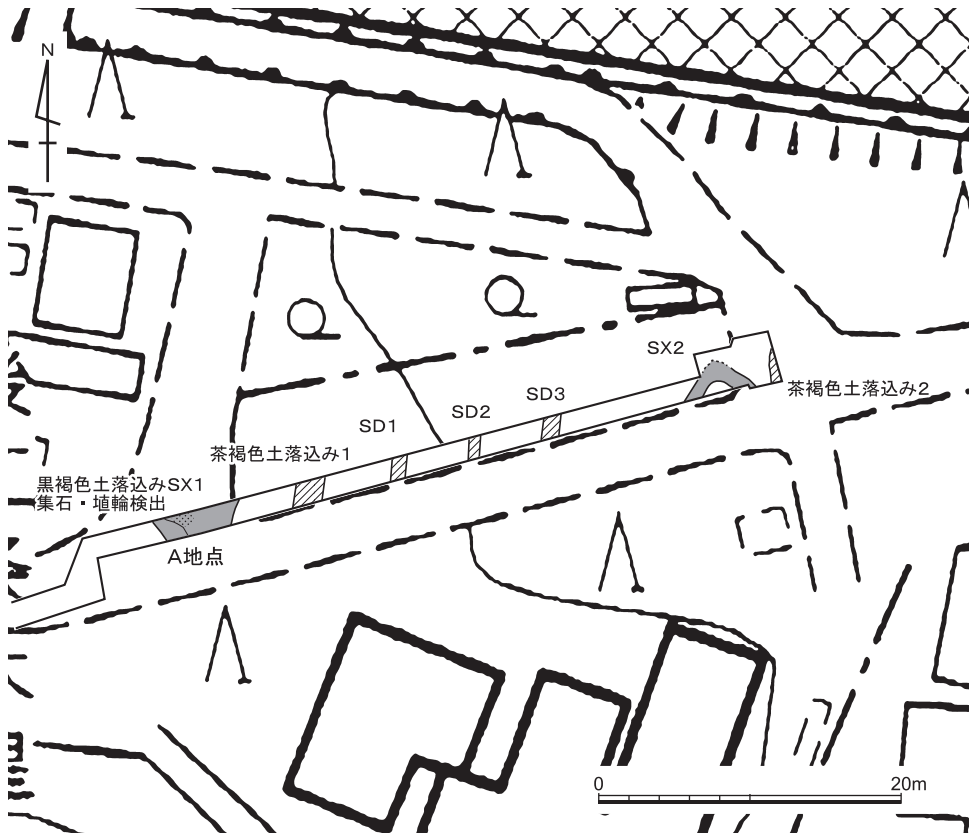


図27 第5工区の主要遺構配置図 縮尺1/500

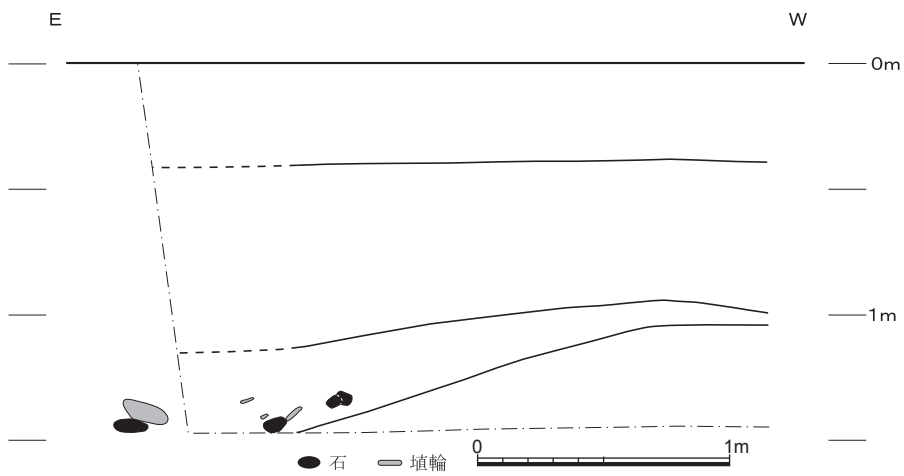


図28 第5工区A地点南壁のSX1の層序 縮尺1/30

調査の成果

が、個々の石は噛み合っていない。ただし、黒褐色土には礫が含まれることはまれであるとともに、構成礫種は白川流域によく見られる花崗岩ではないので、人為的にこの地点にもたらされたことは間違いなかろう。S X 1では、埴輪以外には、北壁の立ち上がり付近、検出面から5 cmほど下位で、須恵器甕の頸部破片を1点回収できた(Ⅱ16)。

埴輪は、S X 1以外ではS X 1の西約20mの15地点と西約10mの17地点の黒褐色土からも、それぞれ家形埴輪の隅柱部と思われる形象埴輪片1点と円筒埴輪1点を回収しているが(Ⅱ10・Ⅱ12)、そのほかの地点では見当たらなかった。

これより東側には、黄色砂上面で黒みがかった砂質土を埋土とする南北方向の溝を数条確認できたほか(S D 1～3)、23地点では、直角に折れ曲がる溝(S X 2)を確認している。S X 2は、遺物の出土はないが、S X 1と同じく黒みの強い埋土であることから古墳の周溝の隅部の可能性も考えておきたい。

第7・8工区 近世の灰褐色土の下位では、中世の暗茶褐色土、古代の黒褐色土ないし黒灰色土、先史時代の暗褐色土、白色粗砂(自然堆積の花崗岩砂粒)という層序を基本としている(表2、図29・30)。第7工区は、西半は攪乱により有意な堆積状況を確認できなかったが、東半では攪乱を免れた地層がよく残っていた(図29)。古代の堆積と思われる黒みの強い土壌化層の堆積はなく、中世の暗茶褐色土から連続的に暗褐色土に移行しているので、両者の判別は容易ではないが、上部は中世の土師器細片を包含することがあるのに対して、下部に包含されている遺物は縄文土器のみであった。縄文時代中期末の堅穴住居や大型建物柱穴列が検出されたB F 33区(図版1-123地点)やB F 32区(図版1-299地点)の発掘調査区に近接する6・7地点では、暗褐色土から摩滅していない縄文中期～後期の破片を回収している。

暗褐色土の下部は、粗砂質で土壌化のあまり進んでいない暗灰色土から、花崗岩粒で構成される白色粗砂へと、漸次的に移行している。白色砂の粒径は、10mm前後の場合もあるがおおよそ1～7mm程度で、1mm以下の細かい部分もある。B F 32区の調査成果に照らせば、白川系流路の水成堆積と思われる。また、3地点では、白色粗砂の下位にやや土壌化した明茶褐色粘質土の堆積を確認した。遺物は発見できなかったが、B F 32区(図版1-299地点・402地点)で確認された縄文早期以前の土壌化層に対応すると判断できる。

第8工区は、25地点以東では灰色がかった黒色の土壌化層が厚く堆積している(図30)。そこから数点の古代の土師器や瓦を回収したが、今回の立合調査の掘削深度までには、縄文土器を確認できていない。しかし、28地点では、近接するB G 34区(図版1-357地点)

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

表2 第7・8工区の立合調査一覧

工区	地点	調査日	概要
7区	1	20170110	GL-1.0mまで掘削。四周攪乱
7区	2	20170123	GL-1.1mまで掘削。四周攪乱
7区	3	20170124	GL-1.9mまで掘削。-0.8~-1.0m暗茶褐色土（中世）、~-1.2m暗褐色土（縄文）、~-1.9m白色粗砂（縄文）、以下は明茶褐色土。白色粗砂は粒径3~5mmだが上部はさらに細かい。
7区	4	20170127	GL-1.1mまで掘削。-0.2~-1.05m砂取り穴埋土（中世）、~-1.1m暗褐色土（縄文か）、以下は暗灰褐色粗砂質土（白色粗砂がやや土壌化した地層）。
7区	5	20170126	GL-0.9mまで掘削。-0.25~-0.35m灰褐色土（近世）、~-0.45m茶褐色土（中世）、~-0.6m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、以下は白色粗砂（粒径1~7mm）。茶褐色土は西側へ落ち込んで下部に砂取り穴埋土を認める。
7区	6	20170125	GL-0.9mまで掘削。-0.35~-0.5m暗茶褐色土（中世）、~-0.6m暗褐色土（縄文か）、~-0.7m暗灰色粗砂質土、以下は白色粗砂（粒径1~7mm）。暗褐色土から縄文土器片。白色粗砂に達する直径30cmの暗褐色土ビット1基。
7区	7	20170131	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.35m灰褐色土（近世）、~-0.5m暗茶褐色土（中世）、~-0.7m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、以下は白色粗砂（粒径1~5mm）。暗褐色土から縄文土器片。
7区	8	20170130	GL-1.2mまで掘削。-0.2~-0.3m灰褐色土（近世）、~-0.4m暗茶褐色土（中世）、~-0.6m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、~-1.1m白色粗砂（粒径1~7mm）、以下は白色細砂。
7区	9	20170130	GL-1.1mまで掘削。-0.25~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.8m暗茶褐色土（中世）、~-0.9m暗褐色土（縄文か）、以下は白色粗砂（粒径1~5mm）。
7区	10	20170130	GL-1.1mまで掘削。-0.25~-0.4m灰褐色土（近世）、~-0.5m暗茶褐色土（中世）、~-0.7m暗褐色土（縄文か）、以下は白色粗砂（粒径5~10mm）。
7区	11	20170131	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.35m灰褐色土（近世）、~-0.5m暗茶褐色土（中世）、~-0.7m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、以下は白色粗砂（粒径1~2mm）。
7区	12	20170131	GL-0.9mまで掘削。-0.3~-0.45m暗茶褐色土（中世）、~-0.65m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、以下は白色細砂。
7区	13	20170201	GL-0.9mまで掘削。-0.25~-0.3m灰褐色土（近世）、~-0.5m暗茶褐色土（中世）、~-0.7m暗褐色土（縄文か）、~-0.8m暗灰色粗砂質土、以下は灰白色粗砂（粒径3~5mm）。灰褐色土は東へ落ち込む。暗茶褐色土の土坑あり。
7区	14	20170201	GL-1.15mまで掘削。-0.25~-0.45m灰褐色土（近世）、~-0.75m暗茶褐色土（中世）、~-1.05m暗褐色土（縄文か）、~-1.1m暗灰色粗砂質土、以下は白色細砂。
7区	15	20170202	GL-0.9mまで掘削。-0.3~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.8m暗茶褐色土（中世か）、以下は砂取り穴埋土（中世）。
8区	16	20171201	GL-0.9mまで掘削。四周攪乱
8区	17	20171206	GL-0.9mまで掘削。四周攪乱
8区	18	20171207	GL-1.2mまで掘削。-0.8m~黒灰色土（古代か）
8区	19	20171208	GL-0.9mまで掘削。-0.6m~黒灰色土（古代か）
8区	20	20171209	GL-0.9mまで掘削。-0.6m~砂取り穴埋土（中世か）
8区	21	20171212	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.6m灰褐色土（近世）、~-0.65m黄灰褐色砂質土（中世か）、~-0.8m暗茶褐色土（中世）、以下は茶褐色土（中世）。
8区	22	20171215	GL-1.0mまで掘削。-0.8m~暗茶褐色土（中世）
8区	23	20171216	GL-0.85mまで掘削。-0.55~-0.6m灰褐色土（近世）、以下は暗茶褐色土（中世）。
8区	24	20171219	GL-0.7mまで掘削。-0.45~-0.65m灰褐色土（近世）、~-0.7m赤褐色土（近世）、以下は灰褐色土（近世）。
8区	25	20171220	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.7m暗茶褐色土（近世）、以下は黒灰色土（古代）。黒灰色土から古代土師器・瓦破片。
8区	26	20171221	GL-0.9mまで掘削。-0.4~-0.5m灰褐色土（近世）、~-0.7m暗茶褐色土（中世）、以下は黒灰色土（古代）。
8区	27	20171222	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.7m暗茶褐色土（中世）、以下は黒灰色土（古代）。西側で灰褐色土埋土の近世野壺の底部を確認。
8区	28	20171222	GL-1.0mまで掘削。-0.3~-0.7m灰褐色土（近世）、以下は砂取り穴埋土。
8区	29	20170213	GL-1.5mまで掘削。-0.4~-0.6m赤褐色土（近世）、~-0.8m黄灰色砂質土（中世か）、~-1.0m黒灰色土（古代）、~-1.2m暗灰色粗砂質土（古代）、以下は黒色粘質土（縄文か）。暗灰色砂質土から古代土師器・瓦破片。

調査の成果

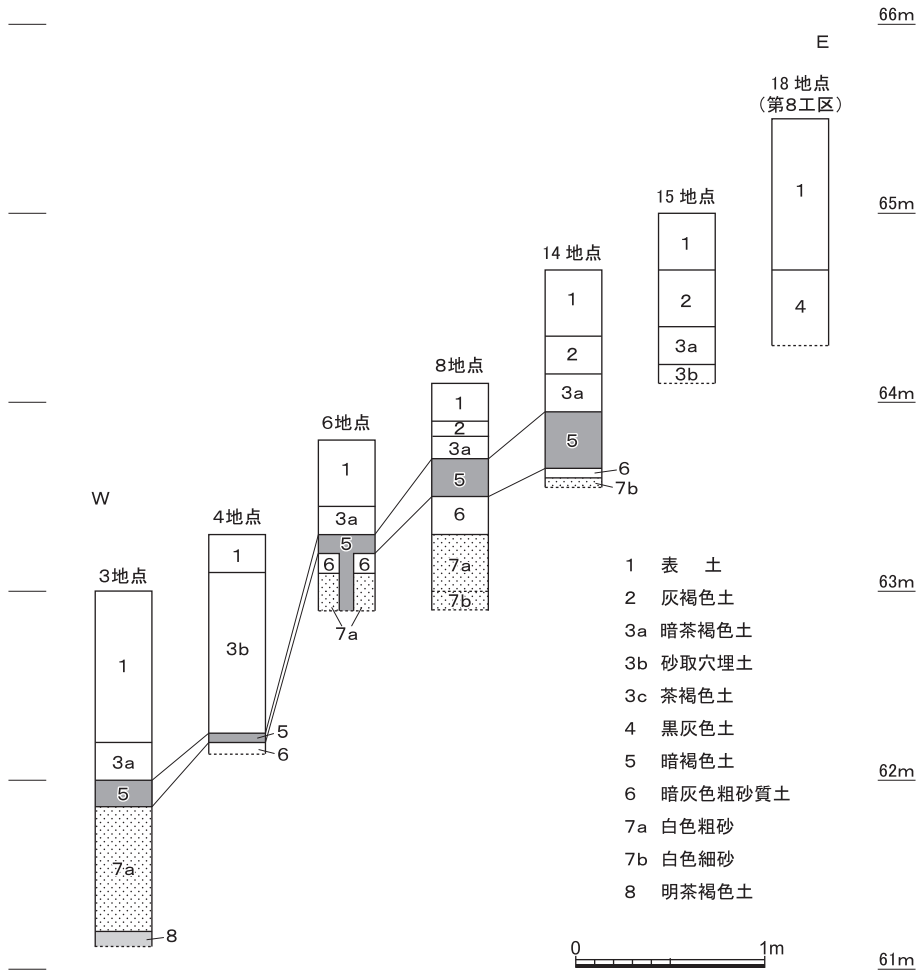


図29 第7工区の層序模式図 縮尺1/40

と同様に砂取り穴の埋土が堆積しているので、今回確認した黒灰色土も、BG34区の堆積状況と同じく縄文時代から古代にかけて白色粗砂の上部に形成された土壌化層と推定できる。なお、16地点で確認した黒灰色土は25地点以東の黒灰色土に対応すると思われるが、しまりがよくない。

(2) 遺物 (図版5・6, 図31~33)

Ⅱ1~Ⅱ12は第4工区出土の埴輪片で、Ⅱ10を17地点、Ⅱ12を15地点で回収したほかは、いずれもA地点の落込みSX1出土。Ⅱ1~Ⅱ10は円筒埴輪で、Ⅱ12は形象埴輪である。Ⅱ1~Ⅱ4は、いずれも灰白色を呈し、色調・焼成・調整工具から、同一個体と判断する。

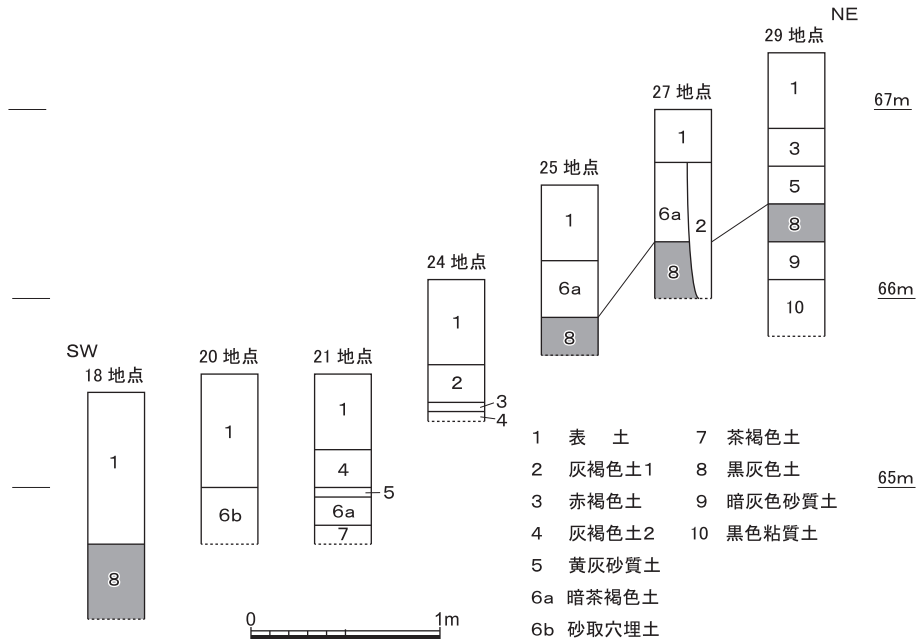


図30 第8工区の層序模式図 縮尺1/40

Ⅱ 1 は口縁部で、破片の下端付近の外面ではヨコハケをタテハケが切っていることが確認できる。口縁端部は、内外面のタテハケの後に面取りをほどこし、そのヨコナデは内外面とも10mm前後までおよぶ。Ⅱ 2 は、口縁下の1条目の突帯をもつ破片で、突帯断面はシャープな三角形を呈する。調整は、外面はヨコハケの後にタテハケで、内面は外面の突帯付近より上位にはタテハケ。Ⅱ 3 は透かし口を有するので、突帯は、2条目ないしそれ以下のものである。外面にはタテハケは認められない。Ⅱ 4 の底部では、外面には、A N 21 区の吉田二本松古墳群 8 号墳出土の円筒埴輪のようなオサエないシタタキ目は認められず、ハケメの静止痕跡が明瞭に残る。B d 種ヨコハケ〔一瀬1998〕に相当し得よう。

Ⅱ 5 は、白橙色を呈する円筒埴輪の口縁端部破片で、外面には1条の線刻が縦走する。調整は、外面はヨコハケで内面はタテハケ。端部の面取り調整は内外面のハケメにはほとんどかぶらない。胎土には粒径10mmほどの堆積岩が含まれる。Ⅱ 6 ～Ⅱ 9 は円筒埴輪で、淡橙色を呈し器面が摩滅している。同一個体と思われる。Ⅱ 6 ・Ⅱ 7 は口縁部で、Ⅱ 6 は、B c 種ヨコハケと思われる直線的な静止痕の残るヨコハケで、内面では斜めのハケメを端部付近のヨコハケが切る。口縁端部の面取りは、内外面のハケメにかぶるが、外面では10mm前後までおよび、いくぶん内湾気味にほどこされる。Ⅱ 7 ・Ⅱ 8 も同様の特徴を残すが、

調査の成果

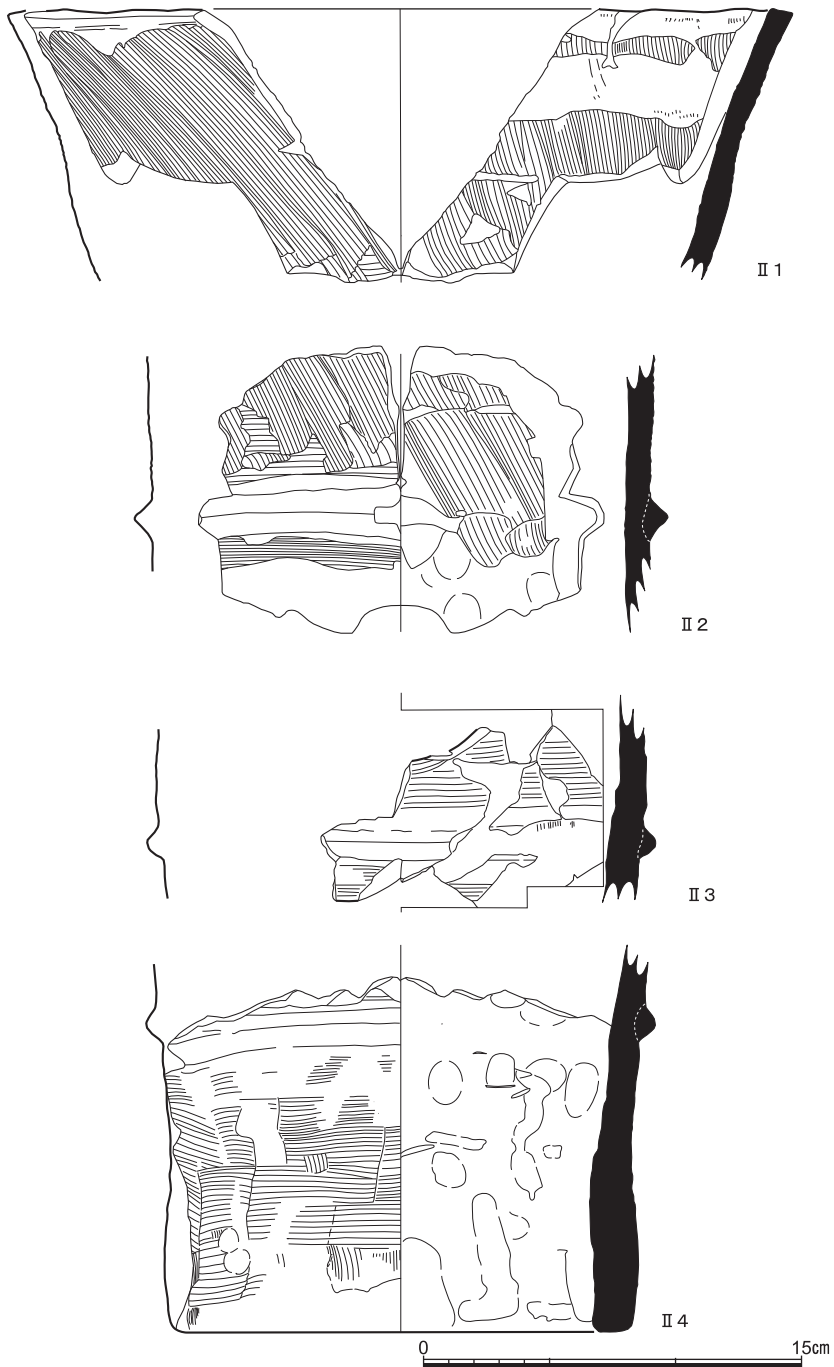


図31 第5工区の出土遺物(1) 縮尺1/3

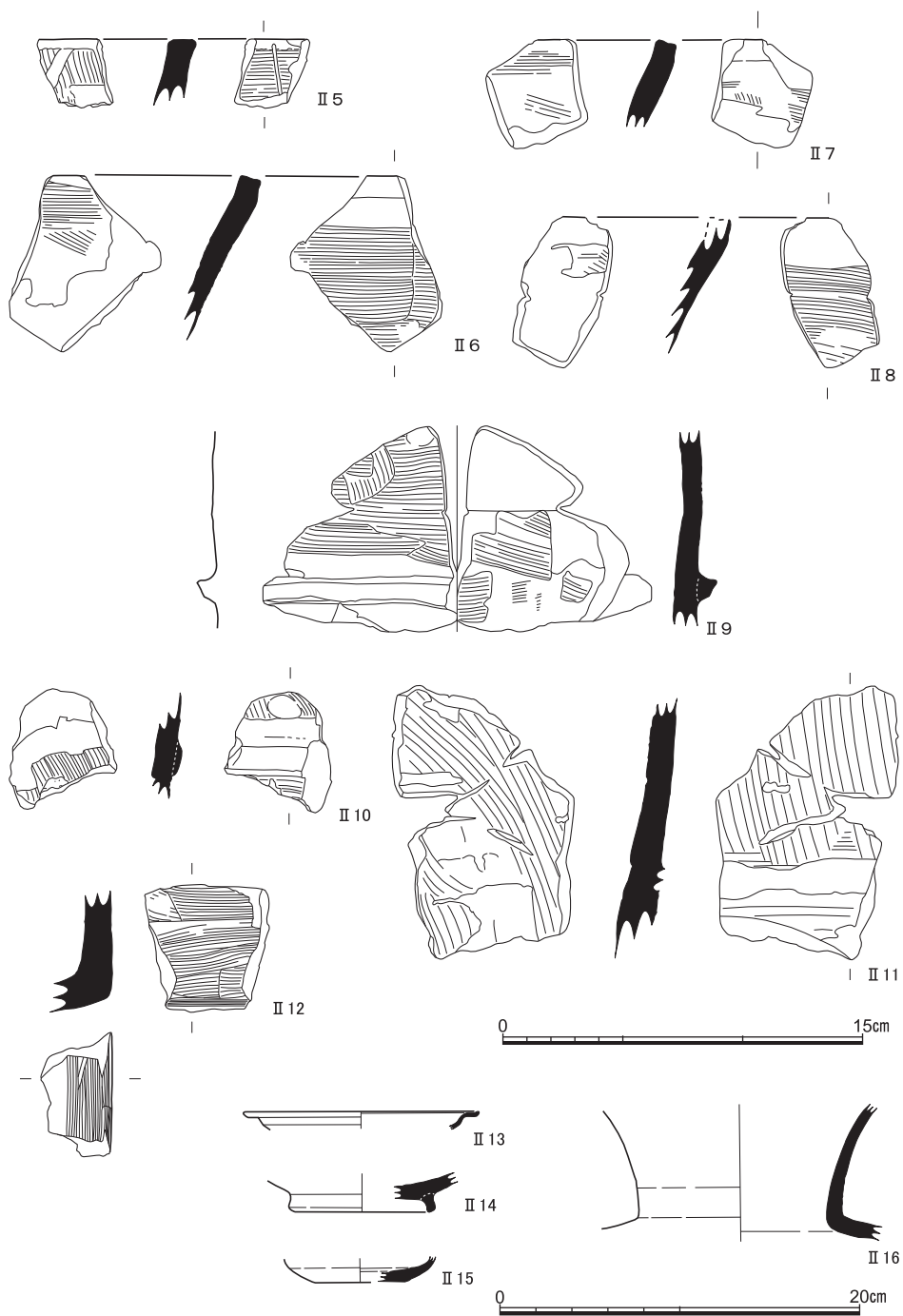


図32 第5工区の出土遺物(2) II 5～II 12縮尺1/3

摩滅がより進行し、Ⅱ 8ではさらに内面が広く剝離している。Ⅱ 9は、突帯断面が稜の比較的明瞭な台形を呈する。外面には部分的にタテハケが認められ、摩滅の進行した内面でも突帯の裏側あたりには斜めのハケメを認めえる。

Ⅱ 10は、黄橙色を呈し、低い台形の断面を呈する突帯をもつ。突帯の上方にはタテハケを確認でき、内面にもタテハケを確認できることから、1段目の突帯と思われる。茶褐色を呈するⅡ 11は、外面は突帯が剝離したと思われ、突帯部の上方はタテハケで下方はヨコハケの調整となり、内面はタテハケである。この破片は、ハケメの特徴はほかの個体とは異なり、粗雑な印象を与える。形象埴輪の目立たない部位の可能性もあるが、よくわからない。Ⅱ 12の形象埴輪は、家形埴輪の隅柱部と思われる。シャープに折れ曲がる外面の調整は、鉛直方向にハケメがほどこされている。ハケメはほかの円筒埴輪よりも細かい。

こうした埴輪の特徴は、吉田二本松古墳群 8号墳の埴輪の特徴と比べると、型式学的には古いと言える。円筒埴輪で言えば、Ⅳ期〔川西1978〕におさまると思われる。

Ⅱ 13・Ⅱ 14は S D 1 周辺で回収した。Ⅱ 13は平安時代の土師器で、「て」字状の口縁断面を呈し器壁の薄い B₂ 類の皿である。Ⅱ 14は平安時代の白色土器。Ⅱ 15は 15地点で回収した須恵器坏の底部。Ⅱ 16は S X 1 の西の立ち上がり付近で回収した古墳時代の須恵器甕の頸部。

Ⅱ 17～Ⅱ 26は第 7 工区からの出土で、Ⅱ 17～Ⅱ 25は 6・7 地点から出土した縄文土器。Ⅱ 17は、隆帯と半截竹管状工具による施文の船元Ⅲ式だが、縄文は確認しづらく、深淺縄文であれば船元Ⅳ式になる。Ⅱ 18は中期末の深鉢胴部の帯縄文。Ⅱ 19～Ⅱ 23は縄文や沈線のある胴部破片である。Ⅱ 19・Ⅱ 20は縄文と沈線をもち、Ⅱ 21・Ⅱ 22は縄文のみで、Ⅱ 23は沈線のみである。いずれも中期末から後期中葉までの時期におさまる深鉢破片だろう。Ⅱ 24・Ⅱ 25は、ともに外面が撫で調整で、中期末から後期中葉までの時期におさまると思われる深鉢の底部ないし底部付近の大ぶりの破片。胎土は、Ⅱ 24は雲母が目立つのに対してⅡ 25は堆積岩粒が目立つ。

Ⅱ 26は、暗茶褐色土から出土した、器壁がやや厚くいくぶん内湾する 2 段撫での平安時代の土師器皿で、C₃ 類と思われる。

Ⅱ 27～Ⅱ 29は第 8 工区の黒灰色土からの出土。Ⅱ 27は器壁が薄く外反する 2 段撫での平安時代の土師器で、C₁ 類と思われる。Ⅱ 28は高台が外側に踏ん張る平安時代の須恵器壺の底部。Ⅱ 29は一枚造りと思われる、須恵器のような焼成の平瓦。平安時代後期の播磨産であろうか。

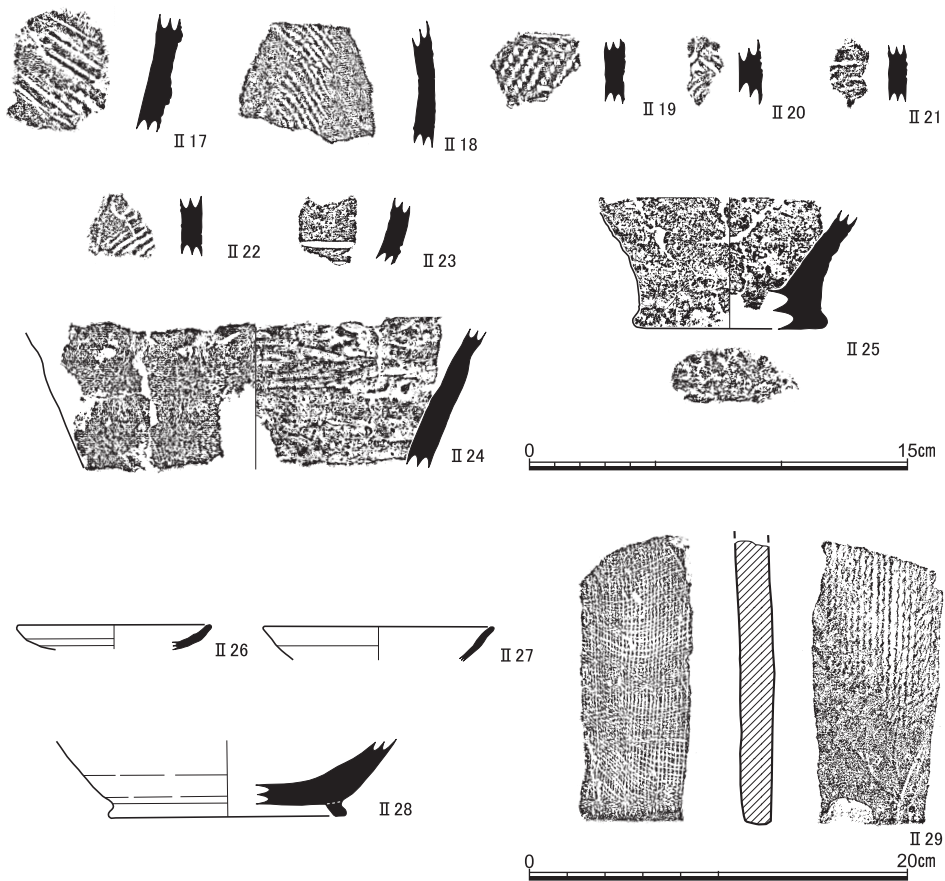


図33 第7・8工区の出土遺物 II 17～II 25縮尺1/3

3 1973年農学部総合館周辺発掘調査について

(1) 発掘の概要と層序（図版7，図34～36）

はじめに ここに紹介するのは、『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』（昭和48年9月）（以下、『概要』と略記する）として既報の発掘調査についてである。この『概要』は、残念ながら印刷物としてほとんど頒布されるものとなっておらず、また、とくに出土遺物については簡略な記述と少数の写真が添付されるにとどまり、資料として活用できる状態にはなかった。今回、至近の地点での立合調査を報告するに際して、この1973年調査資料の再検討もおこなったことから、前述の状況に鑑みて、出土遺物などを中

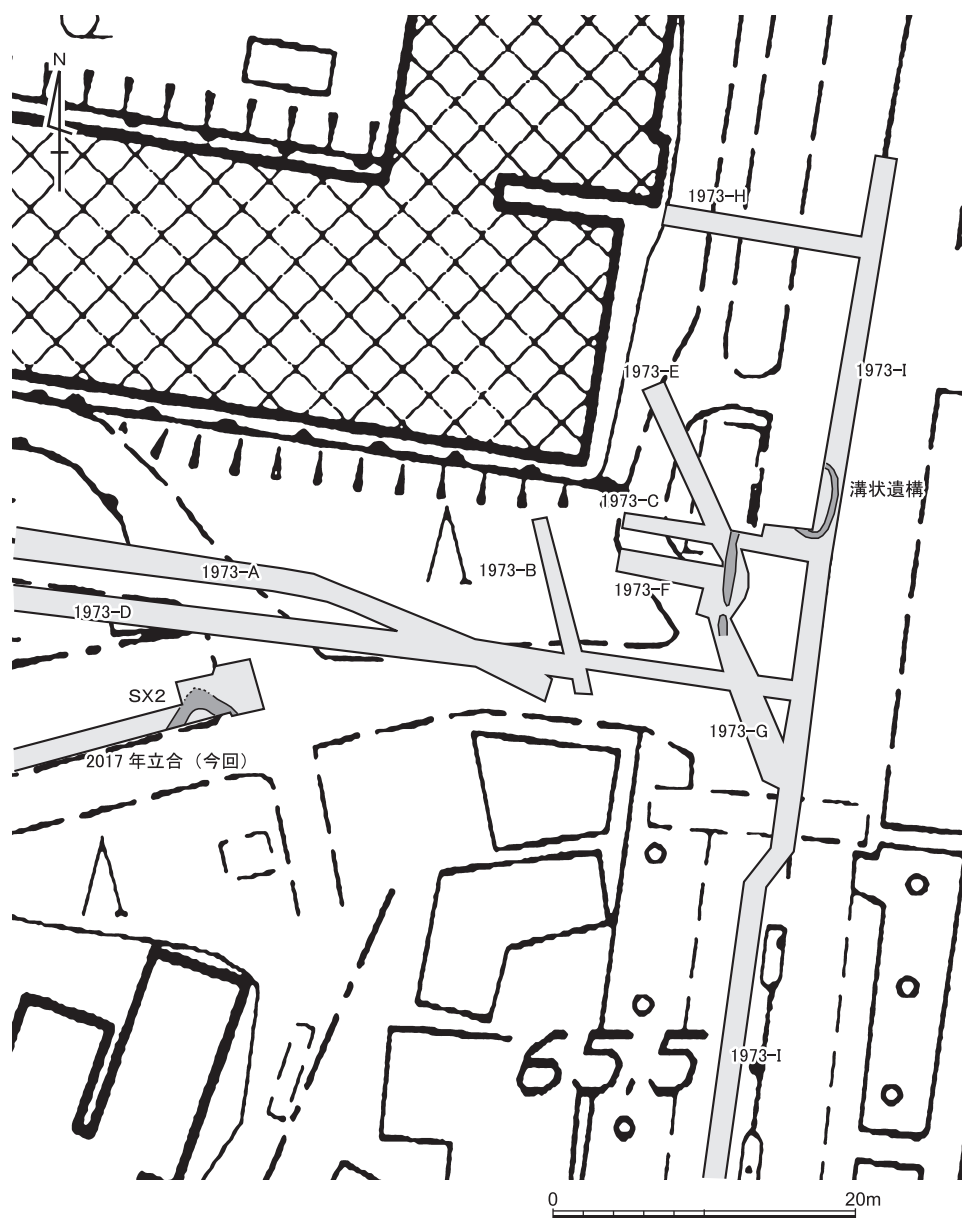


図34 1973年農学部総合館周辺調査トレンチ配置図 縮尺1/500

心にここに図示し、後世の活用をはかることとした。なお『概要』は、現在はPDFとして京都大学学術情報レポジトリKURENAIに収納され、誰でも閲覧が可能となっている(<http://hdl.handle.net/2433/151820>)。今回詳述しない経緯と経過をはじめ、当該調査の概要を把握することが可能であり、参照されたい。

トレンチの概要と層序 発掘調査は、管路敷設の1.5m幅の溝をそのまま調査トレンチとして活用する形で実施され、農学部総合館周辺のA～Hトレンチと、今出川通から北進して農学部正門を入り延びる、南北方向の長さ145mの長大なIトレンチの、計9つのトレンチからなる。『概要』の配置図をもとに、図34にこれらを示した。

このうち、互いに近接するFトレンチ北壁とBトレンチ東壁の層序については、『概要』に提示されているが、今回あらためてトレースして再掲した(図35)。これら2地点の層序はおおむね共通しており、とくに奈良時代層とされる黒色土層(第7層)が、黄色砂層上に厚く安定して認められる点が注意される。ただし、奈良時代に限定できるものではなく、それ以前の弥生中期～古墳時代の可能性もある点は、後述する。

また、Iトレンチについては、『概要』中に文章での記述のみであったが、今回、農学

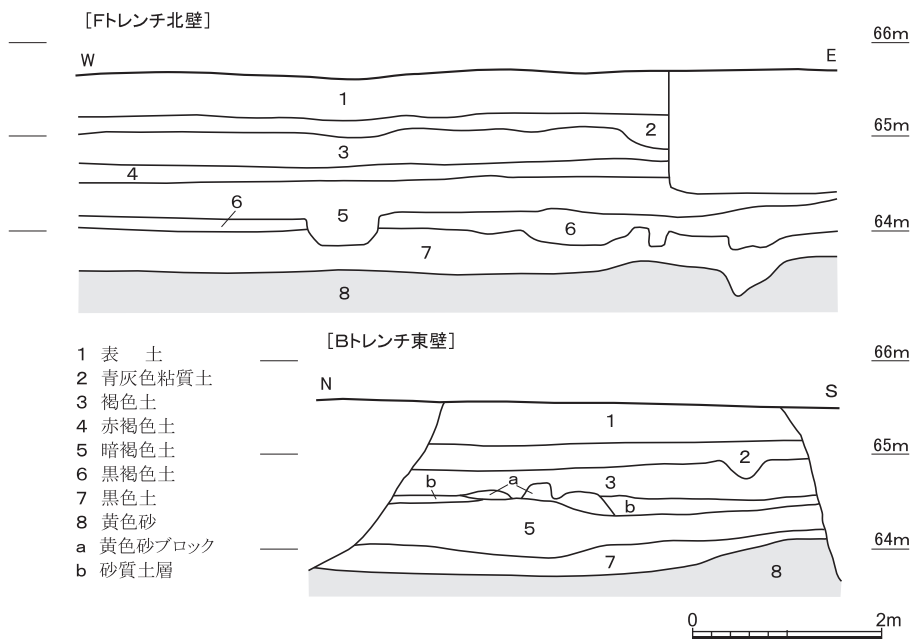


図35 Fトレンチ北壁・Bトレンチ東壁の層位 縮尺1/80

部正門以北についてを、調査時の原図をもとにトレースし、あらたに提示した（図36）。『概要』によれば、正門を境として南北で層序が大きく変化しており、南では、道路面下0.6～0.7mの水田床土層下部に約2mにおよぶ砂層の堆積がみられるのみで、遺構は全く存在しなかったとされる。門より北側では、層位は安定していくが、門北の約5m位にわたって層序の断絶が認められ、北側の古い白川砂層および歴史時代層が、南側の新しい白川砂層によって絶たれている、と報告されている。

図36には、その部分付近より北側の層位を提示した。ここにみるように、砂層どうしの切り合いは確認できるが、歴史時代層との関係については、肝心の部分が攪乱にかかっており、層位図からは関係を把握することは不可能であった。したがって、『概要』で推定するような、中世以降の新しい流れが西流していた、とする根拠は欠けていると言わざるをえない。今回の立合調査や、周辺での調査成果を勘案すると、中世以降の大規模な流れの存在は想定しがたく、その流下した時期は、少なくとも古墳時代以前ではないかと推測する。

農学部正門から約250m西南西に位置する276地点の発掘調査において、黄色砂層を切って西流する同じような流れの存在が確認されており、その流れは南側の217地点へもおよんでいる。上面では奈良時代以降の遺構が確認され、下面では、弥生中期後葉の土器が良好な状態で一括出土している。この状況を重視するならば、流れの時期も弥生中期後葉かそれに近い時期である、と絞ることもできよう。仮にこの流れが、農学部正門付近の流れが西へとおよんだものとするならば、その流れの上に位置する今回の立合調査第4工区の古墳時代遺構や、後二条天皇陵が古墳時代の産物であったとしても、矛盾しないであろうと考える。

（2）遺構と遺物（図37～40、図版8・9）

溝状遺構と出土遺物 幅の狭いトレンチ調査であったため、遺構としてはIトレンチの方形にめぐる溝状遺構が、取り上げるべき唯一のものといえる（図34）。まずその遺構と出土遺物について詳述する。

『概要』によると、直上の黒色砂質土層が落ち込む形で、トレンチ西壁に入り込むコ字状に、幅50cm深さ20～30cm、南北辺5.5mで検出されている。埋土中から遺物がほとんど出土しない中で、南辺角近くに、完形の甕1個体がつぶれて発見された（図版7-3・4、図37）。トレンチを西へと拡張した結果、溝は西へ向かうにつれて北折し、結果として方形プランにはまともらなかったとされている。残されている図面でみる限りは、西北部分

京都大学北部構内B C 30区ほかの立合調査

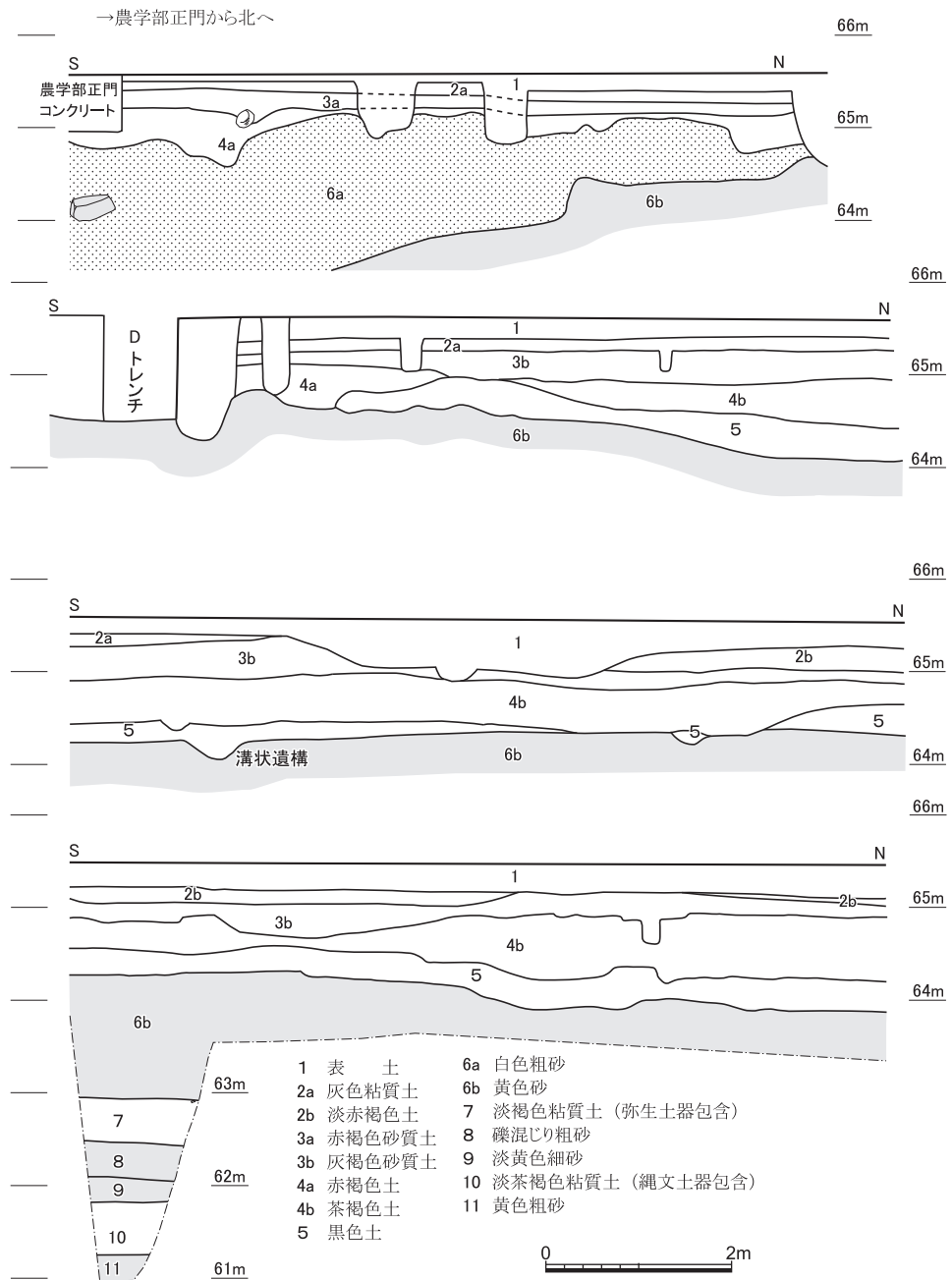


図36 Iトレンチ西壁の層位（農学部正門より北側） 縮尺1/80

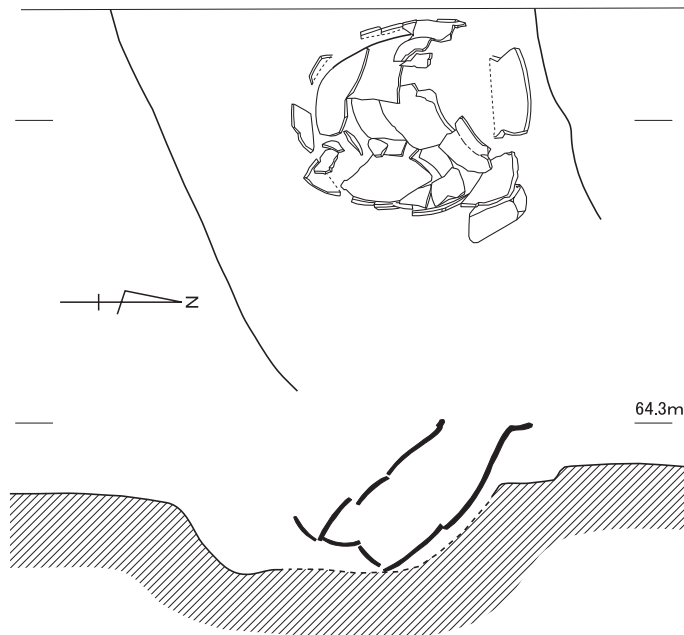


図37 I トレンチ溝状遺構内の甕の出土状況 縮尺1/10

は不詳ながら、南北軸が6 mたらずの楕円形に近い形状であったといえる。

出土した完形の甕（図38-1）は、器高が40cm近くに達する長胴甕で、内外面の全面を刷毛目調整した後、外面下半は底部から中位まで削りあげている。口縁部は、弱く内湾する。この資料は、『概要』では奈良時代初期に比定され、黒色土を奈良時代とする根拠となっている。しかしながら現在の知見に照らすと、同種の特徴をもつ甕は、山城地域においては、京都市旭山古墳群・中臣遺跡などで知られており、7世紀中葉に比定されている〔小森1996〕。この資料の帰属時期も、その段階に求めるべきであろう。したがって、溝状遺構も、奈良時代ではなく飛鳥時代（古墳時代終末期）とするのが妥当である。

上記のように時期を推定すると、あらためてこの溝状遺構の性格が問題となる。形状からみて、住居址である可能性は低く、京都市旭山古墳群では、7世紀前半段階に小規模な方形墳の造墓をおこなっていることを考慮すると、墳墓の周溝であった可能性もあろう。とすると、出土した甕は、蔵骨器として使用されたか、供献されたものとみることになる。しかし、記録に残された出土状況によると、甕は、溝の方向と軸線を直交するような方向で、口縁部を溝で囲まれる側に向けて、溝底に接しながら出土している（図37）。仮に転落したものとしても、上記の用途に用いられたものとしては不自然であるともいえよう。

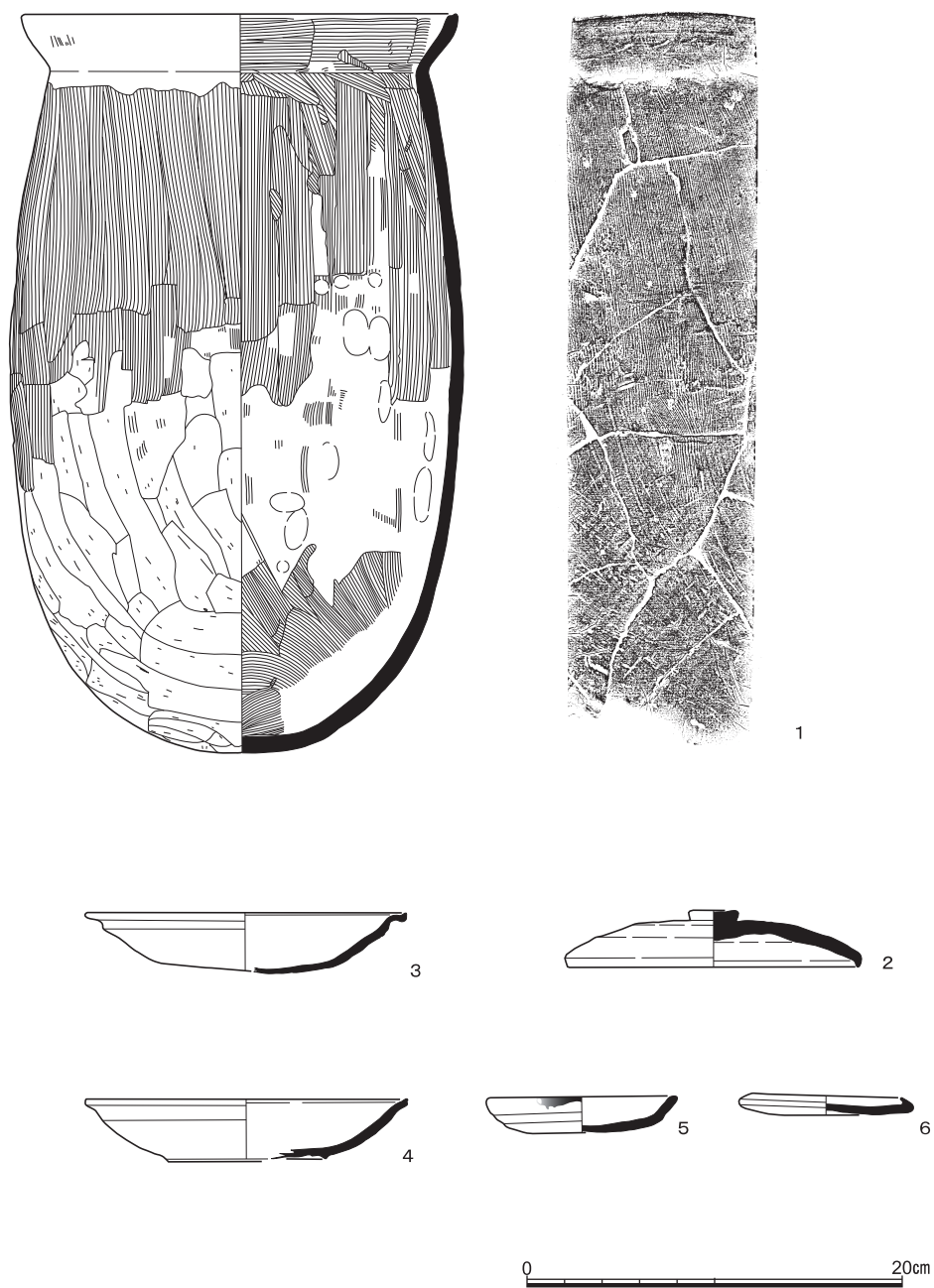


図38 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(1)

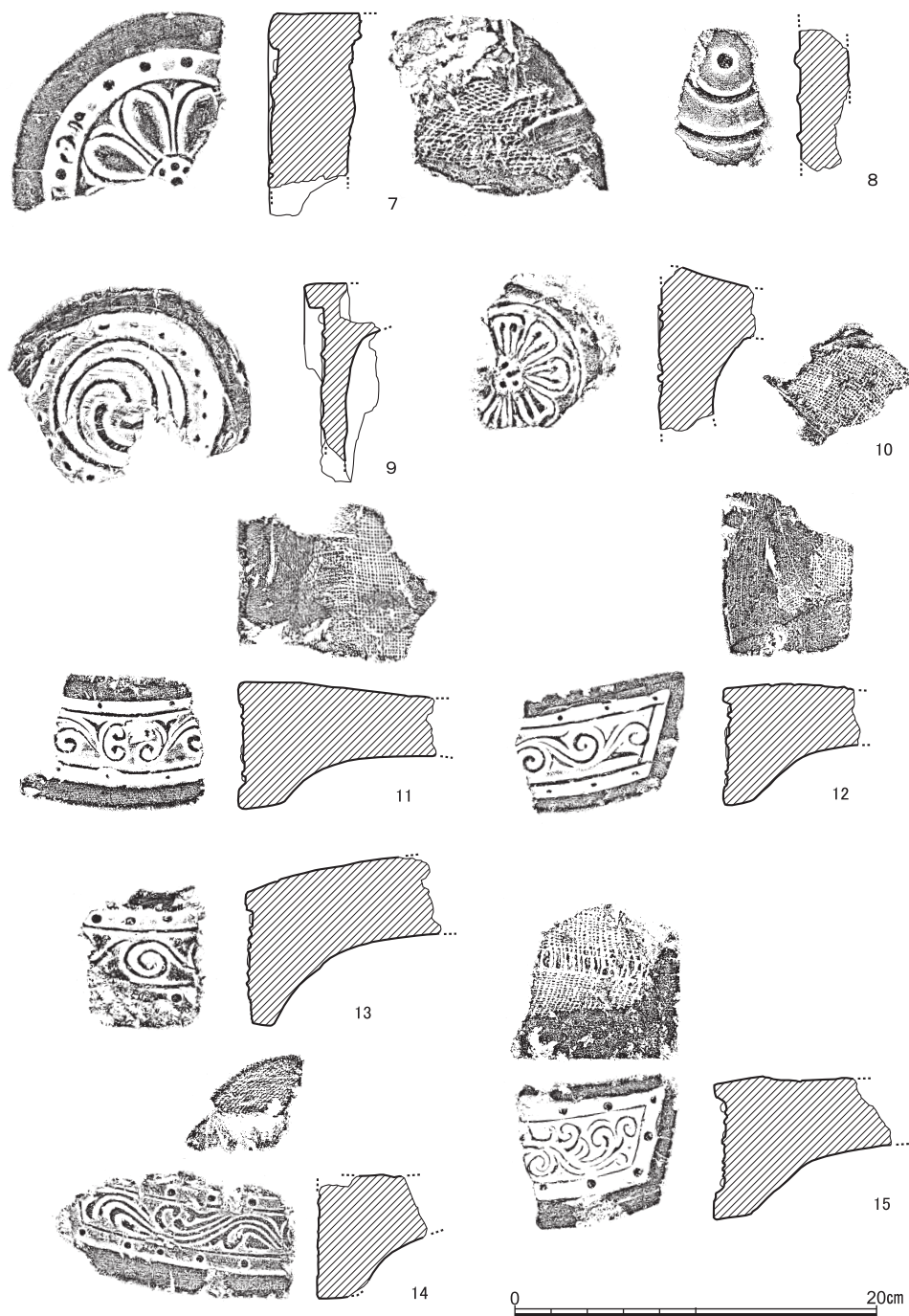


図39 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(2)

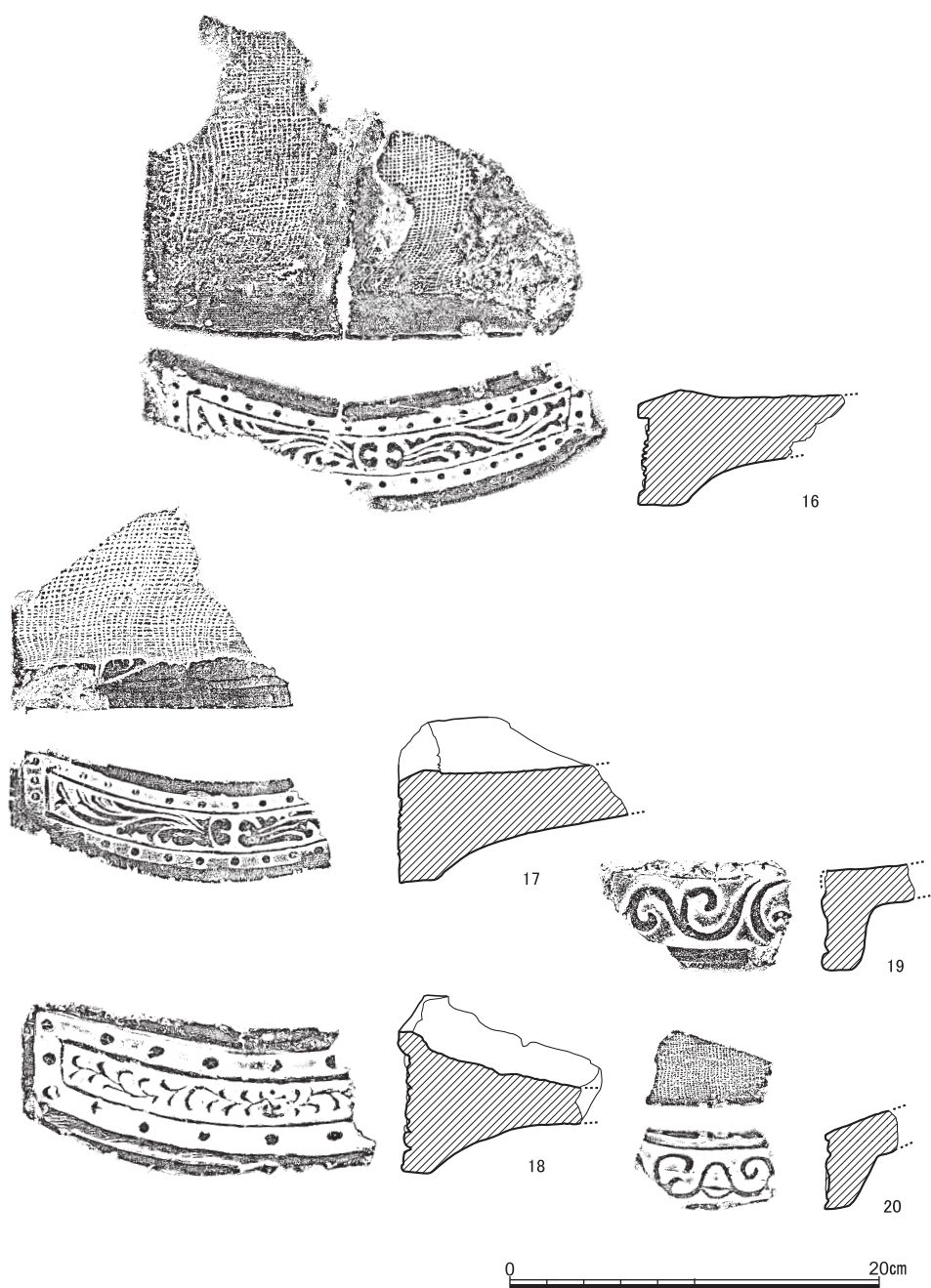


図40 1973年農学部総合館周辺調査の出土遺物(3)

土器と瓦磚類 遺構にはともなっていないが、おもにAトレンチやDトレンチを中心に、包含層中から土師器皿類と瓦磚類多数が延喜通宝とともに出土している。土師器皿類は、「て」字状口縁のものが多く（図38-3・4）、4には痕跡的な紐状の高台が付されている。9世紀末～10世紀初頭頃のものと言えよう。このほか、12世紀代のものと言える2段撫で手法の皿（5）や、受皿（6）がある。

軒瓦についても、土師器と同じく平安中期～後期のものがみられる。7は、瓦当に小野瓦屋産を示す「小」銘がみられるもので、軒平瓦の13と対をなすものとされる。また、18の均正唐草文軒平瓦は、平安宮大内裏に出土例があるとされるが、中心には「上」銘が認められる。16・17はC字対向の中心飾りをもつ同文の軒平瓦で、図示していないが、さらに2点の同文品が出土している。これら1973年に出土した軒瓦は、現在存在を把握しているものでは軒丸瓦が4点、軒平瓦が12点と、軒平瓦の比率がかなり高い。同様に平安中～後期の瓦磚類が多く出土している221地点でも、軒丸瓦16点に対して軒平瓦34点と、やはり同様な傾向が報告されている。そして、軒丸瓦では7と1点、軒平瓦では16・17との同文品4点が含まれている。遺構からの出土品ではないとは言え、組成の偏りは興味深いデータであろう。

(3) 小 結

以上、堆積状況の確認と出土遺物の提示を主眼にして、再報告をおこなってきた。奈良時代と報告されてきた甕が、古墳時代にさかのぼるものであって、出土した溝状遺構の性格について、墳墓を含めて再検討を必要とされること、平安時代中～後期の瓦磚類が多く出土しており、その組成比率の軒平瓦への偏りが、地点を違えても共通する可能性が指摘できること、の2点が、あらたな成果であったと考える。とくに、後者については、北部構内でも西半域では瓦磚類の出土は目立たないことから、瓦を使用したなんらかの施設を想定するならば、東半部の可能性が高いと考えるべきことが、いっそうはっきりしたものとみたい。

4 小 結

今回の調査の最大の成果は、第4工区における埴輪のまとまった出土である。調査形態や範囲の制約から、今回のSX1が古墳の周溝そのものであると確定するには至らなかったけれども、少なくとも至近に5世紀代の埴輪をとまなう古墳が存在することは事実となった。吉田南構内における吉田二本松古墳群と同様な古墳群が、北白川追分町遺跡にも展

開していた可能性も、示唆していよう。埴輪の型式や特徴には、若干の相違がみられるようであるが、今後子細に検討することが課題となる。

また、埴輪の出土地点は、宮内庁の比定する後二条天皇陵の北側に隣接する。この御陵は、円墳状を呈している。こうした形状と、かつては「フケ塚」などと呼ばれ、周溝状の窪地をともなっていたと伝えられていること、また、京都市の遺跡地図上では、近接して追分町古墳群という横穴式石室の円墳が記録されていること、から、当該の御陵も古墳でもおかしくないとする推定も提出されてきた〔山田2005〕。今回の埴輪の発見により、中期古墳も含めた推定が可能になったとみることができよう。そして、前節で再報告したように、墓域としては終末期まで継続していた可能性も、示されたといえる。これらは、本部構内でみつかる同時期の遺構と一連のものと捉ええるのかどうかを、今後検討していかなければならないだろう。

本章は、(1)・(2)を富井が、(3)・(4)を伊藤が執筆し、全体の調整を伊藤がおこなった。また、整理作業において埴輪について、梅本康広（向日市埋蔵文化財センター）、小浜成（大阪府教育庁）、阪口英毅（本学文学研究科）の3氏からご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 網 伸也 1994年 「北白川廃寺2」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所
- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 泉 拓良 1978年 「京大病院遺跡A H17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 五十川伸矢 1991年 「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
- 五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 一瀬和夫 1998年 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—京都大学北部構内B A30区（追分地蔵地点）の出土資料—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2010年 「鴨東の古代—古墳—奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 伊藤紀之 2010年 「湯たんぼの形態成立とその変化に関する研究Ⅳ」『共立女子大学家政学部紀要』56
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O 18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 川西宏幸 1978年 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』

参 考 文 献

- 1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
- 1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
- 1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
- 1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
- 2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
- 2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
- 2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
- 2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京大文総研（京都大学文化財総合研究センター）
- 2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
- 2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 2011年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
- 2012年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
- 2013年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
- 2014年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』
- 2015年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』
- 2016年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
- 2017年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2015年度』
- 小森俊寛 1996年 「山城北部・南部」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』
- 笹川尚紀 2018年 「土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 千葉 豊 1991年 「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
- 2013年 「京都大学北部構内採集の石棒」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
- 千葉豊・阪口英毅 2005年 「京都大学吉田南構内A N22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研

参 考 文 献

- 究年報 2000年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 富井眞・笹川尚紀 2010年 「京都大学病院構内A G16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 富井眞・笹川尚紀・伊藤淳史 2015年 「京都大学吉田南構内A N21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年 「京都大学北部構内B A28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
- 兵頭 勲 2008年 「押型文系土器（黄島式土器）」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 宮本雅明 1977年 「病院構内の変遷」『京都大学建築八十年のあゆみ 京都大学歴史的建造物調査報告』京都大学広報委員会
- 山路茂則 1996年 『炎と生きる アサヒ衛陶株式会社前史』『炎と生きる』編纂委員会
- 山田邦和 2005年 「図80 後二条帝 北白川陵」外地昇編『文久山陵図』新人物往来社
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代

京都大学構内遺跡調査要項 2016年度

京都大学文化財総合研究センター規程

- 第1条 この規程は、京都大学文化財総合研究センター（以下「文化財総合研究センター」という）の組織等に関し必要な事項を定めるものとする。
- 第2条 文化財総合研究センターは、文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 文化財総合研究センターに、センター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、文化財総合研究センターの所務を掌理する。
- 5 センター長に事故があるときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を代理する。
- 6 センター長が欠けたときは、あらかじめセンター長が指名する者がその職務を行う。
- 第4条 文化財総合研究センターに、その重要事項を審議するため、協議委員会を置く。
- 2 協議委員会の組織及び運営に関し必要な事項は、協議委員会が定める。
- 第5条 文化財総合研究センターに、学際的教育研究拠点の構築に係る関係機関等との連携に関する重要事項についてセンター長の諮問に応ずるため、連携協議会を置く。
- 2 連携協議会の組織及び運営に関し必要な事項は、連携協議会が定める。
- 第6条 文化財総合研究センターは、次に掲げる研究科の教育に協力するものとする。
- 文学研究科
工学研究科
- 第7条 文化財総合研究センターに置く事務組織については、京都大学事務組織規程（平成16年達示第60号）の定めるところによる。
- 第8条 この規程に定めるもののほか、文化財総合研究センターの内部組織については、センター長が定める。

センター長

吉川 真司（文学研究科教授）

協議委員会委員

吉川 真司（文学研究科教授）

千葉 豊（センター准教授）

吉井 秀夫（文学研究科教授）

竹村 恵二（理学研究科教授）

山岸 常人（工学研究科教授）

西山 良平（人間・環境学研究科教授）

岩崎奈緒子（総合博物館教授）

センター教員

千葉 豊

伊藤 淳史

富井 眞

笹川 尚紀

内記 理

センター教務補佐員

磯谷 敦子

長尾 玲

柴垣理恵子

センター事務室

西本 幸江（文学研究科・事務室長）

藤森 良祐（事務補佐員）

京都大学構内遺跡のおもな調査

表3 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照、文献中「埋」は京大埋文研、
「調」は京大調査会、「文」は京大文総研をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器、石器	梅原23, 鳥田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満安		鳥田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	鳥田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺、玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原末治				縄文土器、石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒	千葉13	
1972	大阪府満安		小野山節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器、瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器、土師器	中村73, 第3章	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器、瓦、陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部B E33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器、土師器、瓦	調77	
1976	病院A E15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝、池、土器溜	土師器、瓦、陶磁器	調77, 埋81a	
1976	植物園B D35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院A H17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝、井戸、集石	土師器、瓦	埋78a	
1976	教養部A S23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器、須恵器	調77	
1976	北学部B J33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	調77	
1976	和歌山県瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壙墓	縄文土器、人骨	埋78a	
1977	病院A F14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸、溝、井戸	土師器、瓦、陶磁器	埋78a, 埋81a	
1977	医学部A O18区	41	泉吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝、土器溜、井戸	土師器、瓦、陶磁器	埋79, 梶原03	
1977	北気管	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝、土坑	須恵器、土師器	埋78a	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 A Q23区 A N23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 A A18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 B E29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 B G32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 B G31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 A W28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 A Y22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 A N19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 B H37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 A M24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 A Z30区	71	西川 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 A P19区	74	清水 芳裕 五十川伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 A T27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期堅穴住居, 中世土墳墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	堅穴住居跡を現地保存
1979	北 部 B D32区	79	泉 拓良	立合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 A T27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 A X28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京都府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 A O21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土墳墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 A M22区	93	吉野 治雄	立合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 B D30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺 跡 名	地点	担 当 者	調 査 の 種 類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
1981	和歌山県瀬戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑、弥生配石、古墳時代土坑	縄文土器、硬玉管玉、弥生土器、製塩土器	埋84	
1981	本部 A X 28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器、瓦、陶磁器、硯	埋83	
1981	教養部 A P 22区	111	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳、古代梵鐘鑄造遺構、中世門・溝・墓	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、銅型、溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺構を現地保存
1981	京都市山本			分布調査			縄文土器、緑釉陶器、灰釉陶器	埋83	
1982	京都府中海道		泉 拓良	試 掘	20	中世土器溜	縄文土器、土師器	埋84	
1982	病院 A F 15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸、溝	白磁	埋84	
1982	農学部 B F 33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居跡、中世土坑	縄文土器、土師器	埋84	
1982	和歌山県瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器、弥生土器、製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本部 A T 29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠、建物	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1982	農学部 B E 33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世水田、溝	土師器、瓦器、陶磁器	埋86	
1983	医学部 A N 20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸、土取り穴	須恵器、瓦器、土師器	埋86	
1983	北 部 B F 31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林、古代・中世溝	縄文土器、土師器、緑釉陶器	埋87、富井98	
1983	医学部 A M 19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立 合		中世土取り穴	土師器、瓦器、石鍋	埋86	
1984	病院 A F 19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池、井戸、野壺	縄文土器、蓮月焼	埋87	
1984	病院 A J 19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋87	
1984	医学部 A N 18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸、土取り穴、中世梵鐘鑄造遺構	土師器、瓦器、銅型	埋88	
1985	北 部 B J 31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝、建物跡、土坑、近世溝	弥生土器、土師器、須恵器	埋88	
1985	病院 A J 18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器	埋89	
1985	病院 A J 19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸、近世土取り穴	土師器、近世陶磁器、銅型	埋89	
1986	教養部 A P 25区	167	清水 芳裕 宮本 一夫 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器、近世陶磁器	埋89	
1986	本部 A X 30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑、中世道	土師器、陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査区	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1986	医学部 A L 20区	169	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	331	近世土取り 穴	土師器, 陶磁 器	埋90	
1986	教養部 A L 23区	170	清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北部 B D 33区	180	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土 師器, 須恵器	埋90	
1987	本部 A W 27区	181	五十川伸矢 千葉 豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北部 B H 35区	182	清水 芳裕	試掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北部 B D 28区	183	清水 芳裕	試掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本部 A T 25区	188	清水 芳裕	立合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 A R 19区	190	清水 芳裕 森下 章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋92	
1988	病院 A H 19区	191	浜崎 一志 千葉 豊 森下 章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1988	病院 A E 12区	192	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	599	近世道路・ 溝・野壺・井 戸	土師器, 瓦, 陶 磁器	埋93	
1989	病院 A E 13区	198	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸・ 野壺・柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病院 A G 14区	200	千葉 豊 森下 章司	事前発掘	394	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教養部 A R 21区	202	五十川伸矢 浜崎 一志 森下 章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 A M 17区	207	五十川伸矢 森下 章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北部 B A 28区	208	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬戸	213	浜崎 一志 伊藤 淳史	立合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	本部 A V 30区	214	千葉 豊 伊藤 淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北部 B B 28区	217	清水 芳裕 古賀 秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本部 A W 25区	218	千葉 豊 吉井 秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器	埋97	
1993	本部 A U 30区	219	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学部 A O 22区	220	五十川伸矢 伊藤 淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸・溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤10	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北部 B F 34区	221	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器溜 ・土坑, 中世 ・近世道路	土師器, 陶磁 器	埋98	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺 跡 名	地点	担 当 者	調 査 の 類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
1993	病 院 A F 12区	222	伊藤 淳史	試 掘	113	近世道路	土師器, 陶磁器	埋97	
1994	北 部 B F 30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周溝墓, 平安土壇墓	縄文土器, 弥生土器, 土師器	埋98	
1994	本 部 A X 25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土器溜	土師器, 陶磁器	埋99	
1995	総合人間 学 部 A R 25区	238	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病 院 A G 20区	239	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病 院 A F 20区	240	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本 部 A X 26区	241	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医 学 部 A N 20区	248	五十川伸矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間 学 部 A R 24区	249	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間 学 部 A R 23区	254	伊藤 淳史	立 合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生～中世 包含層
1998	総合人間 学 部 A N 22区	261	千葉 豊 古賀 秀策 阪口 英毅	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本 部 A U 28区	262	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間 学 部 A L 24区	264	古賀 秀策 千葉 豊	立 合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生～近世 包含層
1999	病 院 A F 20区	269	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医 学 部 A O 17区	270	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A W 26区	271	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸・瓦溜・溝, 近世溝	縄文土器, 須恵器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本 部 A X 22区	272	富井 眞	立 合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北 部 B C 28区	276	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文 献	備 考
2000	本 部 A T 21区	277	千葉 豊 阪口 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳 周濠, 中近 世白川道, 尾張藩邸水 路・堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭 貨	埋06	
2000	病 院 A E 19区	278	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・ 土坑・池	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器, 瓦	埋07	
2000	病 院 A E 18区	279	阪口 英毅	試 掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁 器	埋05	近世包含層
2001	吉 田 南 A R 24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘 立柱建物, 平安時代経 塚, 古代・中 世溝, 柵	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器, 青銅製経 筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病 院 A F 12区	290	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病 院 A F 13区	291	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世柱穴	土師器, 陶磁 器	埋06	
2001	本 部 A T 25区	293	清水 芳裕 千葉 豊	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋06	
2002	本 部 A U 25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・ 井戸, 近世 集石	縄文土器, 土 師器, 近世陶 磁器・瓦	埋07	
2002	北 部 B D 28区	297	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1925	縄文堅果集 積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医 学 部 A R 19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中 世道路・井 戸, 近世土取 り穴・野壺	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北 部 B F 32区	299	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	1900	縄文建物跡・ 焼土・土坑, 中世砂取り 穴・近世溝	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶 磁器, 近世墓 石	埋08	
2002	吉 田 南 A R 25区	302	千葉 豊	立 合		古代・中世・ 近世溝	土師器, 陶磁 器, 中世瓦, 磁 器, 将棋駒	埋07	
2003	医 学 部 A P 18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井 戸・溝・集石・ 土器溜・野壺 群, 近世井 戸・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器, 瓦, 石 鍋, 近世陶磁 器	埋08	
2003	北 部 B D 33区	311	富井 眞	立 合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包 含層
2004	北 部 B C 30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・ 溝, 中世土 坑	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器, 須 恵器, 瓦器	文09	
2005	本 部 B A 22区	321	富井 眞 吉江 崇	事前発掘	98	近世溝・瓦 溜	縄文土器, 石 器, 磁器, 近世 陶磁器・瓦	文09	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺 跡 名	地点	担 当 者	調 査 の 種 類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
2005	吉 田 南 A P 21区	322	伊 藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・ 溝, 中世土 坑・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 轆羽口	文09	
2004	美 山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立 合				文09	
2004	北 部 B C 35区	325	吉江 崇	立 合		古代道路?		文09	297地 点 の 古代道路と つながるか
2005	本 部 A W 24区	329	伊 藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D 30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包 含層
2005	本 部 A T 22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T 26区	335	伊 藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V 24区	336	伊 藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	文09	
2001 ～ 2004	桂	337	千葉 豊	分布 立合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病 院 A G 16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・集 石・石垣	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病 院 A F 14区	339	千葉 豊	事前発掘	713	中世道路・ 井戸・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬 戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西 部 A W 20区	348	伊 藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081	中世建物, 玉石集積, 井戸, 瓦溜, 土器溜, 流路	土師器, 陶磁 器, 瓦, 玉石	文12	
2008	病 院 A G 13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・ 野壺・土坑・ 溝	近世陶磁器・ 土製品	文11	
2009	北 部 B H 31区	355	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹 幹, 弥生土 器片敷, 中 世砂取り穴・ 溝, 近世溝	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器	文12	
2009	本 部 A Z 23区	356	千葉 豊	事前発掘	710	縄文住居, 古墳周溝, 中世土坑	縄文土器, 石 器, 須恵器, 土 師器	文12	
2009	北 部 B G 34区	357	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	1152	古代土坑, 中世砂取り 穴・道路・溝・ 野壺, 近世 野壺	縄文土器, 石 器, 土師器, 黒 色土器, 須恵 器, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 陶 磁器, 瓦, 銭貨	文13	
2009	医 学 部 A Q 18区	358	伊 藤 淳史	事前発掘	824	中世井戸・ 道路・集石・ 土坑・溝・柱 穴, 近世集 石・野壺・溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	文13	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2010	病院 A J 16区	366	網東 伸也 洋一	事前発掘	1085	中世土坑・溝、近世畔・野壺・柵・土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器	文13	
2010	吉田南 A L 22区	367	笹川 尚紀	立合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本部 A T 25区	377	伊藤 淳史	立合		尾張藩邸堀	須恵器、陶器	文13	先史～近世包含層
2011	吉田南 A N 21区	378	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部、弥生方形周溝墓、方形墳、中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	縄文土器、弥生土器、古墳時代埴輪・須恵器・土師器・鉄器、中世土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、銭貨、瓦、近世陶磁器	文15	
2011	病院 A H 12区	379	千葉 豊	事前発掘	1700	近世道路・水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本部 A V 27区	383	伊藤 淳史	立合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院 A H 15区	384	伊藤 淳史	事前発掘	583	近世道路・水路・井戸	近世陶磁器・土師器、近代病院食器	文14	
2012	病院 A F 17区	385	富井 眞	事前発掘	4100	近世段差・溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	文15	
2012	北部 B H 38区	391	笹川 尚紀	立合		溝ないしは土坑		文14	先史～中世包含層
2012	本部 A T 23区	395	千葉 豊	立合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本部 A Z 30区	397	笹川 尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、陶磁器	文15	
2013	病院 A H 13区	398	千葉 豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	吉田南 A M 21区	399	伊藤 淳史 富井 眞 内記 眞理	事前発掘	923	弥生流路、平安溝、中世大溝・土取り穴・土器溜・瓦溜、近世野壺・溝・土取り穴・瓦溜	縄文土器、弥生土器、埴輪・古墳須恵器、古代土師器・須恵器、中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨、近世土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	文16	
2013	医学部 A O 20区	400	伊藤 淳史	事前発掘	173	縄文流路、中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器、中世土師器・陶器	文15	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2013	吉田南 A M21区	401	伊藤 淳史 富井 内記	事前発掘	945	縄文流路, 弥生流路, 古代溝・井戸, 中世建物・溝・土取り穴・土器溜・集石, 近世野壺・溝・土坑・土取り穴・集石	縄文土器, 弥生土器, 古墳須恵器, 古代土師器・須恵器, 中世土師器・陶磁器・瓦・銭貨, 近世土師器・陶磁器・西洋陶器	文16	
2013	北 部 B F32区	402	千葉 豊	事前発掘	90	縄文土坑, 古代土坑	縄文土器・石器, 古代土師器・須恵器・緑釉陶器	文16	
2013	本 部 A T22区	403	笹川 尚紀	事前発掘	62	中世道路・井戸, 近世道路・溝	中世土師器・陶磁器・瓦・埴, 近世陶磁器・土師器	文16	
2013	本 部 A U28区	404	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	815	中世溝・道路・土坑・砂取り穴, 近世野壺・溝・集石	古代土師器・須恵器・緑釉陶器, 中世土師器・陶器・瓦・埴, 近世土師器・陶磁器・瓦	文16	
2013	北 部 B A28区	405	千葉 豊	事前発掘	51	自然流路, 集石	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	医 学 部 A L17区	412	伊藤 淳史	立 合				文15	中近世包含層
2013	病 院 A I12区	415	千葉 豊	立 合				文15	398地点の近世道路・溝
2013	吉田南 A P21区	416	伊藤 淳史	立 合		中世溝	中世土師器・陶器	文15	先史～中世包含層
2013	病 院 A G11区	419	伊藤 淳史	立 合				文15	近世包含層
2014	病 院 A I15区	427	富井 内記 眞理	事前発掘	2191	中世溝, 近世石垣・溝・土坑・井戸・集石・柱穴列	先史石器, 中近世土師器・瓦器・陶磁器・瓦, 近代陶磁器	文17	
2014	吉田南 A P23区	428	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	1470	弥生水田・流路, 古代土器溜・土取り穴, 中世溝・井戸・土器溜・砂取り穴, 近世路面・野壺	縄文土器, 弥生土器, 石器, 古代須恵器・土師器, 中世鉄鋤, 中近世土師器・陶磁器, 瓦	文17	
2015	熊 野 A A18区	435	富井 内記 眞理	事前発掘	1876			整理中	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
2015	病院 A H18区	436	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	480	中世土取り 穴・近世土 坑・土取り 穴・溝, 近代 土坑・井戸	縄文土器, 古 代土師器・黒 色土器・須恵 器, 中世土師 器・瓦器・陶 磁器・瓦, 近世土 師器・陶磁器・ 土製品・石製 品・瓦, 近代陶 磁器・瓦	第2章	
2015	北 部 B J 37区	440	千葉 豊	立 合			土師器・須恵 器	文17	古代・中世 包含層
2015	吉田南 A M22区	446	伊藤 淳史	立 合				文17	中世包含層
2015	和歌山県 瀬 戸	447	佐藤 純一	試 掘	4	時期不詳堆 積	土師器微小片	文17	遺跡東限か
2016	西京区 下津林	448	千葉 豊	立 合				第1章	
2016	病院 A H12区	449	千葉 豊	立 合				第1章	
2016	北 部 B C 30区	450	伊藤 淳史 富井 眞	立 合		古墳時代埴 輪溜・集石・ 落ち込み, 古代溝	縄文土器, 古 墳時代埴輪・ 須恵器, 古代 土師器・須恵 器・瓦	第3章	古墳存在の 可能性あり
2016	病院 A K17区	451	千葉 豊	立 合				第1章	
2016	本 部 A Y 22区	452	千葉 豊	立 合				第1章	
2016	北 部 B F 34区	453	千葉 豊	立 合				第1章	近世包含層

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないいせきしょうさけんきゅうねんぼう2016ねんど								
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2016年度								
編著者名	吉井秀夫, 千葉豊, 伊藤淳史, 富井眞, 笹川尚紀, 内記理								
編集機関	京都大学文化財総合研究センター								
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691								
発行年月日	2018年3月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号					
びょういんこうない 病院構内 A H18区	きょうとふきょうとしさきょうく 京都府京都市左京区 しょうごいんかわらまち 聖護院川原町		26100	-	35° 01′ 01″	135° 46′ 47″	20160215 ~ 20160415	480	Ⅱ期病棟・iPS等臨床試験センター棟新営
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		特 記 事 項	
病院構内 A H18区	散布地	縄文時代				縄文土器			
	生産址	室町時代	土取り穴2			土師器・瓦器・陶磁器・瓦			
	生産址 ・田畑	江戸時代	土坑2・土取り穴2・溝1			土師器・陶磁器・土製品・瓦			
	大学	明治時代	土坑1・井戸1			陶磁器・瓦		土坑から「住瓦庄」の刻印銘をもつ瓦が2点, 井戸から湯たんぼといった京都帝国大学附属病院関係の遺物が多量に出土	

緯度・経度は日本測地系（第Ⅵ座標系）にもとづく

第Ⅱ部 京都大学文化財総合研究センター紀要X XⅣ

弥生時代前期の吉田二本松町遺跡における土器の正面意識

富井 眞

京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬

伊藤淳史

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

内記 理

蓮月焼を模倣した陶器について

千葉 豊

土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書

笹川尚紀

弥生時代前期の吉田二本松町遺跡における土器の正面意識

富井 眞

1 はじめに

本稿では、京都市に所在する吉田二本松町遺跡における弥生時代前期に安置された土器の外面向きを検討する。これは、先史時代の土器外面に発現した変色・色ムラへの当時の対応事例を蓄積する作業の一環である。この作業は、縄文時代の狩猟採集生活から弥生時代の稲作農耕生活へと社会的・文化的な転換が生じる日本先史時代において、先史時代人の認知・感性にどのような変化が生じたか探る手がかりを得ることを射程にしている。人工作品の外観に生じた、不調和と認識し得る現象をどう捉えたのか、その対処法から当時の認知・感性について考えようという試みの基礎的取り組みとして、本稿を位置づける。

2 研究の背景

窯が導入される前の野焼きによる土器の焼成では、火の回りが安定しなかったり燃料材などが接触したりすることも多く、その結果として、土器の表面の色調が不均質になり色ムラが発現しがちである。黒斑を最たるものとしてこうした色ムラが視覚に与える印象は小さくない。黒斑に関する研究も、その発現・生成要因に迫るものには蓄積がある〔佐原1964, 久保田1989, 岡安編1999, など〕。その一方で、発現してしまう色ムラへの土器使用者の対応に関する考察は少ない。

もっとも、遺物のライフヒストリーで言えば製作の段階の研究に比べて使用や廃棄の段階の研究が少ないことは、この色ムラに関する研究に限ったことではない。しかし、文化を「社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体」〔大辞林：松村編2006〕と定義するならば、何らかの物品に関わる行為の文化的な側面は、その物品が製作されるときよりもむしろ使用されるときにこそ、うかがい知れることが多いだろう。行動や生活の単位となるのが行為であるから、使用時の行為における意識を捉えてその事例を蓄積していけば、行動や生活の背後にある認知や感性に接近できると考える。先史時代の文化を対象とする場合には、器物において使用時の様相に関する情報は製作時の情報よりも抽出しにくいことは否めない。しかし、ポンペイのように日常的な生活の状況がパックされた場合でなくても、埋葬のように、閉ざされた空間にその場での行為

の結果が遺存している場合もある。かつての行為がそのまま残されている場面であれば、器物の使用の最終局面であっても、使用時の意識や行為により接近できるであろう。こうした視座に立って、物品の使用という行為の背後の意識に着目しようと思う。

さて、土器に発現した色ムラへの対応について、古代に関しては、使用・消費の観点から、供膳用土師器の黒斑をもつ個体が都城で少なく生産遺跡で多いことを根拠として、黒斑の付着した土器が不良品として扱われた可能性が指摘されている〔秋山1994〕。先史・原史時代に関しても、専門化の傾向があるともされる弥生時代後期について、こうした古代の状況を踏まえつつ、弥生後期土器から古墳時代土師器の黒斑の面積が経時的に減少していくこと〔藤原・森岡1977、田辺1978〕を加味して、器面調整が丁寧な無文の壺類に黒斑のない個体があるのは美観を求めたからではないか、との指摘もある〔長友2006〕。しかし、そこで例示された壺類は特殊なコンテキストで出土したわけではない⁽¹⁾。土器生産遺構の様相が不透明な先史時代の色ムラへの対応については、焼け歪みなど器本来の機能に支障が出る場合はともかくとして、容器としての機能が損なわれていないならば、使用・消費の観点からではなく製作・生産の観点からでは、すなわちその個体の焼成以降使用以前の状況に焦点を当てても、蓋然性を高めるのは難しいだろう。使用・消費の観点に立ってコンテキストを吟味する研究はまだまだ途上と言ってよい。

それでも、古墳時代に関しては、前期古墳の棺の小口付近に供献される壺に黒斑が発現していた広島県赤羽古墳（図41）や滋賀県雪野山古墳（図42）では、黒斑が被葬者とは反対の方向を向くように土器が据えられたことがわかっている〔冨井2014〕。弥生時代前期に関しても、松山平野に位置する墓域である持田町3丁目遺跡では、葬送において供献土器の黒斑の向きが強く意識されていて、黒斑が参列者に向かない配慮があったことがうかがえる。そこでは、小壺が供献された13基の墓において、小壺に黒斑がある場合、遺骸があったであろう棺内中心付近から出土するものでは黒斑が中心側（被葬者側）を向き、棺内の壁際から出土するものでは黒斑は壁側を向くことが確かめられている〔Tomii 2015〕。

このようにコンテキストのわかる事例の吟味に努め、そうした事例の蓄積と比較をし続けることが、先史時代における認知の変化といった一般化した議論を志向する上では不可避である。例えば、京都大学構内に所在する弥生時代前期の集落遺跡である吉田二本松町遺跡でも、顕著な黒斑をもつ弥生前期の埋設土器が知られている。そこで本稿では、それに加え、同遺跡で出土した同時期で遺存状態がよくコンテキスト情報のあるそのほかの土器も対象にして、当時の色ムラに対する認知の傾向を探るための検討作業をおこなう。

研究の背景

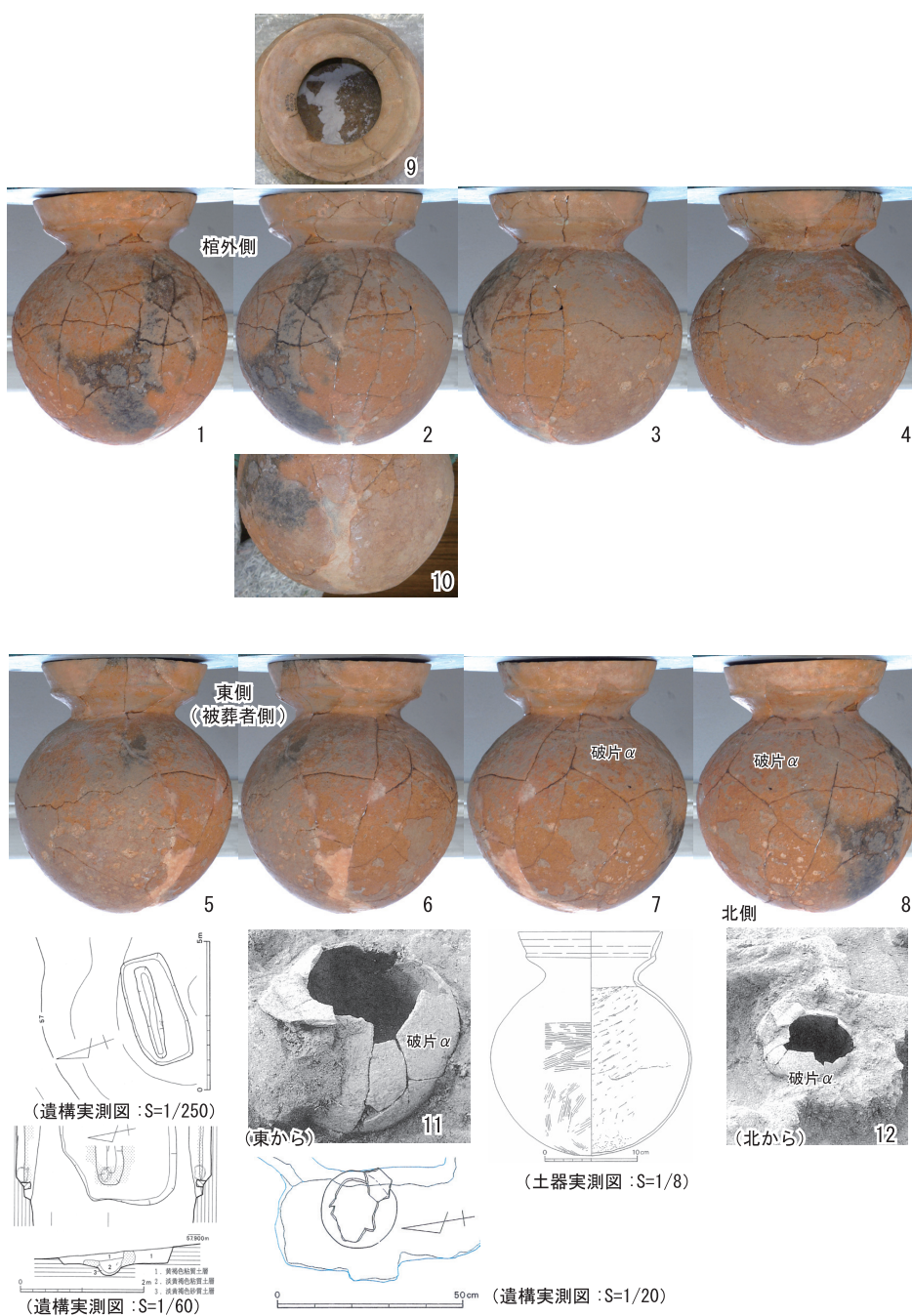


図41 赤羽古墳の土器の展開写真および実測図と出土情報

3 検討方法と対象資料

(1) 具体的作業方法

基幹となる作業は、安置されたと推定される土器の出土記録を確認して、土器のどの部分がどの方向を向いていたかを復原し、土器の視覚的特徴と遺構の本体ないし周辺環境との対応の有無を探ることである。具体的には、まず、安置されていたであろう状況が図面や写真など出土記録として残っている土器で、回転体として復原されたものを検討対象の候補としてリストアップする。コンテキストの記録が無いと、土器のどの部分がどこを向いていたのか、状況復原できないからである。また、復原個体を対象とするのは、土器が接着復原されていないと向きの同定作業が不正確になってしまうことが多いからである。

次いで、図面や写真など遺構の出土記録の中に視認できるその土器の装飾部や破片形状などに着目し、その部分が復原個体のどの部分に位置しているか同定する。これによって、出土時にその部分が向いていた方向が判明する。例えば、図41の赤羽古墳例〔恵谷編1991〕に示したように記録写真に破片 *a* の正面が写っていれば（写真12）、その復原土器の中の破片 *a* の部分が正面を向くアングルが（写真8）、その遺構の記録写真の撮影地点の方角を向いていたことになる。複数の出土記録で確認できれば、なおよいであろう（写真11）。破片化の著しい個体なら、その破片 *a* が埋没から出土の記録化までに二次的に移動したか否か確認するために、破片 *b* や破片 *y* などそのほかの破片で同様に位置比定をおこないクロスチェックするのが望ましいだろう（例えば図42）。この基礎的な方角比定が達成できれば、いよいよ、その土器の特徴的な部分に着目して、その部分が遺構の中で（あるいは遺構が位置する遺跡において）どの方面を向いていたかも確定できる。図42の雪野山古墳例〔福永・杉井編1996〕で言えば、石室の南側の小口付近に供献された土器では、破片 *a* が北～北東を向いているから（写真11）、写真5～6のアングルが被葬者側だったことになる。そして、その裏側である写真1～2のアングルが棺外側を向いていたことがわかる。

以上の作業を検証可能にするためには、回転体である土器の展開写真が必要となる。出土した安置土器を接着復原後の状態で全方向から写真を撮影することになる。基礎データとなる立面写真では、基本的には45°ずつ回転して8カットを望遠で撮影している（図41・42の写真1～8）。各部分がおおよそ歪みなく写るアングルを一つ確保するためである。また、出土記録に基づく基礎的な方角比定の手がかりとなる部分が、内面や底部になることもあるので、必要に応じて、底面や内面なども撮影することもある（同両図9・10）。

検討方法と対象資料

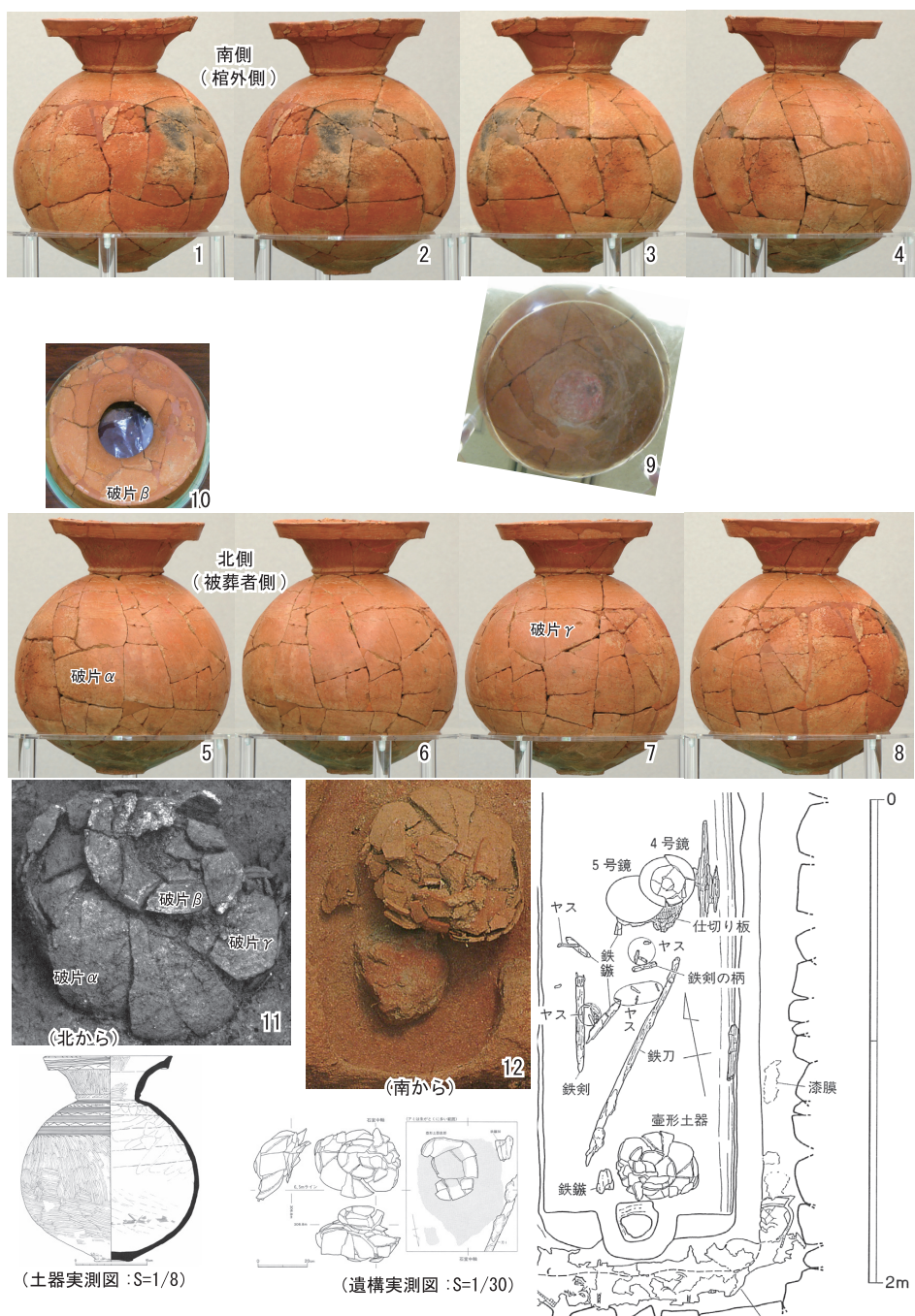


図42 雪野山古墳の土器の展開写真および実測図と出土情報

(2) 対象とする資料

本稿で検討するのは、吉田二本松町遺跡から出土した5点の弥生前期土器で、壺3点と甕2点である。いずれの個体も、製作的特徴から、縄文晩期の突帯文土器からの系譜に位置づけられるものではなく、遠賀川系と判断できる。吉田二本松町遺跡は、京都盆地東北部に位置し、稲作開始期の弥生前期には、扇状地縁辺に展開する水田や水利施設からなる生産域と、そこから100mほど離れた扇状地末端に営まれた居住および葬送のための生活域で構成される、小規模な集落が営まれたことがわかっている〔伊藤ほか2017など〕。検討対象の5個体は、扇状地上の、構内座標のAR25区（図版1－238地点）とAR24区（図版1－288地点）の2地点の発掘調査で出土した（図43）。

AR25区では〔伊藤2000〕、土器棺として2基の土器安置遺構が報告されている。そのうちSK13は（事例1：図44）、上部がやや削平を受けているものの、掘り方が明瞭な土坑で、南北（長軸）70cm・東西（短軸）50cm・深さ60cm程度が残存している。その中心付近に、残存高約40cmの壺（個体1）が、長軸に平行して口縁を南に向け、横位で出土した。やや口縁部側に傾斜していて遺構上部が削平されたため、底部は損失しているが、それ以外は残存している。壺の内部や土坑埋土は全て水洗されたがほかの遺物は出土していない。土器外面の遺存状態は全面がほぼ同様に良好で、磨きの痕跡を明瞭に確認できる。また、

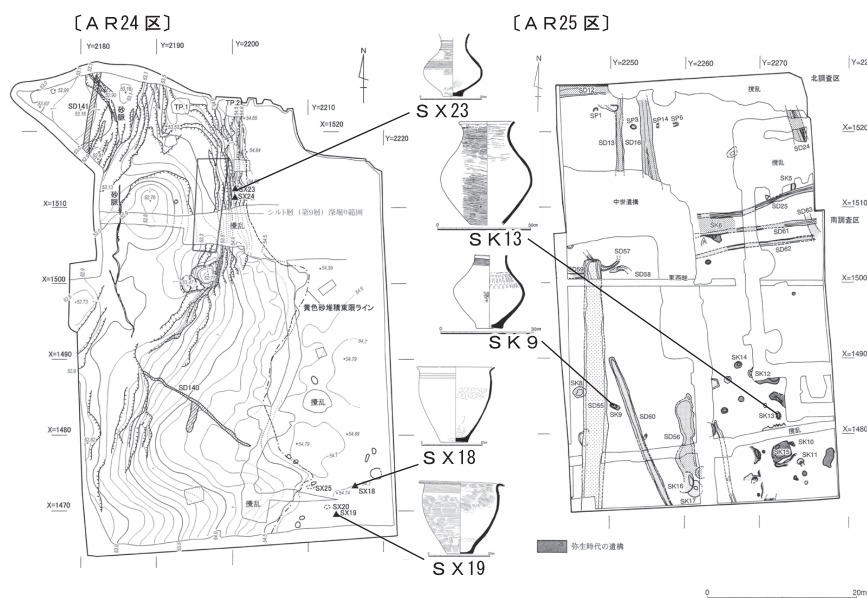


図43 吉田二本松町遺跡における検討対象個体の出土位置 縮尺1/1000

検討方法と対象資料

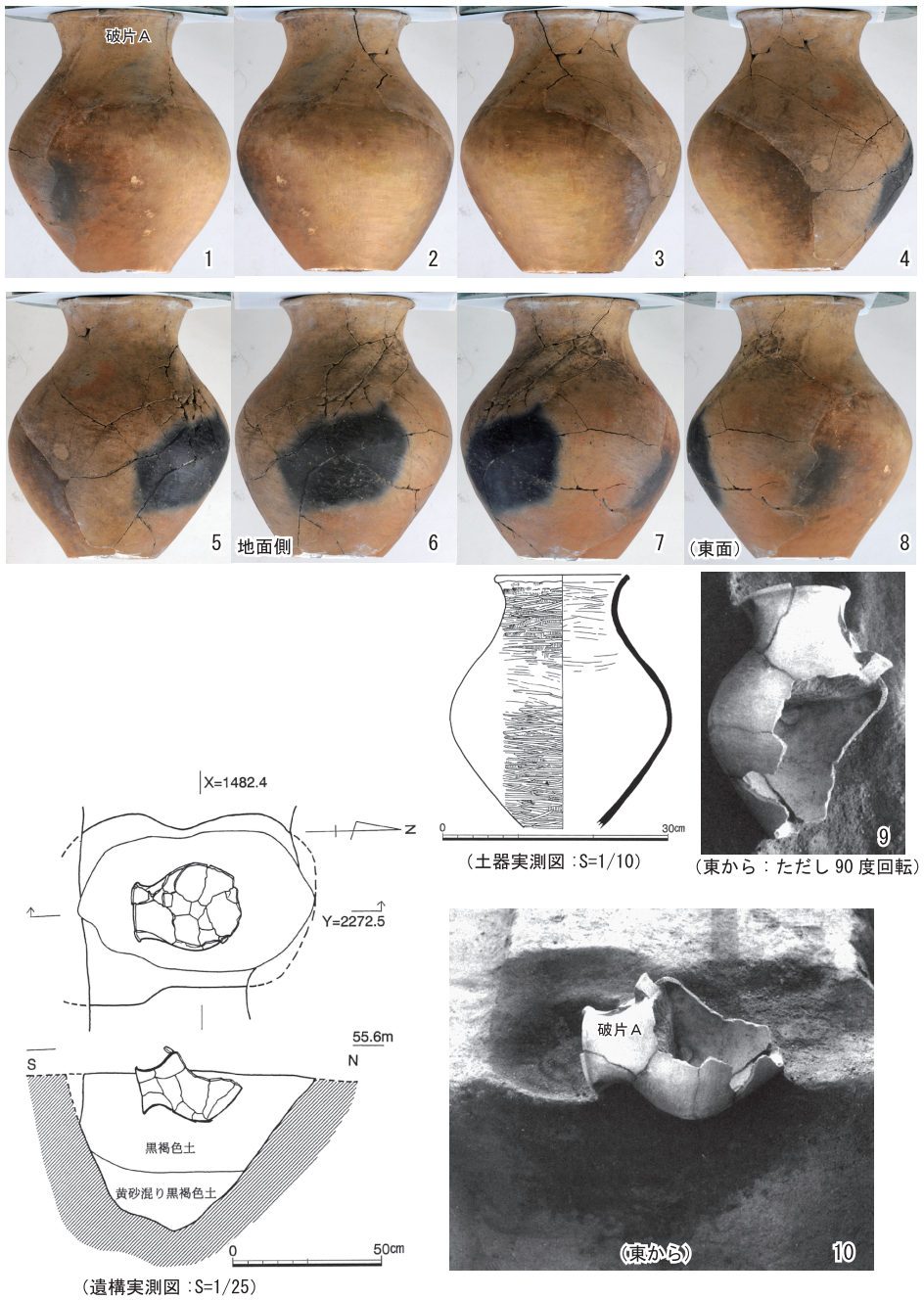


図44 事例1の土器の展開写真および実測図と出土情報

楕円形状の平面形を呈する明瞭な黒斑がある。被熱痕跡は見出せなかった。

もう1基のSK 9は（事例2：図45）、長軸100cm・短軸50cm程度が残存している土坑で、長軸はおおよそ北西－南東の方位をとる。土坑の、中心よりやや南東側で長軸よりやや北東に寄ったところに、残存高約25cmの壺（個体2）が、およそ短軸に平行して口縁（側）をやや南に振れた西方に向け、横位で出土した。土器は小さく、口縁は欠損しているが、周辺から破片が回収されていないので、口縁部は安置される以前に既に損なわれていたと想定できる。また、器体の1／3程度である、出土時の横位上半側だった部分を損失している。土器外面の遺存状態は、横位状態の側面側だった部分は良好で、磨きの痕跡を明瞭に確認できる箇所もあるが、横位下半側だった部分は劣化している。そして胴部上半には小さな不整形の黒斑がある。また、破断面の縁から1～3cmのあたりに、焼成後に引かれた

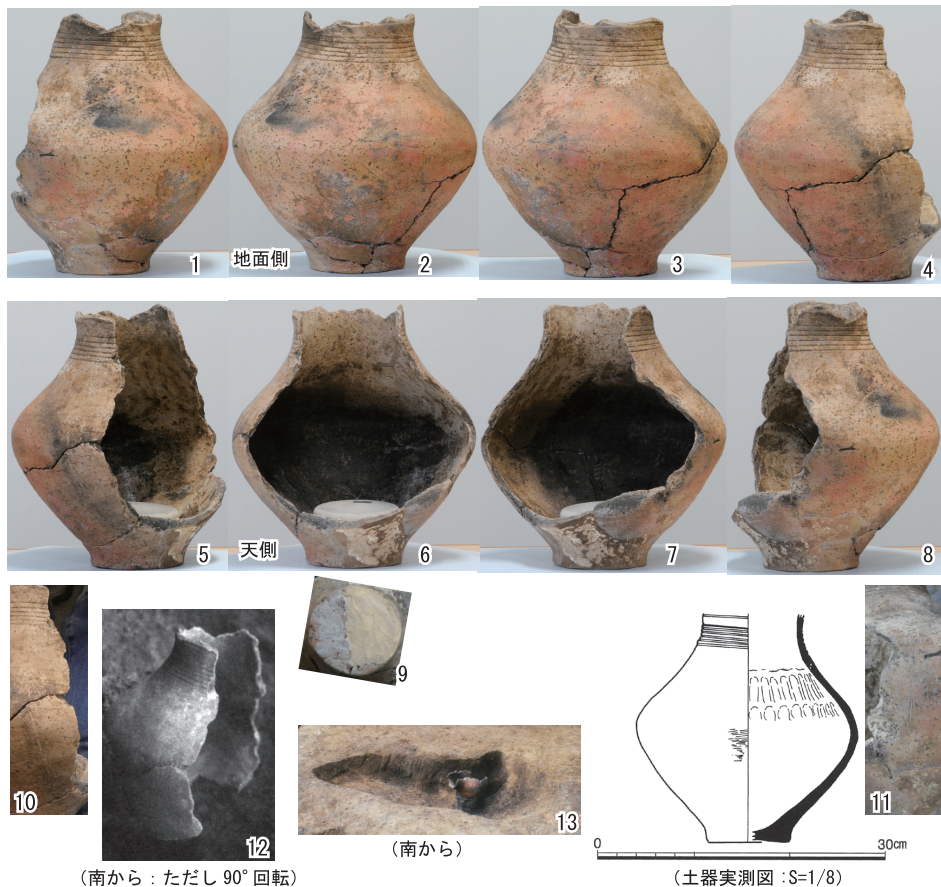


図45 事例2の土器の展開写真および実測図と出土情報

細線が断続的に数条縦走する。なお、胴部上半には部分的におこげが付着するほか、およそ全面にわたって薄赤色の変色が広がっていて、赤変の縁を黒化部が巡る部分もあり、これらは使用による被熱痕跡と判断できる。そして、内面にも、加熱によると思われる、黒色の変色部および付着物から成る、楕円形状の平面形を呈する黒化部を確認できる。

A R24区〔伊藤ほか2006〕では、掘り込みをともなうものではないが、ほぼ完形になる壺1個体と甕2個体がそれぞれ単独で出土している。S X23は（事例3：図46）、西落ちの斜面の肩部付近で壺（個体3）が単独で出土したもので、弥生前期末中期初頭の砂質土石流堆積で覆われていた。掘り込みは検出されていない。壺は、残存高20cmほどの小型品で、口縁（側）を斜面上方となる東側に向けて、横位で出土した。口縁部は欠損しているが、周辺から破片が回収されていないので、土石流に覆われる以前に既に損なわれていた

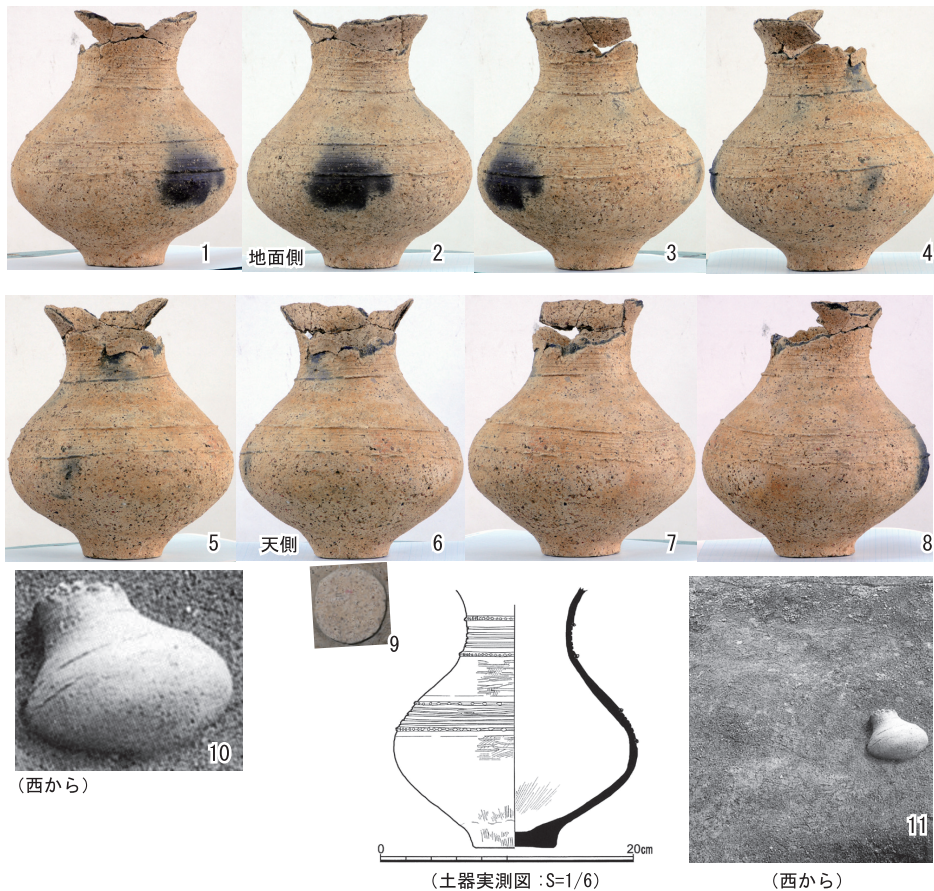


図46 事例3の土器の展開写真および実測図と出土情報

と想定できる。また、頸部以下は完存し、ヒビも認められない。土器は、土石流を除去して確認されたようだが、その横位下半は包含層に十分に入り込んでいる。土器外面の遺存状態については、磨きの痕跡が明瞭ではなく器肌が荒れてザラついており、また、横位状態の下半側だった部分の外面は、上半側だった部分と比べると薄層が損耗したかのような感がある。胴部最大径のあたりを中心にして楕円形状の平面形を呈する明瞭な黒斑がある。被熱痕跡は見出せなかった。

甕2個体は、土器片が比較的集中するエリアから出土した。S X18は（事例4：図47）、高さ約25cmをはかるほぼ完形の甕（個体4）が口縁を北に向け横位で出土したもので、掘り込みは検出されていない。土器外面は、全面がほぼ同様の遺存状態で、器肌は、荒れてはいないが平滑でいくぶん磨耗した感がある。胴中部に楕円形状の平面形を呈する明瞭な黒斑があり、その反対側にも細長い不整形の黒斑がある。また、胴部上半の最大径付近にはこげ茶色の変色部が巡り部分的におこげも付着するほか、胴部下半を中心に薄赤色に変色した部分が広がっており、とりわけ明瞭な黒斑の直下で赤みが濃い。これらの特徴は使用による被熱を物語る。

S X19も（事例5：図48）、高さ約25cmをはかるほぼ完形の甕（個体5）が横位で出土したもので、掘り込みは検出されていない。口縁は東を向いている。土器外面は、全面がほぼ同様の遺存状態で、器肌は荒れてはいない。胴下半はいくぶん平滑で磨耗した感があるが、最大径付近には刷毛目の痕跡をしっかりと残す。肩部に円形を呈する小さな黒斑があり、その反対側には大ぶりの黒斑の存在をうかがわせる黒化部の下縁を認めるが、その上方は損失している。また、肩部にはこげ茶～黒色の変色部が巡り、胴中部には部分的におこげが付着するほか、胴部下半には薄赤色の変色がおよそ一様に広がっており、これらは、使用による被熱痕跡と判断できる。

4 観察の結果

土器の向きについて対照観察するために各個体の状況を1枚の図にまとめた、図44～48を順次見ていこう。事例1の個体1では（図44）、写真10に見える破片Aが写真1で正面を向いている。写真10は水平よりもやや高い位置、仰角が45°程度のアングルから撮影されているので、土坑底面を向いていたのは写真6のアングルである。すなわち、大型で楕円形状の平面形を呈する黒斑が、地面側を向いていたことがわかる。

事例2の個体2では（図45）、写真13は、およそ水平で仰角がかなり小さいアングルか

観察の結果

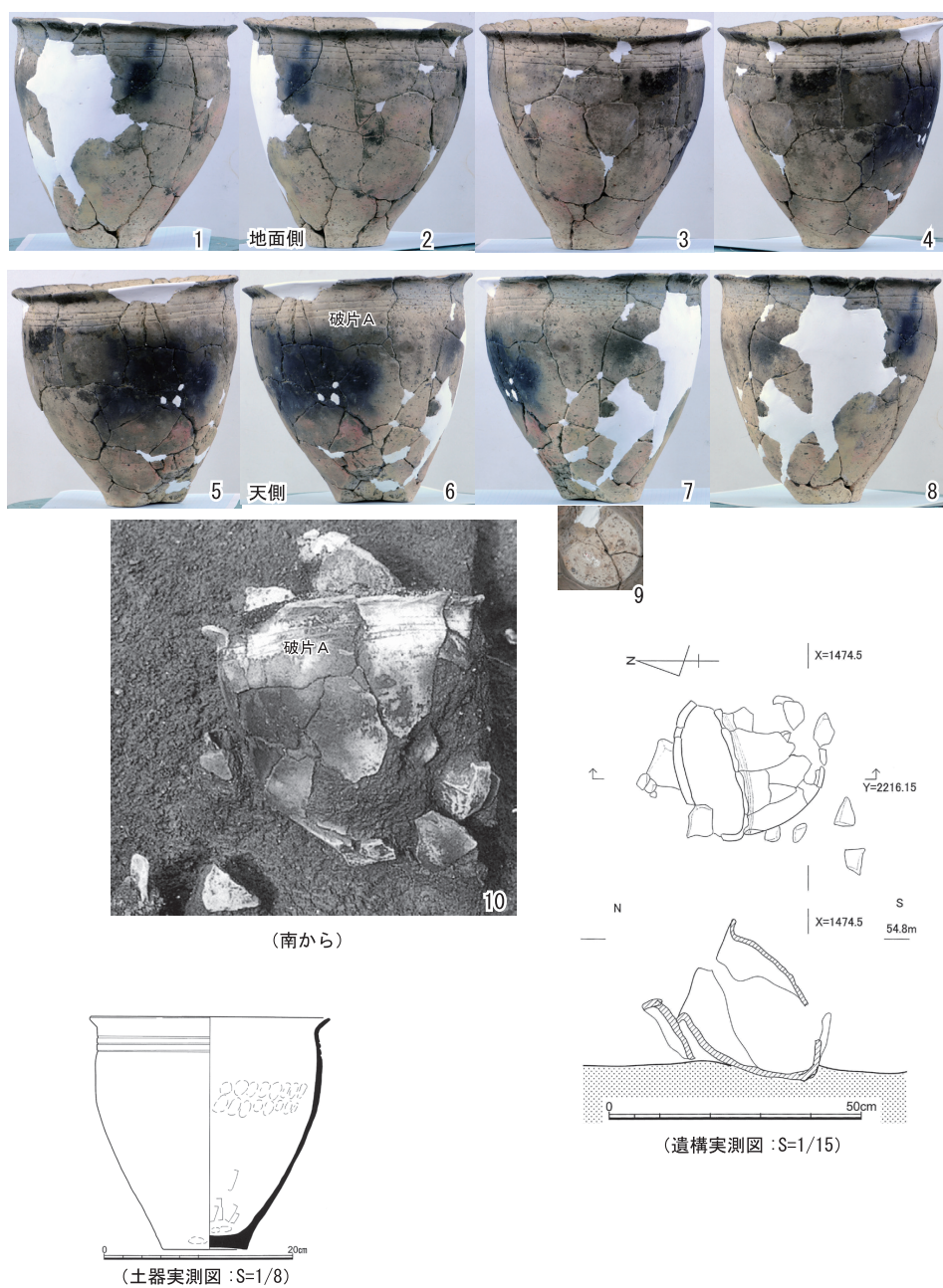


図47 事例4の土器の展開写真および実測図と出土情報

弥生時代前期の吉田二本松町遺跡における土器の正面意識

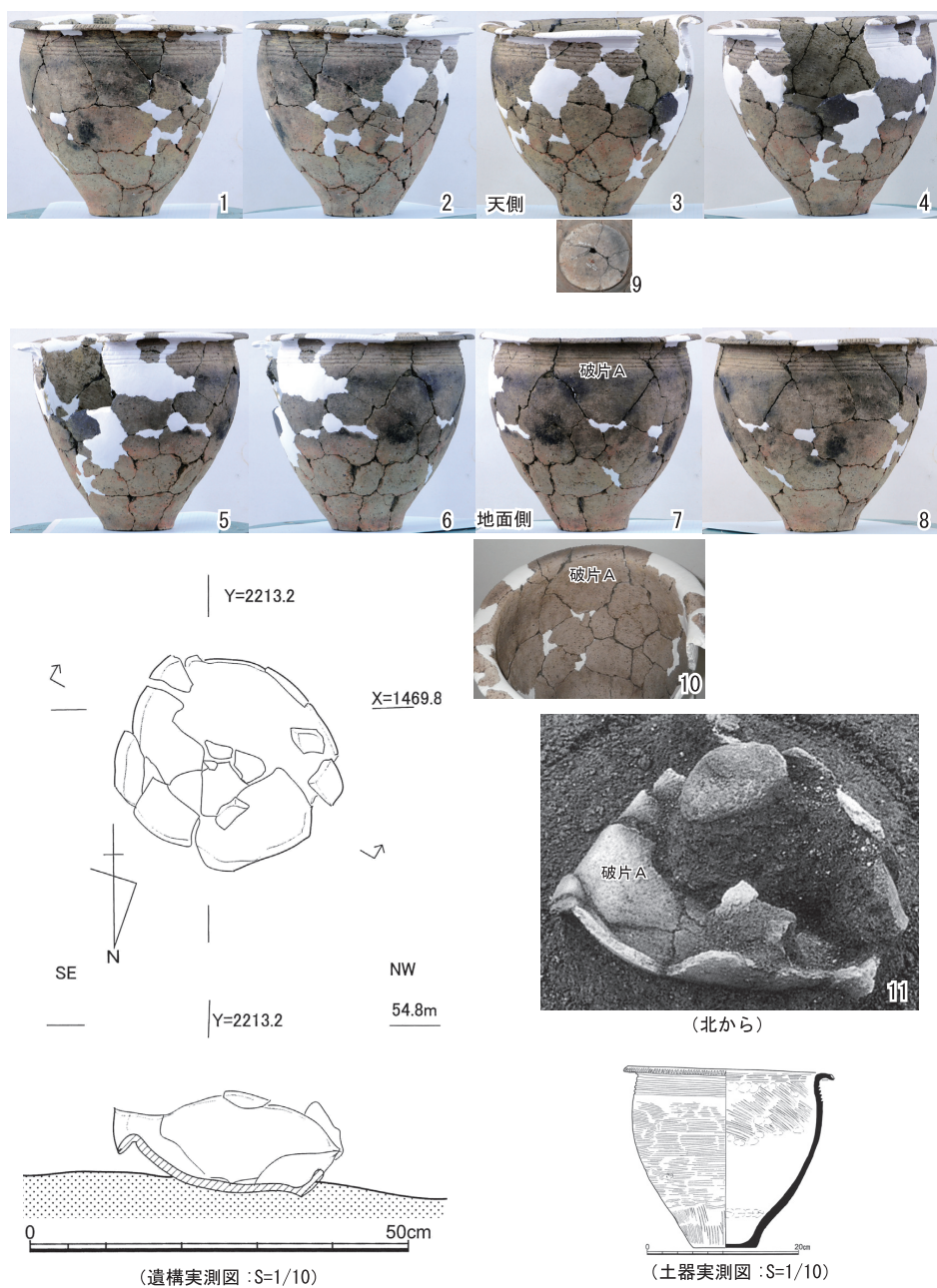


図48 事例5の土器の展開写真および実測図と出土情報

考察と課題

ら撮影されているので、土坑底面を向いていたのは写真2～3のアンゲルである。すなわち、不整形で小型の黒斑が、地面側から天頂側へ向けて北方向に45°前後振れた位置にあること、赤変の目立つ部分が地面側およびそこから南側へ45°前後振れた位置にあることがわかる。なお、内面の黒化部についてみてみれば、中央部分の外面側が地面側を向いていたことになる。

事例3の個体3では（図46）、写真10に見える2条の凸帯の残存状況は写真5でおよそ正面を向いている部分に相当する。頸部の破断部分も整合的である。写真10は写真11を部分拡大したもので、その撮影アンゲルは、水平よりもやや高い位置、仰角が45°程度なので、天頂方向を向いていたのは写真6のアンゲルである。それと反対側のアンゲルである写真2が地面側、すなわち、楕円形状の平面形を呈する明瞭な黒斑が地面側を向いていたことがわかる。

事例4の個体4では（図47）、写真10に見える破片Aが写真6で正面を向いている。写真10はほぼ真上から撮影されているので、大型で楕円形状の平面形を呈する黒斑および胴下半の最も顕著な赤変部が、天頂側を向いていたことがわかる。なお、顕著なおこげが正面を向くのは写真4のアンゲルである。

事例5の個体5では（図48）、写真11で破片Aの内面側を確認できる。写真11を遺構実測図と比較すると、その撮影アンゲルは真上よりも低い位置、仰角が45°程度であることがわかるから、破片Aの内面の正面が天頂を向いていたことになる（写真10）。つまり、破片Aの外面側正面である写真7のアンゲルが地面側を向いていた。すなわち、不整形で小型の黒斑や明瞭なおこげをもつ面が、地面側を向いていたことになる。また、顕著なおこげの面は2つあり、それぞれ写真6と写真8のアンゲルで正面を向く。なお、明瞭な黒斑があった可能性を前章で指摘した損失部が正面を向くのは、写真4のアンゲルである。

5 考察と課題

(1) 5個体に関する個別考察と総合評価

個体1 後世の削平によって損失した部分は、顕著な黒斑よりも面積が大きい。しかし、以下の理由によって、そこにより大きな黒斑があった可能性はきわめて低い。すなわち、西日本の弥生前半期の遠賀川系の土器に見られる黒斑は、覆い型野焼きによって、球体における対称的な位置に黒斑が発現する場合があることが指摘されている〔久世ほか1997、岡安編1999、長友2006など〕。それによると、黒斑が発現しているならば、焼成時

に接地していたであろう部分に生じる楕円形を呈する明瞭なものと、それと言わば地球の裏側の位置関係にある部分に生じる不整形かつ小ぶりになりがちなものを見出すことが期待される。本例の損失部が位置するのは、大型で楕円形を呈して明瞭な黒斑と同じ半球面側（で黒斑とは反対側）なので、その損失部に黒斑は無かった可能性が高く、あったとしてもより小ぶりで目立ちにくいものだったと思われる。

出土状態は横位ではあるが、口縁部側が幾分地面に入り込み底部接地面が尻上がりのような状態だったことが、出土記録からも底部の欠損状況からもうかがえる。この時期の壺の底部は重厚に作られるので、全体のプロポーショナルに照らしても、土器の中に固形の物体が口縁側に重心を保っていた状態で収まっていない限りは、自然状態で口縁部側が下がって出土することは考えがたい。したがって、倒れた可能性は低く、もともと口縁がより下がった横位状態で、しっかりと据えられるかのように安置された可能性が高い。そのときに、明瞭な黒斑は地面側を向いていたのである。

個体2 埋没時および埋没後の堆積環境は、20mあまり東方で同じく横位で検出された個体1と同様だったと思われるが、横位下半側の外面の遺存状態は個体1よりもよくない。これは、内外面の様相から写真3を中心としたアングルの器体側方から加熱されていると思われるので、被熱を経た影響もあるだろう。また、事例1の土坑よりも縦長の形状で平面的にも大きいにもかかわらず、包含されていた個体2は小型であり、口縁部は既にどこかで欠損していた上、出土時の口縁方位も長軸に平行せずむしろ短軸とおおよそ平行するほどである。さらには、土坑の埋土に底面壁際のいわゆる三角堆積が無かったかは不明だが、土坑の底面よりは10cm前後高い位置から出土しているようである。そして、個体2の使用痕跡に照らせば、横位上半側の損失は、埋没後の後世の削平によってではなくこの土器がこの地点に着地した時点で既に被っていた可能性も意識せねばなるまい。破断面の縁付近の細線が、発掘調査時点ではなく埋没以前に付されていたとすれば、破断の目安であるかのように器体を縦走していることになる点も示唆的である（写真10・11）。

こうしたことから、事例2（SK9）を、横位に据えられた供献土器ないし土器棺や正位に据えられてから横転した供献土器が後世に上部を削平されて割れた、とみなすよりも、もともと縦割れしている壺が横位に出土した、と考えてみたい。この形状に照らせば、どの面がどの方角を向くか意識していなくても、この体位になることは必然的でもある。しかし、この土坑からは細かな土器片以外に同伴遺物を指摘し得ないうえ、この個体の被熱状況は通常の壺の用途とは異なった目的に供したことを物語る。このような点からは、横

位に据えられていたという評価の余地も残されよう。また、面意識に引きつけるならば、同様の法量と器形の個体3を参考にする限り、個体2の損失部に明瞭な黒斑が存在していた可能性はある。その場合、この土器が意図的に縦に割られていたとすれば、黒斑の目立つ部分が取り去られていたことになるかも知れない。

個体3 事例2から北西60m程にある事例3も、事例2と同様に同様の小型壺の単独出土であるが、本例は、掘り方が認められない。その上、横位状態の上半が砂質土石流堆積に覆われていたことに加え、器肌も荒れている。また、西へやや急に傾斜する斜面において、底部側よりも比重の軽い口縁部側が斜面上方に向けて出土している。こうした点は、個体3が人為的に安置されたことを積極的に支持する根拠にはなりがたい。個体1と同様に黒斑が地面側を向いているけれども、それが意図的ではない可能性はある。

しかし、このSX23は、周囲では大型の壺の底部が単独出土しただけで、事例4・5の位置する調査区東南部のような通常の廃棄場所だったわけではない。また、等高線の間隔が比較的詰まっている西落ち斜面の肩部に位置している。このような地形環境で、算盤珠の形状で底部側に比重がある個体3が、横位出土の下位側が半分近く埋まるまで斜面を落さず、ヒビも入らずに、この位置にこのままとどまっていた、というのはいささか考えがたくはなからうか。さらに、土器の外面の遺存状態は、土壌化層に埋まっていた側と、それよりもはるかに透水性の高い砂質土石流堆積層に埋まっていた側とで顕著な違いまでは見出せない。こうしたことから、事例3は、浅い土坑があったが事例1・2のように掘り込みが地山まで達することがなくまた埋土の判別が不可能で掘り方を検出し得なかった、という可能性は残る。もっとも、その場合には、土器は、埋納されたのではなく、器体の半分近くまでを据えるように横位に据えられていた、といういささか不自然な安置行為を想定することになろう。

個体4 この土器の外面色調の不調和が意識されるのは、黒斑・おこげ・顕著な赤化部であるが、黒斑および赤化部は天頂側を向き、おこげは西を向いていたことになる。個体3の検出事例と同様に掘り込みは確認されていないが、個体3の場合とは異なって、土石流に覆われていたのではなく、包含層に埋没していたものである。そして、土器破片や石器剥片など生活廃材の捨て場と考えられるエリアからの出土でもある。この土器がこの地点に接地してから土器の向きがそのまま維持はされていなかった可能性もあろう。

個体5 小ぶりな黒斑が地面側を向いていた状態で出土したことになる。また、2箇所にある顕著なおこげは、地面側からそれぞれ反対方向に45°ずつ振れた位置にある。し

かし、写真5で正面を向いている胴部最大径付近の黒色部が、その上方の欠損部にあった大型の黒斑の下縁だと解釈するならば、想定されるその大型の黒斑は、天頂側から地面側へ向けて南方向に45°前後振れた位置にあることになる。この事例5は事例4から南西に4 m程の距離にあり、事例4と同じく生活廃材などの捨て場と考えられるエリアからの出土である。個体4の場合と同様に、この土器がこの地点に接地してから土器の向きが維持されていなかった可能性もある。

土器の変色部の向き 以上の5例を総合的に評価してみよう。まず、図42の古墳の供献土器のように、別の器物が同様に安置されたかのような状態で伴っていれば、それらの器物のそれぞれ特徴的な部位がどの部分を向いていたのか合わせて検討することによって、当該の土器個体の位置や向きを意識していた可能性を、それぞれのコンテキストで推測できる。しかし実際には、安置されたと判断し得る事例1も含め、いずれの事例ともそうしたコンテキストではなかったので、位置や向きに関して強い意識が発揮され得る場面だったとは断定できない。

しかし、個体1の壺の場合、黒斑の展開する部分はその部分の外周の1／6程度の面積しか占めていない。明瞭な黒斑が地面側に向く確率は、1／6程度だったと言い換えることもできよう。このほか、掘り込みの有無や埋没状況から安置されたと考え得るのは、事例2・3で、いずれも器種は壺である。事例2の個体2の場合は、正確に言えば、地面側というよりもそこから45°回転した方向であるが、これについては、既に器体の損失を経てもたらされた可能性もある。個体3は、安置されていたならば、明瞭な黒斑が地面を向いて据えられたことになる。いずれにしても、同一遺跡の同時期の土器安置遺構と思われる場で、壺という同一器種が、外面色調の不調和な部分を地面側に向けて出土していたことは確かである。

一方、個体4・5では、個体4のほうは、被熱による顕著な赤化部も焼成による明瞭な黒斑も天頂側を向いていた。個体5は、おこげや黒斑からうかがえる変色部の顕著な面が、地面側を向いていた。仮に、個体5の損失部に大きな黒斑があったとすれば、それは天頂から45°振れた方向を向いていることになる。この2個体は、個体1～3とは器種や使用痕の有無ないし性格が異なり、煮沸痕跡が明瞭で日常生活に供した可能性が極めて高い甕である。また、出土のコンテキストは、生活廃材の捨て場とみなしえる地点で掘り込みが確認できない状態で、安置したとするには根拠が弱い。

仮に、個体1・3の黒斑の向きの同調性を、黒色部に対する当時の明確な意図に基づく

おわりに

もの、と積極的に解釈し、さらに、器種もコンテキストも異なるこの個体4・5にも、その解釈を好意的にあてはめるならば、甕は壺とは対照的に黒色部を意図的に天に向けて据え（置くように廃棄し）た、とも言なくもない。しかし、本稿での検討個体はわずか5つであり、しかもコンテキストに対して安置と確定し得たのは事例1の一例にすぎないので、そのような解釈は控えよう。以上から、弥生時代前期の吉田二本松町遺跡における色ムラへの対応に関する解釈としては、現状では、あくまでも、壺を据える場合には黒斑という色ムラを意識していたかもしれない、ということまでにとどめておきたい。

(2) 今後に向けた課題

吉田二本松町遺跡では、先行する晩期後半の様相が不透明だが、後続する弥生中期前葉に関しては、土器が安置されたような事例がある〔伊藤ほか2006〕。また、同じく前期水田が確認されている北方800mの北白川追分町遺跡では、弥生前期の、壺ではなく甕の土器棺が検出されているほか〔長戸ほか1997〕、晩期末の長原式の、土器棺の可能性もある大型壺が単独出土した土坑もある〔浜崎・千葉1990〕。冒頭に掲げた目的に向けて、今後は、まずはこうした時間的・空間的に近接した資料との比較を重ねていく必要がある。

6 おわりに

本稿では、水田耕作をおこなっていた弥生時代前期の小規模集落である吉田二本松町遺跡において、安置された土器の外面の向きを検討した。安置と確定し得たのは1例であるが、安置された可能性のある2例を含めると、壺の場合には、色ムラの最たる例とも言える黒斑が、地面側を向く傾向にあることがわかった。そして、壺を据える場合には黒斑を意識し土器の向きを決めていた可能性があることを指摘した。今後は隣接する時空間の様相とも比較していきたい。

謝 辞 本稿は、JSPS科研費16K03153の助成を受けたものです。資料調査に際し、赤羽古墳に関しては広島県教育事業団埋蔵文化財調査室に、雪野山古墳に関しては東近江市埋蔵文化財センターに、お世話になりました。また、作図では、高木康裕氏（京都大学文学研究科博士課程）の補助を得ました。記して御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 例示された大阪府下田遺跡と岡山県足守川矢部南向遺跡の合計3例はいずれも、ほかの器種

の土器も多数包含する溝や土坑や住居などの覆土から出土している〔西村編1996, 江見編1995〕。なお, 特定の器種に黒斑の発現が少ない傾向は, 例えば北部九州の丹塗土器にうかがえることも指摘されていた〔萩原1983〕。

〔参考文献〕

- 秋山浩三 1994年「キズモノの土器—古代土師器の黒斑への視点と流通—」『大阪府埋蔵文化財研究紀要』2, 大阪府埋蔵文化財協会
- 伊藤淳史 2000年「京都大学総合人間学部構内A R 25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』(京都大学埋蔵文化財研究センター), 3-80頁
- 伊藤淳史・梶原義実・土屋みづほ 2006年「京都大学吉田南構内A R 24区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』(京都大学埋蔵文化財研究センター), 97-234頁
- 伊藤淳史・笹川尚紀・外山秀一・辻本裕也 2017年「京都大学吉田南構内A P 23区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』(京都大学埋蔵文化財研究センター), 31-124頁
- 恵谷泰典編 1991年『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VI』(広島県埋蔵文化財調査センター)
- 江見正巳編 1995年「足守川矢部南向遺跡」『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94)岡山県教育委員会
- 岡安雅彦編 1999年『弥生の技術革新—野焼きから覆い焼きへ— 東日本を駆け抜けた土器焼成技術』(安城市歴史博物館企画展示図録)
- 久世健二・北野博司・小林正史 1997年「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」『日本考古学』第4号, 41-90頁
- 久保田正寿 1989年『土器の焼成I—土師器の焼成実験—』成和印刷
- 佐原 眞 1964年「弥生式土器の製作技術」『紫雲出』詫間町文化財保護委員会, 21-29頁
- 田辺昭三 1978年「土師器の成立と発展」『弥生土器 須恵器』(日本原始美術大系2), 講談社, 169-172頁
- 富井 眞 2014年「考古学で心は語れるか」『考古学研究60の論点』(考古学研究会), 139-140頁
- 長戸満男・竜子正彦・尾藤德行 1997年「京都大学構内遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(京都市埋蔵文化財研究所), 62-69頁
- 長友朋子 2006年「弥生土器における覆い型野焼きの受容と展開—西日本を中心に—」『日本考古学』第22号, 1-14頁
- 西村 歩編 1996年『下田遺跡』(大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集)
- 萩原裕房 1983年「安国寺遺跡の甕棺について」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』第2集(久留米市文化財調査報告書第36集), 117-131頁
- 浜崎一志・千葉豊 1990年「京都大学北部構内B D 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』(京都大学埋蔵文化財研究センター), 15-35頁
- 福永伸哉・杉井健編 1996年『雪野山古墳の研究』(八日市市教育委員会)
- 藤原学・森岡秀人 1977年「弥生遺構に伴う焼土壙について」『河内長野大師山』(関西大学文学部考古学研究5), 212-265頁
- 松村明編 2006年『大辞林』三省堂
- Tomii, M. 2015 A new method for contextual analysis on prehistoric attitudes to ritual pottery. *Open Archaeology* 2015(1), pp.247-257.

京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬

—吉田南構内A O22区出土資料の紹介—

伊藤淳史

はじめに 文化財総合研究センターが、前身の埋蔵文化財研究センターの設立である1977年から40年を経たことを記念して、京都大学総合博物館での展示『足もとに眠る京都—考古学からみた鴨東の歴史—飛鳥～室町時代編』が、2018年2月14日～6月24日に開催されることになった。この小稿は、そこに陳列する予定でありながら、未報告のままとなっていた構内遺跡出土の平安時代土馬を紹介するものである。

土馬の出土地点 京都大学吉田キャンパスでは、吉田南構内と北部構内で土馬の出土があり、平安時代前半（9・10世紀）の遺構・遺物が濃密に確認される範囲と重なっている。今回紹介する土馬は、吉田南構内中央の220地点（A O22区）から出土した（図49）。そこでは、梵鐘鑄造遺構や井戸をはじめ、各種の遺構や包含層から9～10世紀代の遺物が大量に出土しており、概略を報告している⁽¹⁾。

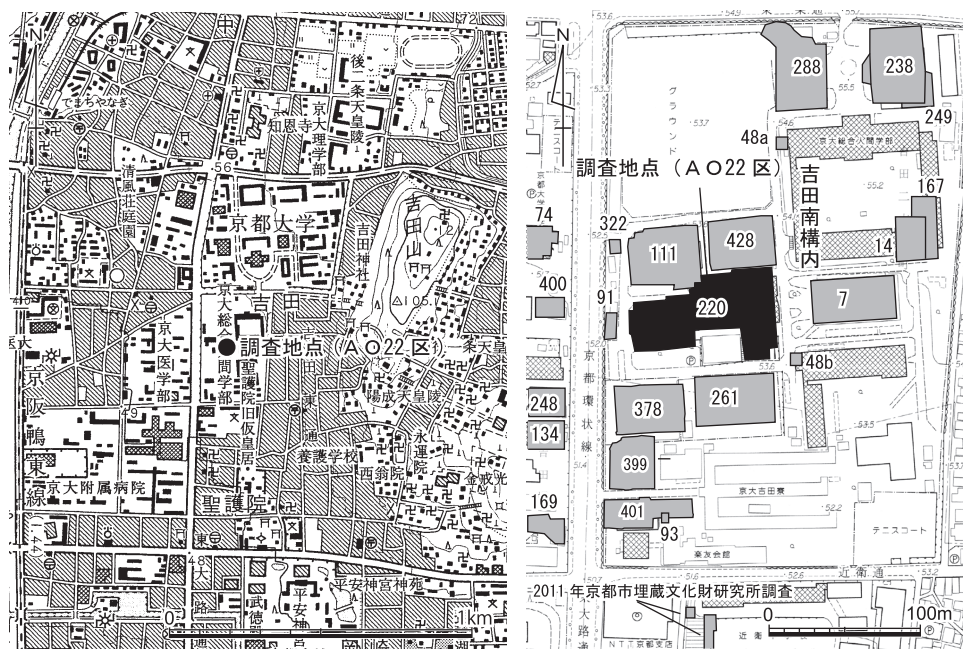


図49 調査地点（A O22区）の位置（左1/25000、右1/50000）

土馬出土遺構と出土状態 出土土馬は3点あり、うち最も遺存の良い1例（図52-1）は、調査区中央南壁際にある方形井戸S E28から出土した（図50）。この井戸からは、「て」字状口縁手法B₁類の土師器皿が出土しており、9世紀後葉の遺構と同定できる。残り2例（同2・3）は、2がS E28西側の中世土坑S K28、3が12世紀代に比定される井戸S E26から出土し、後代の遺構へ混入と評価すべきと思われる。

想定される製作年代と齟齬のない時期の井戸S E28から出土した1は、廃棄後の移動を被っていない可能性が高い。この井戸は、南辺が調査区外で正確な南北長は不明ながら、東西長約5.6mの方形掘形が検出された（図51）。検出面から約1.8m下に平坦面が形成され、一辺約2.5mの方形掘形がみられる。さらに、そのなかに径約1.3mの円形井筒の痕跡がみられ、底に向かうにつれ次第にすぼまる形態を呈していた。そして、底部に径約50cmの水溜部が明瞭に残り、ここから平安中期と推定される丸瓦と土馬1が出土した。

出土土馬について（図52） 土馬1は、尾の先端をわずかに欠失するのみで、全高6cm（胴部高3cm）、全長5cm。竹管で眼を表し、頭部と頸部の区別が曖昧で、脚は短小である。小笠原好彦の形式分類と変遷観によると⁽²⁾、第Ⅱ段階終末のH～I形式に相当すると思われる。この形式は、平城京東三坊大路東側溝での例から9世紀中頃～末の年代が

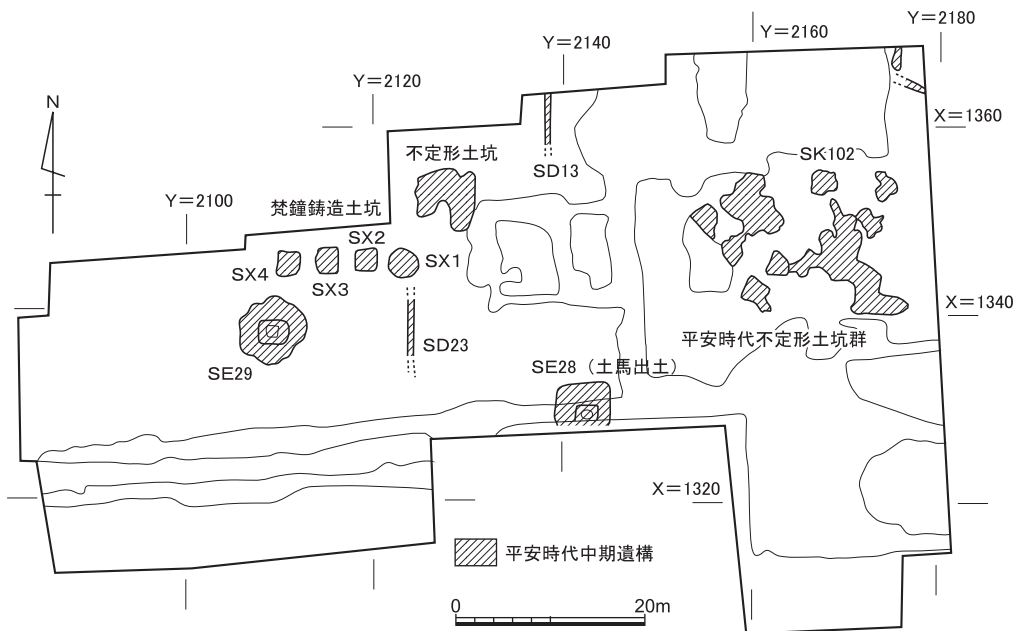


図50 A O22区検出の平安時代中期の主要な遺構 縮尺1/800

想定されている。土馬2は、頭部から背部までの区別も不明瞭で、脚も杜撰なつくりがうかがえる。土馬3は胴部のみで全形不明だが、かなり小型となることは明らかで、これら2点とも土馬1と同様かやや下の段階の製品とみてよかろう。なお、土馬1はきわめて精良な胎土だが、2と3は砂粒混じりの粗い胎土で、遺存も悪い。中世遺構への混入品とはいえ、1と質感が著しく相違する。破損出土が通有ななかで完存に近い点、井戸水溜部から単独出土である点もあわせ、土馬1には特別な配慮が感じられる。

構内遺跡出土の土馬とその意味 吉田南構内では、ほかに、西側の91地点で胴部が、北側の428地点で頭部や脚部、南方の401地点で脚部の出土が報告されている。いずれも破片で、中世以降の遺構や包含層への混入であり、今回の土馬1のような良好な出土例はない。ただし、それらの形態的特徴をみると、小笠原分類のF～G形式に比定できるような、

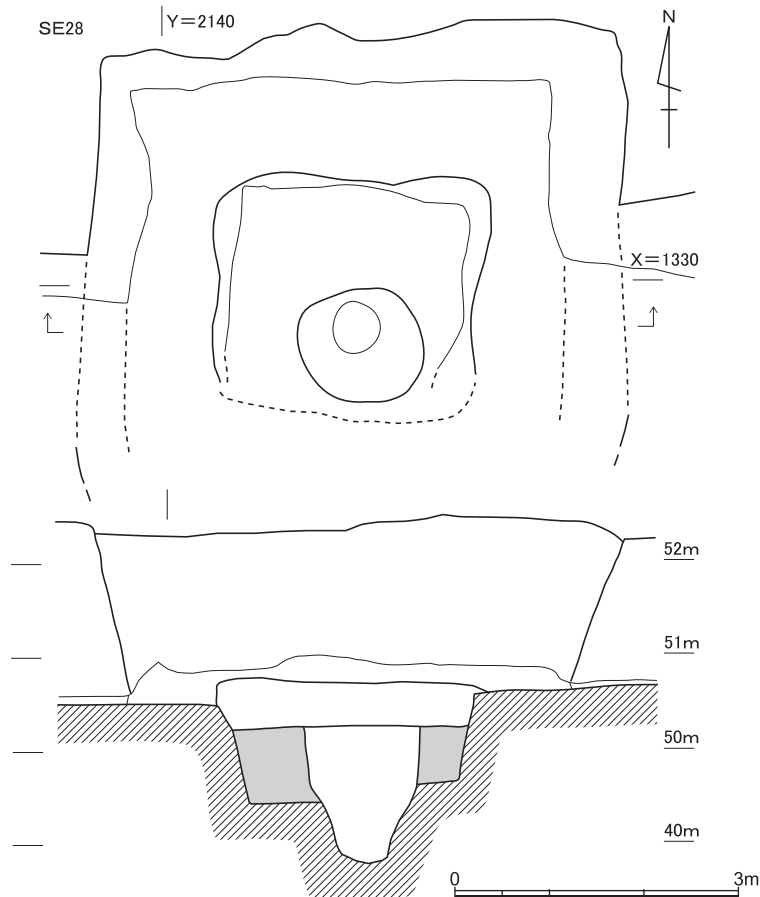


図51 平安時代中期の井戸 S E 28 縮尺1/80

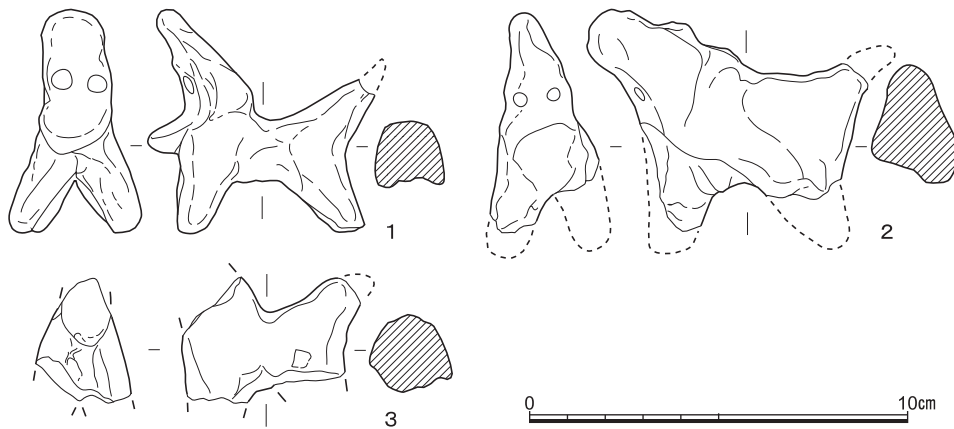


図52 A O22区出土の平安時代土馬 縮尺1/2 (1 : S E28出土, 2・3は中世遺構出土)

胴部が断面U字形に近く、脚部も一定の長さを有するものが含まれる。もう一カ所の分布域である北部構内では、299地点で長脚を有する胴部片が報告され、ほかにも複数の破片が出土したとされる。この299地点例も、今回の紹介例よりも先行する段階の形態的特徴を示している。このように、構内遺跡の出土例総体では特徴に幅があることから、この地の土馬の祭祀は平安期の一定期間継続的になされていた、とみることもできよう。

長岡京期までの土馬は、都城側溝からの大量出土などが知られ、官による祈雨祭祀との関連も想定されているが、平安期以降については同様な出土例をみない。管見では、今回のような宅内井戸などからの1～数点の出土のようである。水にかかわる私的祭祀への変容が予想されるものの、平安期の事例集成と検討による裏付けが、今後必須の課題となる。同時に、平安京の北東郊外に位置しながら、土馬も含めて京内と遜色ない遺物組成がみられる京大構内の平安期遺跡の性格についても、あわせて考察を深めていく必要があろう。

〔注〕

- (1) 伊藤淳史「京都大学総合人間学部構内A O22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』, 1999
 - (2) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25, 1975
- 奈良～平安期の土馬祭祀に関しては、ほかに以下の文献を参照した
- 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集, 1985
- 木村泰彦「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』, 1986
- 久世康博「祭祀遺物」『平安京提要』1994
- 上村和直「長岡京における祭祀」『堅田直先生古稀記念論文集』1997

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

内記 理

1 はじめに

今日、京都大学吉田キャンパスがある一帯が、幕末の激動期において、各藩の藩邸の用地として用いられたことは、すでに周知のこととなっている（五十川1981, 浜崎1983など）。慶応4年（1868）に描かれた京都の絵図である「改正京町御絵図細見大成」をみると、幕末の京都市中とその周辺にどのような施設が存在したかを知ることができる。絵図の中でも、今日京都大学吉田キャンパスがある吉田周辺に目を向けてみよう（図53）。まず、高野川と鴨川が合流する地点の付近から東に延びる通りがあるが、その通りの北には「土州屋敷」（土佐藩邸）が、そして、南には「尾張屋敷」（尾張藩邸）が確認される。これらの藩邸の存在は、幕末より前の時代に描かれた絵図では確認されないため、幕末になってか

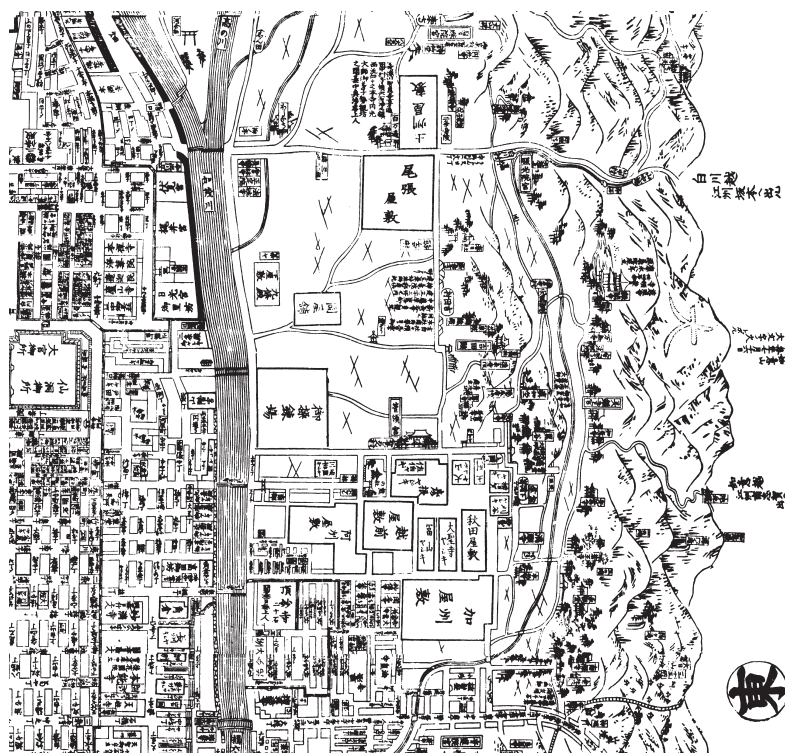


図53 幕末における吉田周辺（「改正京町御絵図細見大成」を改変）

ら建てられたものと思われる⁽¹⁾。これらはそれぞれ、現在の京都大学吉田キャンパスのうちの、北部構内と本部構内に重なる地点である。

また、絵図の中で吉田周辺より南に目をうつし、「熊の社」(熊野神社)の周辺から岡崎にかけての一带をみると、「彦根屋敷」や「阿州屋敷」、「加州屋敷」などが描かれる。吉田周辺と同様に、この地域にも各藩の藩邸が建てられたことがわかる。これらのうち、「阿州屋敷」(徳島藩邸)が描かれる地点は、現在の京都大学吉田キャンパスの熊野構内に重なる。

以上の絵図における描写から、幕末期においては、現在の京都大学の北部構内に土佐藩邸が、本部構内に尾張藩邸が、熊野構内に徳島藩邸が所在したことが想定される。

これらの藩邸のうち、吉田キャンパス内でおこなわれた発掘調査によって考古学的な裏付けがとられたものが、北部構内と本部構内にそれぞれ所在したと想定された、土佐藩邸と尾張藩邸である。それらの構内における発掘調査では、幕末期の遺構が検出され、また、土佐や尾張とのかかわりを示す遺物が出土した。また、熊野構内における発掘調査でも、幕末期頃にかかると考えられる遺構が検出された。絵図から存在が想定された徳島藩邸とのかかわりが想像されるものの、現段階では、出土遺物の内容による比定はできていない。

上述のように、土佐藩邸と尾張藩邸の比定には出土遺物が用いられたが、遺物の中でもとくに、瓦が果たした役割は大きい。近世につくられた瓦の中には、刻印を捺されたものが存在する。刻印は、瓦を生産した瓦工や工房を示すと考えられる。北部構内や本部構内の幕末期の遺構からみつかった瓦のいくつかも、刻印をもつ。そして、それらの出土瓦の刻印について検討することにより、それらの瓦が、土佐や尾張の国元から京都へもたらされたものであることが確認された(浜崎ほか1995, 伊藤ほか2007)。近世瓦の刻印を検討することで、遺跡の性格が判明し、さらには、遠隔地からのものの移動が説明されたのである。このように、近世の考古学の研究において、瓦の刻印がもつ潜在性は大きい。

このように、土佐藩や尾張藩とかかわりがある刻印をもつ瓦がみついている一方で、京都大学吉田キャンパスの発掘調査では、それらの藩とはかかわりのない刻印をもつ瓦もみつかった。これらの瓦については、これまでに十分な検討がおこなわれていない。1つの理由は、それらが、数量的に少量であったためである。また、もう1つの理由は、京都近隣における刻印の集成作業がこれまでににおこなわれておらず、京都大学の構内遺跡から出土した瓦の刻印を、他の資料と比較することが容易ではなかったためである。

ところが、2015年におこなわれた熊野構内の発掘調査において、まとまった量の、刻印をもつ瓦が発見された。第4節で紹介するように、そこには多様な刻印が確認される。一

方で、2017年の夏に、大阪歴史博物館において、画期的な主題をもつ研究集会が開催された。それは、埋蔵文化財研究会が主催した「幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—」と題された研究集会である。この研究集会は、近世における瓦の生産と流通について、全国規模での検討を試みるために開催された。そして、この研究集会の準備と併行して、全国の瓦の刻印の集成が図られた。その集成は、研究集会の資料集として刊行された（埋蔵文化財研究会2017）。編者が断っているように、内容は暫定的なものであり、網羅的なものではないものの、このような全国での刻印の集成が試みられたことにより、今後は、全国の近世瓦の刻印を容易に参照し、比較することができるようになった。

以上のような研究状況を踏まえ、本稿では、京都大学構内の遺跡から出土した瓦の刻印を整理し、紹介する。基本的には、これまでに報告された資料を提示するが、あらたに2015年度の熊野構内での調査で出土した瓦の刻印も紹介する。第2節では北部構内から出土した近世瓦の刻印を、第3節では本部構内のものを、第4節では熊野構内のものを、第5節では吉田南構内のものを、そして、第6節では病院構内と病院西構内のものを、それぞれ紹介する。一通り紹介を終えた後に、第7節では改めて、瓦の京都への搬入について検討し、第8節では、京都の瓦工と刻印のかかわりについて考察する⁽²⁾。

2 北部構内から出土した近世瓦の刻印

北部構内出土の近世瓦 北部構内においては3箇所の調査地点で、幕末の遺構および遺物がみつかった⁽³⁾。遺構としては、藩邸の南を画していたと考えられる堀や、瓦溜、井戸が検出された。前述のように、北部構内には幕末に土佐藩邸が所在したと考えられる。

その想定を考古学的に裏付けたのが、北部構内の調査で大量に出土した、軒棧瓦・棧瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・袖瓦・塀棧瓦などの近世瓦である（図54）。軒瓦の文様面には、三巴文や唐草文、桐葉文などがあらわされた。また、通常では出土する比率の低い左棧瓦が、高い比率で発見された点も注目される⁽⁴⁾。土佐藩邸の屋根には、正面性を意識した左右対称の配列で、瓦が並べられていたようだ（浜崎ほか1995：103）。

北部構内出土瓦の刻印 北部構内出土の瓦には、複数の種類の刻印がみられた（図55）。確認された刻印には、「アキ兼」、「アキ文」、「アキ角」、「□（ア）キ卯平」（図55－1～4。以上は報告の中でa類に分類される。浜崎ほか1995：104）、「安喜寅」、「安喜□（岩？）」（図55－5・6。以上はb類に分類される。）、「赤野銀」、「赤戈改」、「赤の源」、「赤傳仕成」（図55－7～10。以上はc類に分類される。）、「片常」、「片重」、「片万」、「片菊」、

「片九」（図55-11～15。以上はd類に分類される。），「並生野角」，「韭生□」（図55-16・17。以上はe類に分類される。），「中友」，「中山林」（図55-18・19。以上はf類に分類される。），「御瓦師」，「いおろい栄」，「佐古吉」，「住瓦庄」，「□（福？）瓦□（作？）」などの語がみられる（図55-20～24）。

興味深いことに、刻印にあらわされる語の大半は、土佐（高知県）の地名と関係する。そして、同じ刻印の瓦が土佐に現存する古建築の屋根を葺くのに使われていることが確認された（浜崎ほか1995：103-105）。刻印の冒頭に「アキ」ないし「安喜」がつくa類とb類の瓦、および「御瓦師」の刻印をもつ瓦は、旧・安芸郡の一带（現在の安芸市本町近辺）で、「赤野」や「赤」字のつくc類は、旧・赤野村（現在の安芸市赤野ほか）で、「片」字のつくd類は、旧・片地村（現在の香美市土佐山田町）で、「並生野」ないし「韭生」のつくe類は旧・韭生野村（現在の香美市香北町韭生野）で、そして、「中」ないし「中山」のつくf類は、旧・中山田村（現在の香南市野市町中山田）で製作されたと考えられている。そのほか、「いおろい栄」は旧・五百蔵（いおろい）村（現在の香美市香北町五百蔵）で、また、「佐古吉」は旧・東佐古村（現在の香南市野市町東佐古）でつくられたと考えられている。なお、2016年の病院構内における発掘調査にかかわる笹川尚紀氏の検討により、「住瓦庄」の刻印瓦が、大阪の住吉でつくられたものであったことが判明している⁽⁵⁾。

北白川に建てられた土佐藩邸の建物は、文久元年（1861）に大阪湾警備のため住吉に建てられた陣営が、慶応2年（1866）に移築されたものである。陣営造営の際、建物の屋根を葺くために、土佐から運ばれた瓦や住吉でつくられた瓦が使用された。それら陣営で用いられた土佐や住吉の瓦が、建物が京都へ移築された際に運ばれたと考えられる。

3 本部構内から出土した近世瓦

本部構内出土の近世瓦 本部構内においては、13箇所の調査地点で、幕末の遺構および遺物がみつかった⁽⁶⁾。藩邸の西堀や南堀がみつかったほか、藩邸内を流れていた水路や、池にかかわるものと思われる粗砂の堆積が認められた。これらの遺構からは、尾張藩の特注品である「御小納戸茶碗」がみつかったほか、後述するように、尾張藩の国元でつくられた瓦が出土した（千葉ほか2006、伊藤ほか2007）。これらの遺物が確認されたことから、本部構内には幕末に尾張藩邸があったと考えられる。

吉田に所在した尾張藩邸は、文久3年（1863）頃から明治4年（1871）まで存在した。愛知県公文書館所蔵の「吉田御屋敷之図」や名古屋市蓬左文庫所蔵の「吉田御屋敷惣図」

本部構内から出土した近世瓦

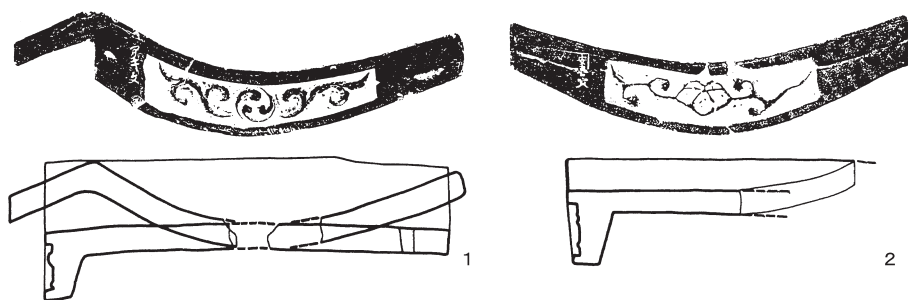


図54 北部構内出土の近世瓦（1：浜崎ほか1995, IV206, 2：IV219）縮尺1/5

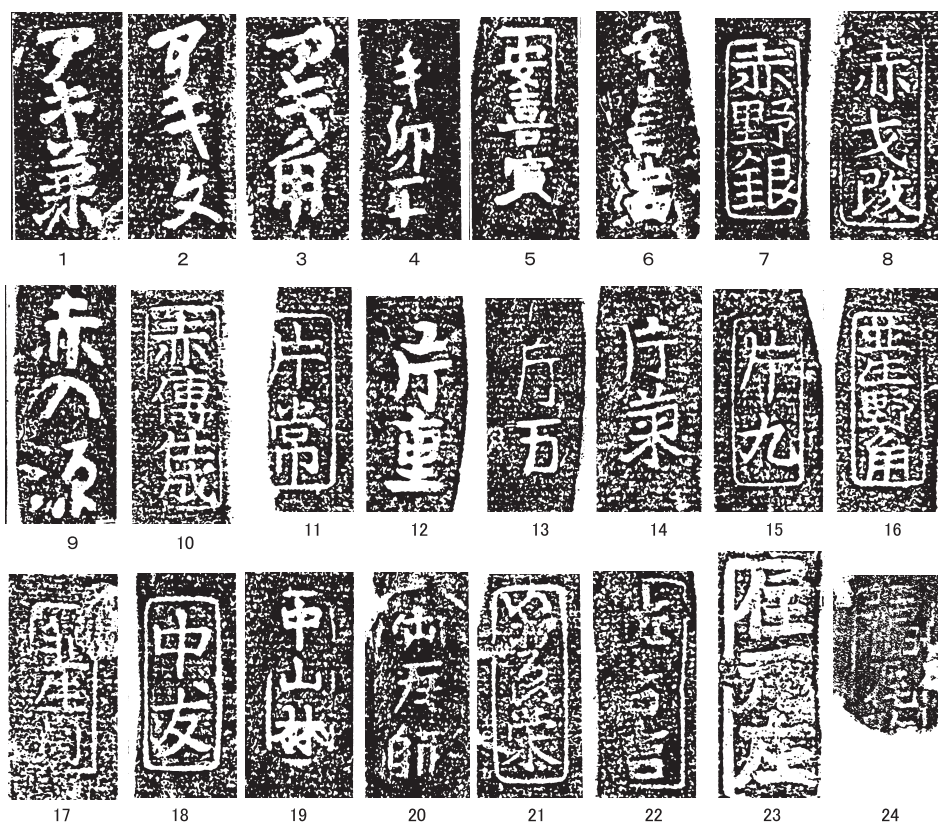


図55 北部構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1～23：浜崎ほか1995, 図68, 24：伊藤ほか2005, II482）縮尺1/1

などの、当時の尾張藩吉田邸を描いた絵図の存在が確認されたことにより、藩邸内部の建物の配置なども明らかになりつつある。なお、絵図には藩邸内を流れる水路が描かれるが、これはまさに、発掘調査でみつかった水路に対応すると考えられる。このような、絵図に描写された内容と発見された遺構を対照する作業も進められている（伊藤ほか2007）。

本部構内においては、棧瓦や丸瓦をはじめとした瓦がみつかった（図56）。

本部構内出土瓦の刻印 瓦にみられる刻印の多くは、「作」字を円形で囲ったものである（図57-1・2）。「作」字の刻印をもつ瓦は46点みつかっており、「作」字は筆致によって2種にわけられる（千葉ほか2006：87，伊藤ほか2007：188）。同様の「作」字瓦がみつかった江戸の尾張藩邸を発掘した東京埋蔵文化財研究センターによれば、「作」字をもつ刻印瓦は、18世紀以降に尾張の常滑で、御用瓦屋であった山田庄八によってつくられたものである（内野2004：58）。国元の尾張で生産された瓦が、京都や江戸に運ばれ、藩邸の屋根を葺くために用いられたのである。「作」字のほかにも、竹管文状の刻印、「京都／大仏／東政治郎／□師」銘の刻印、「八」字を方形に囲う刻印も確認された（図57-3～6）。「京都大仏」の刻印をもつ瓦は、廃棄土坑と考えられる遺構から、「作」字刻印瓦とともにみつかった。京都で生産された瓦と、「作」字の瓦がともにみつかったことから、尾張藩邸の敷地内で用いた瓦を、すべて国元の尾張から取り寄せたわけではなかったようだ。

刻印の類例 ここで、第1節で紹介した全国近世瓦刻印集成（埋蔵文化財研究会2017）を参考にしながら、刻印の類例を探してみよう。

「作」字を円形で囲った刻印は、京都市内では、相国寺旧境内でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-38・39）。京都以外では、東京都の尾張藩麹町邸跡（埋蔵文化財研究会2017：p. 349）や尾張藩上屋敷跡遺跡（埋蔵文化財研究会2017：13-99-241～247，310～312，315，336，363～366），あるいは愛知県の名古屋城三の丸（埋蔵文化財研究会2017：23-4-55），名古屋城西南隅櫓（埋蔵文化財研究会2017：p. 461）などの、尾張藩の国元である愛知県内や、東京都内の尾張藩邸跡で出土している。そのほかにも、奈良県今井町（埋蔵文化財研究会2017：29-11-2）や、岡山県の宝福寺仏殿（埋蔵文化財研究会2017：33-15-47），津山城跡（伊藤ほか2007：189，埋蔵文化財研究会2017：33-2）でも出土している。京都相国寺旧境内でみつかった「作」字刻印瓦や、奈良県と岡山県でみつかったものについては、尾張藩とのつながりがみいだせない。

なお、竹管文状の刻印は京都市内で、相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-1～3・14）。

本部構内から出土した近世瓦

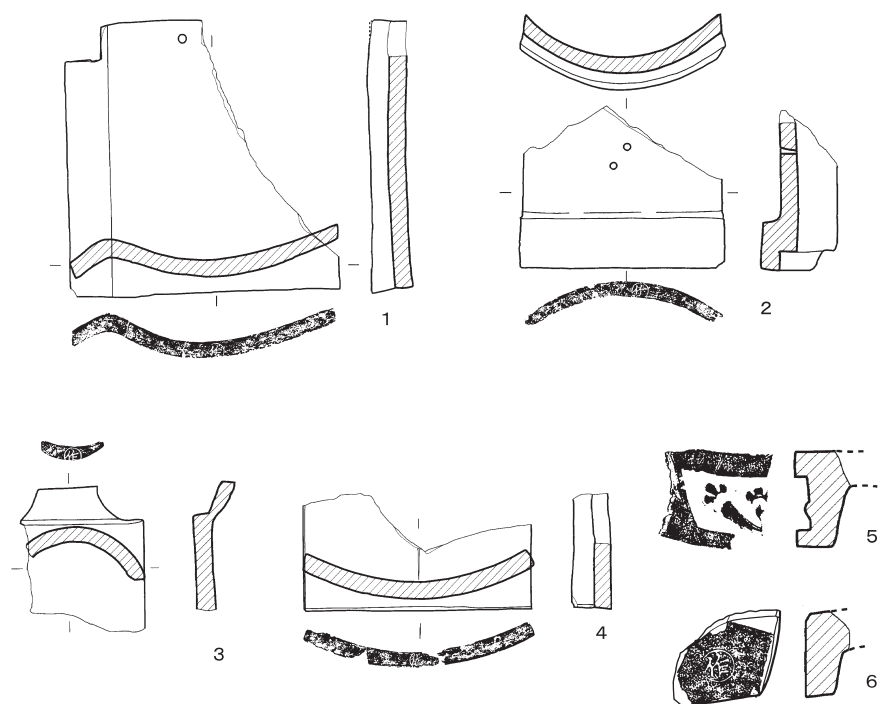


図56 本部構内出土の近世瓦（1：伊藤ほか2007，Ⅱ791，2：Ⅱ804，3：Ⅱ801，4：Ⅱ810，5：Ⅱ789，6：Ⅱ790）縮尺1/8（1～4），1/4（5・6）

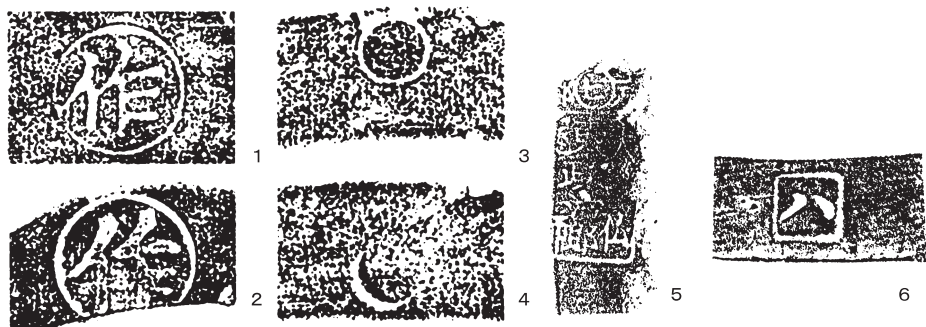


図57 本部構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1～4：伊藤ほか2007，表8，5：千葉ほか2006，Ⅰ1085，6：Ⅰ1086）縮尺1/1

4 熊野構内から出土した近世瓦

熊野構内出土の近世瓦 熊野構内においては、2015年におこなわれた調査で、幕末頃のものと考えられる堀の跡がみつかった⁽⁷⁾。前述したように、「改正京町御絵図細見大成」によれば、この地点には徳島藩邸が所在した。よって、みつかった堀は、徳島藩邸の堀であった可能性がある。徳島藩に關係する可能性のある遺物として、徳島藩主であった蜂須賀家の家紋である「卍」紋の瓦がみつかったが、他の家紋をもつ瓦もともに出土しており、考古学の観点からは、「卍」紋瓦1点の出土をもって同地が徳島藩邸であったとは断定できない。

この遺構にかかわって興味深いのは、堀の一部が瓦積によって埋められた状況が確認された点である。瓦積に用いられた瓦には棧瓦のほか、鬼瓦や道具瓦が含まれていた。前述の家紋瓦も、瓦積内でみつかったものである。これらの瓦は二次的に利用されたものと考えられる。この熊野構内の発掘調査で出土した遺物については、現在、報告書作成のための整理作業中であるため、ここでは、瓦の刻印のみを紹介する。

熊野構内出土瓦の刻印 熊野構内の発掘地点において積まれた状態でみつかった瓦に確認された刻印は、以下のようなものである（図58・59）。

刻印は、大きく5種類に分けられる。①花文様のもの、②1字の文字を円形で囲ったもの、③1字を方形で囲ったもの、④2字を方形で囲ったもの、⑤5字以上の文字を方形で囲ったもの、の5種類である。

①の花文様のものは、四弁の花と九弁の花が確認された（図58-1・2）。

②の1字を円形で囲ったものには、「へ」・「ハ」・「十」・「弥」・「元」・「大」・「極」（2点）・「市」（2点）・「長」（2点）の文字のほか、文字不明のものがある（図58-3～15）。また、楕円で「九」字を囲ったものが1点確認された（図58-16）。

③の1字を方形で囲ったものには、「治」と「彦」の字が確認されたほか（図58-17・18）、断片であるために文字が確認できないものが5点ある（図58-19～23）⁽⁸⁾。図58-23の刻印は、文字を陽刻したものと考えられる。

④2字を方形で囲ったものには、「昆（ないし日比）太」・「□八」・「大□」（2点）を縦書きにしたものと（図58-24～27）⁽⁹⁾、「甚私」と横書きにしたものがある（図58-28）。「甚私」の刻印では、文字が陽刻される。

⑤5字以上の文字をもつものには、「御用／京大佛瓦師／井上三右衛門」（2点、図59-



図58 熊野構内出土の近世瓦で確認された刻印 その1 縮尺1/1

1・2)・「□□大佛住瓦師／西村彦右エ門尉」(図59-3)・「大佛瓦□(屋?)／江川喜兵衛」(図59-4)・「大ふつ／次郎」(2点, 図59-5・6)・「□(大)ふつ／□(又)左衛門」(図59-7)・「大ふつ／□(右?)□□」(図59-8)・「京深草瓦師／平岡作兵衛」(図59-10)・「深草瓦師／□□□□」(図59-11)・「ふかくさ／長左□□」(図59-12)などがある。1点は断片であるため読めないが、「大ふつ」の「つ」字である可能性がある(図59-9)。「大仏」や「ふかくさ」の言葉が確認されることから、これらの瓦が、京都において生産されたものであったことがわかる。

刻印の類例 これらの瓦の刻印について、以下で類例を確認しよう。

まず、四弁の花文様の刻印は、相国寺旧境内で出土している（埋蔵文化財研究会2017：26-1-5・6）。

六弁や八弁の花文様の刻印は、京都市内でも確認されるが（埋蔵文化財研究会2017：26-14-37など）、九弁の花文様の刻印は確認できない。それでは、京都市外ではどうかというと、山口県の萩城跡（埋蔵文化財研究会2017：35-1-17）や、岩国城跡（埋蔵文化財研究会2017：35-4-21, 46）などでみつまっている。

「八」字の刻印は、京都市内の公家町遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-30）。

「十」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内や公家町遺跡、寺町旧域、方広寺跡でも出土した（埋蔵文化財研究会2017：26-1-58, 26-2-15, 26-3-3, 26-14-27）。また、市外では、熊本県の熊本城飯田丸（埋蔵文化財研究会2017：p. 744）や、大分県の毛利家御居間・三府御門・土間・広間の工事でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：p. 786）。

円囲いに「元」字は、京都市内では類例がない。一方、京都を離れると、熊本県の熊本城飯田丸（埋蔵文化財研究会2017：p. 744）や、御裏五階御櫓跡（埋蔵文化財研究会2017：p. 748）、熊本城跡桜馬場地区（埋蔵文化財研究会2017：p. 753）でみつまっている。

円囲いに「市」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-41・42）。公家町遺跡でもみつまっているが、字体は異なる（埋蔵文化財研究会2017：26-2-38）。また、二条城本丸玄関で葺かれていた瓦の刻印には、字形が同様で、円形の囲いのないものと、字形が異なり、円形の囲いのあるものがある（元離宮二条城事務所1986：図173・図190）。

「長」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内や公家町遺跡でもみつまっているが、それらは楕円で囲われる（埋蔵文化財研究会2017：26-1-44・45, 26-2-35）。

楕円囲いに「九」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-43）。

文字不明のものに関しては、香川県の丸亀城跡（埋蔵文化財研究会2017：37-15-83）でもよく似た文様のものが出土しているが、こちらも文字は不明である。

「昆（ないし日比）太」銘の刻印は、病院構内の2016年の発掘調査で出土したことが、本年報第2章で報告される。それ以外で京都に類例はない。東京の尾張藩上屋敷跡遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：13-99-78, 130, 149, 251, 252, 370）。

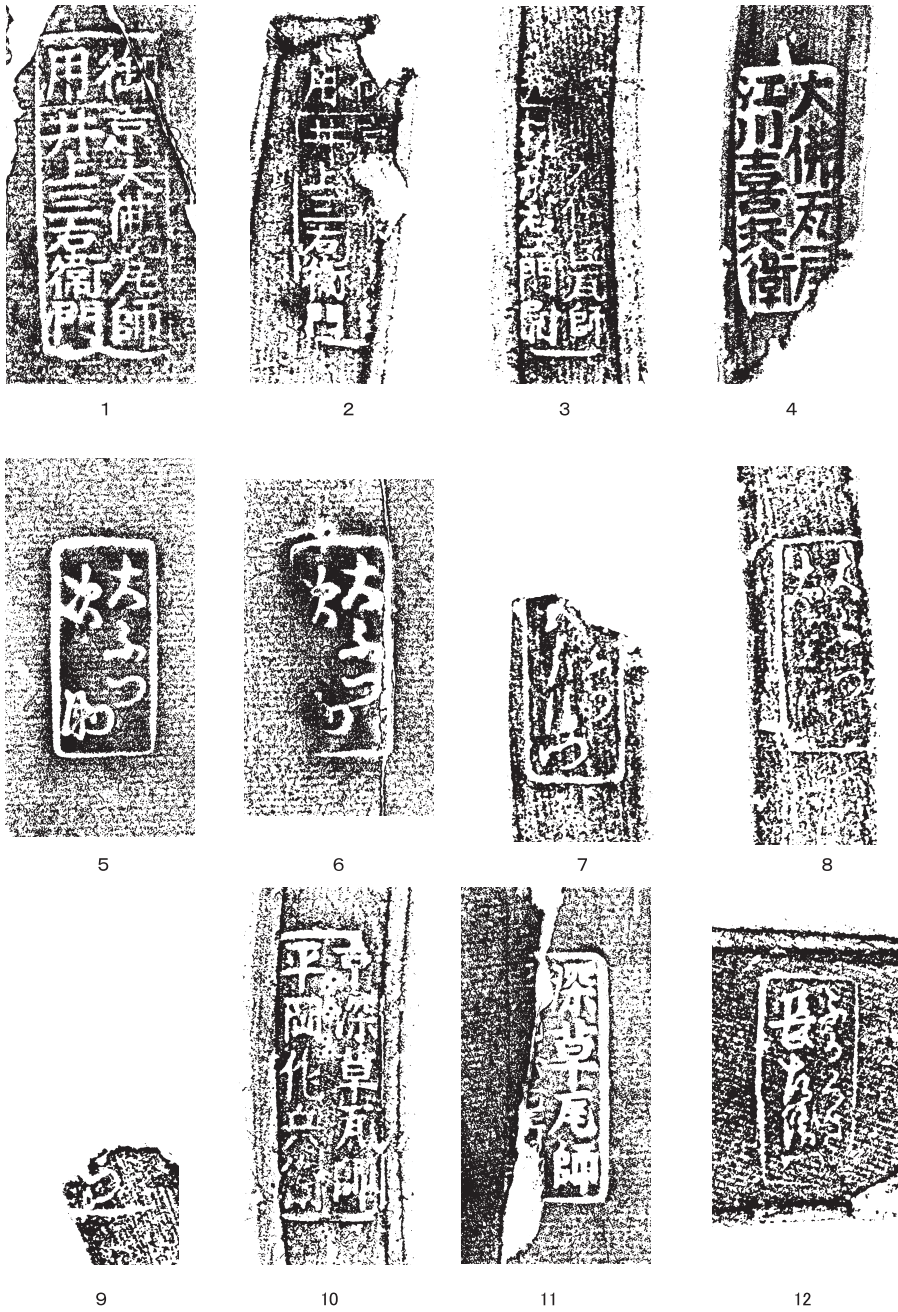


図59 熊野構内出土の近世瓦で確認された刻印 その2 縮尺1/1

「甚私」銘の刻印を持つ瓦は、他に確認できないが、横書きで文字が陽刻される瓦は、大阪府の広島藩蔵屋敷跡（埋蔵文化財研究会2017：27-9）や、広島県内の各遺跡で多く確認される（埋蔵文化財研究会2017：34）。また、香川県の丸亀城跡と愛媛県の今治城跡でも、それぞれ1点確認される（埋蔵文化財研究会2017：37-15-80, 38-1-9）。

「井上三右衛門」の刻印をもつ瓦は、京都市内の知恩院三門においてもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-24）。

「西村彦右衛門尉」の刻印をもつ瓦は、京都市内の二条城本丸御殿玄関でも用いられていた（元離宮二条城事務所1986：図177）。

「大ふつ又左衛門」の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-54）。

「平岡作兵衛」の刻印をもつ瓦は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-49・50）。

5 吉田南構内から出土した近世瓦

吉田南構内出土の近世瓦 吉田南構内における発掘調査でも、19世紀代を中心とする包含層（灰褐色土）より、近世瓦が出土した⁽¹⁰⁾。軒棧瓦と菊丸瓦が確認された（図60）。

吉田南構内出土瓦の刻印 刻印には、方形囲いの「大□」字、円形囲いの「作」字、円形囲いの「一」字、囲いなしの「与」字などが確認された（図61）。瓦が出土した地点は、吉田南構内でも北辺に位置し、尾張藩邸の比定地である本部構内と隣接する。第3節でみたような、尾張藩邸にゆかりのある「作」字の刻印をもつ瓦が出土したのは、そのためであろう。

刻印の類例 丸囲いに「一」字は、京都市内で、相国寺旧境内でもみつまっているが、筆遣いは異なる（埋蔵文化財研究会2017：16-1-29・30）。また、伏見奉行所や伏見城跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-21-4・5・7・8, 26-15-6）。

伏見城跡では、囲いのない「与」字の刻印のほか、三角形囲いのものや方形囲いのもの、円形囲いのものがみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-15-8～15）。また、円囲いの「与」字刻印は、相国寺旧境内や公家町遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-35, 26-2-37）。一方で、伏見奉行所や二条城本丸御殿玄関のものは、方形囲いである（埋蔵文化財研究会2017：26-21-254～258, 元離宮二条城事務所1986：図185）。

吉田南構内から出土した近世瓦



図60 吉田南構内出土の近世瓦（1：伊藤2000, I587, 2：I589, 3：I591）縮尺1/4



図61 吉田南構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1：伊藤2000図40, a, 2：b, 3：c, 4：d）縮尺1/1

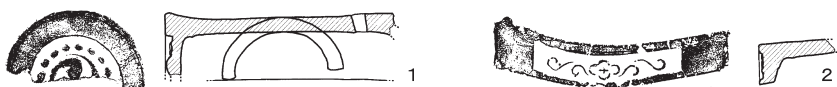


図62 病院構内出土の近世瓦（1：富井ほか2015, II116, 2：II121）縮尺1/8

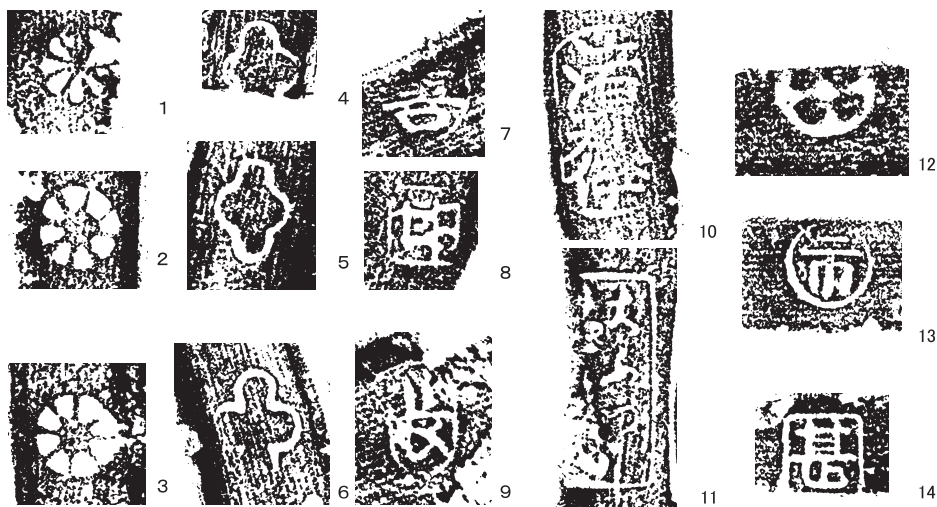


図63 病院構内・病院西構内出土の近世瓦で確認された刻印（1：富井ほか2015, II124, 2：II129, 3：II128, 4：II131, 5：II130, 6：II132, 7：II133, 8：II127, 9：II120, 10：II125, 11：II126, 12：千葉ほか2015, III681, 13：III683, 14：III682）縮尺1/1

6 病院構内・病院西構内から出土した近世瓦

病院構内・病院西構内出土の近世瓦 病院構内・病院西構内からも近世の瓦が出土した。軒丸瓦・軒棧瓦・棧瓦などがみつかった⁽¹¹⁾。瓦には、三巴文などが表される(図62)。

病院構内・病院西構内出土瓦の刻印 刻印には、四弁の花文(図63-12)、八弁の花弁をもつ菊花文様(3点, 図63-1~3)、四弁をつなげたような花文様(3点, 図63-4~6)、「市」字を円形で囲ったもの(図63-13)、「甚」の字を方形で囲ったもの(2点。図63-8・14)、楕円形で囲った「善」の字と考えられるもの(図63-7)、「長」字を楕円形で囲ったもの(図63-9)、「渚□□」を楕円形で囲ったもの(図63-10)、「大ふつ／□□□」を方形で囲ったもの(図63-11)などがある。

刻印の類例 四弁をつなげたような花文様については、それを枠線として用いたものが、方広寺跡出土瓦の刻印でもみられる(埋蔵文化財研究会2017: 26-14-76・77)。

「甚」字の刻印は、二条城本丸御殿玄関の瓦にもみられる(元離宮二条城事務所1986: 図188)。また、公家町遺跡でもみられるが、こちらは円形囲いである(埋蔵文化財研究会2017: 26-2-22)。

7 京都に搬入された瓦

以上では、京都大学吉田キャンパスで出土した瓦の刻印について紹介した。

京都大学から出土した刻印瓦が興味深いのは、何よりも、それらの中に、遠くから運ばれたことを示すものが含まれていることである。これまで先達によって検討されてきたように、北部構内では土佐藩の国元から搬入されたことを示す刻印をもつ瓦が出土し、また、本部構内では尾張藩から運ばれた刻印瓦が出土した(浜崎ほか1995, 伊藤ほか2007)。

しかし、今回、熊野構内から出土した瓦の刻印をみることで、京都にはより様々な地域から瓦が搬入された可能性がでてきた。つまり、京都大学出土瓦の刻印の中には、京都市内には類例がなく、京都を離れた地域に類例がある刻印が、少なからず存在するのである。

まず、九弁の花文様の刻印は、山口県の萩城跡や岩国城跡などでみつまっているものに近く、長州藩や岩国藩と関係がある可能性がある(図58-2)。また、円形囲いの「元」字は、熊本県の熊本城飯田丸や、御裏五階御櫓跡、熊本城跡桜馬場地区でみつかっており、熊本藩とのかかわりが想定される(図58-7)。そして、文字不明のものについては、香川県の丸亀城跡からよく似た文様のものがみつかっており、丸亀藩とのかかわりが考えら

れる（図58-15）。そして、横書きで文字が陽刻される例は、大阪府の広島藩蔵屋敷跡や広島県内の各遺跡で多く確認されるため、「甚私」の陽刻の印は、広島藩とのかかわりを想定してもよいかもしれない（図58-28）。

なお、「昆（ないし日比）太」の刻印（図58-24）は、東京の尾張藩上屋敷跡遺跡で複数個みつかった。尾張で出土していないことから、江戸とのかかわりをもつ可能性がある。

以上、分析としては不十分なものの、京都大学出土瓦の刻印には、長州藩ないし岩国藩や熊本藩、丸亀藩、広島藩、そして、江戸とかかわりを示す可能性のあるものが存在する。

8 京都の瓦工と刻印

前節では、京都に搬入された可能性のある瓦をみた。京都大学構内遺跡出土の近世瓦の刻印を検討する際に忘れるべきでないのは、それらの中に、京都産の瓦であることを示す刻印が多数確認されることである。本節では、京都で製作された瓦に目を向ける。

京都で製作されたと考えられる瓦の刻印の中には、瓦工名を姓名ともに示すものや、さらには、瓦工がどこを拠点に瓦の生産をおこなっていたかを示すものがある。製作者が特定できる点で、非常に便利な遺物であるといえよう。ところが、京都大学構内遺跡でみつかった刻印の多くは、簡単な文様や1字の文字のみを示すだけのものである。これら、単純な刻印をもつ瓦の製作者を推定することは、可能なことであろうか。

1字の刻印をもつ瓦の製作者を考察する上で手掛かりとなるのが、ある特定の建物の屋根を葺いていた瓦の集合である。ある建物を建立したり、修理した際に、屋根に新たに葺かれた瓦は、1つの工房でなかったとしても、少数の工房で生産されたと考えられる。また、すべての瓦に拠点と姓名を示す印を捺すことは大変であったろうから、代表的な瓦に瓦工についての詳細な情報を示し、残りの瓦には、省略した印を捺したことが想定される。

以上の話は、あくまで想定の話であるが、そのような作業仮説を設けた場合に、説明のしやすい刻印の例がある。それは、二条城本丸御殿玄関を葺いていた瓦の刻印である（元離宮二条城事務所1986）。興味深いのは、二条城の屋根を葺いていた瓦の刻印に、「平安城大仏住瓦師西村彦右衛門尉」、「京都／西彦」、「大仏／西彦」、「彦」などが確認されることである（元離宮二条城事務所1986：図172・図174・図177・図179）。刻印から、「西村彦右衛門」は京都の大仏に住んでいた瓦工であることがわかる。また、彼の名前は、瓦の窺書きでも確認される。窺書きには、「嘉永元年 戊申六月吉日／皇都大佛住／御用大瓦工／西村彦右衛門／瓦師細工人／由兵衛作之□」と示される（元離宮二条城事務所1986：図

134～137)。この窺書きから、西村彦右衛門が、嘉永元年（1848）頃、つまり、19世紀半ば頃に活動していたことがわかる。この例から考えて、瓦工の中には、自身の姓名の一部ないし1字のみを示す印を、瓦に捺した者がいたようだ。

「西村彦右衛門」の名をもつ刻印と「彦」字の刻印は、実は、京都大学の熊野構内でも確認された。よって、京都大学でみつかった「彦」字の1字の刻印をもつ瓦も、19世紀半ばに京都で活動した西村彦右衛門によって生産された瓦である可能性が高い。

瓦工の中には姓名の1字を刻印に用いた者がいた、とする観点から、ほかの遺跡から出土した刻印の例をみてみよう。まず、相国寺旧境内では、「京深草瓦師平岡作兵衛」の刻印瓦とともに、「作」1字の刻印瓦がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-38・39・49・50）。また、公家町遺跡では、「ふかくさ市右衛門」の刻印瓦とともに、「市」字の刻印瓦がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-38・47）。これら複数の例があることから、京都の瓦工の中には、自身の名前の中の1字を示す印を瓦に捺す者が、複数人存在したと考えられる。このように考えるならば、ほかの1字の刻印についても、瓦工の名前の一部を表す可能性が高いのである。

熊野構内からは、「治」字や「長」字の刻印が確認された。一方で、同じ左京区内の公家町遺跡では、「五位川治兵衛」や「山之内長兵衛」の刻印がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-51・52）。「治」字の刻印は五位川治兵衛と、「長」字の刻印は、山之内長兵衛を示すのであろうか⁽¹²⁾。

吉田南構内では「与」字の刻印瓦がみつかった。一方で、上京区に所在する本隆寺本堂の解体工事では、「洛東大佛住人西村与三右衛門」の名前が刻まれた鬼瓦が確認された（京都新聞社2017）⁽¹³⁾。「与」字はこの大仏の瓦工と関係があるかもしれない。なお、本隆寺の鬼瓦には、万治2年（1659）の年号も刻まれていたようだ。西村与三右衛門が、17世紀半ばに活動した瓦工であったことがわかる。

ところで、土佐藩邸跡に比定される北部構内でみつかった刻印瓦について、それらの多くが土佐藩で生産されたものであること、そして、それらの瓦の中に大阪の住吉で生産された瓦も混じることは、第2節で述べた通りである。しかし、北部構内でみつかった瓦の刻印の中には、土佐や住吉とのつながりがみいだされないものがある。それは、「福瓦作」と書かれていると考えられた刻印である。この刻印とかかわりのありそうなものに、京都市内の教王護国寺や大徳寺山門、知恩院山門において確認された、「福田加賀」、「瓦大工福田加賀守」の刻印をもつ瓦がある（埋蔵文化財研究会2017：26-17-3，26-22，26-24）。

これまでの検討とは反対に、京都大学出土瓦の刻印から、他の遺跡出土の1字の刻印瓦の瓦工名を推定することもできる。公家町遺跡や二条城本丸御殿玄関では、楕円形囲いの「喜」字の刻印がみつかった（埋蔵文化財研究会2017：26-2-23、元離宮二条城事務所1986：図189）。一方で、熊野構内では、「大佛瓦□（屋？）／江川喜兵衛」の刻印瓦がみつかった。「喜」字の刻印は、江川喜兵衛の名前の1字を用いたものである可能性がある。

一方で、1字だけでは特定の瓦工と結びつけられない例もある。熊野構内では「九」字の刻印瓦がみつかったが、京都市の公家町遺跡からは「左□ 九良兵衛」の刻印瓦が（埋蔵文化財研究会2017：26-2-50）、また、寺町旧域からは「ふかくさ九良右衛門」の刻印瓦がみつかった（埋蔵文化財研究会2017：26-3-7・8）。このように、「九」の字を名前にもつ瓦工が複数人いた場合、瓦工の推定は難しくなる。

同じく、熊野構内や病院西構内でみつかった「市」字の刻印についても、瓦工との結びつけは容易でない。先に、公家町遺跡で、「市」1字の刻印と「ふかくさ市右衛門」の刻印がともに確認されることを述べたが、「市」字を名前の一部にもつ瓦工は、市右衛門以外にも複数確認される⁽¹⁴⁾。「平井市右衛門」（京都府2009：図275③）⁽¹⁵⁾、「青山市郎右衛門」⁽¹⁶⁾、「青山市左エ門」（埋蔵文化財研究会2017：26-24）⁽¹⁷⁾、などである。熊野構内や病院西構内でみつかった「市」字は、これらの瓦工のいずれかとかかわりがあると考えられる。

また、病院構内と病院西構内でみつかった「甚」字の刻印に対応する名の瓦工として、「甚助」や「甚兵衛」の名が知られる。「甚助」の名は、本願寺大師堂修理の際に確認された。大師堂の南西隅棟二の獅子口の瓦には、篋書きで、「文化七庚□年林鐘上旬 御用瓦工 森田平兵衛 細工人甚助」と、また、北西隅棟一の獅子口の瓦には、「文化七庚午歳五月吉旦 御用瓦師 森田平兵衛 細工人甚助」と書かれる（京都府2009：p. 134、図257）。森田平兵衛は大仏の瓦工であるので、甚助も大仏の瓦工と考えられよう（京都府2009：図260④、図261、京都府1984：図版184など）。なお、文化7年は西暦1810年であり、甚助もまた、19世紀はじめ頃に活動した瓦工であることがわかる。「甚兵衛」の名は、2017年度の京都大学女子寮の発掘調査で、攪乱の中からみつかった瓦の刻印にみられ、「深草」の瓦工であることまでがわかる。

このように、刻印の1字で瓦工の名前の一部を示すと考えられるものもあるが、そのような刻印の使い方と一致しない明確な例も存在する。それは、京都大学熊野構内でも出土した「十」字の刻印にかかわるものである。「十」字の刻印は、本願寺大師堂や六角堂で、「大佛瓦町瓦師井上重良兵衛」の刻印とともに、同じ瓦に捺されている（京都府教育委員

会編2009：図版261・278，埋蔵文化財研究会2017：26-18-2）。このように，1つの瓦に同時に捺されたことから，「十」字の刻印は，大仏の瓦工の井上重良兵衛とかかわりがあると考えられる。重良兵衛の名は，本願寺大師堂の瓦の箋書きにもみられる。それによれば，彼は，18世紀前半に京都で活動した瓦工である（京都府2009：図275③，p. 135）。

9 ま と め

以上，京都大学の北部構内・本部構内・熊野構内・吉田南構内・病院構内・病院西構内の調査でみつかった近世瓦の刻印について紹介した。これまでの検討で，土佐藩や尾張藩の国元から搬入された瓦が北部構内や本部構内でみつかることがわかっていたが，今回，新たに吉田キャンパス全体で出土した瓦の刻印をみることにより，また，全国近世瓦刻印集成（埋蔵文化財研究会2017）などを参考にしながらその類例を確認することにより，新たな見解が得られた。

まず，瓦の中には，これまでに存在の知られていた土佐藩や尾張藩にかかわる刻印をもつものだけでなく，他の藩とかかわりのある可能性のある刻印をもつものが存在することが確認された。具体的には，九弁の花文様の刻印をもつ瓦は，山口県内でも出土しており，「元」字を円形で囲った刻印をもつ瓦は，熊本県内の各遺跡でも出土している。また，文字不明の刻印をもつ瓦は，よく似た例が香川県内でみつまっている。「昆（ないし日比）太」の刻印をもつ瓦は，京都大学構内遺跡以外では，東京都内でのみみつまっている。そして，横書きで文字が陽刻される刻印をもつ瓦は，広島県内などの広島藩にかかわる遺跡から出土している。十分な分析を踏まえた結果ではないものの，今後は，京都市内でみつかる近世瓦の刻印について，全国規模での比較が必要であろう。

また，京都でつくられた瓦について，1字のみの刻印から，瓦工を比定する試みをおこなった。1字の刻印から想定できる瓦工を下に列挙する。

「彦」字：西村彦右衛門

「作」字：平岡作兵衛

「市」字：ふかくさ市右衛門，平井市右衛門（大仏？），青山市郎右衛門，青山市左エ門

「治」字：五位川治兵衛

「長」字：山之内長兵衛

「与」字：西村与三右衛門

「甚」字：（森田？）甚助，甚兵衛

「喜」字：江川喜兵衛

「九」字：九良兵衛、ふかくさ九良右衛門

「十」字：井上重良兵衛

1字の刻印以外にも、瓦工が想像できるものに以下のものがある。

「西彦」：西村彦右衛門

「福瓦作」：福田加賀守

十分な分析を経た見解とはいえないものの、1字の刻印が瓦工の名前の一部を示したものであると想定することで、近世瓦工についての検討が大きく進められる可能性がある。京都の古寺や古建築の屋根を葺く瓦の刻印や箋書きを、より広範に確認することで、刻印に表された瓦工の活動した時期や場所を、より詳細に検討することが可能であろう。

ただし、このように想定した場合、京都大学でも出土する「作」字の刻印については問題が残る。京都で使われた「作」字瓦には、少なくとも2系統が存在したことになるためである。1つ目の系統は、これまでに議論されてきた、尾張藩邸跡からみつかった、尾張で生産された「作」字の刻印瓦である。もう1つの系統が、今回その可能性を提示した、京都深草の平岡作兵衛が生産したものである。さらに、京都を離れると、これまでにも指摘されてきたように、「作」字の刻印瓦は、岡山県内の遺跡でもみつまっている（伊藤ほか2007：189）。「作」字を円形で囲った印を瓦に捺す瓦工が、日本国内に少なくとも3系統いたことになる。今後、京都市内で出土する「作」字の刻印瓦を扱う場合は、この刻印に複数の系統が存在する可能性があることを念頭に置きながら、検討をおこなう必要がある。

近世の考古学の研究において、瓦の刻印の検討がもつ潜在性は大きなものである。今後の研究の進展に期待したい。

謝辞 本稿は、以下の2つの考察をもとに作成したものである。1つは、2016年度に開催された京都大学総合博物館特別展『文化財発掘Ⅲ—激動の幕末と京大キャンパス—』の企画を、文化財総合研究センターの笹川尚紀氏とともに担当した際におこなった考察であり、もう1つは、第66回埋蔵文化財研究集会の誌上発表の準備に際しておこなった考察である。これらの機会を与えてくださったのは、岩崎奈緒子先生をはじめとする京都大学総合博物館の方々と、市川創氏をはじめとする埋蔵文化財研究会関西準備会の方々である。また、本稿では、筆者が副担当を担った2015年度の熊野構内の発掘調査で出土した刻印瓦を中心的な分析対象として扱った。整理作業中の未発表の遺物を本稿でとりあげるにあた

り、文化財総合研究センターの千葉豊氏および、発掘調査の担当の富井眞氏より、ご理解をいただいた。また、やはり、筆者が副担当を担う2017年度の百万遍女子寮の発掘調査で出土した刻印瓦を、本稿で引用するにあたっては、調査の担当の笹川尚紀氏より、ご理解をいただいた。なお、熊野構内出土の瓦の整理にあたっては、長尾玲氏より全面的なご協力をいただいている。上記の方々に、記して感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 幕末より前の時代に描かれた京都の絵図としては、「元禄京都洛中洛外大絵図」(元禄(1700年頃))や「天明大火図」(天明8年(1788))などがあげられる(京を語る会1975)。これらの絵図をみると、吉田周辺には、尾張藩邸や土佐藩邸は描かれない。よって、「改正京町御絵図細見大成」に描かれる尾張藩邸や土佐藩邸は、幕末になってから建てられたものであると考えられる。
- (2) なお、本論で示した、それぞれの藩邸の建造年と廃棄年、そして、その来歴などにかかわる文献史料の検討に基づく見解の多くは、2016年度京都大学総合博物館特別展「文化財発掘Ⅲ―激動の幕末と京大キャンパス―」の準備に際して、文化財総合研究センターの笹川尚紀氏より教示いただいたものである。
- (3) 北部構内においては幕末の遺構が、109地点(浜崎1983:26)、276地点(伊藤ほか2005:178-179)、208地点(浜崎ほか1995:88-105)の3箇所で見出された(図版1)。
- (4) 北部構内の208地点で見出された土佐藩邸にかかわると考えられる遺構からは、右棧瓦(軒瓦を含む)が214.2点みつかり、左棧瓦(軒瓦を含む)は161.3点みつかった(浜崎ほか1995:102)。
- (5) 2016年の病院構内436地点(図版1)の発掘調査で出土した「住瓦庄」の刻印をもつ瓦については、本年報紀要の第2章および笹川氏の論考の中で紹介されている。詳細については、それらを参照いただきたい。
- (6) 本部構内においては幕末の遺構が、75・89地点(五十川1981:23-25)、188地点(西川ほか1990:2)、277地点(千葉ほか2006:69-87)、293地点(清水ほか2006:237-238)、296地点(伊藤ほか2007:155-200)、329e地点(千葉ほか2009:47)、335地点(千葉ほか2009:47)、336a地点(千葉ほか2009:47)、336b地点(千葉ほか2009:47)、383地点(上原ほか2014:2)、395地点(上原ほか2014:2)、403地点(笹川2016:174)の13箇所で見出された(図版1)。
- (7) 幕末頃のものと考えられる堀の遺構が見つかったのは、熊野構内の435地点である(図版1)。
- (8) 断片的で文字が確認できないものに関しては、本来2字以上のものであった可能性がある。しかし、ここでは仮に、それらを1字の刻印に含めて紹介する。
- (9) 図58-25~27については、1字だけ、あるいは3字以上の刻印であった可能性がある。しかし、ここでは仮に、それらを2字の刻印に含めて紹介する。
- (10) 吉田南構内においては近世瓦が、238地点から出土した(伊藤2000:72, 74, 図版1)。
- (11) 近世瓦は、病院構内では385地点で(富井ほか2015:150-152)、病院西構内では379地点(千葉ほか2014:62)と398地点(千葉ほか2015:194-199)で出土した(図版1)。
- (12) ただし、2016年の病院構内の調査で、「五」字の刻印をもつ瓦が見つかった。このような刻印の例があることから、五位川治兵衛は、名前の一部である「治」字の1字刻印でなく、姓の

一部である「五」字の1字刻印を用いていた可能性も考えられる。「五」字の刻印については、本報紀要の第2章で紹介されているため、詳細についてはそちらを参照いただきたい。なお、「五」字の刻印瓦は、京都大学の構内以外では、左京区の公家町遺跡からも出土した（埋蔵文化財研究会2017：26-2-27～29）。

- (13) 京都市上京区に所在する本隆寺でおこなわれた解体修理において、16点の鬼瓦の中で、13点に鬼瓦の製作者の名前が刻まれているのが確認された。それらのうちの6点には、「伏見深草住瓦師青山市郎右衛門」の名前が刻まれており、また、残りの7点には「洛東大佛住人西村与三右衛門」の名前が刻まれていたようだ（京都新聞社2017）。京都を代表する2箇所の瓦生産拠点である深草と大仏の瓦工が分担して、本隆寺の鬼瓦を製作していたことがわかった点でも興味深い発見である。
- (14) なお、「ふかくさ市右衛門」の名前は、公家町遺跡出土の瓦のほか、本願寺本堂の瓦でも確認される（京都府1984：図版184）。
- (15) 平井市右衛門の名は、本願寺大師堂の平瓦に窺書きされる。窺書きには、「寶曆十庚辰歳六月／御造工／山城國愛宕郡／大佛住人／平井市右衛門末孫／井上重良兵衛俣／平井山三郎作」と示される（京都府2009：図275③，p. 135）。孫の平井山三郎が瓦をつくった宝暦10年は、西暦の1760年にあたる。よって、2代遡る祖父である平井市右衛門の活動時期は、示された年号より数十年古く、18世紀前半頃であったと考えられる。平井山三郎と同じく、大仏を拠点とする瓦工であったと考えられる。
- (16) 青山市郎右衛門は、先述の2017年の京都市上京区に所在する本隆寺の解体修理に際して確認された（京都新聞社2017）。鬼瓦には、万治2年（1659）の年号が刻まれていたようである。これらから、青山市郎右衛門が17世紀半ば頃に活動した、深草の瓦工であったことがわかる。
- (17) 知恩院三門において、「山州深草／青山市左エ門」と「深草住青山市左エ門」の刻印が確認された（埋蔵文化財研究会2017：26-24）。なお、市左衛門の名は、本願寺大師堂の隅棟獅子口・南東隅・稚児棟の瓦の窺書きでも確認された（京都府2009：図256②③，p. 134）。その窺書きには、「干時安政六己未天四月謹造之／御用瓦司青山市左衛門（花押）」と刻まれる。安政6年は、西暦の1859年にあたる。よって、市左衛門は19世紀半ばに活動した深草の瓦工と考えられる。

〔参考文献〕

- 五十川伸矢 1981年「第4章 京都大学本部構内A T27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』pp. 21-34.
- 伊藤淳史 2000年「第2章 京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』pp. 3-80.
- 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005年「第3章 京都大学北部構内B C28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』pp. 133-208.
- 伊藤淳史・梶原義実 2007年「第3章 京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』pp. 125-200.
- 上原真人・千葉豊 2014年「第1章 2011・2012年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』pp. 1-2.
- 京都新聞社 2017年「350年前鬼瓦に職人2人の名 京都・本隆寺本堂」『京都新聞』2017年10月25日記事 URL：<http://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20171025000016>（最終確認日：2017年12月17日）
- 京都府教育庁指導部文化財保護課編 1992年『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

- 京都府教育委員会 1984年『重要文化財本願寺本堂（阿弥陀堂）修理工事報告書』
- 京都府教育委員会 2009年『重要文化財本願寺大師堂修理工事報告書』
- 京を語る会（編） 1975年『近世京都絵図十種』
- 笹川尚紀 2016年「第5章 京都大学本部構内A T22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』 pp. 169-187.
- 清水芳裕・千葉豊 2006年「第4章 京都大学病院構内・本部構内の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』 pp. 235-238.
- 千葉豊・伊藤淳史・富井眞 2009年「第5章 京都大学構内における分布調査・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』 pp. 41-54.
- 千葉豊・阪口英毅 2006年「第2章 京都大学本部構内A T21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』 pp. 3-96.
- 千葉豊・長尾玲 2014年「第2章 京都大学病院構内A H12区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』 pp. 3-68.
- 千葉豊・長尾玲 2015年「第4章 京都大学病院構内A H13区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』 pp. 157-202.
- 富井眞・長尾玲 2015年「第3章 京都大学病院構内A F17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』 pp. 123-156.
- 西川幸治・久馬一剛・清水芳裕・森下章司 1990年「第1章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』 pp. 1-4.
- 浜崎一志 1983年「第4章 京都大学北部構内B D30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』 pp. 25-30.
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年「第4章 京都大学北部構内B A28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』 pp. 65-125.
- 埋蔵文化財研究会 2017年『幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通』第66回埋蔵文化財研究集会 発表要旨・資料集
- 元離宮二条城事務所 1986年『重要文化財二条城本丸御殿玄関修理工事報告書』第7集

蓮月焼を模倣した陶器について

—京都大学病院構内A E 19区 S K 15出土資料—

千葉 豊

1 はじめに

蓮月焼とは、幕末の女流歌人・大田垣蓮月（1791－1875）が生活の糧として製作したやきもののことである。茶器を中心とするもので、手づくねで成形し自詠の歌で飾るのを特徴とした。その素朴な趣が文人墨客から一般庶民へと流行が広がりつつあった煎茶趣味と一致し、幕末から明治初年にかけて、蓮月焼として名声を博することとなった。

この蓮月焼が京都大学医学部附属病院構内東南部の発掘調査で多数出土した（図版1－141・239地点）〔浜崎・宮本1987，千葉2000・2006〕。その出土地点は、聖護院村で蓮月が居を構えたと推定できる場所にはほぼあっており、焼き損ない品が多く出土していることから、出土資料は選に漏れた失敗品が廃棄されたものと考えられた。

その一方で、2001年に実施した病院構内A E 19区（278地点）の発掘調査では、S K 15と呼称した井戸から、蓮月焼そのものとともに、蓮月焼に酷似しつつも玉木良斉という人物が製作した陶器が多数出土した（図64）〔千葉・富井・井上2007，p.88〕。蓮月焼に関しては、蓮月生存中からすでに蓮月焼を模倣した贋作が出回っており、また蓮月本人が関与しつつ蓮月以外の人の手が加わった作品も存在している⁽¹⁾。こうした作品と比較すると、S K 15から出土した資料は、玉木良斉という製作者本人の名前を記していること、やきものを飾る歌も蓮月の歌ではなく、自らが詠んだ歌を施していることから、贋作としての蓮月焼とは一線を画しているといつてよい。前報ではこのような資料が出土したという記述のみで、実測図や写真を用いての詳細な報告ができなかった。ここで改めて出土資料を報告し、その特徴や意義について考えてみたい。

2 調査の概要と井戸 S K 15

調査地点は、京都大学病院構内の東南部に位置しており、聖護院川原町に含まれる（図版1－278地点，図64）。調査期間は2000年3月26日～10月19日，調査面積は8000㎡であった。縄文時代の流路，中世の井戸・土坑，近世～近代の井戸・池・土取穴・溝・遺物溜などを検出し，整理箱で700箱を越える遺物が出土した。出土遺物の大半は，江戸時代の土器・

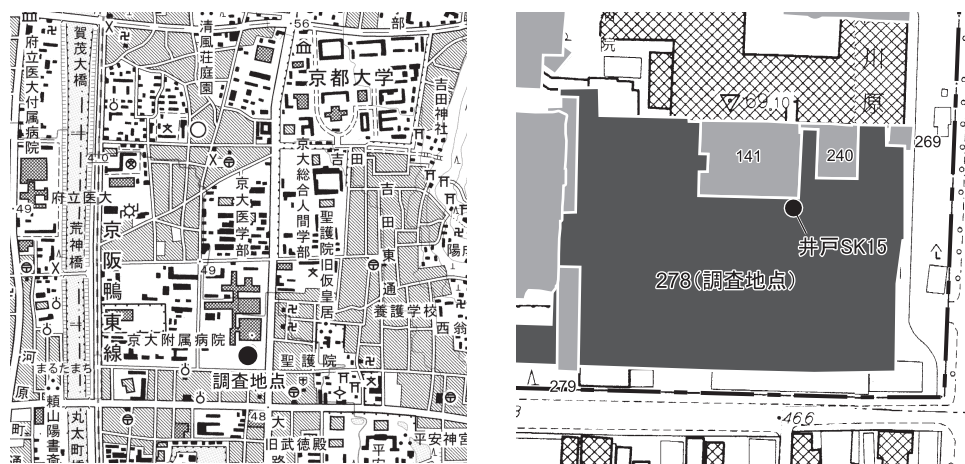


図64 調査地点の位置 (左: 1/25000 右: 1/5000)

陶磁器類であったが、江戸中期の乾山焼に関係する資料がまとまって出土したことから、文献に聖護院門前で営まれたと記述のある乾山「聖護院窯」の実態を解明する資料として注目された〔千葉ほか2003, 千葉・富井・井上2007〕。

蓮月焼模倣陶器が出土したSK15は、調査区の東寄り北辺に位置している。一辺が1.7～1.8mのほぼ方形の掘形で、検出面からの深さは2m以上。下底部で、1m四方の木枠とそれを固定するための1辺5cm前後の角杭を検出した。近世の井戸の場合、通常みられるような石組や瓦積みは認められなかったため、当初は廃棄土坑と考え調査を進めたが、掘形の深さと下部の木組みから、井戸であると判断した。この井戸の埋土から、幕末期の日常的な陶磁器類とともに、蓮月焼そのものと蓮月焼に酷似し良齊という銘をもつ陶器が多数出土した。井戸の廃絶に伴ない、不要品が廃棄されたものであろう (図版12)。

3 井戸SK15出土資料

井戸SK15より出土した資料を蓮月焼そのもの、良齊の銘をもつ蓮月焼模倣資料、その他の資料に大別して、紹介する。なお、蓮月焼および蓮月焼模倣資料に関しては、やきものに記された歌・署名・紀年銘などを表4にまとめたので、参照されたい。

(1) 蓮月焼 (図版13, 図65)

1は椀。施釉陶器で、鉄錆で歌 (「閑なるねざめのとくに音づれて 心のちりをはらう 山風」) を筆書きし、「蓮月」と署名している。2・3は急須の蓋と身。口径から判断して、

セットになろう。素焼の状態で、身に蓮月の歌（「梅がかに枕もとらで更る夜の 空に鳴ゆく春の雁がね」）、蓋の裏側に「蓮月」の銘をくぎ状の工具で彫り書きしている（以下、刻書と記す）。1～3は、蓮月の手になる蓮月焼そのものと理解する。素焼の段階にとどまる2・3は、未製品（失敗品）として廃棄されていることは明らかであるが、こうした資料を伴いつつ、つぎに解説する蓮月焼模倣資料が出土していることは、蓮月焼模倣資料の製作にあたって、蓮月自身が関係していたことを示唆するものとして注目してよい。

(2) 蓮月焼模倣資料（図版13～17、図65～74）

盃（4～8） 4～8は陶器盃。4は型作りで、素焼の段階である。外面は型離れの状態を残し、内面は指押さえによる整形の跡が顕著である。高台は、付け高台である。5は見込みから外面にかけて歌と「良齊」の銘を刻書し、高台まわりを除いて施釉する。4と5は同じ型から作られた可能性もある。6・7は同形・同大の盃。見込みに呉須を用いて、歌を筆書きし、底裏をのぞいて施釉しているが、発色が悪く、歌の判読はできない。6は外面に「良齊戯造」の銘を呉須で筆書きしている。8は回転台で成形した土師器の盃。見込みに桜花、見込みから外面にかけて歌を墨書する。

椀（9～18） 9～18は陶器椀。型を用いて成形した後に、手づくねによって整形している。9は煎茶椀で高台まわりを除いて施釉するが、内面は透明、外面は灰緑色と釉を掛け分けている。「臥蟪」の銘を入れている。10・12はほぼ同形・同大の小椀。歌は刻書で記し、高台まわりを除いて施釉する。11は焼成が軟質で、高台まわりを除き、施釉する。

「臥蟪」の銘と歌を刻書するが、歌のほとんどは欠損している。13は高台まわりを除いて施釉し、歌と「良齊併戯製」の銘を刻書する。14は13と同形・同大の可能性があり、釉調も類似する。底部を欠損する。15は鉄錆を用いて、見込みと外面に梅花を描き、底裏に「厚子作」の銘を入れている。見込みから外面上半まで施釉する。16は畳付けを除いて施釉しており、胴部には「良齊戯造」、底裏には「良齊」の銘を刻書している。17と18は蓋付き椀の蓋（17）と身（18）である。蓋は呉須を用いて、外面から内面かけて歌を筆書きし、内面中央に五弁花を描く。身は見込みと外面に梅花を描いている。蓋はつまみ、身は高台部分を除いて施釉する。

筒状容器（19） 19は底径7cm前後、高さ8.1cmの筒状の容器。焼き締め陶器で、歌と銘（良齊）を刻書する。茶道具とすれば、茶巾筒であろうか。

花生（20） 20は焼き締め陶器の花生。釣り手と口縁部、体部のごく一部が欠損する。内面には輪積み痕が残し、外面は指押さえによって整形した痕跡を顕著に残している。「仙

蓮月焼を模倣した陶器について



図65 S K15出土遺物(1) (1～3 蓮月焼, 4～22 蓮月焼模倣陶器)

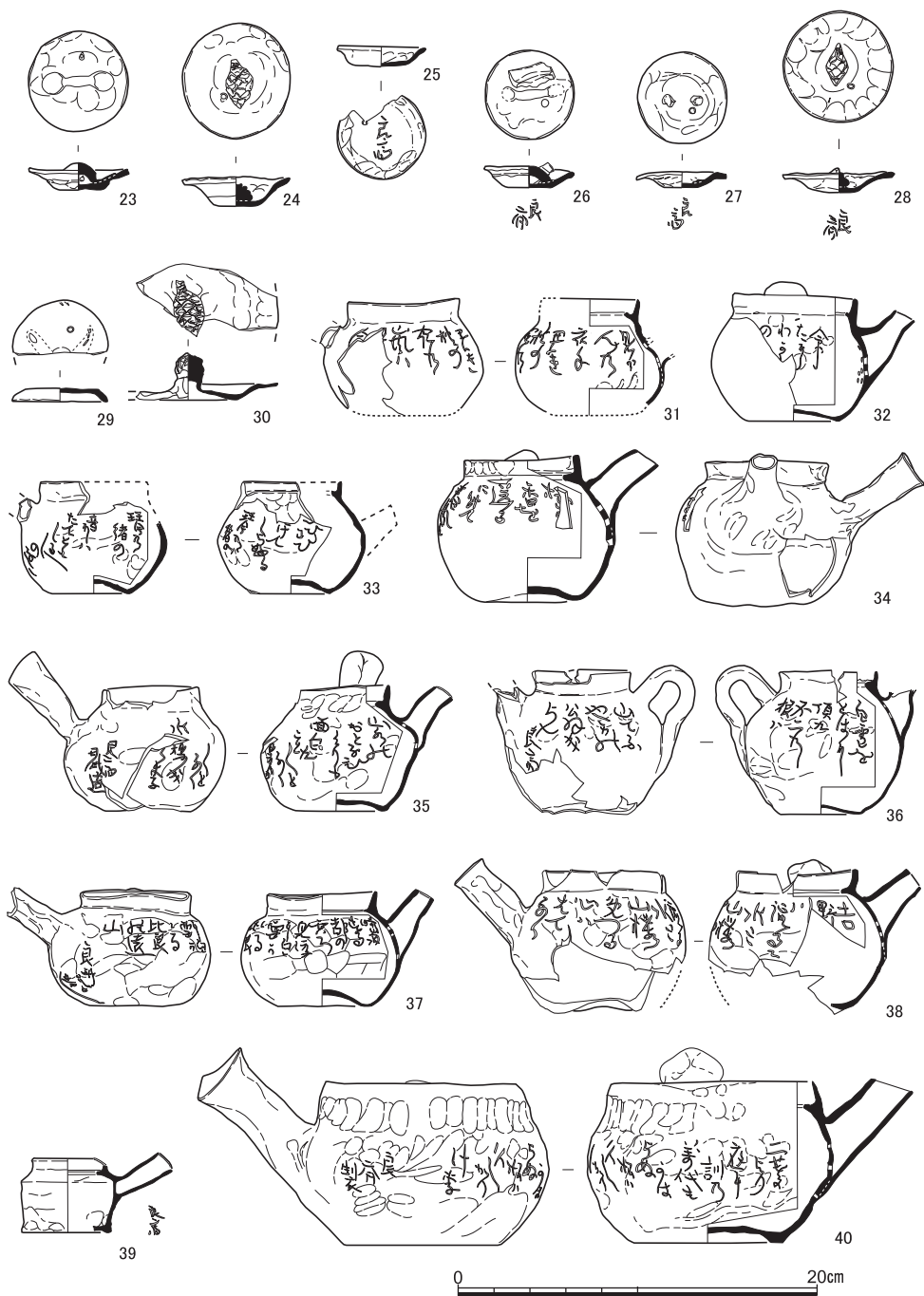


図66 S K15出土遺物(2) (23~40蓮月焼模倣陶器)

人の住家とぞ思ふ四つの時 花の匂はぬひまなかりせば」の歌を体部下半に刻書し、その裏側の体部に「銘 仙家」と刻書し、その下部に「安政乙卯初夏 洛東 錦織里士半隠 玉木良齊橋正貞 詠并戯造之」と刻書している。

香 炉 (21) 21は完形品で、口径8～8.5cm、高さ5.5cmの焼き締め陶器の香炉である。手づくねで整形し、口縁部は折り返し、玉縁状に作り出す。底部中央に、径3mmの小孔が焼成前にあけられている。3脚がつく。歌と「良齊戯作」の銘が体部に刻書される。

徳 利 (22) 22は手づくねで整形した焼き締め陶器の徳利。底部付近を焼き継ぎしている。白菊の歌とその絵、および「洛東 にしこりの里 良齊戯造 花押」の銘を刻書している。

急須・土瓶 (23～40) 23～29は陶器急須の蓋。いずれも手づくねで整形し、焼き締め焼成であるが、26～28は自然釉が掛かっている。25～28は裏面に「良齊」の銘を刻書している。26は焼成中に破損した急須身の口縁部小辺が溶着している。30は焼き締め焼成の土瓶蓋。つまみは、松笠を模している。

31～39は陶器急須の身。下半部は型を用いて成形し、上半部は輪積みしたのち、全体を手づくねで整形している。いずれも焼き締め焼成で、歌と銘が刻書される。31・33・35はほぼ同形・同大で、自然釉の掛かり方もよく似ている。同一時期に製作され、同じ窯で焼成されたのかもしれない。このうち、35は体部の破損箇所の断面に、自然釉が掛かっており失敗品とみられる。39は小型の急須で、把手下面に「良齊」と刻書する。急須の多くは、横手の把手がつくタイプであるが、36のみ注ぎ口と対向する位置に、環状の把手がつく後手のタイプである。

40は焼き締め陶器の土瓶の身。急須同様、下半部は型作りし、上半は輪積みのち指押さえて整形している。高台付近および底部内面は黒変しており、火にかけた痕跡とみられる。歌と「良齊」の銘を刻書している。

鉢 (41) 41は陶器角鉢で、口縁部の一辺7.5cm前後、高さ5cm前後。呉須を用いて四面に、歌と銘および歌にあわせた情景、見込みにも雁を筆書きし、高台まわりを除いて施釉している。良齊の製作した角鉢は、本調査区に隣接するAG20区の調査でも1点出土している〔千葉2000, II 415〕。

蓋 物 (42～49) 42～49は陶器蓋物。42～45は蓋で、同一の型を用いて作られている。上面に歌と銘を刻書し、焼き締め焼成している。46～49は身で、46～48は同一の型から作られており、そのサイズから42～45の蓋とセットになるとみられる。46・48は焼き締め焼

成であるが、47は内面に施釉している。49も型作りで三脚がつく。これを製作した型が110である。内面から体部上半まで施釉し、口縁部付近にはさらに白泥を施釉後に塗ったのちに焼成している。底面が黒変しており、火にかけた可能性がある。

鍋 (50～74) 50～64は陶器鍋の蓋。いずれも型による成形とみられる。50を除くと、大きさは口径13cm前後、16cm前後、18cm前後の3法量に分かれそうである。50は口径14.5cm前後で、他の蓋と比較して器高が高く、歌をもたないなど、他とはやや異なる作りである。55・56・63は素焼段階にとどまる。内面に施釉し、64のみ内面に加えて外面にも施釉している。54・59・64は口縁端部に白泥を塗っている。51を除いて通気孔はもたない。50は梅花と「遊月造」の銘を刻書している。51～64は歌と銘を刻書し、51は桜花、59・63は松葉も描いている。銘には「臥蟬」(51)、「良斉」(52・53・64)、「良斉作」(54)、「遊月

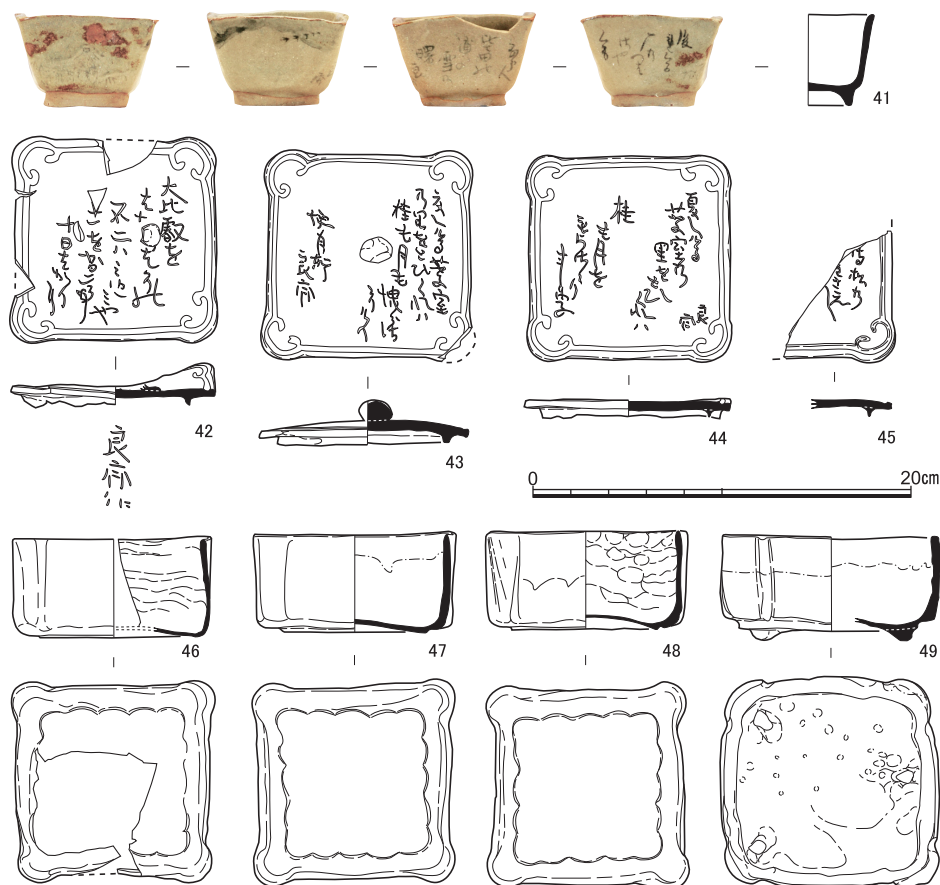


図67 S K15出土遺物(3) (41～49蓮月焼模倣陶器)

蓮月焼を模倣した陶器について

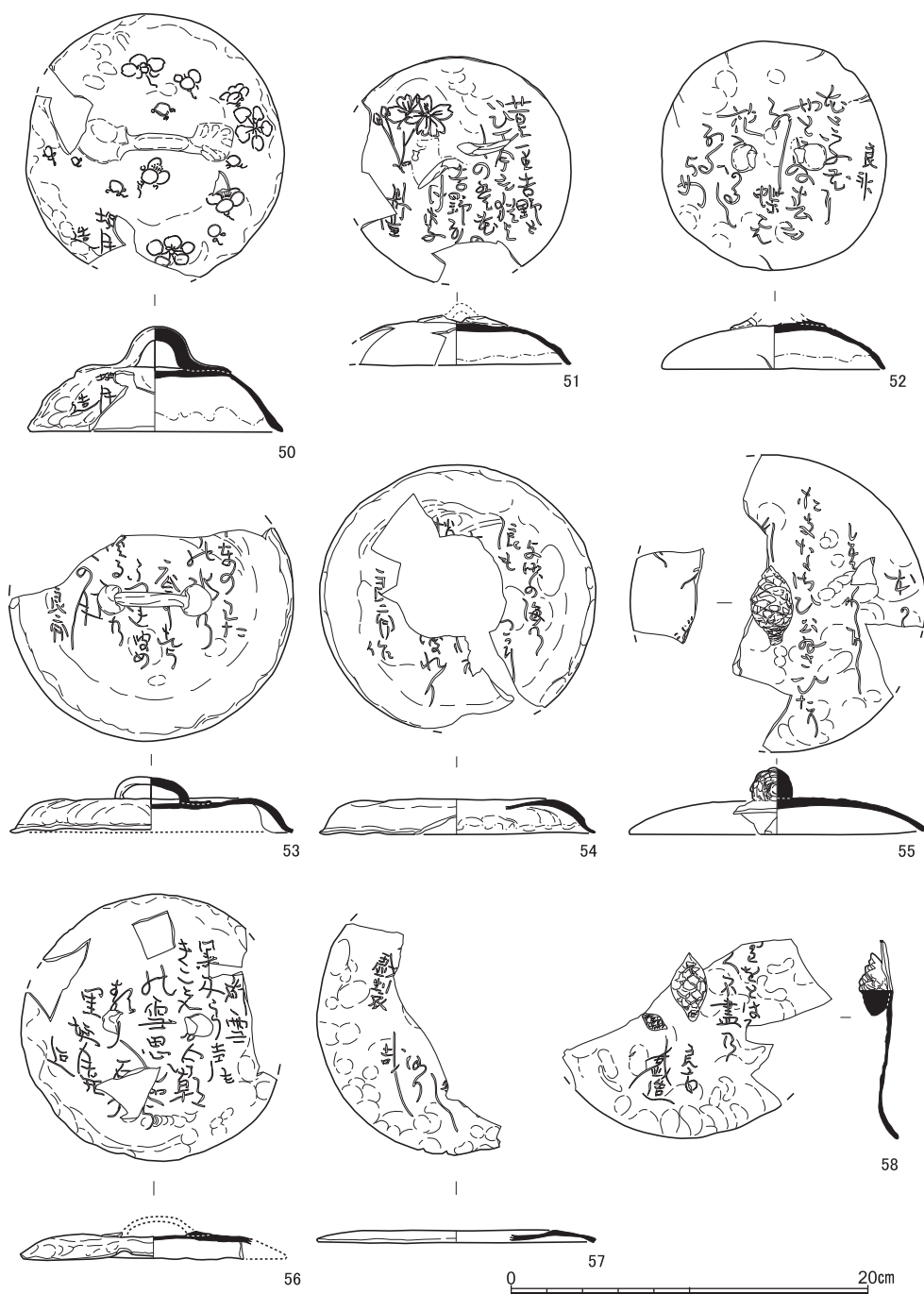


図68 S K15出土遺物(4) (50～58蓮月焼模倣陶器)

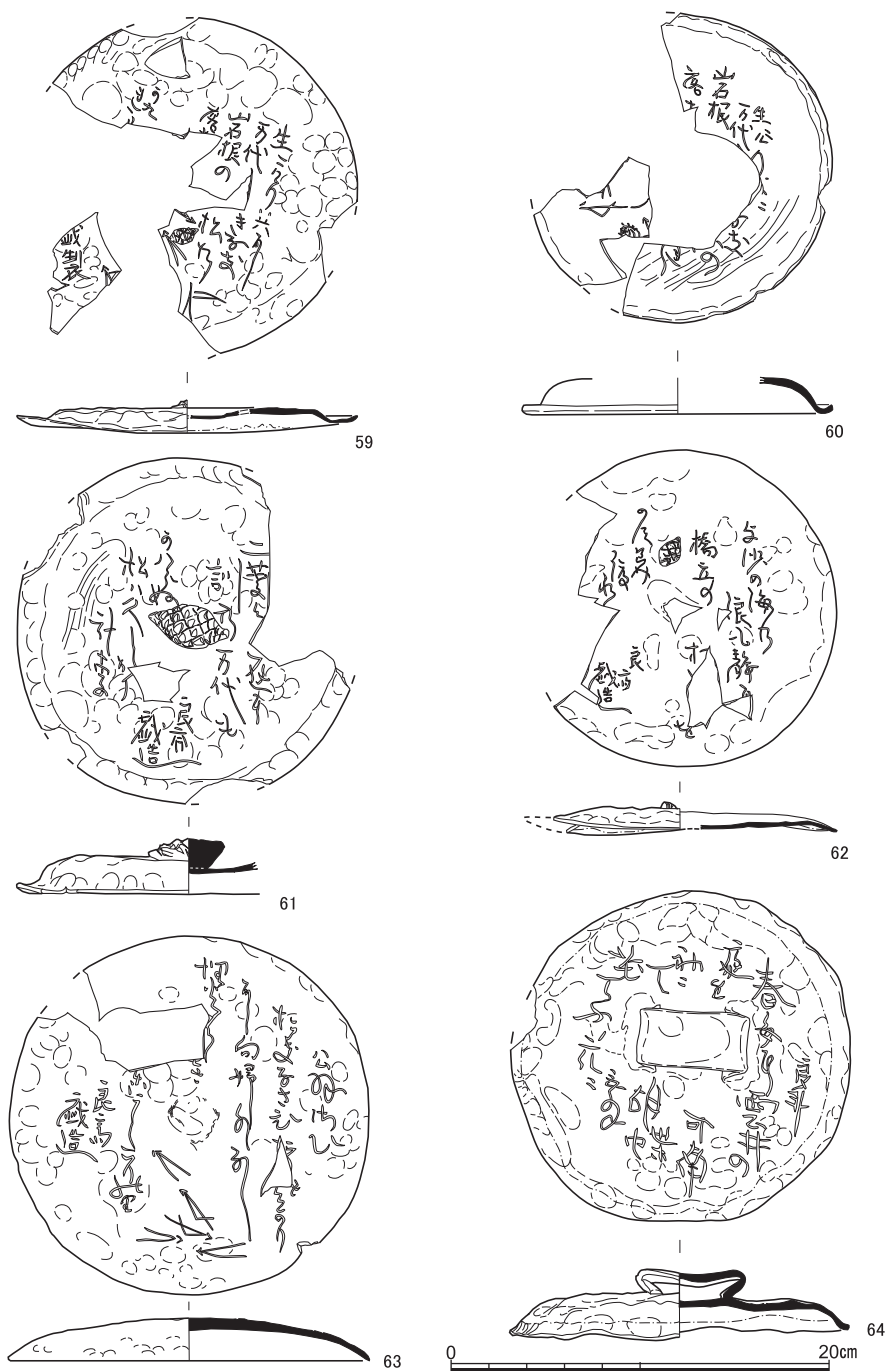


図69 S K15出土遺物(5) (59～64蓮月焼模倣陶器)

并造」(56), 「□□戯製」(57・59), 「良斉戯造」(58・61・63) が認められる。

65～74は, 陶器鍋の身。74は素焼きの段階にとどまる。施釉は基本的に内面のみであるが, 72のみ外面にも施釉している。69・72は施釉後, 口縁内面に白泥を塗った後, 焼成している。逆U字形(66・67・69・71・72)ないしは輪状(65・68・70)の把手を口縁部の対向する位置にもち, 65～72は, 把手から90度振った位置に注ぎ口がついている。大型の73・74は注ぎ口をもたない。73は把手の部分が2カ所とも欠損しており, 把手の形状は不

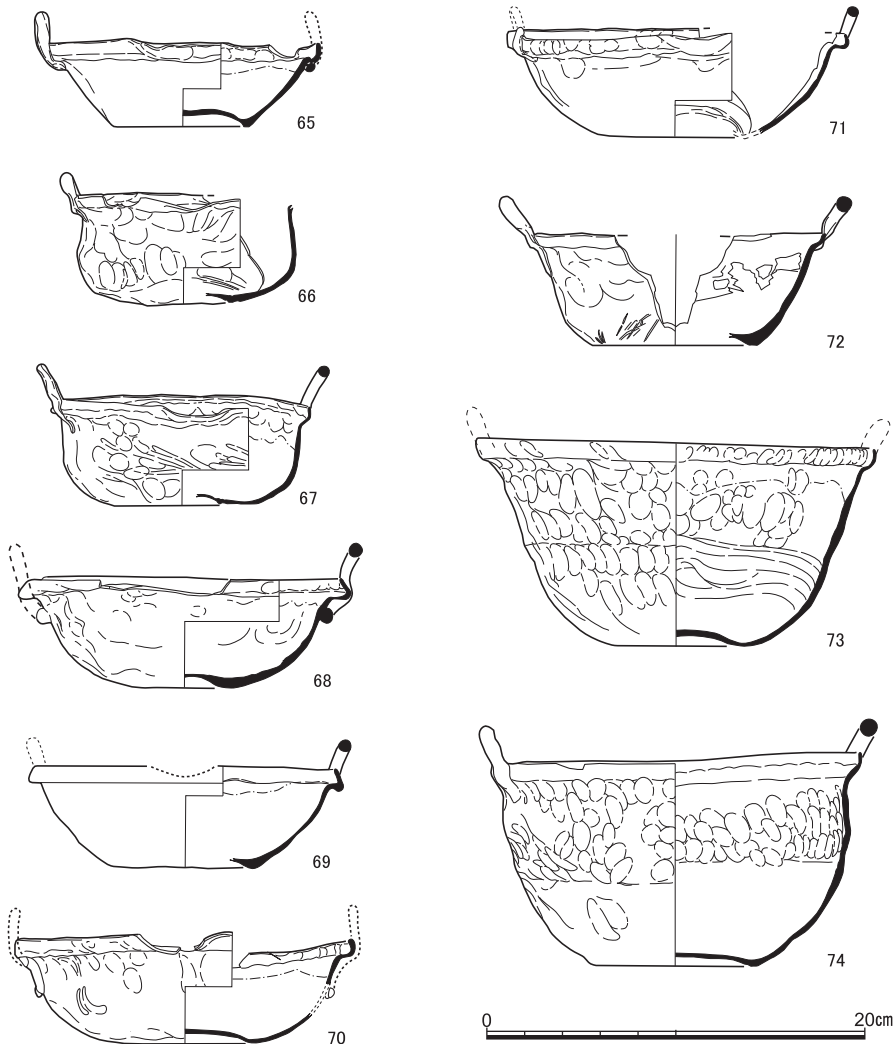


図70 S K15出土遺物(6) (65～74蓮月焼模倣陶器)

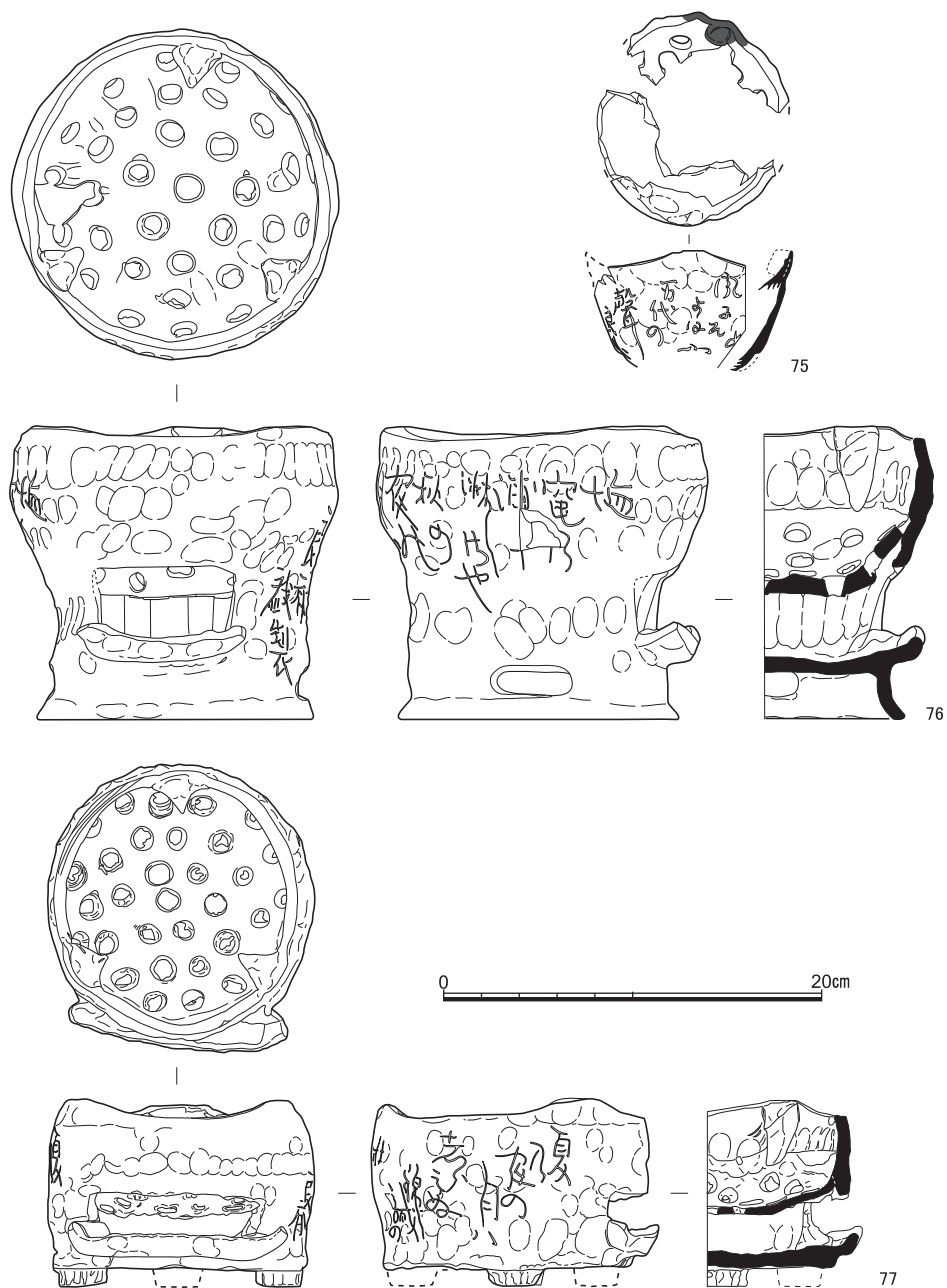


図71 S K15出土遺物(7) (75～77蓮月焼模倣陶器)

明である。口径が13cm前後の小型（65～67）、16cm前後の中型（68～72）、19～20cmの大型（73・74）の3法量に分かれ、蓋の規格と対応している。体部の成形は、いずれも型を用いる。外面は型離れの痕跡を残し、内面はへら削りで器壁を薄く仕上げている。大型の73・74は底部から体部下半までを型作りで成形した後、体部上半から口縁部までは輪積みで成形してから、内外面とも指押さえて整形している。65～67・69・71・72は、底部が黒変しており、火にかけた痕跡とみられる。とくに72は底部まわりが広く黒変している。

焜炉(涼炉) (75～82) 土師質の焼成で、円筒形の胴部をもち、内面中央付近に、別作りされた目皿がとりつく。口縁部内面に、土瓶や鍋などの加熱用具を受ける突起が3カ所つく。胴下部には、通風のための口があき、その下端はペロ口状の突起となり、外側へ張り出している。脚部は、3脚がつくタイプと2カ所の窓をもつ高台タイプがある。口径は12cm～18cm程度であるが、75は口径10cm程度の小型である。いずれも胴部外面に、歌と銘を刻書している。

土 型 (83～111) いずれも土師質素焼の外型である。83・109を除き、製品の外面に粘土塊を押し当て型どりし、内面は型離れのままとし、外面は指などでやへら削りによって整形して製作している。83は外面が型離れのまま、内面を撫で調整で仕上げており、内外の仕上げがそれ以外の土型とは逆転している。

83～93は椀の土型。86は外面全体に布目圧痕が観察できる。94・95は椀蓋、96は蓋物、97～101は急須・土瓶下半部の土型。102～104は鍋の身、105～108は鍋の蓋の土型。109は、高さ5cm前後で、長径15.5cm、短径14.5cmの楕円形を呈する。内外面とも指などによって整形している。型ではなく、素焼の段階にとどまる可能性もある。110は蓋物の身、111は蓋物の蓋の土型である。

土型のうち、約半数の15点に刻書をもつ。その刻まれている内容を整理してみると、「紀年+種類+署名」(89・91・104)、「紀年+署名」(88・92・98)、「種類+署名」(87・93・94・96・97・103)、「種類のみ」(95)、「署名のみ」(99)となり、種類に署名を記したものがもっとも多い。紀年を記したものも6点あり、うち5点は嘉永6年(1853)の年号とともに「八月」(88・98)、「九月」(89)、「中秋」(91・92)と刻書する。残りの1点(104)は、「丑冬」と記す。嘉永6年は丑年であるので、これも嘉永6年の冬に製作されたと考えてよく、刻書をもたない土型も含めて、嘉永6年の夏から秋、冬にかけて製作された可能性が高いと考えられる。

以上、蓮月焼模倣資料に関して実測図と写真を掲げて記載した。この資料のもつ特徴を

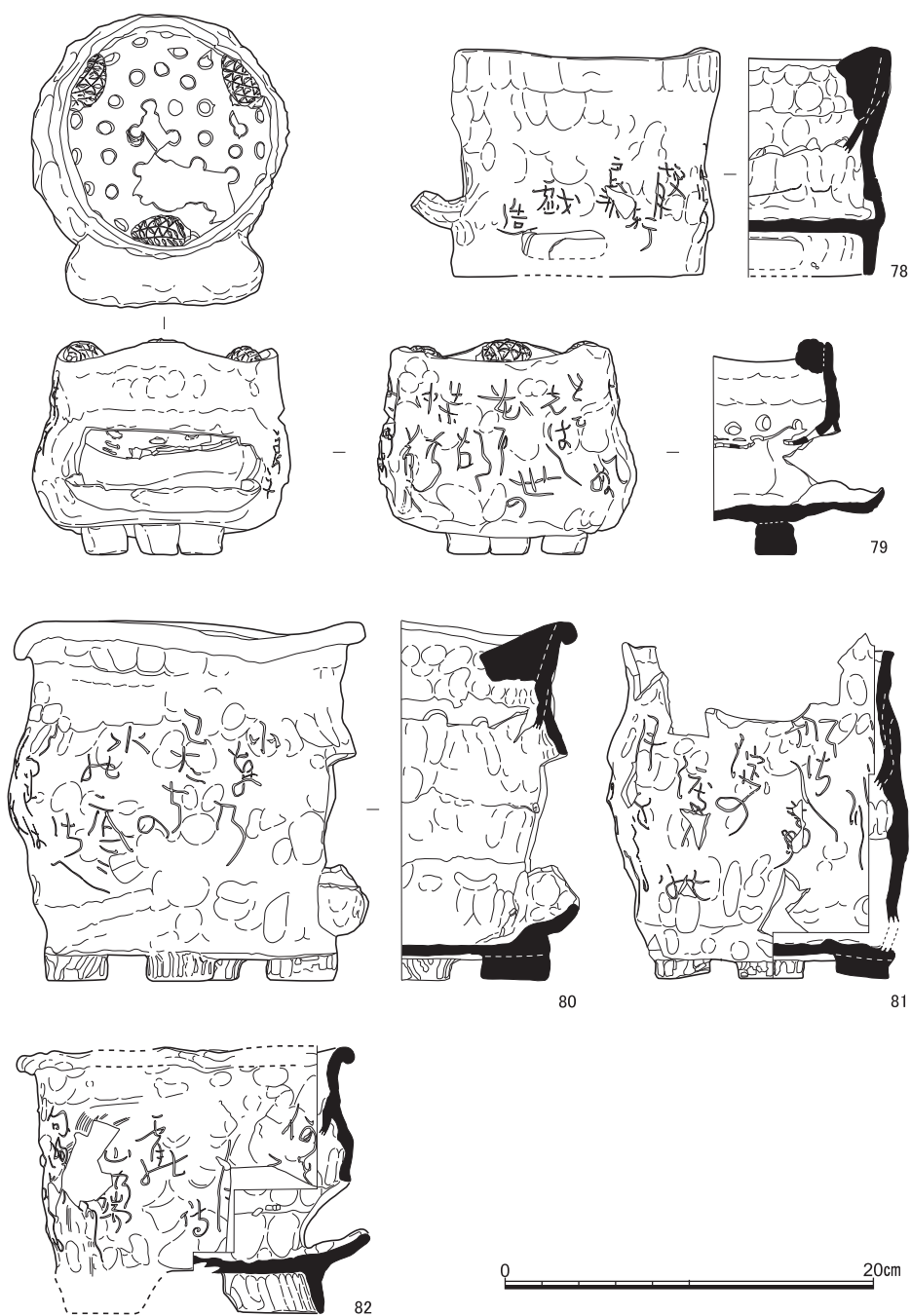


図72 S K15出土遺物(8) (78～82蓮月焼模倣陶器)

蓮月焼を模倣した陶器について



図73 S K15出土遺物(9) (83~99蓮月焼模倣陶器の土型)

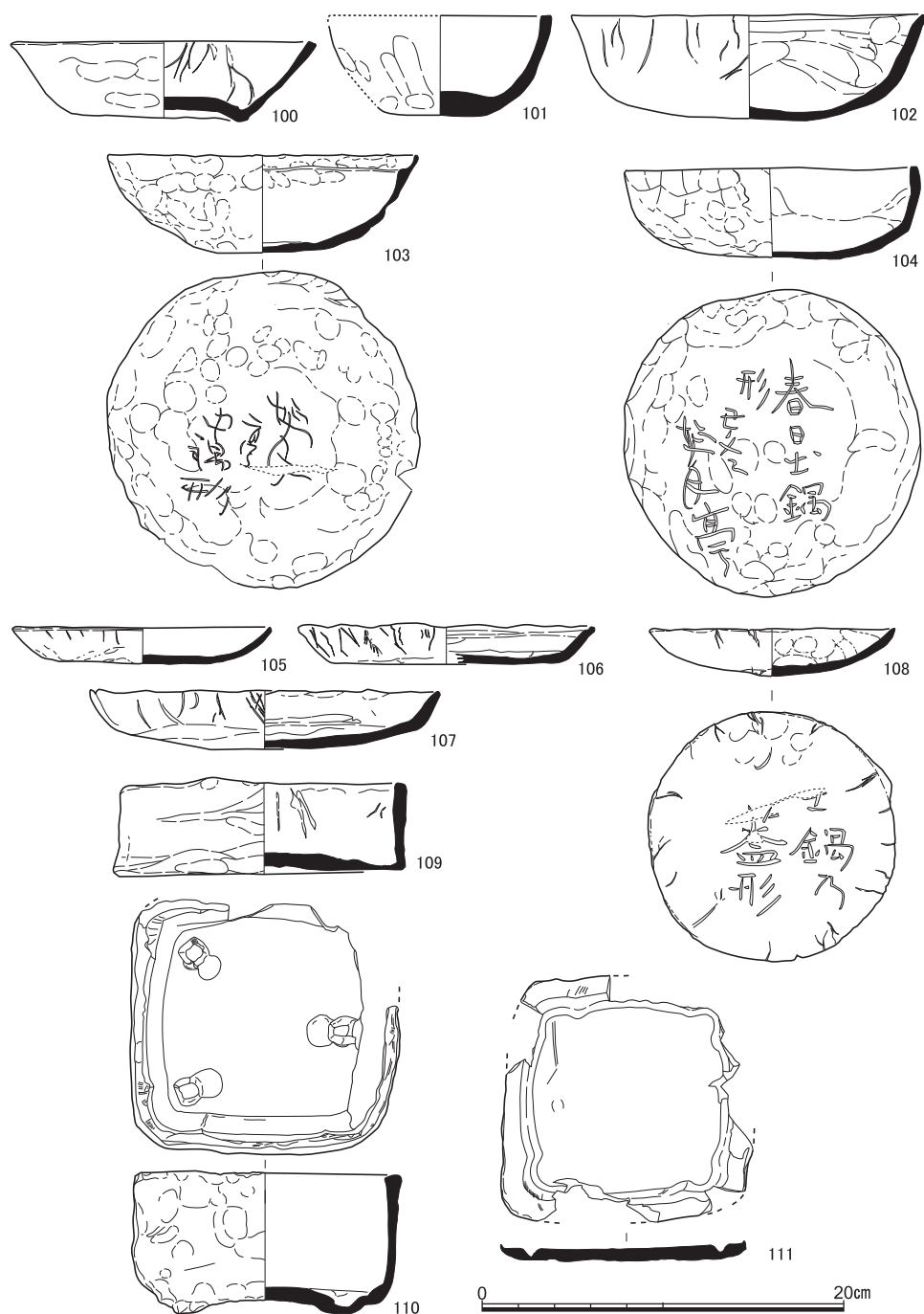


図74 S K15出土遺物(10) (100～111蓮月焼模倣陶器の土型)

再度まとめておこう。

〔出土地点〕 井戸SK15に、日常生活で利用された雑器類とともに出土している。この井戸を含む一辺10m四方の調査区の遺物包含層からは、蓮月焼模倣資料の小片がごく少量出土しているものの、この調査区外では、別の地点で1点出土が確認されているだけである⁽²⁾。蓮月焼模倣資料は出土地点がきわめて限定された資料と言える。

〔種類〕 盃・碗・花生・香炉・徳利・急須・土瓶・鉢・蓋物・鍋・焜炉・筒状容器（茶巾筒？）などからなる。京都大学病院構内で出土している蓮月焼と種類が重複するとともに、器形も酷似している。

〔成形・整形〕 轆轤水挽き技法が用いられた痕跡はない。土型が多数出土していることから、型を用いて大まかな成形をしたのち、手づくねで整形したものと考えられる。土型は一般的には量産をはかるための工夫であるが、良斉の場合は器形を簡単に成形するための方策であるとみてよい。蓮月焼も手づくねであり、また型を用いた製品があることから、傍らにいて、見よう見まねで製作したという印象が強い。

〔焼成〕 無釉焼き締め陶器、施釉陶器、土師質焼成品がある。素焼の段階にとどまる資料があることから、陶器の場合は、いったん素焼したのち、本焼きしている可能性が高い。本焼きは、栗田口あるいは五条坂などの登窯を借りなければ焼成することは困難である。蓮月が自身の製品を借窯をして焼成するときに、一緒に焼成して貰ったと理解するのが自然である。

〔銘〕 表4から明らかなように、良斉は多くの種類の作者名をいれている。蓮月焼が「蓮月」という作者名しか入れていないことと、対照的である⁽³⁾。

〔和歌〕 「詠并戯造之」・「并二造」・「并造」といった銘があること、蓮月の和歌に該当作品が認められないことから、良斉が自ら詠んだ和歌を記しているとみてよい。また、和歌の表現に、くぎ状の工具で彫り書きしたものと筆を用いて書いたものの2種類が認められるのも蓮月焼同様である。

〔製作年代〕 製作年代は、土型と製品に記された年号および没年から推定できる。土型は、嘉永6年（1853）、製品である花生は、安政乙卯（1855）の年号をもつ。後述するようにこれらの陶器を制作した良斉は、安政3年（1856）には死亡している。したがって、良斉が作陶した期間は、土型に刻書された嘉永6年（1853）から安政2年（1855）あるいは安政3年（1856）までの3～4年間という短い期間であったと考えられる。

井戸 S K15出土資料

表 4 蓮月焼・蓮月焼模倣陶器一覧

番号	種 類	焼成	和 歌	銘	備 考
1	椀	施釉陶器	閑なるねざめのとこに音づれて 心のちりをはらう山風	蓮月	蓮月焼そのもの。筆書き。
2	急須蓋	素焼		蓮月	蓮月焼そのもの。銘は裏面に刻書。素焼段階。3とセット。
3	急須	素焼	梅がかに枕もと(らで)更る夜の 空に鳴ゆく春(の)雁が(ね)		蓮月焼そのもの。刻書。素焼段階。
4	盃	素焼			素焼き段階の失敗品か。
5	盃	施釉陶器	月によし雪に又よし花に猶よしと 汲□□□新しけりかな	良齊	4と同型品の可能性もあり。
6	盃	施釉陶器	[筆書き, 発色悪く, 判読不能]	良齊戯造	呉須による筆書き。歌は見込み, 銘は体部外面。7と同型品。
7	盃	施釉陶器	[筆書き, 発色悪く, 判読不能]		呉須による筆書きで, 歌を見込みに記す。
8	盃	土師器	[判読不能]		見込みに, 墨書による歌と絵。良齊ではないかもしれない。
9	椀	施釉陶器	く□(欠損)き□かくはしきけり	臥蟪	刻書。
10	椀	施釉陶器	小車のわだちの水の底にたに(う)つれば(す)める(秋の夜の月)	良齊	刻書。53・80と同一の歌か。
11	椀	施釉陶器	一葉(欠損)	臥蟪	刻書。軟質。
12	椀	施釉陶器	□□は□葉柏のかげに(欠損)た(欠損)は(欠損)な		刻書。
13	椀	施釉陶器	みつゝをれば心もすめり落滝は 清水寺の秋のよの月	良齊併戯製	刻書
14	椀	施釉陶器	ちり(欠損)つもり(欠損)なれ(欠損)山に(欠損)くらし□(欠損)		刻書。
15	椀	施釉陶器		厚子作	呉須で梅花。底裏に呉須で銘。
16	椀	施釉陶器	白雲と天にみつるも萬代の声のひびきにしられけるかな	良齊戯製・良齊	胴下部と底裏の2か所に銘あり。
17	椀蓋	施釉陶器	鶯は都に□□□朝より□□梅は匂ひそめけり		18とセットになるか。歌および内面中央の梅花は呉須による筆書き。
18	椀	施釉陶器			呉須で梅花を外面および見込みに描く。
19	茶巾筒?	焼締陶器	□対する佐川男のなくは 牡鹿の夏もの□□を□にたてまし	良齊	筒状の容器。刻書。
20	花生	焼締陶器	仙人の住家とぞ思ふ四つの時花の匂はぬひまなかりせば	銘 仙家 安政乙卯初夏 洛東 錦織里士半隠 玉木良齊橋正貞詠并戯造之	口縁部につく釣りが剥落している。刻書。
21	香炉	焼締陶器	子を思ふ心のひまのしばしだに やまさる社は憐なりけり	良齊戯作	底部中央に焼成前穿孔あり。刻書。
22	德利	焼締陶器	白菊の花に本見る頬杖は 朽なん斧の柄にも似たりな	洛東にしごりの里 良齊戯造	底部付近に焼継あり。刻書。

蓮月焼を模倣した陶器について

表 4 つづき

23	急須蓋	焼締陶器			37の蓋か。
24	急須蓋	焼締陶器			32の蓋か。
25	急須蓋	焼締陶器		良斉	銘は裏面。把手は剥落。36の蓋か。刻書。
26	急須蓋	焼締陶器		良斉	銘は裏面。ほかの破片が表面に付着する。表面に自然釉。刻書。
27	急須蓋	焼締陶器		良斉	37の蓋か。表面に自然釉。
28	急須蓋	焼締陶器		良斉	銘は裏面。表面に自然釉。刻書。
29	急須蓋	焼締陶器			表面に把手の剥落痕跡。
30	土瓶蓋	焼締陶器			
31	急須	焼締陶器	見る人の衣も寒き秋の夜の嵐は(欠損)	良斉	表面に自然釉。刻書。
32	急須	焼締陶器	□□たにわか□の(欠損)	(良)斉	刻書。
33	急須	焼締陶器	思ひわび□けてしらぶる琴の緒の 音にはたてどもしる人のなき	良斉造	刻書。
34	急須	焼締陶器	梅(が)香を送るに□て春風を長閑きものと思初けり	良(斉)	刻書。
35	急須	焼締陶器	山水のおとなひよりも面白くことこととなく水□成けり	良斉戯造	刻書。破断面に自然釉のかかる失敗品。
36	急須	焼締陶器	白雲をとほに頂く不二の根ハ山てふやまの翁成らん	良斉	刻書。
37	急須	焼締陶器	時雨する都の雲の見渡に白雪かかる比良の遠山	良斉并二造	刻書。
38	急須	焼締陶器	吉野川流るる水と山桜 めづる心ははてなかりけり	(良)斉	刻書。
39	急須	焼締陶器		良斉	銘は把手の下面。小型。刻書。
40	土瓶	焼締陶器	二葉より庭に訓の萬代もかはらぬ松は久しかりけり	良斉製	刻書。底部に受熱痕あり。
41	角鉢	施釉陶器	後れ来る雁のつばさやくもならん 堅田の浦の雪の曙	良斉	呉須で、歌・銘・山水画を4面に筆書きする。
42	角蓋	焼締陶器	大比叡をは□□ばかりの不二はみゆ みやこを出て十日ばかりに	良斉作	型物。銘は裏面。把手剥落。刻書。43～45と同一の型を用いる。
43	角蓋	焼締陶器	夏しげる葉室の里をとひくれば 桂も月も浅らさざりけり	遊月軒 良斉	型物。刻書。44とほぼ同一の歌。
44	角蓋	焼締陶器	夏しげる葉室の里をとひくれば 桂も月をもらさざりけり	良斉	型物。つまみが剥落。刻書。
45	角蓋	焼締陶器	(欠損)□松の(欠損)□さえ(欠損)		型物。刻書。
46	角鉢	焼締陶器			型物。47・48と同一の型を用いる。
47	角鉢	焼締陶器			型物。
48	角鉢	焼締陶器			型物。
49	角鉢	施釉陶器			型物。3脚がつく。底面に受熱痕跡。
50	鍋蓋	施釉陶器		遊月造	内面に施釉。外面に梅花を刻書。

井戸 S K15出土資料

表 4 つづき

51	鍋蓋	施釉陶器	昔より吉野といひて今も猶 よしのは花の吉野な(り)けり	臥蟬	桜花を描く。内面に施釉。把 手一部剥落。刻書。
52	鍋蓋	施釉陶器	花といふ花にやどらぬ春もな し 蝶こそ花のあるじなるら め	良斉	内面に施釉。把手一部剥落。 刻書。
53	鍋蓋	施釉陶器	(小)車のわだ(ち)の水の底に すら うつればめずる(秋)の (よ)の月	良斉	内面に施釉。刻書。
54	鍋蓋	施釉陶器	与 沙の海の浪も(し)づかに (橋立の)松の梢(にかすみ)渡 れり	良斉作	内面に施釉。刻書。
55	鍋蓋	素焼	本か(欠損)□□わに松きなさ ひ 翁さひたり(欠損)		素焼段階。刻書。
56	鍋蓋	素焼	黒□□□声もきこえぬ今朝の 雪 思いやらる大石の里	都雪 遊月并造	素焼段階。把手剥落。刻書。
57	鍋蓋	焼締陶器	(欠損)しけり哉	(良斉)戯製	刻書。
58	鍋蓋	施釉陶器	(白)雪をとほに(いただ)く不 盡の (根ハ山てふやまの翁 成らん)	良斉戯造	刻書。
59	鍋蓋	施釉陶器	生にけり共に万代(欠損)きな き 岩根の松の落(欠損)かく れに	(良斉)戯製	内面に施釉。刻書。
60	鍋蓋	施釉陶器	生にけり共に万代□□□岩根 の松の□□□		内面, 縁を除いて施釉。刻書。
61	鍋蓋	素焼	二葉よ(り)庭に訓の萬代も かはらぬ松は久しかりけり	良斉戯造	素焼段階。刻書。
62	鍋蓋	施釉陶器	与 沙の海の浪も静に橋立の 松(のこずえ)をかすみ渡れり	良斉戯造	内面に施釉。大小2個つく把 手のうち, 大把手が剥落。刻 書。
63	鍋蓋	素焼	翁さひ松きなさひ(欠損)□か りに 向ふ水なし埋□(欠損)	(洛)東にしごりの里 良斉 戯造	素焼段階。把手剥落。刻書。
64	鍋蓋	施釉陶器	春毎に雲井の庭を初にて 花 てふ花に舞胡蝶かな	良斉	内外面とも施釉。刻書。
65	鍋	施釉陶器			内面施釉。
66	鍋	施釉陶器			内面施釉。
67	鍋	施釉陶器			内面施釉。
68	鍋	施釉陶器			内面施釉。
69	鍋	施釉陶器			内面施釉。
70	鍋	施釉陶器			内面施釉。
71	鍋	施釉陶器			内面施釉。
72	鍋	施釉陶器			内面施釉。
73	鍋	施釉陶器			内面施釉。
74	鍋	素焼			素焼段階。
75	焜炉	土師質	(欠損)ぬ 風こそ□□万代 の聲	良斉	小型の焜炉。刻書。
76	焜炉	土師質	塩竈の浦(欠損)淋しさや秋の 夜の月に一すじ立煙かな	遊月軒 良斉戯製	刻書。
77	焜炉	土師質	夏の夜の月はしらみぬ錦織の 杜の若葉の露のまにして	良斉	刻書。

蓮月焼を模倣した陶器について

表4 つづき

78	焜炉	土師質	秋のよの望中の□の月かげに 心をやれははてなかりけり	遊月軒 良斉戯造	刻書。
79	焜炉	土師質	末終にさめはてぬともしばし 世の 花に胡蝶の夢はみてまし	良斉	刻書。
80	焜炉	土師質	小車のわだちの水の底にさへ うつればすめる秋の夜の月	良斉戯造	刻書。
81	焜炉	土師質	真菅かる美豆の河瀬に船さし て 淀の渡りの月を見るかな	良斉	刻書。
82	焜炉	土師質	何と(欠損)□宵の山の端に 向ふころもほのめきにけり	良斉戯造	刻書。
83	土型	土師質			碗の土型か。
84	土型	土師質			碗の土型。
85	土型	土師質			碗の土型。
86	土型	土師質			碗の土型。
87	土型	土師質		筒茶碗形 遊月亭	碗の土型。
88	土型	土師質		嘉永六年丑八月十五日新調 遊月亭蔵 臥きん造	碗の土型。
89	土型	土師質		嘉永六年うし九月十七日造 之 小湯呑形 遊月亭 臥 蟻蔵	
90	土型	土師質			碗の土型。
91	土型	土師質		嘉永六のとしうし中秋しん 調 陶器形 遊月亭臥きん	
92	土型	土師質		嘉永第六癸丑中秋望 遊月 亭	盃の土型。
93	土型	土師質		大茶碗形 遊月亭	碗の土型。
94	土型	土師質		大茶碗の蓋形 遊月亭	碗蓋の土型。
95	土型	土師質		こぼれ梅のふた形	碗蓋の土型。
96	土型	土師質		山水蓋物のふた形 遊月亭	蓋物の蓋土型。
97	土型	土師質		急須形 遊月亭	急須下部の土型。
98	土型	土師質		嘉永六丑八月造 遊月亭	完形品。急須下部の土型か。
99	土型	土師質		遊月	土瓶下部の土型か。
100	土型	土師質			土瓶下部の土型か。
101	土型	土師質			急須下部の土型か。
102	土型	土師質			鍋下部の土型か。
103	土型	土師質		遊月亭 中鍋形	鍋の土型。
104	土型	土師質		春日土鍋形 丑冬 遊月亭	鍋の土型。
105	土型	土師質			鍋蓋の土型。
107	土型	土師質			鍋蓋の土型。
108	土型	土師質		土鍋の蓋形	鍋蓋の土型。
109	土型	土師質			
110	土型	土師質			角鉢の土型。
111	土型	土師質			角鉢蓋の土型。
備考 □：文字不詳, (欠損)：欠損にて判読不能, (文字)：欠損文字を他の資料から推定。					

(3) その他の資料 (図75～81)

上に紹介した資料とともに、土器・陶磁器や玩具、瓦類などが出土している。主な資料を図示して、簡単に解説しておきたい。明治時代に下ることが明らかな資料を含まない。上述したように、「安政乙卯」(1855年)の紀年銘資料があるので、それ以降で明治初年頃までには一括廃棄されたと限定できる幕末期の良好な一括資料である。

土師器皿 (112～148) 手づくねで見込みに圈線をもつもの(112～141), 手づくねで圈線をもたないもの(142～147), 回転台を用いて成形しているもの(148)に大別できる。見込みに圈線をもつ皿は、口径が12cm前後(112～137), 11cm前後(138・139), 口径9cm前後(140・141)の3つの法量がある。圈線をもたない皿は、口径が8cm前後(142・143), 5.5～6cm(144～147)の2つの法量に分かれる。

土師器椀 (149) 149は回転台を用いて成形した椀。口径8.8cm, 高さ3.4cm。

焼塩壺 (150) 150は型作りによる成形で、内面に布目圧痕を残す。

火消し壺 (151～156) いずれも土師質。151～155は蓋で、中央につまみがつく。156は身で、口縁部下が膨らんで、口縁部に向けて内湾する。口径19.6cm, 高さ17.6cm。

焜炉・焜炉付属品 (157～164) いずれも土師質。157は焜炉。下部に通風口をもち、3脚がつく。内部中央に目皿が取り付け、底面とのあいだに円柱形の脚が補強のため、ついている。目皿の上面と底部の外面には布目圧痕が残存している。158～164は、焜炉付属品の目皿。158～163は皿状、164は円盤状の形態である。

陶器碗 (165～169) 165～168は京・信楽系の丸碗。166～168は、上絵付けを施しているが、167・168は劣化により、文様がほとんど見えない。

陶器皿 (170) 170は陶器皿で、見込みに錆絵で文様を描いている。

陶器段重 (171・172) 171は口縁部内面に蓋受をもち、外面に文様を施している。

陶器片口 (173) 173は、口径9cmの小型の片口。大部外面下半を無釉とする。

陶器水注 (174) 174は、底裏に「米」の墨書がある。

陶器蓋 (175～178・181) 177は軟質施釉陶器。178は段重の蓋。

陶器灯火具 (179・180・182～191) 185・191以外は京・信楽系。180はカンテラで、179は180とセットになる蓋。182～185は灯明皿、186～190は灯明受皿。185は軟質施釉陶器で、見込みに圈線をもち、口縁部内面に3カ所、灯心を固定するための突起がつく。191は乗燭(タンコロ)で、鉄釉を施し、露胎の底部には糸切り痕が残る。

陶器急須 (192) 192は口径5cm, 高さ4.5cmの小型の焼き締め急須。体部下半と上半

蓮月焼を模倣した陶器について

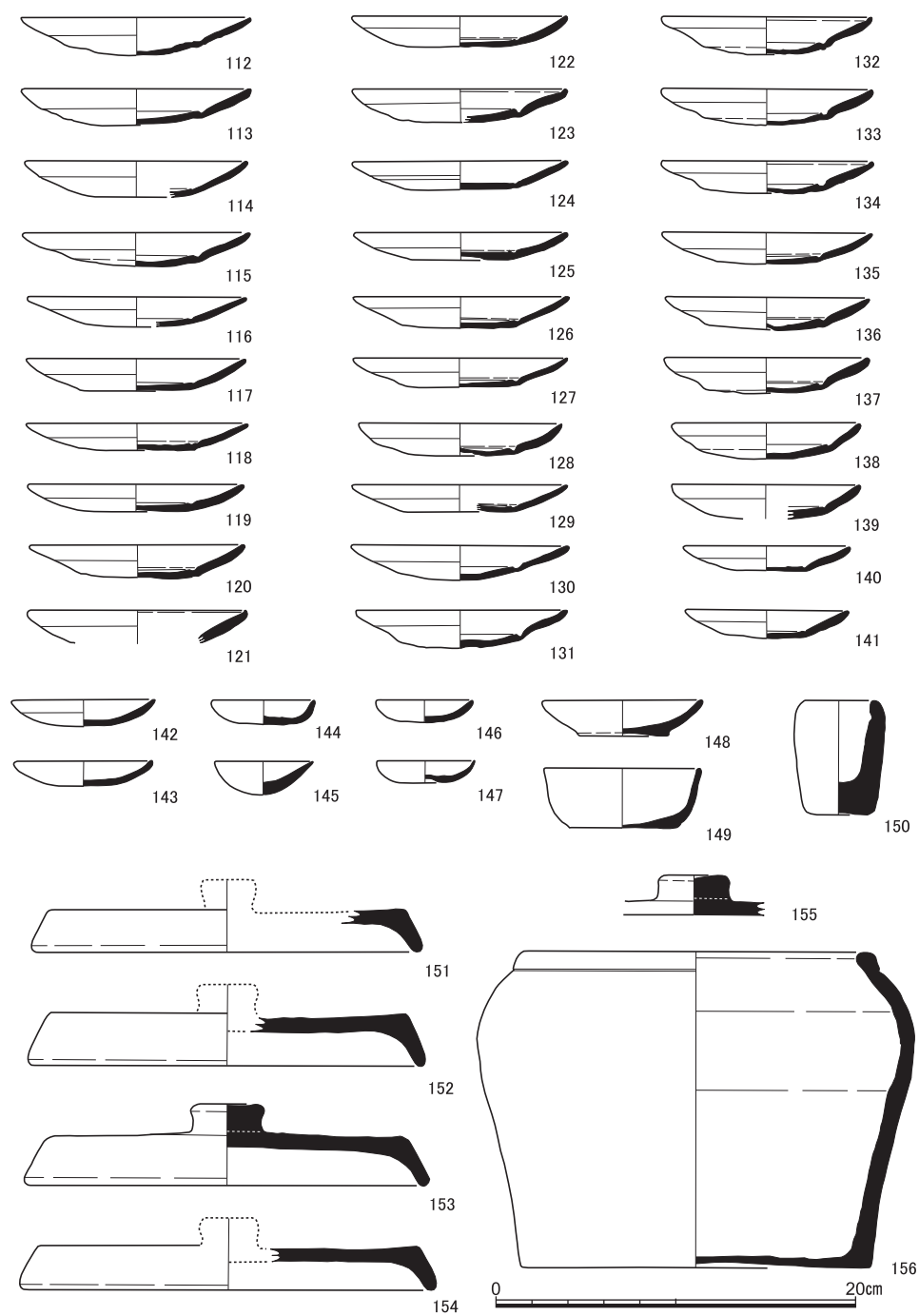


図75 S K 15出土遺物(11) (112~156土師器)

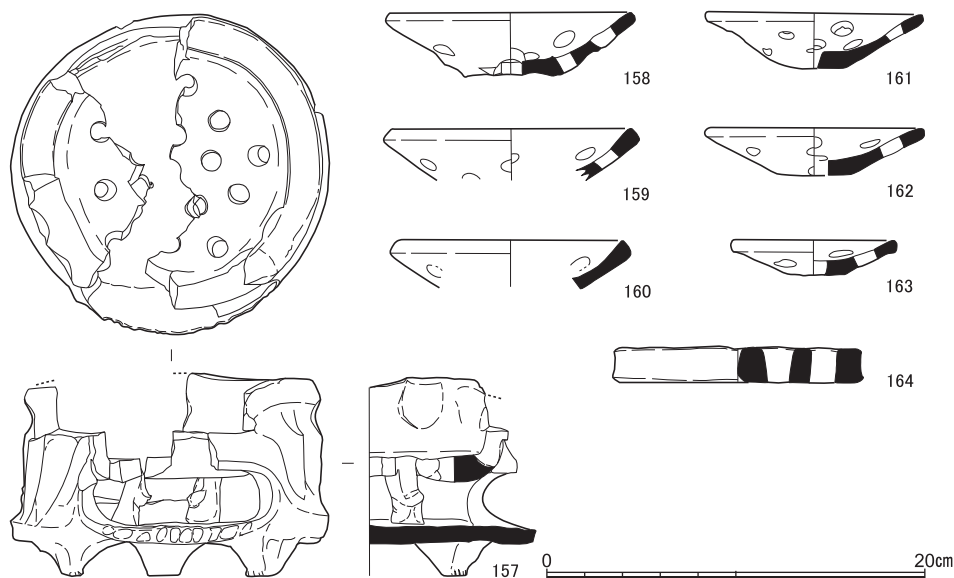


図76 S K15出土遺物(12) (157～164土師器)

を別作りにして接合した痕跡が内外面で観察できる。底部外面，体部の接合箇所の上下，体部上半，把手の外面，注ぎ口の外面に布目の痕跡を残している。

陶器土瓶 (193) 193は体部を白化粧したのち，山水楼閣文を描いている。

陶器徳利 (194・195) 194は焼き締め陶器で，体部の器壁の厚みは1mmに満たない薄作りである。底部外面と肩部の部分に布目痕を残しており，型作りかと思われる。把手の上面に「丸□」の刻印を押している。195は通い徳利。

陶器鍋 (196～206) 196～201は鍋蓋。196・197は白泥を用いたイッチン描きで文様を施文する。198・199のつまみは，狛犬をかたどっている。202～206は行平鍋。202～205は鉄釉をかけて，体上部に飛び鉤を施している。206は底部まわりを除いて灰釉をかけ，底部脇に3脚をつけている。

磁器盃・椀 (207～227) 207～211は見込みに文様をもつ盃。下絵染付の210以外は，上絵付けである。213はコンニャク判による文様を体部に施す。224～227は白磁。211・212・214は焼継している。216は「大明成化年製」の底裏銘をもつ。

磁器鉢 (228～230) 228は口径18cm，高さ8cm，体部を「壽」文で埋めている。239は口径12cm，高さ6.5cm，体部に花文を施す。228・229は，破損箇所を焼継している。230は上面観が16角形になる鉢。底部は蛇の目釉はぎしている。

蓮月焼を模倣した陶器について



図77 S K 15出土遺物(13) (165~195陶器)



図78 S K15出土遺物(14) (196～206陶器)

磁器皿 (231～235) いずれも染付。235は口縁部に切り込みを入れて、輪花とする。

磁器蓋 (236～241) 236・237・240・241は染付、238は青磁染付、239は色絵染付。

236・240は焼継している。

磁器仏飴具 (242) 242は染付の神酒徳利で、蛸唐草文を施している。

磁器蓋物 (243) 243は口径13cm、高さ10cm、口縁部を釉はぎする。

磁器レンゲ (244) 244は染付の型作りである。底面を除いて施釉している。

蓮月焼を模倣した陶器について

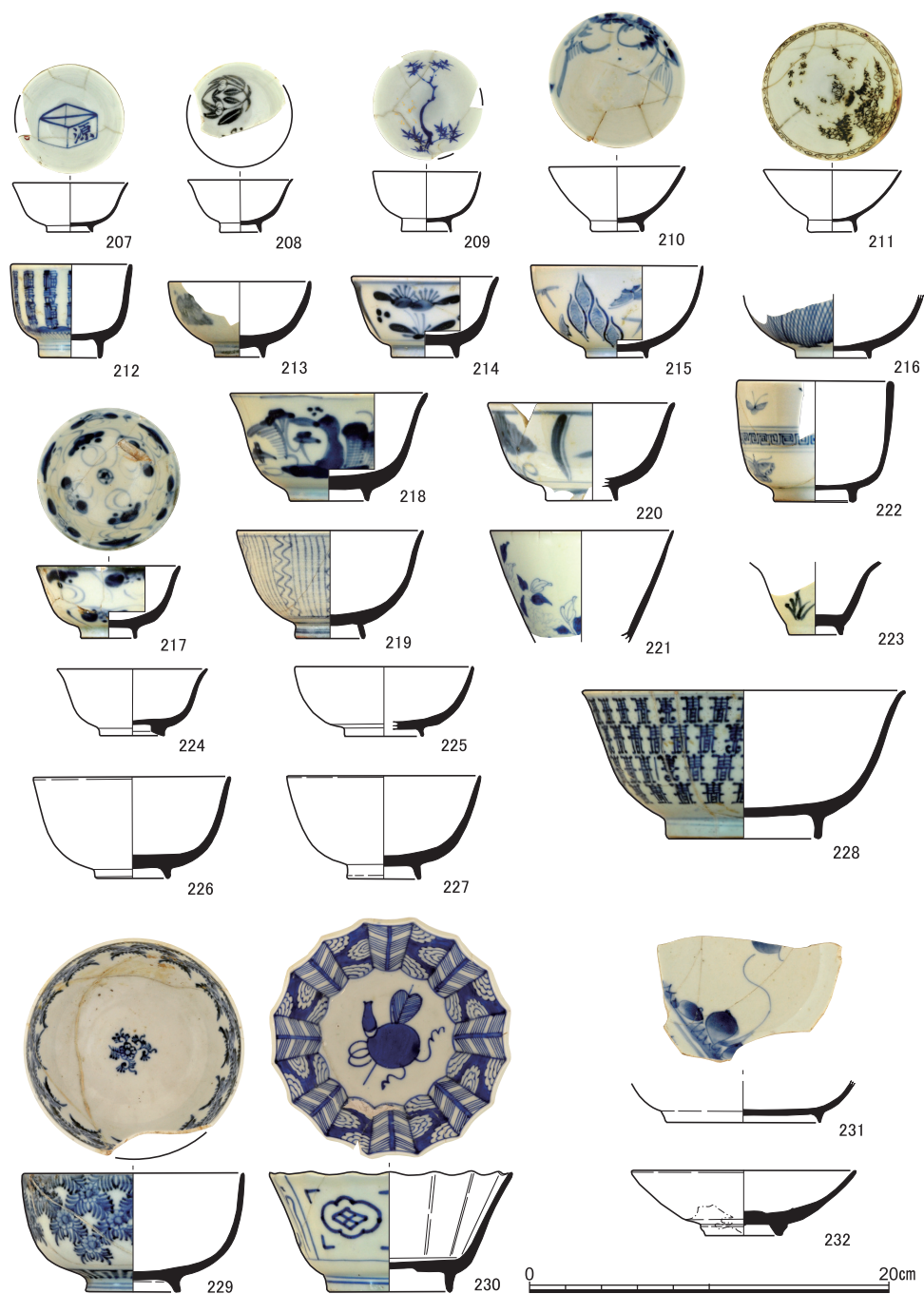


図79 S K15出土遺物(15) (207～232磁器)



図80 S K15出土遺物(16) (233～245磁器)

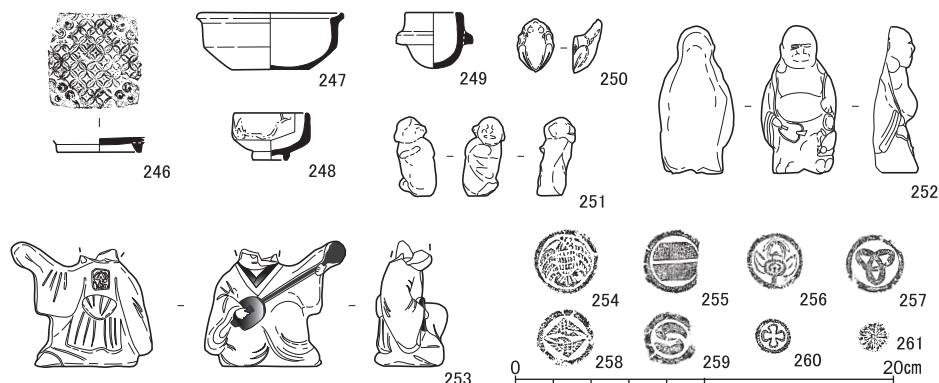


図81 S K15出土遺物(17) (246～248・259軟質施釉陶器, 249土師器, 251～253伏見人形, 254～261泥面子)

磁器急須 (245) 245は染付の急須。底部に火にかけた痕跡が認められる。

軟質施釉陶器・ミニチュア (246～250) 246～248・250は軟質施釉陶器。246は底部のみ残存しており、見込み中央に七宝つなぎ文、四隅に花文を印刻で施している。247はミニチュアの鍋、248はミニチュアの椀。249はミニチュアの土師質羽釜。外面に離れ砂が付着する。250はミニチュアの蛙。緑釉を施している。

伏見人形 (251～253) 251は中実、手づくね成形。252・253は型作りで、正面側と裏面側を別々に作り、貼り合わせて成形している。

泥面子 (254～261) 円盤形で、254～259は径3～3.5cm、260は径2cm、261は径1cm。

4 玉木良斉について

蓮月焼模倣陶器を製作した良斉とは、どのような人物だったのか。その重要な手がかりとなるのが、花生に記された文言である(図版13, 図65-20)。「銘 仙家」と花生の愛称を記し、「仙人の住家とぞ思ふ四つの時 花の匂はぬひまなかりせば」との歌を刻書し、さらに「安政乙卯初夏 洛東 錦織里士 半隠 玉木良斉 橘正貞 詠并戯造之」と由緒を入れている。安政乙卯は安政2(1855)年。「洛東錦織」は聖護院村の別称。「半隠」は号なのか、あるいは隠居に近い状況を記したものか、よくわからないが、洛東の聖護院村に居住した玉木良斉(橘正貞)なる人物が安政2年に、趣味として自詠の歌を刻んだ花生を製作したことがこの文面から読み取れる。

管見では、玉木良斉(橘正貞)という人物を文献上で見つけることはできていないが、『平安人物志』の天明2(1782)年版には玉木慎齊(橘維一)、慶応3(1867)年版には

玉木東民（橘直）という玉木姓と橘姓をもち聖護院村に居住する人物が記されている。また、『京都名家墳墓録』には、玉木葦齊（元文元（1736）年没）を筆頭に、玉木要人（寛政7（1795）年没）、玉木慎齊（文化11（1814）年没）、玉木和泉正弘（安政2（1855）年没）を掲げ、この一族の墓地が頂妙寺境内にあると指摘する〔寺田1922（1976）、pp.383-4〕。この墓地を調べたところ、これらの人物の墓石が現存するとともに、玉木良斉（正貞）の墓石も存在し、安政3（1856）年4月に没していることがわかった（図82）。すなわち、ここで問題にしている玉木良斉なる人物は聖護院村に居住し頂妙寺に墓地をもつ玉木一族の一人であることが判明したのである。

それでは、玉木姓と橘姓をもち聖護院村に居住した玉木氏とは、どのような一族であったのであろうか。頂妙寺の玉木氏一族の墓のなかでもっとも古い墓は、江戸時代中期の玉木正英（葦齊：1670-1736）のものである。玉木正英は京都梅宮神社の神職で、薄田以貞より梅宮神社の祠官橘家に伝わった神道行事を伝授され、ついで山崎闇斎の垂加神道説を正親町公通より学んでこれを勘案して、橘家神道として大成させた神道家として知られている〔松本1996・1997〕。尊皇を旨とする橘家神道は、幕末の尊皇攘夷思想に影響を及ぼしたとされている。

ついで、玉木正英の子として文献にみえる人物が玉木慎齊（橘維一：1734-1814）である。先述した、平安人物志（天明2年版）には、「学者」として分類収載されており、『平安人物志短冊集影』では、慎齊が詠んだ歌を掲げるとともに、医家であり、聖護院村の医家玉木正英の子であると解説している〔小笹編著1973、p.9〕。また、正英を曾祖父にもつ



図82 頂妙寺墓地に所在する玉木氏の墓石（1：玉木葦齊，2：玉木正弘，3：玉木正貞）

人物として、玉木左近（正弘）（－1855）が漢蘭折衷の医家として、山本善太編著『海内医林伝』（文政11（1828）年）に、「聖護院 漢蘭 秋吉氏高第弟子 玉木左近」と記され、「名正弘字興民曾祖正英以来世奉垂加神道」と注されている〔京都府医師会医学史編纂室編1980, p.500〕。さらに、平安人物志（慶応3年版）にみえる玉木東民（橘直）も医家として分類収載されている。正英は橘家神道を体系だてた神道家として一派をなしたが、「京都医師ノ部也」と注する文献も存在するようで〔松本1996, p.47〕、子孫は代々、医業を家業として継いだとみることができよう。ただし、正弘（左近）の注書きには「正英以来世奉垂加神道」とあり、幕末まで橘姓をも継承していることを鑑みれば、玉木氏の一族が橘家神道の継承者としての自覚も合わせもっていた可能性を捨てきれない。

良斉が家業としての医家を継いでいたかどうか、あるいは神道家であったのかは、まったく不明である。良斉が没する安政3年の前年に亡くなっている漢蘭折衷の医家である正弘との関係も、没年の近さから、兄弟あるいは従兄弟などが考えられるものの、想像の域をでない。しかし、30首以上の歌を自作のやきものに記していることや本格的なやきもの作りに挑戦していることから、医業を生業とした一族の中にあって、晩年（紀年銘資料から見て、作陶期間は嘉永6年～安政2年ないし3年の3～4年間）には、悠々自適な生活をおくることができた教養ある文化人として、良斉の姿を描くことができる。

良斉銘のやきものが多量に出土した地点は、富岡鉄斎が描いた「聖護院村略図」〔京都市編1985, 口絵〕に蓮月宅として描かれた地点とはほぼ重なっている。この略図には、安政～文久年間に聖護院村に住んだ多くの文化人の居宅も示されているが、玉木氏に関係すると推定できる居宅は描かれていない。また、蓮月の書簡など同時代史料の中にも、玉木良斉はもとより玉木氏一族に関係する記述は見られないようである。したがって、良斉と蓮月がどのような関係を結んでいたのかについても後述するような推測を除けば、不明とせざるを得ない。ただし、出土地点と蓮月居宅推定地点がほぼ重なり合ってくることから、SK15は、良斉の居宅に附属する井戸であり、その隣近所に蓮月の居宅が存在していた可能性は考えてよいだろう。

居宅が隣近所という地の利以外で、蓮月と良斉を結びつける手がかりとして六人部是香の存在を考えてみたい。蓮月は、『平安人物志』天保9（1838）年版に女流（歌・画）、弘化4（1847）年刊行の『皇都書画人名録』に書・画・和歌と記されるように、陶芸家としてよりも最初は、歌人や画家・書家として世に知られるようになっていたが、嘉永2（1849）年には、六人部是香（1798－1863）に入門し歌を学んでいる〔徳田ほか1982〕。六人部是

おわりに

香は国学者であり、また向日神社の神官を勤めた人物である〔山中2012〕。平田篤胤（1776－1843）に入門し、その神道思想を継承した。また歌学に関しても造詣が深かった。晩年には、蓮月の生地である京都三本木に神習舎を開塾している。橘家神道を継いでいたとも推定できる玉木氏一族とは神道を介して交流があったのではなかろうか。

このように考えることが可能なら、歌を仲立ちとして蓮月と是香、神道を仲立ちとして良斉と是香の結びつきが考えられる。あるいは、歌を詠む良斉自身も是香に入門して歌を学んでいた可能性も考えられる。こうした是香をあいだにはさんだ交わりの中で、良斉と蓮月は出会い、親交を深めていったのかもしれない。

そして、良斉は、隣近所に引っ越してきた蓮月の作陶を間近に見ることで興味を抱き、やがて自らも蓮月焼を模倣したやきものを作るようになったのではないか。良斉のやきものが多量に出土した井戸SK15に、蓮月焼そのものの未製品（失敗品）が共伴することは、良斉と蓮月との親しい関係が推定できる。陶土の調達・作陶から焼成（借り窯）にいたる一連の工程のすべてにおいて、蓮月の助力や手ほどきがあったのであろう。そして、嘉永6年の紀年銘をもつ型が存在することから、二人の親交はそれ以前からあったことを示している。そのきっかけは、第一に、嘉永2（1849）年に蓮月が六人部是香に入門したことにより、是香を仲介として良斉と蓮月が親しく交わるようになったことであり、第二に、蓮月が聖護院村の良斉の居宅の近所に引越してきたことではないかと理解しておく。

5 おわりに

蓮月焼に酷似しつつ、玉木良斉（橘正貞）なる人物によって製作されたやきものを紹介しつつ、その特徴や製作の背景などに関して考察をめぐらせてきた。やきものに記された玉木良斉を同時代の文献資料の中に見出すことはできなかったが、自らの名前と居住地・年号を刻んだやきものが手がかりにすることによって、聖護院村に居住した玉木氏一族に連なる人物として、その姿を垣間見ることができた。良斉銘をもつ蓮月焼模倣陶器は、趣味的なものとして製作され、玉木良斉本人によって利用されたと考えられる、きわめて特殊な考古資料であるといつてよいが、幕末期における無名文化人の趣味の世界や教養の持ち方を考えるうえでは、示唆的な資料になろう。

〔注〕

- (1) 蓮月焼の範疇には、①蓮月本人の手になるもの、②二代蓮月を名乗る黒田光良の手になるもの、③吉田安、垂水文子といった蓮月の製陶の手助けをした人物の手になるもの、④清水六兵衛、錦光山宗兵衛といった京焼陶工との合作品以外に、蓮月自身が手紙の中で記しているような⑤贋作なども含めることができる〔千葉2006〕。真偽の程は定かではないが、記すべき歌に困った贋作者に新たな歌を蓮月が与えたといったエピソードも伝わっている〔村上編1927(1980)〕。本稿で扱う資料は、①～④の範疇には含まれず、また⑤の範疇に含まれるものでもない。玉木良斉という自分の銘を入れ、自詠の歌で飾っているからである。その上で、手づくねや型を用いて成形し、歌を記すという蓮月焼の特徴を踏襲していることから、蓮月焼を模倣したやきものであることは明らかである。本稿では、これら玉木良斉なる人物によって製作されたやきをも蓮月焼模倣陶器と呼んでおく。
- (2) S K15から北へ100mほど離れたA G20区の調査で、1点出土している〔千葉2000, II 415〕。この文献では、蓮月に該当する和歌が検索できなかったことから、蓮月焼でない可能性を指摘しておいたが、「良斉」銘をもつことと、本稿で紹介する資料がまとまって出土したことで、蓮月ではなく玉木良斉が製作したことが判明した。この経緯については、千葉2006文献の注12に記した。
- (3) 蓮月は文久3(1863)年に西賀茂へ移るが〔徳田ほか1982〕、この頃から、「蓮月 ○○歳」と署名に年齢を記入するようになる。ただし、署名は一貫して「蓮月」である。

〔引用・参考文献〕

- 京都市編 1985年『史料 京都の歴史』第8巻, 平凡社
- 京都府医師会医学史編纂室編 1980年『京都の医学史 資料編』京都府医師会
- 小笹喜三編 1973年『平安人物志短冊集影』思文閣
- 千葉 豊 2000年「京都大学病院構内A G20・A F20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 千葉 豊 2006年「考古資料としての蓮月焼」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 千葉豊・富井眞・清水芳裕・リチャード＝ウィルソン 2003年「京都大学病院構内出土の乾山焼関連資料」『日本考古学協会第69回総会 研究発表要旨』
- 千葉豊・富井眞・井上智弘 2007年「京都大学病院構内A E19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 寺田貞次 1922年『京都名家墳墓録』山本文華堂(1976年復刻版(村田書店)に拠る)
- 徳田光圓・村井康彦・篠田桃紅・元津真知・稲垣行一郎 1982年『大田垣蓮月』講談社
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年「京都大学病院構内A F19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 松本 丘 1996年「玉木葦齊序論—その人物と思想の根幹—」『國學院雑誌』97巻2号
- 松本 丘 1997年「玉木葦齊と橘家神道の発展」『神道史研究』45巻2号
- 村上素道編 1927年『蓮月尼全集』蓮月尼全集頒布会(思文閣, 1980年, 増補復刻版による)
- 山中芳和 2012年「六人部是香の国学学びにおける篤胤学の受容」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第151号
- 弄翰子編 1782年『平安人物志』天明2年版
- 弄翰子編 1838年『平安人物志』天保9年版
- 弄翰子編 1850年『平安人物志』嘉永3年版

土佐藩白川邸・尾張藩吉田邸にまつわる覚書

笹川尚紀

1 はじめに

江戸時代の最末から明治時代のはじめにかけて、京都大学の北部構内には土佐藩の白川邸が、本部構内には尾張藩の吉田邸が所在していた。もう少し具体的に述べると、百萬遍知恩寺の東側に前者が、その南側に後者が位置していたことになる。

本稿は、主として文献史料を検討の素材とすることで、それら藩邸の移りかわりにつき克明に跡づけていくことをねらいとする。

ところで、筆者は、平成28年2月15日から4月15日にかけて、京都大学の病院東構内の436地点における発掘調査⁽¹⁾を担当した。それを終えたのちの遺物の整理作業において、近代の土坑から、「住瓦庄」という刻印銘をもつ瓦が出土したのを知った。くわえて、そのような刻印瓦が北部構内の208地点、よりくわしくいうと、土佐藩の白川邸の南をかざる空堀の埋土からとりあげられているのがわかった。

それら出来事をきっかけにして、白川邸にかんし少しずつ調べていたところ、京都大学総合博物館においてもよおされる平成28年度特別展「文化財発掘Ⅲ—激動の幕末と京大キャンパス—」に関与することになり、ひっきょう、深く分析をおこなっていく必要が生じるにいたった。

いっぽう、尾張藩の吉田邸については、本部構内の403地点における発掘調査の成果をまとめた小文のなかに、文献史料をもっぱら用いた考察の梗概をさし入れた⁽²⁾。しかしながら、上記の白川邸にまつわる吟味の過程で、みおとしている史料および解釈がまちがっている箇所が存在に気づき、ふたたび掘りさげていくことが不可欠であると痛感するにおよんだ。

拙稿は、以上のような経緯によって執筆されたものである。まったくの門外漢であるがゆえに、論文の形で発表することにたいしては、相当なためらいがあった。されども、その時期の在京藩邸にかんする文献史学・考古学双方の研究の進展に、ほんのわずかでも役に立つのではないかと思い、あえてそうするよう決心するにいたった。もちろん、諸賢にご教示・ご批判をいただくことで、修正を随時くわえていく所存である。

2 土佐藩白川邸の沿革

(1) 設 置

まずは、白川村に土佐藩の屋敷がもうけられるにおよんだ時期について、検討をこころみる。

つとに、平尾道雄氏は、『中岡慎太郎 陸援隊始末記』において、「慶応二年の冬、福岡、小笠原の周旋で土佐藩兵上京のとき駐屯させるために購入した新邸」であり、その「設けられた家屋は、かつて参政吉田東洋が摂海警備の幕命をうけて、摂津の住吉に建築した兵営を移したもので、多人数が収容せられる」と指摘している⁽³⁾。

しかしながら、どのような史料にもとづいて、さような記述をおこなったのか、同書にはいっさい書きとどめられてはいない。だからこそ、事実かどうか確認するため、史籍などあれこれ探し求めたものの、それを裏づけるものをみつけたことはなかった。

ところが、そのように困惑しているなかで、偶然にも柳内良一氏が所蔵されている文書と絵図を閲覧することができた⁽⁴⁾。それらは、作事瓦方による慶応2年(1866)9月吉日の㊦「土州様^{さかい}左海御陣家瓦数控」と㊩「土州様 引越 左海御陣所惣絵図写」、大工新助による同年同月の㊧「土州様御屋舗 住吉御陣家 こほち運送割出し帳」の3点で、その月のうちにまとめられた一連のものであるともくされる。なかでも、㊧では、その最後に、秋の末の「九月廿七日」という月日がみえている。

これらのうち、㊦には、「右御屋根瓦卸從京都御屋舗御場所迄運送仕候而」とあり、また㊧から、住吉陣屋のもろもろの建物を解体したうえで、それら部材のあら方を「白川村御地所迄」運び込もうと企図していたことが読みとれる。

そして、両者のほかに着目すべきは、『寺村左膳道成日記』慶応3年9月24日条であって、そこには、「白川邸ハ先年御買上ニ相成シ新邸也」と書きつづられている⁽⁵⁾。そのなかの「御買上ニ相成シ」とは、具象的には、土佐藩が白川村の土地を買収したことを指しているよう。くわえて、「先年」とあるので、さような購入は、慶応2年以前に実施されたのがうかがえる。

かかる事柄と先の㊦ならびに㊧の文書の中身とを勘案すると、慶応2年の冬以降に、土佐藩が藩邸をこしらえるために買いとった白川村の土地に、住吉陣屋の建物が移送されたという点がおさえられよう。その運搬およびくみ立ての時分をしばらくはなかなかわずかしいけれども、あとでとりあげる史料に徴するに、遅くとも翌年の前半のうちには完

了していたとみなして、まず誤謬あるまい。

残念ながら、平尾氏は、こういった史料をもとにして、如上の筆記をおこなったのか、つまびらかにしえない。しかるに、建物の移動はまちがいなく、また設置の時期にかんしては、慶応2年の冬ごろであったとみておくのが無難であろう。

なお、佐佐木高行の日記である『保古飛呂比』慶応3年9月10日条には、白川邸のことを「土佐ノ下屋舗」としたためている⁽⁶⁾。それと対になる上屋敷は、中京区備前島町に所在していた川（河）原町邸であった。同邸は、いくつかの史料から、寛永5年（1628）に購入され、その年の秋より建築工事が着手されたことが知られる⁽⁷⁾。

(2) 住吉陣屋

ここで、話題を住吉陣屋に転じる。

安政5年（1858）6月19日に、幕府と米国とのあいだで日米修好通商条約が締結された。その条約には、1863年の正月までに兵庫を開港することが定められており、そうした関係上、大坂湾の警固の強化が急務となった。土佐藩は、条約の調印から2日後の6月21日に、「大坂表海岸御警衛」を命じられ⁽⁸⁾、その一翼をになうことになった⁽⁹⁾。

住吉陣屋は、さような大坂湾警備の拠点として、土佐藩により造営されたものである。そこで、以下に、その設置にまつわる史料を列記する。

【史料1】『保古飛呂比』万延元年（1860）9月条⁽¹⁰⁾

- 一、同月、幕府ヨリ、大坂警衛ノタメ、住吉ニ於テ陣屋地ヲ交付セラル。我藩曩ニ、関西ノ諸侯ト同ジク、大坂警衛ノ命ヲ受クルトキ、木津川口ヲ守ルベシトノ命アリ。故ヲ以テ住吉ニ戍営ヲ置カシメシナリ。其命ニ曰ク、大坂表海岸御警衛被仰付、摂州住吉郡中在家村・今在家村入会ニテ、壺万七拾九坪七合五勺、右之場所為陣屋地被下候間、可被得其意候。尤地所受取方等ノ儀ハ、町奉行并御代官ヘ可被談候。

【史料2】『保古飛呂比』万延元年9月条

- 一、同秋、住吉御陣屋造営初マル。役掛、御仕置役吉田元吉、御普請奉行後藤良輔、御作事奉行寺村勝之進。
但国役ニテ人夫数百人、普請方役人召連出役ス。

【史料3】『保古飛呂比』文久元年（1861）2月20日条

一、二月二十日、帰国ス。

但帰途大坂住吉陣營普請場ニ立寄ル。其工事ノ運ノ速カナルコト土地ノ人々賞讃セリ。木石ハ土佐ヨリ運送シ、工夫モ人夫モ皆土佐人ヲ用キ、上下大ニ競ヒ、勇マシキコト大坂住吉辺都会ノ人目ヲ驚カス。甚ダ以テ愉快ナリ。参政吉田元吉担当シ、自身最初実地ニ臨ミ指揮ス。普請奉行ハ後藤良輔ナリ。後藤若年ナレ共頗ル鋭敏、依ツテ工事尤モ運ブトイヘリ。来ル四月中ニハ皆出来ノ見込トテ、此節尤モ上下勉強ノ時ナリ。此時迄ハ長堀近辺ニ警衛人数散在ス。役掛等ハ少々引移り居ルト聞ク。

史料1から、幕府より土佐藩へ住吉に陣屋地があたえられたのは万延元年9月であり、その場所は摂州住吉郡の中在家村と今在家村の入会地で、1万80坪弱のひろさであったことが知られる。また、大坂湾のなかでも、木津川の川口の守衛を課せられたことがおさえられる⁽¹¹⁾。『住吉区史』によると、旧粉浜村字陣屋前、^{こはま}現在の大阪市住吉区東粉浜2丁目のうちに、住吉陣屋が存していたとする⁽¹²⁾。

つづいて、史料2をとりあげるに、万延元年の秋からその建設がはじまり、御仕置役を吉田元吉（東洋）⁽¹³⁾、御普請奉行を後藤良輔（象二郎）、御作事奉行を寺村勝之進がつとめたとする。くわえて、国役によって人夫数百人が土佐から動員されたと記されている⁽¹⁴⁾。

最後に、史料3に目をむけるに、佐佐木高行が江戸から土佐に帰る途次、住吉陣屋の建築現場を訪れた際の様子が生きためられている。とりわけ留意すべきは、傍線をほどこした部分であって、これにより、木材や石材が土佐から運搬されたこと⁽¹⁵⁾、工夫や人夫もまたすべて土佐から徴発されたことがわかる。

そこで、上記の事柄をふまえたうえで、視点を京都大学北部構内の発掘調査の成果に移すに、その208地点から、白川邸の南を画する空堀にあたるSD1および井戸SE3が検出されている。くわえて、前者の埋土からは415点、後者のそれからは8点の刻印銘を有する瓦がとりあげられている。

かような刻印瓦は、割れたことによって読みきるのが不可能なもの1点を含めると、24種類にもおよぶ。しかして、それらの内容にたいし分析をおこなったところ、22種類のは、土佐の瓦屋の屋号ないしは商標に該当するのが明らかになった。要するに、土佐国の各所において製造されたもので、建物を破壊するおりに、刻印銘をもたない瓦といっし

よに、堀SD1や井戸SE3に投げすてられるにいたったと推察されている⁽¹⁶⁾。

ここで、想起すべきは、白川邸の建物は住吉陣屋のそれを移築した点、木材・石材が土佐から運ばれた点だ。これら事柄と上述の刻印瓦の検討結果を考えあわせるに、瓦もまた土佐から住吉へともたらされ、ついには、白川邸の建物の屋根に葺かれることになったと解してよいのではあるまいか。詮ずるところ、住吉陣屋で使われた資材の大半は、土佐国内において用意され、運送されるにおよんだと想定される。

ちなみに、判読しうる23種類のうち、「住瓦庄」という刻印銘にかんしては、その詳細は不明であるとされる。「住瓦庄」の刻印瓦は、堀SD1から2点のみしかみつかっていない。けれども、筆者が担当した病院東構内の436地点の発掘調査において、近代の土坑であるSK1から、2点のおなじいそれが出土しており⁽¹⁷⁾、そうしたことを契機にして、その意味するところを仔細に検索した。その結果、つぎのようなことが判然となった。

現在、衛生・洗面機器を製造しているアサヒ衛陶株式会社（本社は大阪市中央区常盤町1丁目に所在）は、享保年間（1716～1736）に住吉の地において、「摂州瓦屋庄兵衛」と称し、いぶし瓦の作製に従事したことを起点とする企業である。

その「摂州瓦屋庄兵衛」は、幕末になると「住瓦庄」と名のり、ひいては、明治初年にはそれが商号として定まることになった。「住瓦庄」とは、「住吉の瓦屋の庄兵衛」を省略したものである。そうした「住瓦庄」の瓦は、大坂（阪）のみならず、京都の寺社にまで販売されていたという。ところが、丹司徳次郎（第15代・庄右衛門）が大正6年（1917）11月に42歳の若さで亡くなったことが原因となって、それから2年あまりののち、瓦の製造を中止せざるをえなくなったとされる⁽¹⁸⁾。

遺憾ながら、「住瓦庄」にかんする史料は、いっさい伝わっていないという。しかるに、如上の事柄は、徳次郎の子である明治44年（1911）生まれの徳蔵氏、おなじく大正2年生まれ of 豊治氏の「見聞、体験、及び手控え等を基に」したものであることが明示されている⁽¹⁹⁾。よって、享保年間のことはともかく、幕末以降の「住瓦庄」については、両氏の記憶のなかにしっかりと焼きついていたともくされ、ゆえに、それに信頼をよせても、おそらく大過あるまい。

かくして、「住瓦庄」の刻印銘をもつ瓦が住吉で製造されたことが明らかになると、堀SD1から出土した2点の瓦は、住吉陣屋の建物の屋根に使われていたものであったとみなして差し支えないと思われる。「住瓦庄」は、大領村、現在の住吉区上住吉1丁目・南住吉1丁目のあたりに窯場をもうけており、そこは住吉陣屋と近い距離となる。察するに、

住吉陣屋においては、地元の瓦屋から買い入れた瓦が用いられており、結局、それが白川村へと運ばれることになったのであろう。

ただし、「住瓦庄」の瓦が造営当初から、その屋根に葺かれていたとは断言しえない。というのは、修繕や増・改築などの際に、近所から購入された可能性も残されているからだ。住吉陣屋の資材にかんしては、土佐から移送するのにこだわっていた点が、前にみた史・資料からうかがわれるがゆえに、むしろ、あとになって買得された公算が大きいのではないかと考えておきたい⁽²⁰⁾。

さて、万延元年の秋に開始された住吉陣屋の建設は、史料3の波線部分によると、文久元年4月に完成を見込まれていたのが確かめられる。しかしながら、『勤王秘史 佐佐木老侯昔日談』第6・1から、佐佐木高行は、「竣工の予定よりは一ヶ月後れて、五月に至つて出来上つたと覚えて居る」と語っているのが知られる。もとより、高行は、現場に立ちあっていたわけではなく、その発言の内容が正しいのかどうか、少なからず不安を感じざるをえない。

とどのつまり、工事が終了した月日をはっきりさせるのは至難であるといえる。されども、『保古飛呂比』文久元年4月21日条には、「大坂御警衛十一明組士大将、中老山内右近被仰付、出発ス」と記されているので、4月の末にはおおむね仕上がっていたと判断して、まずあやまりあるまい。

こうして落成なった住吉陣屋は、慶応2年の冬ごろに解体されるにいたった⁽²¹⁾。その理由としては、同年9月に幕府から木津川の川尻の警備を免除されたことがあげられる⁽²²⁾。つまりは、住吉陣屋は突如いらなくなって、その結果、建物をばらして白川村へと運び込むという措置がとられたと推量される。

かりにそうだとすると、白川村の土地を土佐藩が買いとった時期は、慶応2年8月以前にさかのぼり、しばらくのあいだ放擲されていた可能性も浮上しよう。こうした点はさておき、住吉陣屋の坪数を前提にすると、白川邸の面積は、少なくとも1万坪はあったのではないかと想察される。

(3) 陸 援 隊

かくして設置された白川邸は、のちに陸援隊の屯所となった。そうしたことの起源を書きとどめている史料を、まずは、以下に掲出する。

【史料4】『保古飛呂比』慶応3年（1867）7月27日条

一、七月廿七日、晴。夕立アリ。出勤。早朝ヨリ真吉・雄之進來ル。又石誠モ来ル。今日ハ仕舞頗ル多忙。畢竟白川邸へ浪人々数ヲ入置クニ付テナリ。石川誠之助ノ申立ニテ、白川邸へ浪人ヲ差置ク事ヲ許セシナリ。毎度唯次郎・雄之進・真吉等来ルナリ。

右白川邸へ人数入レ置キ候義ハ、先日石川誠之助ヨリ申来リ候ニハ、此頃幕ヨリ又々浪人狩リ相初メ候様ニ被察候。其訳ハ、柳馬場ニ下宿ノ対州浪人橘某、既ニ捕縛セラレタル由、就テハ吾々ノ同志共所々下宿致シ居候テハ、危険ニ付、一纏ニ致シ度、白川邸へ御差置キ願度トノ事、内密申出デ候。然ルニ、政府中モ未ダ十分ニ勤王論モ無之、漸ク大政返上建白等ノ事ニハ内々相運ビ居候得共、浪人等ハ余程相忌ミ候者多ク、既ニ在京中ニテモ、福岡藤次初メ其他モ、其論ヲ相含ミ居リ、又他藩ニハ尤モ多ク有之場合ニ付、猥リニ手モ下シ兼候場合ニ付、自分ヨリ由比猪内エ事情能々相談候処、同人ハ存外ニ時勢相分リ居リ、参政中ニテモ上席株ニテ、漸ク同意致シ呉レ候間、他ニ異論不差起中ト、急速ニ相運ビ候様取扱致シ候。幸ニ御陸目附樋口真吉モ同志ナリ。其以下下横目ニテ唯次郎・健三郎・雄之進等孰モ同志ナレバ、異論無之中、自分一手ニテ為相運候事ナリ。殊ノ外多忙ニアリシナリ。今日ノ事情実ニ六ヶ敷事也。他日罪人ト相成候事ハ覚悟之事也。

この記事によると、佐佐木高行の主導により、白川邸に浪人たちを住まわせるよう決したことが知られる。その過程をややくわしくみるに、石川誠之助、すなわち中岡慎太郎は、対馬の浪人である橘某が幕府によって捕捉されたのを機縁にして、ちらばって投宿している同志である浪人らを守るために、白川邸にあつめおくよう内密に願い出た。佐佐木高行は、それをうけて⁽²³⁾、自藩および他藩での浪人にたいする忌避は承知しつつも、上司である参政の由比猪内の賛同をえたうえで、早急に中岡慎太郎の求めに応じたとある。

慎太郎の日記・『行行筆記』をひもとくに、7月27日条に「白川邸定る」、同月29日条に「朝白川邸に移る。著到十一人。是より追々著」としたためられている⁽²⁴⁾。つまるところ、佐佐木高行の尽力によって、過去の藩籍を異にする者などが白川邸にまとめられ、陸援隊が組織されることになった。

さて、史料4にふたたび目をやるに、中岡慎太郎は、仲間の浪人の身のあやうさを救うべく、行動をおこしたことがくみとれる。けれども、そうとばかりはいいいきれない面が存しているといえる。

まずは、「柳馬場二下宿ノ対州浪人橘某」についてとりあげるに、かれをめぐっては、『行筆記』2・丁卯7月19日条を看過することができない。それには、「昨日橘被縛（縛り）候由」と書きつづられていて⁽²⁵⁾、これにより、橘某は慶応3年7月18日にとらえられたことがわかる。

注意をはらうべきは、『品川弥二郎日記』慶応3年7月25日条の「石川柳馬場蛸薬師ノ旅宿ニ問フ」という記述であって⁽²⁶⁾、これから、中岡慎太郎はそこら柳馬場蛸薬師に宿泊していたことがおさえられる点だ。

残念ながら、橘某にかんしては、「柳馬場二下宿」とあって、そのやどりが柳馬場のいずこであったのか、つまびらかにしえない。けれども、慎太郎の旅宿から近かったことはまずあやまりないものと思われ、ひっきょう、橘某の捕縛を耳にして、慎太郎は、身の危険をひしひしと感じたにちがいあるまい。かかる点から推すに、慎太郎は、みずからの安全を確保するためにも、7月19日以降に、先のような申し出をおこなったのではないかと考える⁽²⁷⁾。

ところで、史料4から、浪人らの屯集場所として中岡慎太郎が白川邸を指定したことが読みとれる。いったいかれはどうしてそこを選ぶにいたったのか、疑問が湧いてこよう。以下では、この点をめぐって考察を進めていきたい。

【史料5】『保古飛呂比』慶応3年7月26日条

一、同廿六日、晴。出勤。午後ヨリ真吉・藤右衛門・唯次郎随致サセ、大仏・智積院・新日吉境内委細見分致シ候。其訳ハ、兼テ後藤婦国之節打合セ置キ候二大隊之兵、追々上京可致ニ付、白川邸へ差置キ候哉否之処、同所ハ不便利ニ付、矢張智積院之方可然トノ見込ニテ、進退懸引之都合等、夫是配置之位置等取調之為ナリ。右ハ自分ノ職掌ニテ、大鑑察（鑑）ハ武者奉行之任モ有之故ナリ。

この記事によると、佐佐木高行は、慎太郎の申請を聞き入れた前日に、大仏・智積院・新日吉いまひえの境内をくわしく査察したとある。そして、さような理由として、後藤象二郎が土佐から近づく率いてくるであろう二大隊の兵にかんする駆け引き、およびその配置場所などについて入念に調べるためであったということがあげられている。

さて、そのなかにみえる智積院（東山区東瓦町に所在）には、文久2年（1862）11月ごろ以来、土佐藩が借り入れることで、陣営がおかれていた⁽²⁸⁾。高行は、武者奉行として

の任も兼ねる大監察という役職についていたがゆえに、智積院を中心にすえて兵の収容などにつき思案をめぐらせていたわけだ。

では、傍線を引いた箇所は、具体的にいかなることであったのかというと、この点を理解するためには、まずは、薩土盟約についてとりあげなければならない。

慶応3年6月22日、京都において、薩摩藩の小松帯刀・西郷隆盛らと土佐藩の後藤象二郎・寺村左膳らとのあいだで話し合いがもよおされ、その結果、大政奉還と公議政体の樹立をめざしたとり決めが結ばれた。これを薩土盟約と呼ぶ⁽²⁹⁾。そうした事態をうけて、後藤象二郎らは、同年7月3日に帰国の途についた。

【史料6】『保古飛呂比』慶応3年7月3日条

一、七月三日、寺村左膳・真辺栄三郎・後藤象二郎・深尾直衛、今日出足帰国ス。(中略)

大政返上建白ノ義、老公へ伺ノ為ニ、後藤初メ帰国ス。其節自分ヨリ後藤へ相談致シ候。十分出兵有之度。其訳ハ、此度建白ハ不容易義ニ付、兵ヲ備へ周旋無之テハ、必ズ兵力ニテ圧セラレ可申。後藤同意シ、帰国ノ上其運ニ可致云々。

上の史料によると、薩土盟約にもとづく大政返上の建白の件で、山内容堂の指示をあおぐべく、後藤象二郎らは土佐へと帰ることになった。その際、佐佐木高行は後藤にたいし、大政奉還をなしとげるためには十分な兵力が必要であると語り、こうした意見に賛成した後藤は、兵を引き連れて上京してくると約束したとする。

要するに、史料5の傍線部分は、このときの相談のことを指しているのであり、「二大隊之兵」は、薩土盟約の中身を実現させるうえで、不可欠なものであったのが把握されよう。しかしながら、後藤象二郎は、山内容堂の反対にあつて⁽³⁰⁾、それを率いて京都にもどることがかなわず、ひいては、薩土盟約は、破棄されることになった。

そこで、史料5の波線をほどこした箇所に目をむけるに、佐佐木高行は、二大隊の兵を白川邸におくことは都合が悪いと述べている。実のところ、高行はそれ以前に、とり調べるため白川邸を訪れていた。そのことを示すのが、つぎの記事である。

【史料7】『保古飛呂比』慶応3年7月4日条

一、七月四日、快晴。(中略)例刻ヨリ未ノ刻、毛利ト兩人白川邸見分ニ至リ、申ノ

刻帰宿ス。此ノ白川邸ハ不便ナル処ナルニ、如何ナル事ニテ御買入ニ相成候哉ト
思フニ、佐幕論家ニテ、是迄ノ如ク大仏境内知積院へ御人数差置候時ハ不可然、
辺境ニヨリ出デタル事ナラン。依ツテ知積院ハ要地ニモ有之不而已。一朝事起リ
タル時御人数等繰出シ候ニモ便利ナレバ、矢張り御借置ノ方可然ト存候。旁白川
邸ノ模様モ見分致シ候事ナリ。夕方石川誠之助来ル。

高行は、白川邸が不便なところにあるとし、他方、大仏境内の知積院はそうではないとして、後者を借りつづけるべきであると判断している。高行は、白川邸がどのような理由で購入されたのか思いをめぐらせ、傍線部分のように推測している。しかるに、その内容は、なかなか理解しづらいといえる。

そこで、『勤王秘史 佐佐木老侯昔日談』をひもとくに、その第8・21には、高行によって、「佐幕家が智積院に兵を置く時には、却つて事変の際、その渦中に捲込まるゝといふ事を恐れて、強いてコンな辺境の地を買入れたのだ」と語られていて⁽³¹⁾、その意味するところが明瞭になる。

もとより、それは高行の想像であって、白川村の土地が買い入れられた政治的な背景は定かではない⁽³²⁾。されども、かれが主張しているように、そこが辺鄙な場所であったのかというと、そうした点にかんしては、たやすく首肯することができない。

たとえば、慶応4年の「改正京町御絵図細見大成」をみるに、白川村の「土州屋敷」の南に沿って東西の道が記されている⁽³³⁾。その道は、17世紀後期の地誌などによると、「白川馳道はせみち」と呼ばれ⁽³⁴⁾、西にむかえば今出川（大原）口をへて洛中に、東に進めば白川道・山中越をとおって近江坂本などに達することができた。それゆえに、高行がいうように、白川邸が不便なところにあったとは、とうてい考えがたい。

高行は、慶応3年6月17日に土佐をはなれ、同月21日に入京している⁽³⁵⁾。よって、白川村のあたりの土地勘に欠けていたことがくみとられ、そのあげ句、先のような認識をもつにおよんだのではあるまいか。

かくして、佐佐木高行は、智積院とは異なり、白川邸を陣営として評価してはいなかった点が確かめられた。こうした事柄をおさえたうえで、留意すべきは、高行と中岡慎太郎の関係である。『保古飛呂比』を披見するに、高行は入京して以降、慎太郎と対話するなどしばしば接触をもっており⁽³⁶⁾、両者の親交が深かったことが看取される。

とりわけ、みおとしえないのは、史料7の波線部分であって、高行が白川邸の査察を終

えた日の夕方に、石川誠之助、すなわち中岡慎太郎にあったとしたためられている点だ。これから推すに、慎太郎はこのとき高行から、白川邸の様相およびそれにたいする好ましくない印象について聞かされたのではなかろうか。そして、こうしてえた情報をもとにして、白川邸を浪士たちの屯所とするよう請い求めるにいたったと想定する。

このようにして白川邸は、中岡慎太郎を首領とする陸援隊の拠点となった。その威勢については、慎太郎にしたがって同隊を支えた田中光顕の手紙により、うかがい知ることができる。

【史料8】田中光顕が川添亥平方に送った書翰⁽³⁷⁾

先達而以来白川御屋敷へ諸藩の浪士五十人計入込、陸援隊と相唱へ、横山勘蔵〈石川清之助事〉を総務に被命。且加之十津川の人数五十人計調練修行之為相登せ、是亦当御邸へ入込、日々調練稽古罷在候。過日来より薩州よりも稽古として段々参り盛の事に御座候。百人の兵はいつに而も自由に動かせ申候故、一方を破るに足り可申と私に相楽居申候。(山括弧内は割書)

この書状のなかには、「此度慶喜より天朝へ政権返上の儀に附」、ならびに「当月中には一決戦相遂可やと胸中相期し罷在候」とみえるので、大政奉還が挙行された慶応3年10月14日よりのち、おそらくは同月下半にしたためられたものと推察される。むろん、その内容には誇張も含まれていようが、陸援隊の盛況をくみとって、さして支障なかろう⁽³⁸⁾。

しかしながら、藩内には、同隊のことを不快に感じる人びともまた少なくはなかったといえる。以下に、そのような点を示す史料をひとつだけ掲げることで、本節を締めくくることにしたい。

【史料9】「佐幕派の壮士三十三人連署して建白せし文」(『谷干城遺稿』巻1・第2編・「慶応三年隈山詒謀録」のうち)⁽³⁹⁾

一、亡命者御召返白川邸へ浮浪之徒御閣之事

(中略) 且晋太郎『中岡慎太郎の事。即石川清之助の事なり。』義は長州暴発之節相組し、於京師戦争仕、其後長州に罷在候処、此頃御召返に相成候趣、且白川御邸へ浮浪之輩数人御差置に相成候廉々疑念仕候事。

(4) 処 分

周知のように、中岡慎太郎は、慶応3年（1867）11月15日に、何者かによって襲撃され、坂本龍馬とともに落命することになった⁽⁴⁰⁾。それ以降、陸援隊がいつまで白川邸を根拠地としていたのか、はっきりさせることができない。

【史料10】『皆山集』93巻⁽⁴¹⁾

一、伏見開戦と土佐藩の備え

明治元年一月伏見の戦端開くるの前、藩論二派ニ別れ会桑二藩ニ抛り事を執るものあり。（中略）寺田典膳をして京都白川の藩邸を会津藩ニ貸渡すの約あり。

この史料によると、戊辰戦争の発端となった鳥羽・伏見の戦の前に、土佐藩の藩論はふたつに割れ、その一方が会津・桑名両藩をたよって行動していたとする。そうした一例として、寺田典膳が会津藩とのあいだに白川邸を貸しわたす約束をしていたことがあげられている。むろん、鳥羽・伏見の戦の結末に徴するに、会津藩が白川邸を借用しえたとは、とても考えづらい。

さて、明治時代になると、ときの政府から、つぎのような命令が発せられた。

【史料11】明治3年（1870）2月5日付の太政官布告⁽⁴²⁾

京都ニ有之候諸藩之邸宅地所、近来往々荒蕪ニ相成候場所不少趣、右ハ全ク地力ヲ廃棄シ候儀ニ付、不用之向ハ桑茶等植付、地力ヲ尽候様可致。不及其儀分ハ売払候歟、又ハ上地致候歟、孰レトモ取極、早々京都府ヘ可申出事。

但拝借地ノ分ハ返上可致事。

これによると、京都に存する諸藩の邸宅地所にかんし、荒れはててしまっているところが少なくない状況をうけて、用いないのであれば、桑や茶などを栽培するよういつけている。そして、それができなければ、売ってしまうか、もしくは政府に上納するか、どちらかに決めて早く京都府に申し出るよう命じている。

このような太政官布告をふまえ、高知藩は京都府御役所にたいし、同年3月30日付と6月5日付の2通の文書を提出している⁽⁴³⁾。

まずは、前者をとりあげるに、蹴上ヶ邸・白川邸にかんしては、「但諸作物植付荒所無

御座候」，河原町邸・岡崎邸・烏丸通今出川上ル邸については，「但当時人数差置明地無御座候」と書きつづられている⁽⁴⁴⁾。それら記載に照らすに，白川邸は高知藩によって管理されていたものの，人員はあまり配置されていなかったことが察せられる。

つづいて，後者に目を転じるに，愛宕郡白川村の白川邸について，「此度存寄を以建物取毀，地面近々諸作物植付申候間，此段御届仕候」としたためられている。そうした届出にたいし，京都府は「御書面之趣承届候事」，すなわち承諾をあたえている。

さような事柄にもとづく，白川邸の建物は，明治3年6月5日からほどなくしてとり壊されるにいたったと推量される。先にふれた，堀SD1の埋土などからみつかった瓦は，この際に投棄されたものであろう。

そののち，白川邸の跡地には，桑や茶といった諸作物が植えられたものの，その土地は，あまりときをおかずして，何らかの方途により始末されるにおよんだと想定される。

3 尾張藩吉田邸の沿革

(1) 土地の購入

尾張藩の吉田邸にかんしては，その地所の買いあげにまつわる史料が残されている。まずは，それを引用する。

【史料12】「文久三癸亥年 手元記録 下」11月2日条⁽⁴⁵⁾

一，京都元メ方より左之趣申来ル。

当地吉田領之内，高畑与申田所，初凡貳万坪程
御買上ニ相成。当地 御館御取建之筈，付而ハ
右御地所買主名前，

旦那様へ被 仰付候而も差支之筋無之哉之

段，当春 旦那様御在京之砌，御内意御座候

ニ付，御差支之筋無之趣御申上置ニ御座候処，

其後追々御取調ニ相成，既ニ弥御買上御治定ニ

相成，既ニ代金も御渡相済申候ニ付，去ル十八日在京

役衆尾崎八右衛門殿・永田益衛殿・茜部小五郎殿

列座ニ而，別紙写之通，書付被相渡申候。尤

旦那様御名代上田小右衛門相勤申候。(後略)

この記事によると、吉田領内の高畑⁽⁴⁶⁾というところの田地を当初、2万坪ほど買って屋敷をもうけようとしていたこと、そうした購入に際して、「旦那様」、すなわち茶屋良与^{りようよ}にたいし名義上の買主となるよう、文久3年（1863）の春に公命がくだされたことが知られる。くわえて、茶屋良与はそれを諒承したこと、土地の買い入れがすんだこと、文久3年10月18日に尾張藩の「在京役衆」である尾崎八右衛門ら3名の列席のもと、それにかんする文書がわたされたことが読みとれる。

史料12のなかで、旦那様と呼ばれている茶屋良与（のちに長与と改名）は、尾張徳川家の御用達である尾州茶屋家の8代の主人にあたる。その最後にみえている上田小右衛門は、良与に仕える同家の手代で、藩邸地購入の件につき主体的にはたらい人物である。

さて、この記事から、吉田邸の土地が買い入れられたのは、文久3年10月18日からさほどさかのぼらないときであった点がうかがえる。そして、そのような話がもちあがったのは、傍線部分より、同年の春であったことがおさえられる。

文久3年の春といえば、前藩主の徳川慶勝が在京していた時期に含まれる。14代の藩主で、尊王攘夷・朝幕協調の立場をとっていた慶勝⁽⁴⁷⁾は、朝廷の意向をふまえた幕府のいつけにより、将軍家茂の上洛を前にして同年正月8日に入京している⁽⁴⁸⁾。茶屋良与は、その慶勝につきしたがっており、傍線をほどこした箇所に見えるように、このころ京都に滞在していた⁽⁴⁹⁾。

ちなみに、史料12の波線部分より、最初の段階では、2万坪くらいの土地を買得しようと考えていたのがわかる。もとより、こうした記述からすると、その坪数とは異なる結果をむかえたことが予想されよう。

はたせるかな、愛知県公文書館に架蔵されている「吉田御屋敷之図」では、「三万三千三百三十三坪」と書き込まれており⁽⁵⁰⁾、吉田邸のひろさが確かめられる。したがって、このような記載にもとづくと、文久3年10月18日より少し前に、これとおなじか、ないしはその坪数に近い土地が購入されるにいたったと判断してよからう⁽⁵¹⁾。

かくして、史料12の内容について、いささか分析をおこなってきた。それでは、文久3年の春という時分に、何ゆえに藩邸地所を買いあげようとする動きが生じたのであろうか。さような問題を解き明かすためには、洛中における尾張藩邸のことに着目していかなければならない。

(2) 錦小路屋敷

貞享2年（1685）成立の『京羽二重』巻5・「諸大名御屋敷所付」には、「尾張中納言様」

があげられ、「御用屋敷 錦小路室町西へ入町」と記されている⁽⁵²⁾。よって、遅くとも17世紀後期には、京の市街地のなかに邸宅をおいていたことが知られる。

ただし、京都町奉行所が編纂にあずかったとされる『京都役所方覚書』上・「十六 京都大名屋敷」ならびに『元禄覚書』天・「二十 京都大名屋敷」⁽⁵³⁾には、尾張藩邸はみうけられない。前者は、元禄7年（1694）ごろにその原本がまとめられたと推測されており、また後者は、「元禄十三年のデータに同十四年の事実をくわえた」ものであると指摘されている⁽⁵⁴⁾。ところが、おなじく京都町奉行所が中心となって、享保2年（1717）のうちにおおよそ作成されたと推定されている『京都御役所向大概覚書』1・「五十一 京都大名屋舗・拝領地并買得屋舗之事」においては、「一、錦小路通新町東江入町 尾張殿／買得茶屋長曾名代」（斜線は改行をあらわす）というふうに書きつづられるにいたっている⁽⁵⁵⁾。

以上のようなありさまにかんしては、最後に掲げた「買得茶屋長曾名代」という記述に注意したい。すなわち、18世紀初頭以前は借家であったがゆえに、先のふたつの書にはとりあげられなかったのではあるまいか。この是非はさておき、茶屋長曾（もと長以）は、尾州茶屋家の5代のあるじであって、そのかれが名目上の買主となっている点は、吉田邸の地所購入の場合における先蹤として、すこぶる興味深いといえる。

つづいて、文化5年（1808）5月の「天神山町絵図」に目を転じるに、それには錦小路通の北に沿って、室町通を西に入ったところに尾張藩邸が記されている。もう少し詳しく説明しておく、表門の屋根が描かれ、北側は階段状にあらわされている。くわえて、それぞれの辺には、「表口 九間六寸」「裏行 拾七間三尺八寸」というように長さが付され、かつ「茶屋長意借家／当時尾張殿屋舗」という書き込みが認められる⁽⁵⁶⁾。

そのなかにあげられている茶屋長意は、尾州茶屋家の7代の主人にあたる。それゆえに、継承という観点からすると、「茶屋長意借家」と前の「買得茶屋長曾名代」とでは、つじつまがあわないのではないと思われる。あるいは、天明8年（1788）の大火による焼失⁽⁵⁷⁾をうけて、変化が生じたのではないかと憶測されよう。けれども、ここでは結論を急がず、他日の検討にゆだねることにしたい。

ところで、尾張藩邸のひろさについては、それぞれの長さをもとに計算してみると、450㎡弱、135坪くらいの数値をえる。つまるところ、洛中において尾張藩は、さようにせまい屋敷しかもちえてはいなかった点が確かめられよう。

ちなみに、『御日記頭書』2には、寛文3年（1663）12月のこととして、「京都において松

平下総守殿売屋敷御求可被遊旨御意有之」と書きとどめられている⁽⁵⁸⁾。そこにみえる松平下総守とは、『寛政重修諸家譜』巻第51によると、松平忠弘のことを指す⁽⁵⁹⁾。

そこで、「洛中絵図」に目を移すに、「本竹田町」の東側に「松平下総守」の屋敷が描かれている⁽⁶⁰⁾。今日、中京区に元竹田町という地名が存し、東洞院蛸薬師の南東に所在していたことがおさえられる。要するに、尾張藩は、この邸宅を買い入れようとしていたのが判明する。

残念ながら、そのような意向は、錦小路屋敷の使用よりもさかのぼるのかいなか、瞭然としない。くわえて、松平下総守の売屋敷を最終的に入手するにおよんだのかも定かではない。けれども、尾張藩が京の市街地において藩邸を設置しようとしていた点は、注目に値するといえよう。

いっぽう、寛政13年(1801)の「御屋敷吟味」では、「京都東堀川富田町」の「御屋敷」について、「享保六丑十二月晦日／御求被遊候段御達有之」と書き記されている⁽⁶¹⁾。現在、一条戻橋の北東に^{たてとみだ}堅富田町という地名があつて、おそらく、そこに位置していた邸宅であつたと推量される。

この史料から、享保7年(1722)のはじめには、錦小路屋敷のほかに、あらたに藩邸をえようと動いていたことがうかがえる。ただし、その終局がどうなったのか、分明にすることができない。

(3) 地所買得の背景および建設の状況

以上の事柄をふまえたうえで、尾張藩が吉田村に土地を購入した理由について考察をめぐらせていきたい。

徳川慶勝は、文久3年(1863)正月8日に入京し、縁戚にあたる近衛家の河原御殿(中京区末丸町)に止宿した⁽⁶²⁾。その際、扈從していた藩士などは、妙顕寺(上京区妙顕寺前町)や東福寺(東山区本町15丁目)を宿所としたことが知られる⁽⁶³⁾。

もちろん、それら大きな寺院に供奉の人びとが入ったのは、小さい錦小路屋敷などではとても収容しきれなかったからであろう。つまるところ、慶勝の上京を機縁にして、既設の藩邸などのせまさが問題視され、その結果、ひろい土地を買いあげて屋敷をもうけようとする方針が固まったのではなかろうか。このような事情により、京の市街地からほど近い吉田村の地所が入手されるにいたつたと推考する。

それでは、文久3年の初冬ごろに土地が購入されて以降、藩邸の建造はどのように進められたのであろうか。すでにふれた「吉田御屋敷之図」(図83)、ならびに蓬左文庫に所蔵

されている2枚の「吉田御屋敷惣図」⁽⁶⁴⁾には、主殿や多くの長屋などが描きだされている。ここでは、尾張藩の京都御用人をつとめた尾崎八右衛門（忠征）⁽⁶⁵⁾の日記から、いくつかの記事をぬきだし、それらの中身と前者の絵図とを比較分析することで、上述した課題にたいしせまっていきたいと思う。

【史料13】『尾崎忠征日記』慶応2年（1866）11月27日条⁽⁶⁶⁾

一、隼人正殿今午後当御屋敷御巡覧に御越有之。仍之八右衛門・益衛・将曹・庄大夫（樋口又三郎）・御目付寺山鞠負・御作事奉行秋元卯兵衛御案内罷出。御座敷廻り・御長屋向・御庭向等夫々御廻り、申廻過被成御帰候。御座敷二之間江御通し申上、同処に而八右衛門左之通差上之。（後略）

【史料14】『尾崎忠征日記』慶応2年12月14日条

辰半廻頃御用向に付、隼人正殿宿陣江相伺謁見。西御長屋・稽古場・弓馬炮研究之場処出来方之儀相御談申上、午廻過迄御話申上。（中略）午半廻過令帰邸、直に出勤。稽古場・矢場・鉄炮場等今度出来之場処、御作事方立合に而致見分。犬侯今日御談之趣、良太郎并御作事方江も申談置之。

【史料15】『尾崎忠征日記』慶応3年5月28日条

邸中 熱田御宮御礎御出来に付、今午後 御遷宮有之候。右 熱田神官林相模守規式取扱之。

まずは、史料13をとりあげるに、冒頭の「隼人正殿」とは、尾張藩の付家老（両家年寄）で犬山城主である成瀬正肥^{まさみつ}のことをいう。正肥は巡覧のため吉田邸を訪れ、尾崎八右衛門らはその内部を案内したとする⁽⁶⁷⁾。史料13には、「御座敷」「御長屋」「御庭」がみえており、このときまでにそれらが完成していたことが知られる。これらのうち「御座敷」は、「吉田御屋敷之図」に記されている、南にひらかれた「通用御門」から入ってすぐの「火の見」櫓を有する「瓦」葺きの建物、すなわち主殿に該当しよう（図83③）。くわえて、「御長屋」は、そうした主殿の南側から西側にかけて位置している4棟の長屋であった蓋然性が高い。

つづいて、史料14に目をむけるに、八右衛門は、用事があって成瀬正肥の宿営におもむ

き、対面して「西御長屋」「稽古場」「弓馬炮研究之場処」ができあがったことを報告したとする。そして、吉田邸にもどったのち、今回すっかり仕上がった「稽古場」「矢場」「鉄炮場」などをみとどけたという。もとより、「矢場」「鉄炮場」は、「弓馬炮研究之場処」のうちに含まれるものであろう。

「吉田御屋敷之図」には、その北辺に「弓鉄炮兵法稽古場」とする建物がみうけられる(図83⑤)。史料14の「稽古場」と、「弓馬炮研究之場処」から「馬」をのぞいた「弓炮研究之場処」をあわせたものが、その「弓鉄炮兵法稽古場」に一致するのであろう⁽⁶⁸⁾。くわえて、同図では、「弓鉄炮兵法稽古場」の西から南西のあたりにかけて8棟の長屋が記されており、それらが史料14の「西御長屋」に相当する公算が大きい。

最後に、史料15をみるに、吉田邸のなかに「熱田御宮」が完成し、そこに神座を遷したとする⁽⁶⁹⁾。「吉田御屋敷之図」には、その南西隅のところに「熱田^(宮)□」が描かれており(図83⑥)、これに合致するとしてよからう。

かくして、史料13から史料15の内容と「吉田御屋敷之図」とを照合しつつ、検討をおこなってきた。その結果、「御座敷」「御長屋」「御庭」は慶応2年11月27日より前に、「西御長屋」「稽古場」「弓馬炮研究之場処」は同2年の12月のなかばに、「熱田御宮」は同3年5月28日にできあがったことが確かめられた。このような事実に徴するに、邸内の建物などは総じてほぼ同時に仕上がったのではなく、それぞれその時分にちがいのあったことが理解されよう。

ちなみに、いささか付言するに、文久3年の初冬ごろに土地が入手されたという点を前提にすると、「西御長屋」「稽古場」「弓馬炮研究之場処」などの完成は遅すぎるのではないかと印象をうける。あるいは、地所購入後、すぐに建築工事は実施されず、しばらくのあいだ放置されていたのではあるまいか。

留意すべきは、元治元年(1864)7月19日の蛤御門の変にともなう火災、いわゆる元治の大火によって、錦小路屋敷が焼けおちたともくされる点だ⁽⁷⁰⁾。このような事態をきっかけにして、着工がなされ、ひいては、京における拠点を吉田村の地に移そうとしていたとも想察されよう⁽⁷¹⁾。

遺憾ながら、そうしたことを裏づけるものを何らもちあわせてはおらず、ひっきょう、まったくの臆見にすぎないといえる。けれども、ここに一案として提示し、今後の考察に備えることにしたい。

尾張藩吉田邸の沿革

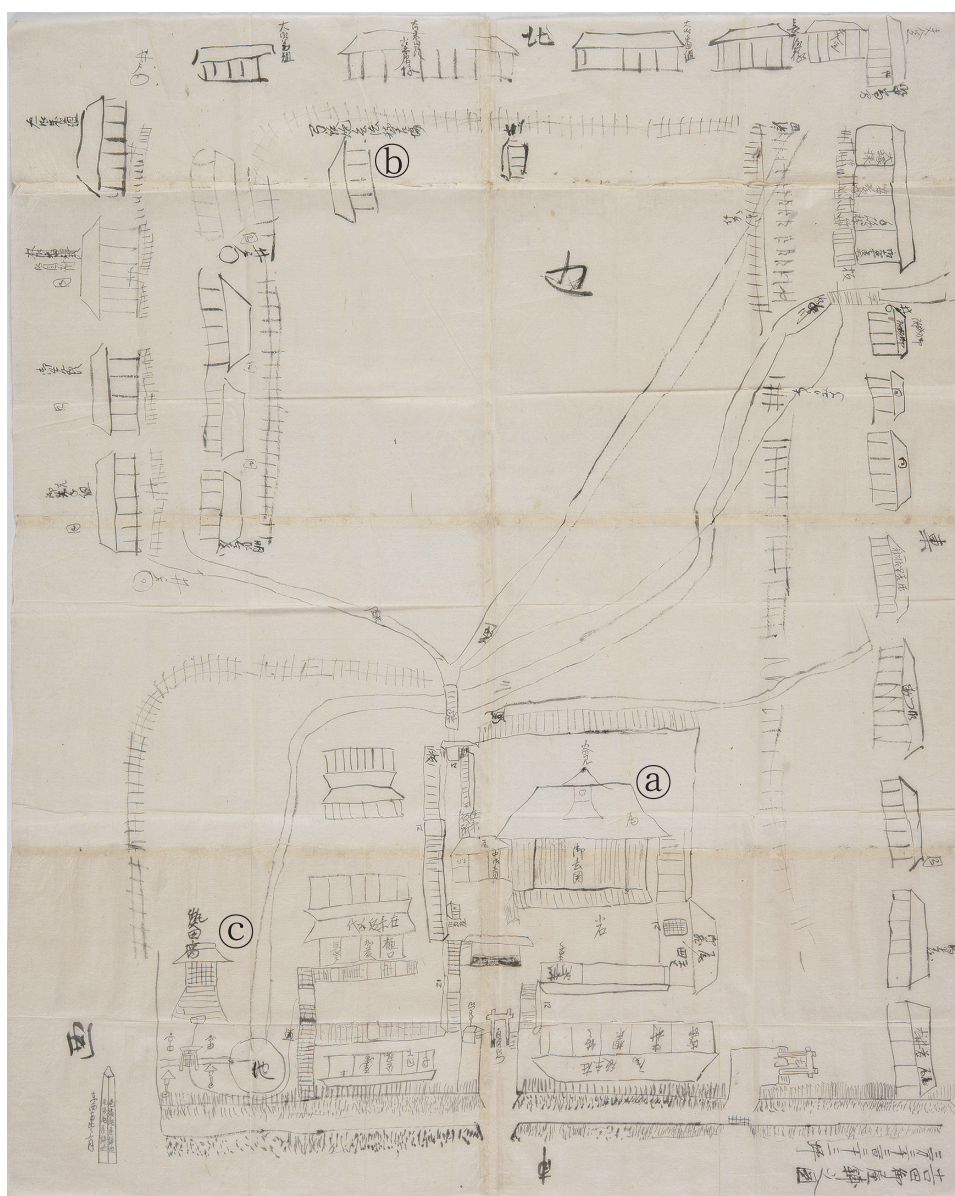


図83 「吉田御屋敷之図」 縮尺約1/5

(4)「吉田御屋敷之図」と「吉田御屋敷惣図」

いまひとたび確認しておくと、吉田邸の絵図としては、愛知県公文書館に所蔵されている「吉田御屋敷之図」、蓬佐文庫に架蔵されている2枚の「吉田御屋敷惣図」が残されている。

前者は、黒のみで描かれ、おおむね筆致があらう。建物にかんしては、正面からみた外観を写生し、「明御長屋」「在京役手代 樋口 加藤 長戸」「御先手組」というように、その内実・使用者などについて文字で示している。

いっぽう、後二者は、定規を用いて作られた類似する内容の平面図で、建物などにかんし「御長屋」「モノヲキ」といった説明が付されている。それらを一瞥するに、黒一色のものと、中央やや下の部分のみを朱線で囲ってある黒・朱二色のものというように、大きな違いに気づく。ここでは、論述の都合上、前者をA図、後者をB図⁽⁷²⁾と仮称する。

さて、A図とB図の文字については、それぞれ貼紙によって訂正されている箇所がいくばくか存する。また、A図とB図をみくらべるに、後者では、外周の「カラ堀」のすぐ内側に「土居上矢来」、複数の井戸などが書きくわえられている。

これら事柄等をふまえたうえで、考察がおこなわれた結果、①訂正前のA図→②現況のA図→③訂正前のB図→④現況のB図という推移、および③は②を下敷きにして作られたことが推定されている⁽⁷³⁾。筆者もまた、このような見解にたいしては異議をもたない。ただし、①と②、③と④にかんしては、ひとつの作業としてほぼ同時になされた可能性を考慮に入れなければなるまい。

それでは、上記の点を前提にすると、それら絵図と「吉田御屋敷之図」との先後関係はいったいどうなるのであろうか。煩雑となるので、詳細は割愛するけれども、発掘調査の成果⁽⁷⁴⁾を念頭におきつつ、「吉田御屋敷之図」で「川」とされている流路・「池」などに着目して、おのおの対比検討したところ、「吉田御屋敷之図」がもっとも古くに作成されたと推認するにいたった。さらに、同図は吉田邸の全体図ではなく、北辺の「広場」・「カラ堀」ならびに東と西の「カラ堀」などを省略したものであるとの理解に達した。そうした卑見はさておき、3枚の絵図では、建物などの描写が異なっている部分が存し、実際のところ、幾度か改造がおこなわれていた点が抽出される。

なお、「吉田御屋敷之図」には、南端の「通用御門」の西に「尾崎八右衛門様」と書き入れられた長屋が記されている。尾崎八右衛門は、明治2年(1869)8月に八衛への改名を申請し、それが許可されていることから、そうした点を根拠にして、同図はそれよりも

前にまとめられたと指摘されている⁽⁷⁵⁾。

ここで、想起すべきは、史料15であって、慶応3年（1867）5月28日に「熱田御宮」ができあがったことが知られる。「吉田御屋敷之図」では、その南西隅のところに「熱田^(宮)□」がみえ、またA図・B図ともに、おなじ箇所「社」と記されている。したがって、「吉田御屋敷之図」および2枚の「吉田御屋敷惣図」は、それよりのちに作成されたのがおさえられよう⁽⁷⁶⁾。

ひるがえって、B図にかんしては、つぎの記事に注意をはらっておきたい。

【史料16】『尾崎忠征日記』明治元年3月6日条

自夫直に吉田邸 御坐元江出勤。御目見之儀久々に而奉願候上、吉田邸中に御新建之 思食相伺、右御図面御出来。御方位之儀に付、申剋前より幸徳井陰陽助方江相越種々相尋候上、勘文請取之、入夜早々吉田邸江再出勤。右之段申上、初更過出張処之方江令帰入候事。

この史料によると、尾崎八右衛門は吉田邸におもむき、久びさに16代の藩主・元千代に面会した。その際、吉田邸のうちにあらたな建物を作ろうという元千代の考えを聞き、また図面ができあがったとしたためられている。

まずは、元千代をめぐって簡単に説明をくわえておくに、明治元年（慶応4年）正月25日、禁裏の守衛を命じられていたかれは入京し、知恩院（東山区^{りんか}林下町）を宿所とした⁽⁷⁷⁾。これにともない、八右衛門は、知恩院の近く「新門前中之町南側」（東山区中之町）に出張所をもうけ、そこにつめることになった⁽⁷⁸⁾。ところが、同年2月28日、知恩院にイギリス人公使をはじめとする100人ばかりの「夷」が到着するのを前にして、元千代は吉田邸へと移り、そこにしばらくのあいだ滞在することになった⁽⁷⁹⁾。

八右衛門は、そののちも出張所の方に勤務しており、しかるがゆえに、吉田邸にいる元千代と対面する機会にはなかなかめぐまれないといえる。ちなみに、元千代は14代の藩主・慶勝の子で、このときかぞえ11歳にあたる。

等閑に付すべきでないのは、史料16によると、吉田邸の図面をたずさえた八右衛門が、方位の吉凶につき幸徳井^{こうとくい}陰陽助にあれこれ質問している点だ。もしかすると、B図がそれに合致する可能性はなかろうか。

先にふれたように、B図には、中央よりやや下のところ、主殿の北側に朱線で囲まれた

一角が存する。元千代はこの箇所、わけても北東のあたりに新しく建物をきずこうとしていたがゆえに、朱でめだつように示され、つまるところ、そうした図面が幸徳井陰陽助の意見を聞くために作りあげられたのではなかったか。

ここで、話題を吉田邸と交通路との関係に移すに、よく知られているように、同邸の設置によって白川道が分断されるにおよんだ。されども、吉田邸にとって、それは肝要な道路であった点は、まずまちがいあるまい。

B図に目をむけるに、吉田邸の西にひらいた門は、その南西隅に近いところに位置している。西端の中央付近ではなく、そのような場所に西門がもうけられたのは、白川道を強く意識したためであろう。また、正門である「南御門」は、白川道からさほどはなれてはおらず、洛中との行き来には、それが利用されていたと考えられる。さらに、その東門は、白川道に接続していた蓋然性が高からう。

興味深いのは、鴨川の東に朝廷が避難しなければならない場合に備えて、西本願寺が荒神口に御幸橋を架設した点だ。同橋にかんしては、慶応元年6月に着工し、同3年10月に竣工にこぎつけたのがわかる⁽⁸⁰⁾。この御幸橋の完成にともなって、京の市街地へといたる道路として、白川道はますます重視されるにおよんだと推察される。

いっぽう、B図では、吉田邸の北端中央やや西よりに門が描かれている。慶応4年の「改正京町御絵図細見大成」では、既述した白川馳道に接して「尾張屋敷」が記されており、その北門は、この道にたいしてひらかれていたとみなしてよからう。

詮ずるところ、如上の事柄を勘案すると、白川道・白川馳道という洛中・近江への路が存していたがゆえに、換言すると、交通の要衝であったがために、尾張藩によってこの場所が選ばれたのではなかろうか。

かくして、種ぐさの史料を活用することにより、吉田邸の変遷については、かなり明らかにすることができたのではないかと思う。このような同邸にかんしては、「徳川家御住居沿革調書」によると、「明治四年引払ひ上地セラル」と記されているという⁽⁸¹⁾。幕末の京都における尾張藩のもっとも大切な拠点であった吉田邸は、ここに終焉をむかえることになった。

4 おわりに

江戸時代の終わりの京における諸藩の屋敷については、「幕末になり京都が政治の舞台になると、処士横議、政治活動の場となり、有力な藩では本邸の拡大整備とともに、兵士

収容施設と練兵場付きの広大な新邸を郊外に設け、幕末政局に大きな影響を与えた」という、要領をえた指摘がすでになされている⁽⁸²⁾。

「郊外」のなかでも、白川村・吉田村・岡崎村・聖護院村の一帯に、多くの「広大な新邸」がいとなまれており、たとえば、加賀藩は、岡崎村に4万3000坪強の敷地を有していた⁽⁸³⁾。そのような状況を引きおこした大きな要因としては、これら地域において田畑がひろがっていた点があげられよう。

土佐藩・尾張藩とともに「幕末政局に大きな影響を与え」、また白川村・吉田村に「広大な新邸」をもうけた。ただし、尾張藩の吉田邸は、公家や他藩などとの幹旋、情報収集等にあたった「在京役衆」が勤仕する場所として大きな機能をはたしたのにたいし、土佐藩の白川邸にかんしては、けっしてそうではなかったことが、小稿における考察によって確かめられたといえよう。

文久3年(1863)3月の将軍家茂の上洛よりのちに、白川村・吉田村などにおいて諸藩邸が築造されたことで⁽⁸⁴⁾、それら地域の様相は一変した。けれども、明治時代の初頭にそれらすべてが処分されるにいたり、もとの田園地帯にもどることになった。さように諸藩の屋敷がいとなまれたことによって、その土地の人びとの生活はどのようにあらたまったのか、こうした点の究明もまた向後つとめていく必要があろう⁽⁸⁵⁾。

京都大学総合博物館において、平成29年2月15日から4月16日までのあいだ、平成28年度特別展「文化財発掘Ⅲ―激動の幕末と京大キャンパス―」が開催された。筆者は、平成29年3月25日におこなわれた、その関連講演会において、「文献史料からみた尾張藩吉田邸・土佐藩白川邸」と題する話をした。本稿は、そのときの講演の内容をより詳細に論じたものである。


本稿をなすにあたって、史料の閲覧に便宜をはかっていたいただいた関係諸機関にあつく御礼申しあげる。とりわけ、所持されている文書・絵図についてふれることを快諾していただいた柳内良一氏、それらを調べる機会をあたえてくださった京都国立博物館の宮川禎一氏、絵図の写真の掲載を許可していただいた愛知県公文書館にたいし、記して感謝申しあげたいと思う。

〔注〕

- (1) 京都大学構内の調査地点にかんしては、図版1を参照。
- (2) 笹川尚紀「京都大学本部構内A T22区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』, 京都大学文化財総合研究センター, 2016年)。
- (3) 第6章・235, 239頁(中央公論新社, 改版2010年, 初版1977年)。
- (4) 柳内氏が所持されている文書は、京都国立博物館の宮川禎一氏が特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」の開催を前にして借りうけられていた。そのことをたまたま耳にし、許可をいただくことで、平成28年7月27日に同館において目にすることがなかった。
- (5) 横田達雄編 青山文庫所蔵資料集 5『寺村左膳道成日記 (3)』。
- (6) 東京大学史料編纂所編纂『保古飛呂比 佐佐木高行日記 2』。
- (7) 山内家史料刊行委員会刊行『山内家史料 第2代 忠義公紀 第2編』179頁など。
なお、若干補足しておく、寛永末年ごろの状況を描きだしていると推量されている「洛中絵図」には、「こり木町」の西側に「松平土佐守」の屋敷が方形に記されている(京都大学附属図書館蔵 中井家旧蔵『洛中絵図 寛永後 万治前』H-7など, 臨川書店, 1979年)。また、元禄7年(1694)ごろに原本が編纂されたと想察されている『京都役所方覚書』上・「十六 京大名屋敷」では、「買得」として「一、河原町三条下三町目南屋敷〈表口卅間、裏行卅間〉松平土佐守」, 「一、同所北屋敷〈表口三十間、裏行六間〉同人」と書きつづられている(京都町触研究会編『京都町触集成』別巻1 参考資料)。
- (8) 石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第6巻・5453。
- (9) 安政5年の摂海警衛については、針谷武志「安政一文久期の京都・大坂湾警衛問題について」(明治維新史学会編 明治維新史研究5『明治維新と西洋国際社会』, 吉川弘文館, 1999年)を参照。
- (10) 東京大学史料編纂所編纂『保古飛呂比 佐佐木高行日記 1』。
- (11) 『保古飛呂比』文久元年4月21日条では、「大和川ヨリ尻無川迄」が土佐藩の警固の範囲であったとする。また、原剛『幕末海防史の研究—全国的にみた日本の海防態勢—』第2章第5節(名著出版, 1988年, 初出1987年)には、「北嶋新田南の端より恩加島新田北の境まで(大和川〜木津川北)」が土佐藩のうけもった場所であったとし、くわえて、諸藩による担当箇所が図で示されている。
- (12) 財団法人 大阪都市協会編集, 第2編第10章3(丸山陽二執筆), 住吉区制70周年記念事業実行委員会, 1996年。
- (13) 吉田東洋にかんして、佐佐木高行は、「斯様に気張てやつたといふものは、前年容堂公が、大阪警衛の事に就て、春嶽侯等が御止めになつたにも拘らず、八間敷御建白杯をなされたのであるから、此の工事には、幕府へ対する政策として吉田も非常に力を入れて、起工の際は監督の為、自身態々出張した」と述べている(日本史籍協会編 続日本史籍協会叢書 第4期『勤王秘史 佐佐木老侯昔日談 1』第6・1)。そのうちの山内容堂による「八間敷御建白」については、さしずめ平尾道雄『吉田東洋』第6・5(吉川弘文館, 1959年)を参照。
- (14) 土佐国の諸郡からの人夫徴発にまつわる記録が、山内家史料刊行委員会刊行『山内家史料 幕末維新 第3編上 第16代 豊範公紀』155〜159頁において収載されている。
- (15) 福島成行『吉田東洋』252頁(1926年)によると、小倉知行の筆記に、「是に於て神速木石を土佐より運送して陣屋を落成し」と書きとどめられているという。
- (16) 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫「京都大学北部構内B A28区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』, 京都大学埋蔵文化財研究センター, 1995年)。

なお、北部構内の276地点からも、208地点出土の刻印銘を有する瓦と同様のものがいくつかみつまっている（伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子「京都大学北部構内B C 28区の発掘調査」〔『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』、京都大学埋蔵文化財研究センター、2005年〕）。

ちなみに、同構内の109地点からもまた、刻印瓦が多くとりあげられているものの、浜崎一志「京都大学北部構内B D 30区の発掘調査」（『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』、京都大学埋蔵文化財研究センター、1983年）においては、そのことについていっさいふれられてはいない。

そこで、このたびあらためて調べてみたところ、瓦溜S X 1～4、第1層の現代の盛土などから出土した、「アキ文」「アキ角」「キ卯平」「安喜寅」「赤野銀」「赤戈改」「片常」「片菊」「並生野角」「御瓦師」という、208地点のものとおなじ捺印をもつ瓦が確認された。浜崎氏は、瓦溜S X 1～4の瓦にかんし、白川邸で用いられていた公算が大きいと指摘している。

なお、瓦溜S X 4からひろいあげられた、1点の右棧瓦の頭部側平部の端面には、「中佐」（枠囲みであろう）という印がおされている。このような刻印銘は、208地点などではみつからないものの、堀S D 1から「中友」「中山林」という刻印瓦がとりあげられており、「中」が共通することから、土佐で製造された蓋然性が高いと考える。

ついでにいうと、高知城にかんする発掘調査報告書をいくつかめくったけれども（高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集『高知城伝下屋敷跡 高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』第2章・6・（4）〔高知県文化財団埋蔵文化財センター、2002年〕、高知市文化財調査報告書第35集『史跡 高知城跡—北曲輪地区埋蔵文化財発掘調査報告書—』第4章第3節5〔高知市教育委員会、2011年〕など）、「中佐」の刻印銘をみつけだすことはできなかった。

- (17) 笹川尚紀・千葉豊「京都大学病院構内A H 18区の発掘調査」（『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』、京都大学文化財総合研究センター、2018年）。
- (18) 山路茂則『炎と生きる アサヒ衛陶株式会社前史』第1・2章、『炎と生きる』編纂委員会、1996年。
- (19) 注（18）前掲書 はじめに・第6章。
- (20) 北部構内の109地点の瓦溜S X 4から出土した、1点の丸瓦の凸面には、「谷川丸市」（枠囲みであろう）という押印がみうけられる。このような刻印銘をふまえると、その瓦は、大阪府泉南郡岬町多奈川谷川のあたりで生産されていた、いわゆる谷川瓦に相当すると考えられる（谷川瓦については、谷川瓦調査委員会編集『谷川瓦調査報告Ⅰ—門瓦製造所・歌坂喜代一瓦窯の調査—』〔岬町教育委員会、1992年〕を参照。なお、同書の資料編・資料3において、この瓦の刻印の拓本および釈文が提示されている）。

その谷川瓦はもともと、住吉陣屋の建物に葺かれていたと推測され、「住瓦庄」の刻印瓦と同様、頭初の造営からいくらかの年月をへて購入されるにいたった可能性が残されているといえよう。

- (21) 住吉陣屋の絵図にかんしては、文久元年の「摂州住吉土州藩陣家略図」（『皆山集』109巻所収〔土佐之国史料類纂『皆山集』第5巻 歴史（4）篇 口絵〕）と慶応2年9月の④という、初期と末期のもの2点をみい出すことができた。

それらの中身を少しだけ紹介しておく、後者には、「式間口御己家四十壺 桁行八拾二間」とする長屋が書かれている。いっぽう、前者では、それを「二階建／南北七十二間」と記し、二階造りの長屋を描きだしている。両者における桁行のちがいは、もしかすると、建て増しに

よるのかもしれない。

そうしたことはともかく、これら絵図は、白川邸の内部を考えていくうえで、すこぶる重要であろう。

- (22) 『山内家史料 幕末維新 第3編上 第16代 豊範公紀』431・432頁。
- (23) 瑞山会編纂『維新土佐勤王史』「其一百三十四」によると、中岡慎太郎は、最初に毛利恭助にたいして説き、そののち毛利といっしょに佐佐木高行のもとへとおもむいたとする。
- (24) 日本史籍協会編 続日本史籍協会叢書『史籍雑纂 2』。
- (25) 「轉」にかんしては、そのままでは文意をとることができず、おそらくは「縛（縛）」の誤記であろう。なお、宮地佐一郎編集・解説『中岡慎太郎全集—全一卷』第1部・文書・日記3（勁草書房、1991年）では、『史籍雑纂』を底本とするにもかかわらず、何のこわりもなく「斬」とされている。しかるに、字形の類似という観点からすると、「斬」ではなく「縛（縛）」の方がふさわしかろう。
- (26) 日本史籍協会編 日本史籍協会叢書 11『維新日乗纂輯 2』。
- (27) 『嵯峨実愛^{さねなる}手記 乾』には、「一、横山脱藩、当時帰邸故、壬生浪度々うか、ひ候に付、行衛不知由に而、当時は白川邸に住のこと」とみえている（日本史籍協会編 続日本史籍協会叢書『史籍雑纂 2』）。横山、すなわち中岡慎太郎が壬生浪（新撰組）にねらわれていたことが知られ、たいへん興味深い。
- (28) 大仏境内智積院における土佐藩の宿陣にかんしては、中村武生「幕末期政治の主要人物の京都居所考—土佐・長州・薩摩を中心に」（御厨貴・井上章一編『建築と権力のダイナミズム』、岩波書店、2015年）を参照。
なお、若干補足するに、智積院の境内はひろい面積を有しており、それゆえに、そこを借用する以前において、白川村の土地が入手されていたとは、とうてい考えにくい。
- (29) 薩土盟約にかんしては、家近良樹「幕薩協調路線の破綻と倒幕運動の本格的進展—倒幕過程の第三段階—」（『幕末政治と倒幕運動』、吉川弘文館、1995年、初出1994年）、青山忠正「土佐山内家重臣・寺村左膳—薩土盟約と政権奉還建白—」（『明治維新の言語と史料』、清文堂出版、2006年、初出2000年）、高橋秀直「『公議政体派』と薩摩倒幕派」（『幕末維新の政治と天皇』、吉川弘文館、2007年、初出2002年）、佐々木克「王政復古の政変と薩摩藩」（『幕末政治と薩摩藩』、吉川弘文館、2004年）など、先学によっていろいろな解釈が提示されるにいたっている。
- (30) 『保古飛呂比』慶応3年8月3日条など。
- (31) 日本史籍協会編 続日本史籍協会叢書 第4期『勤王秘史 佐佐木老侯昔日談 2』。
- (32) 借地では活動の場として不安定であると考えられた点が、所有地をもつにおよんだ大きな要因であろう。
- (33) 大塚隆編集『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』、柏書房、1944年。
- (34) 『雍州府志』巻第8・古蹟門上・白川馳道（『新修 京都叢書』第10巻）、『京羽二重織留』巻1・白川馳道（『新修 京都叢書』第2巻）など。
- (35) 『保古飛呂比』慶応3年6月17日・21日条。
- (36) 『保古飛呂比』慶応3年7月5日・8日・11日・14日・17日・22日条など。
- (37) 富田幸次郎『田中青山伯』其十。
- (38) 尾張藩の京都御用人であった尾崎八右衛門の日記、その慶応3年10月17日条には、「且は土州邸には浮浪士四十人程屯集之旨慥成様子に付、（中略）吉田御邸さへも右之いや気に御座候位に付」と書きつづられている（日本史籍協会編 日本史籍協会叢書 47『尾崎忠征日記 2』）。

これによっても、10月下半には、白川邸において多くの浪人が居住していた点がおさえられる。また、白川邸のななめむかいに位置していた尾張藩の吉田邸の人びとが、そうした状況にたいして嫌悪感を抱いていたことが知られる。

- (39) 日本史籍協会編 続日本史籍協会叢書『谷干城遺稿 1』。そのほか、『保古飛呂比』慶応3年9月10日条、『寺村左膳道成日記』慶応3年9月24日条、『寺村左膳手記』『吾藩ノ事』（日本史籍協会編 日本史籍協会叢書 12『維新日乗纂輯 3』）などを参照。
- (40) 坂本龍馬の殺害にかんしては、たとえば磯田道史氏は、「会津藩が見廻組に命じて行った、政治的暗殺であった」と指摘している（『龍馬史』、文藝春秋、2013年、初刊2010年）。
- (41) 土佐之國史料類纂『皆山集』第5巻 歴史（4）篇 第16章・5。
- (42) 内閣官報局編『法令全書』第3巻。
- (43) 京都府庁文書のうちの明治3年「諸藩邸上地件」（京都府立総合資料館〔現京都府立京都学・歴史館〕所蔵 簿冊番号：京都府庁文書 明3-19）のなかに収録されている。
 なお、「諸藩邸上地件」にかんしては、磯航「明治の京都藩邸処分」（『総合資料館だより』147、2006年）、鈴木栄樹・牧知宏「明治初年における在京藩邸地処分に関する京都府行政文書の概要」（『京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史料学的研究 2005年～2007年科学研究補助費（基盤研究（B）17320101）研究成果報告書』、研究代表者 小林啓治、京都府立総合資料館 歴史資料課編集、2008年）を参照。
- (44) 土佐藩は、慶応末年には、これら藩邸のすべてを所持していたと思われる。なお、慶応4年の「改正京町御絵図細見大成」には、それらのうち白川邸・河原町邸・岡崎邸が描かれている。
 岡崎邸にかんしては、現在の春日上通に一致するとくされる道の南側に、「土州」と記されており、その方形の大きさからすると、たいした坪数ではなかったと考えられる。もっとも、「但當時人数差置明地無御座候」という記述から、建物が存し、かつそれが使用されていた点がかがえる。その位置は、平安神宮の北側のあたりに求められよう（さしあたり、森三紀「幕末・明治維新の遺跡」〔足利健亮 編『京都歴史アトラス』VI、中央公論社、1994年〕を参照）。
- (45) 蓬左文庫に所蔵されている尾州茶屋家文書のうち。請求番号：茶-79。
- (46) 19世紀初頭ごろに作成されたと推量される「山城国吉田村古図」（京都大学総合博物館所蔵。〔分類〕標本乙4-37）では、百萬遍知恩寺の正門の南側付近が「高畠」とされており、高畑はこれに吻合しよう。
- (47) 文久から慶応期における尾張藩内の政治的な状況をめぐっては、藤田英昭「文久二・三年の尾張藩と中央政局―徳川慶勝・茂徳二頭体制下の尾張藩の政治動向―」（家近良樹編 大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書 第16冊『もうひとつの明治維新 幕末史の再検討』、有志舎、2006年）、同「幕末の徳川将軍家と尾張家十五代徳川茂徳」（『徳川林政史研究所 研究紀要』48、2014年）、同「慶応三年における尾張徳川家の政治動向」（『金鯢叢書―史学美術史論文集―』43、2016年）などを参照。
- (48) このたびの慶勝の在京をめぐっては、藤田英昭「徳川慶勝の上京と京都体験―文久三年上半期を中心に―」（『金鯢叢書―史学美術史論文集―』42、2015年）を参照。
- (49) 茶屋良与ならびに尾州茶屋家については、林董一『名古屋商人史 中部経済圏成立への序曲』発展 1（中部経済新聞社、1966年）、同『近世名古屋商人の研究』第2部・第1章および第3章（名古屋大学出版会、1994年）などを参考にして書き記した。
- (50) 名古屋市大塚三右衛門家文書のうち。長辺83cm、短辺67cm。請求番号：W21-148。
- (51) 「諸藩邸上地件」には、明治3年3月の名護屋藩庁から京都府庁にあてた文書が収録されており、それには、「但邸内之儀、表間口百四拾九間八寸、裏行百八拾九間四尺有之。名代を以

買上地にて拝借地所并売払場所上地共無之候」と書きつづられている。そこにみえる「名代」が茶屋良与、「買上地」が吉田村の地所に一致する。

なお、のちにとりあげる絵図から、吉田邸は、南北の方が長いほぼ方形を呈していたのが知られる。そうした点を前提にして、表間口149間8寸、裏行189間4尺をもとに計算すると、2万8330坪ほどとなる。この坪数と「吉田御屋敷之図」の3万3333坪をくらべるに、ひらきが小さくないのがおさえられる。はたして、そのような相違はどうして生じたのか、すぐには答えがたく、すべては後日の検討に期することにした。

- (52) 『新修 京都叢書』第2巻。
- (53) 『新撰 京都叢書』第1巻。
- (54) 「解題」(京都町触研究会編『京都町触集成』別巻2 補遺・参考資料)。
- (55) 清文堂史料叢書 第5刊『京都御役所向大概覚書』上巻。
- (56) 高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門 II 町』都市史図集・4, 東京大学出版会, 1990年。
- (57) 大正4年(1915)刊の『京都坊目誌』下巻3・下京第3学区之部・天神山町のところには、尾張藩邸について、「宝永天明元治の火災に罹る」と記されている(『新修 京都叢書』第20巻)。また、「京都洛中洛外大絵図」から、同地が焼失範囲のなかに含まれていたのがわかる(伊東宗裕『京都古地図めぐり』図番号:20, 京都創文社, 2011年。なお、京の火災図にかんしては、同「京都の火災図 京都市歴史資料館蔵大塚コレクションについて」(『京都歴史災害研究』9, 2008年)を参照)。
- (58) 名古屋市教育委員会編集『名古屋叢書』第5巻 記録編(2)。
- (59) 正保2年(1645)12月晦日に下総守に任じられ、元禄9年(1696)12月18日に刑部大輔にあらためられたとある(『新訂 寛政重修諸家譜 第1』272頁)。
- (60) 京都大学附属図書館蔵 中井家旧蔵『洛中絵図 寛永後 万治前』H-5・6など。
- (61) 「尾張藩邸・御殿の概略・変遷に関する史料」(『金鯢叢書—史学美術史論文集—』30, 2003年)。
- (62) 『尾藩世記』10・文久3年正月8日条(名古屋市蓬左文庫編集『名古屋叢書』3編 第2巻 尾藩世記 上)など。
- (63) 『東西紀聞』3に収められている文久3年3月刊行の「御旅館 御屋敷 方角略図」(日本史籍協会編 日本史籍協会叢書 142『東西紀聞 1』)。なお、同図は、田中泰彦編集・解説『幕末の京都がわかる絵図・武鑑』(京を語る会, 1989年)にも掲載されている)など。
- (64) 請求番号:図-945・946。
- (65) たとえば、「吉田御屋敷之図」にそえられている「吉田御屋敷詰役人書上」には、その一番先に「御用人ノ尾崎八右衛門様定府」と書き記されている。
- (66) 日本史籍協会編 日本史籍協会叢書 46『尾崎忠征日記 1』。
- (67) 藤田英昭氏は、成瀬正肥にかんし、徳川「慶勝よりも一回り年少で、両家年寄とはいっても養父の正住とは異なり、慶勝の手下のごとく振る舞い、その名代を務めて上京するなどしていた」と述べている(「徳川慶勝の政治指導と尾張徳川家」[明治維新史学会編『明治維新史論集 1 幕末維新の政治と人物』, 有志舎, 2016年])。
- (68) 『尾崎忠征日記』慶応3年5月19日条の「稽古場」における「炮術稽古」など、同書には武技の訓練にかんする記事が散見する。政局の中心となった京の騒乱に対処すべく、軍事力の強化にとりこんでいた点が察せられる。
- (69) 『尾崎忠征日記』明治元年12月17日条によると、東京から吉田邸にもどった八右衛門は、す

ぐさま「熱田宮」に拝礼したとする。

- (70) 注(57)の『京都坊目誌』の記述を参照。また、「元治大火図」「京都大火」「京都大火之図」によると、同地が罹災範囲のうちに入っていたのが知られる(『京都古地図めぐり』図番号：22～24)。
- (71) 前記したように、「吉田御屋敷之図」から、その主殿には「火の見」櫓が備わっていたのがわかる。さらに、『尾崎忠征日記』をひもとくに、その慶応3年2月12日条には、「今夜亥刻前、黒谷領北岡崎村民家焼失、壺軒に而鎮火相成。当御屋敷御近火に付、火消御人数貳拾五人、将曹騎馬に而引纏、吉田領境迄出張、鎮火之上引取」としたためられている。おそらく、その「近火」は、「火の見」櫓から確認されたにちがいないまい。
- これらにもとづくに、吉田邸では、延焼をふせぐべく警戒につとめていたことが把握される。あるいは、さような用心は、錦小路屋敷が焼失したことと関連するのかもしれない。
- (72) A図が請求番号：図-945、B図が請求番号：図-946のものにあたる。なお、B図にかんしては、京都大学百年史編集委員会編集『京都大学百年史 総説編』第1編第8章第1節第5項(財団法人 京都大学後援会、1998年)において掲げられている。また、その表記については、伊藤淳史・梶原義実「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』、京都大学埋蔵文化財研究センター、2007年)を参照。
- (73) 伊藤淳史・梶原義実「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」(注(72)前掲)。
- (74) 千葉豊・阪口英毅「京都大学本部構内A T21区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』、京都大学埋蔵文化財研究センター、2006年)。
- (75) 愛知県公文書館企画展解説書「尾張藩と明治維新―所蔵文書にみる藩士たち―」(愛知県公文書館、2013年)。
- (76) ちなみに、「吉田御屋敷之図」における「弓鉄砲兵法稽古場」は、A図では「御稽古場」、B図では「武場」として描かれている。また、後二者では、それらの南東のところに「馬場」が記されており、これが史料14の「弓馬砲研究之場処」のうちの「馬之場処」に相当しよう。
- (77) 『尾崎忠征日記』明治元年正月25日条、『三世紀事略』5・靖公紀事略・明治元年正月15日条(名古屋市教育委員会編集『名古屋叢書』第5巻 記録編(2))など。
- (78) 『尾崎忠征日記』明治元年正月26日条。
- (79) 『尾崎忠征日記』明治元年2月28日条。
- (80) その架橋の詳細・意図などについては、本願寺史料研究所編纂『本願寺史』第3巻・第1章2(浄土真宗本願寺派宗務所、1969年)、朝尾直弘「公儀橋から町衆の橋まで―京の鴨川と橋―」(『朝尾直弘著作集』第6巻、岩波書店、2004年、初出2001年)、高山嘉明「幕末期西本願寺の「勤王」志向」(『龍谷史壇』143、2016年)を参照。
- なお、『尾崎忠征日記』から、御幸橋の「石柱・石懸」ができあがった時期に、西本願寺は尾張藩から「橋板材木」を購入しようとしていたことなどが知られる(慶応3年5月10日・16日・17日条など)。
- (81) 「徳川家御住居沿革調書」にかんしては、『新修 名古屋市史』第3巻・第1章第3節3(岩下哲典執筆、1999年)、後藤真一「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第5篇、清文堂出版、2012年)においてとりあげられている。けれども、どちらにもその出典・所蔵先などが記されておらず、それゆえに、もとにあたって確認することがかなわなかった。
- (82) 『日本史大事典』第2巻・「京屋敷 きょうやしき」(鎌田道隆執筆)。なお、幕末の京屋敷については、同「幕末京都の政治都市化」(『近世京都の都市と民衆』、思文閣出版、2000年、

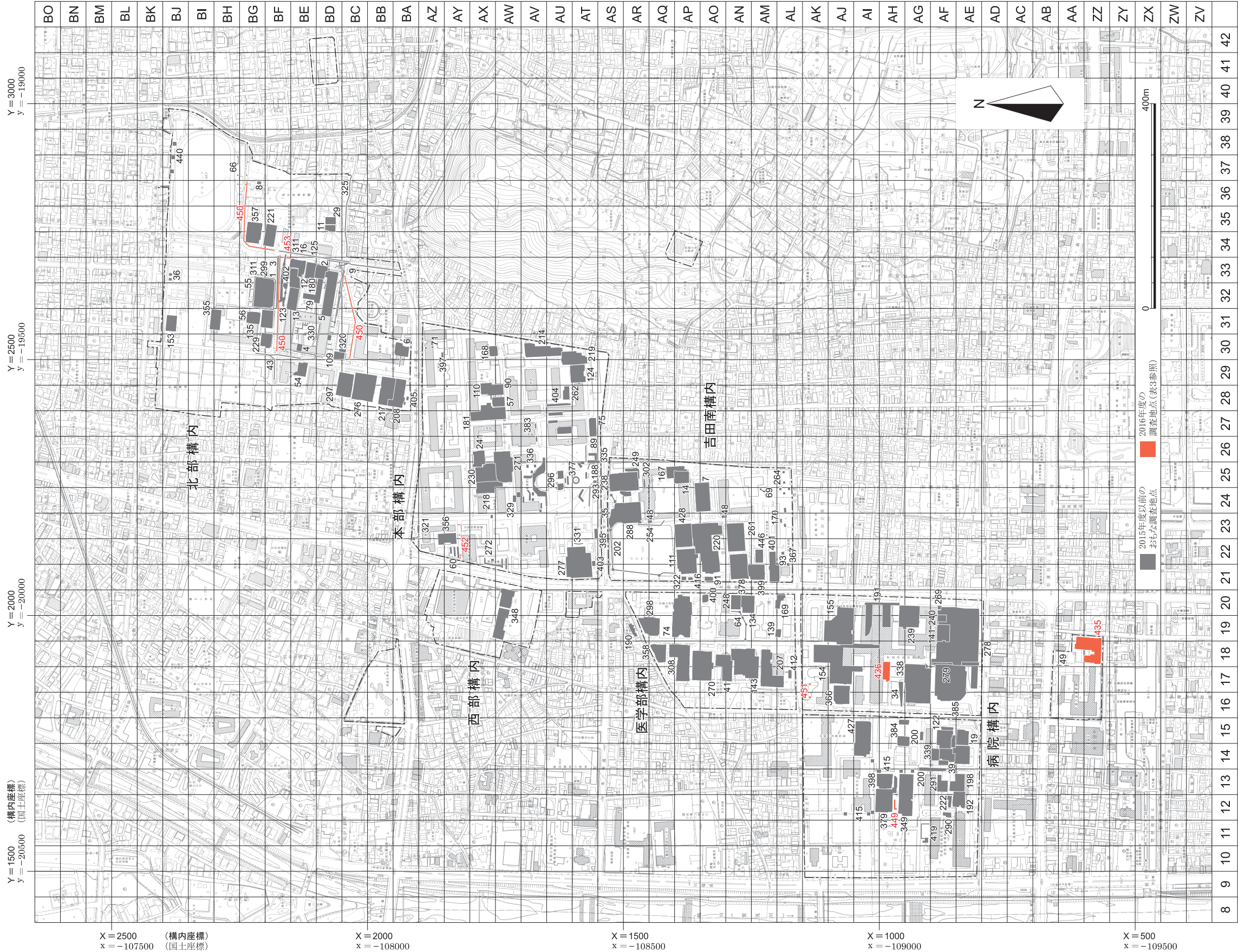
初出1992年)を参照。

- (83) 『加賀藩史料』藩末篇下巻・654頁, 編外・168, 169頁。なお、『尾崎忠征日記』慶応3年12月8日条には、「一、初更過加州侯下岡崎邸中出火、追剋鎮火」とみえている。
- (84) 文久3年3月版行の「御旅館 御屋敷 方角略図」(注(63)を参照)には、二条通以北の鴨東地域において、「阿州ヤシキ地」しか示されていない。同図では、「御屋敷」、すなわち藩邸に「▲」印を付しており、「阿州ヤシキ地」にはそれがないこと、「南禅寺」「靈山」が「阿州」「阿州イナ田」の宿所になっていること、「地」という表記から推すに、このときにはまだ建物がきずかれてはいなかった点がかうかがえる。
- (85) たとえば、慶応元年閏5月の御幸橋架設の出願書において、尊皇の立場をとっていた西本願寺は、「尤勤王之諸藩洛東之在邸も不尠」としたためている(『本願寺史』第3巻・第1章2)。このような記述から、架橋の背景のひとつとして、鴨川の東におけるそれら藩邸の存在がくみとれよう。かかる御幸橋のかけわたしが、白川村や吉田村などの住民にとっても有益であった点は、まず疑いあるまい。

京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度

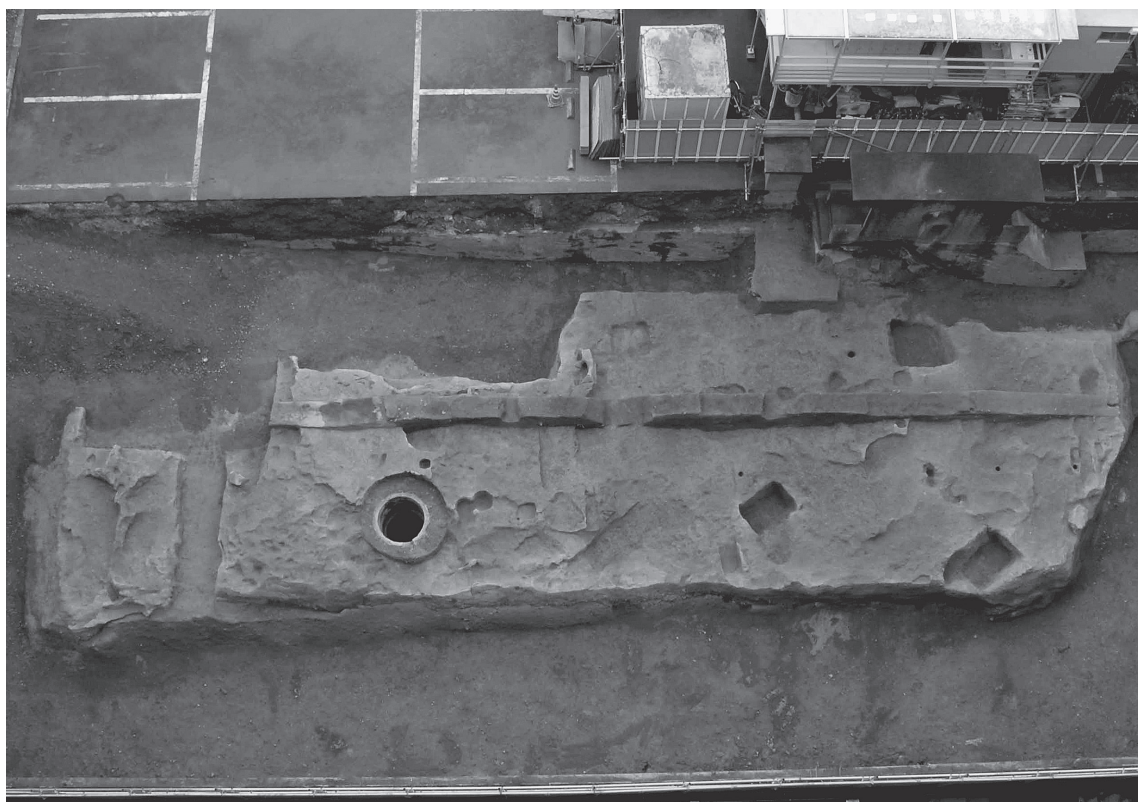
目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2・3 京都大学病院構内 A H 18 区の発掘調査
- 4～9 京都大学北部構内 B C 30 区ほかの立合調査
- 10・11 京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬
- 12～17 京 都 大 学 病 院 構 内 A E 1 9 区

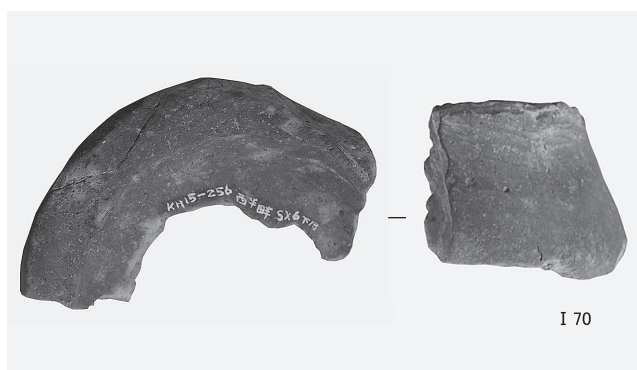




1 表土・攪乱除去後の全景（北から）



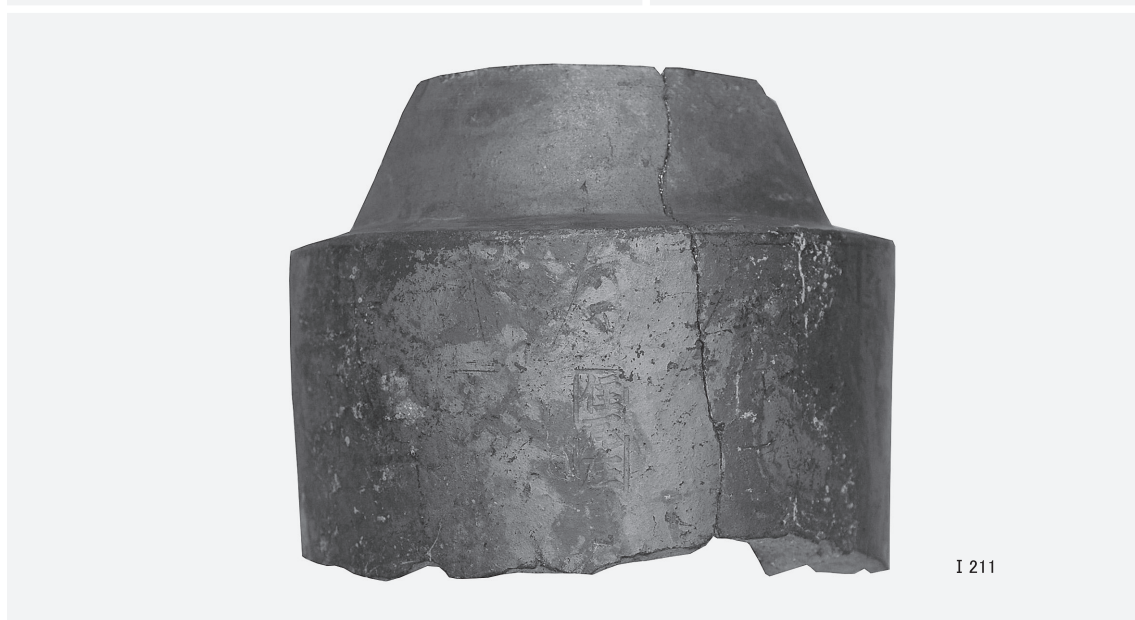
2 中世遺構掘りあげ後の全景（北から）



I 70



I 210



I 211



I 228

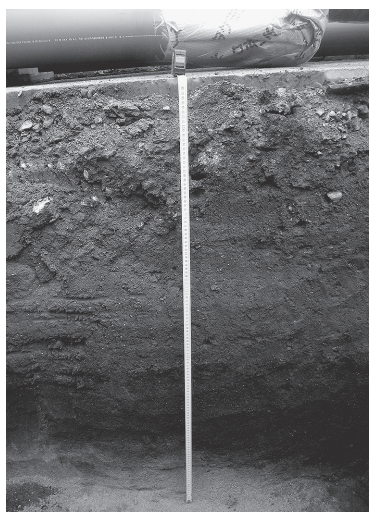
1/3



I 229

1/3

S X 6 出土遺物 (I 70瓦器), S K 1 出土遺物 (I 210・I 211瓦), S E 1 出土遺物 (I 228・I 229陶器)



1 第5工区15地点北壁の層位
(南から)



2 第5工区15地点北壁の形象埴輪出土状況 (南から)



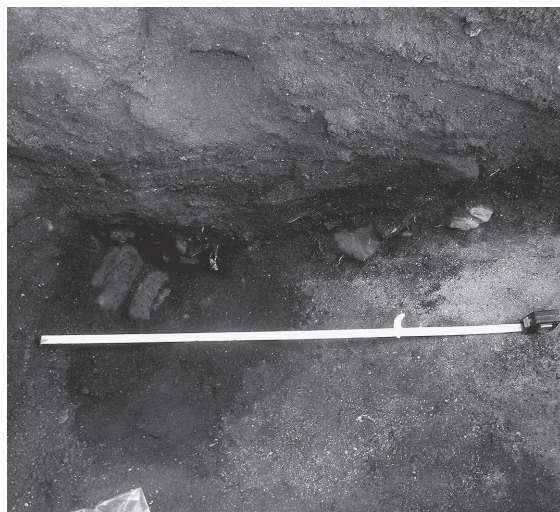
3 第5工区A地点のS X 1
断面 (北東から)



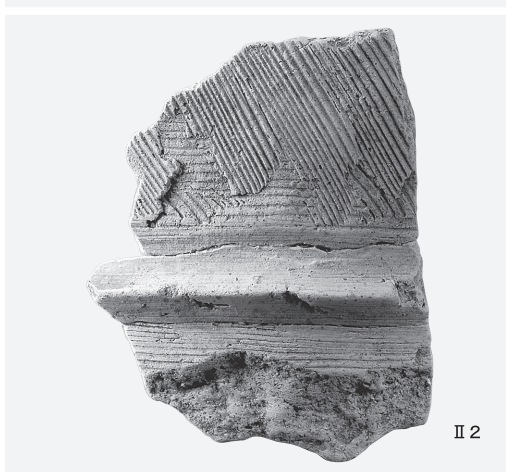
4 埋管掘削底面におけるS X 1確認状況 (南から)



5 S X 1の礫の集積 (東から)



6 S X 1の礫・埴輪の出土状況 (北から)



S X 1 出土遺物(1) (II 1 ~ II 4 円筒埴輪)



S X 1 出土遺物(2) (II 5～II 11円筒埴輪, II 12形象埴輪, II 16須恵器)



1 Iトレンチ農学部正門
付近（北から）



2 Aトレンチ平安層遺物出土状況（北から）



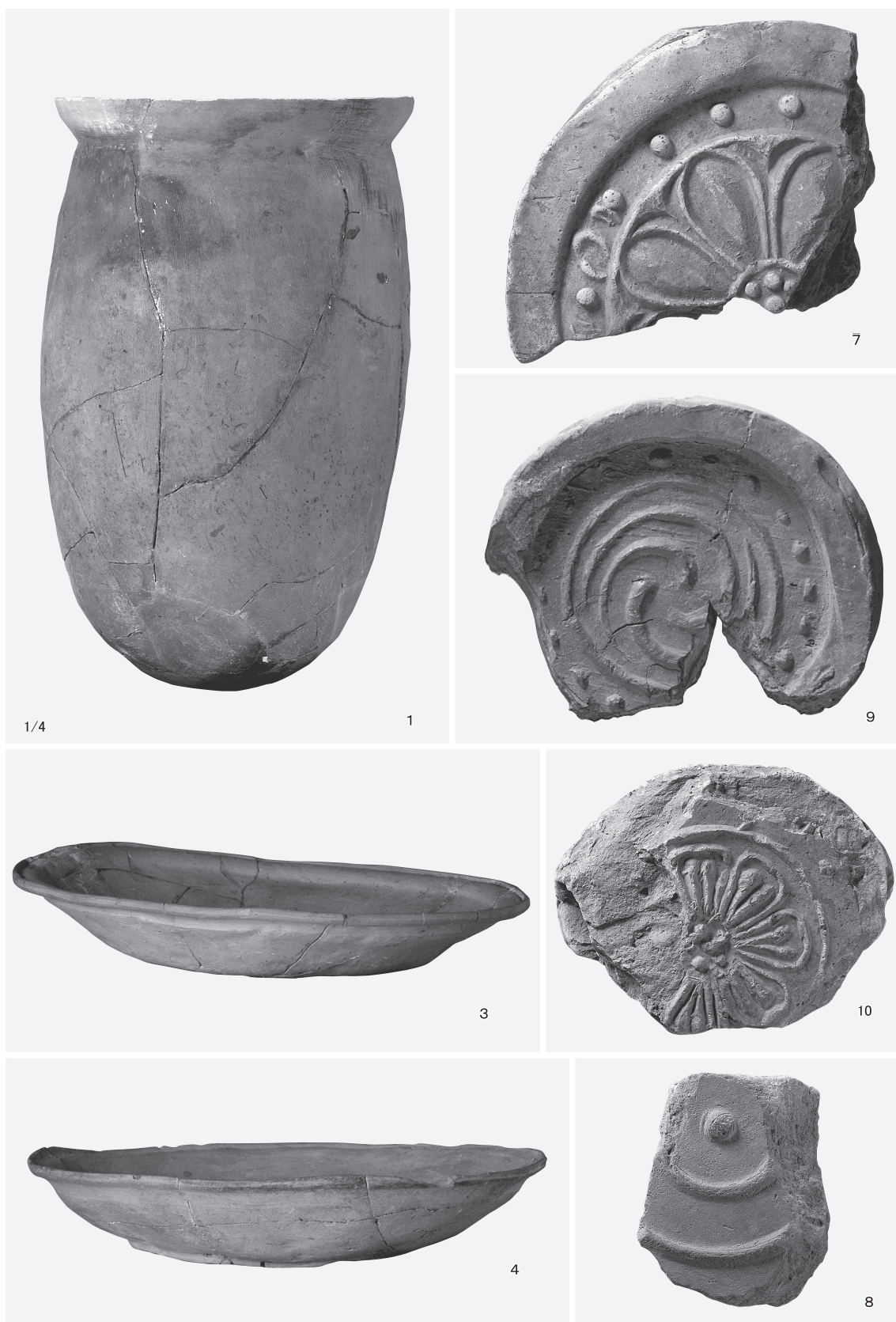
3 Iトレンチ溝状遺構甕出土状況（その1・南から）



4 Iトレンチ溝状遺構甕出土状況（その2・東から）



5 Iトレンチ拡張後溝状遺構
完掘状況（南から）



1973年農学部総合館周辺の発掘調査（1・3・4 土師器，7～10 軒丸瓦）



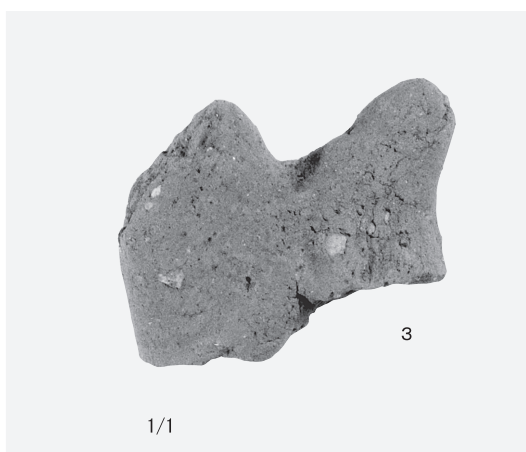
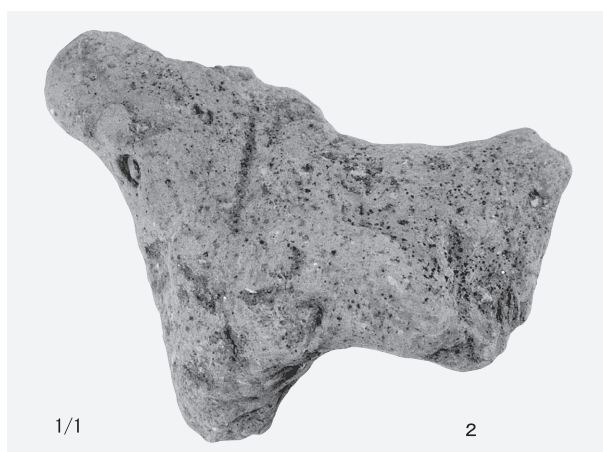
1973年農学部総合館周辺の発掘調査 (11・13～16・18・19軒平瓦)



1 吉田南構内A O22区西半域の古代中世遺構全景（北東から）



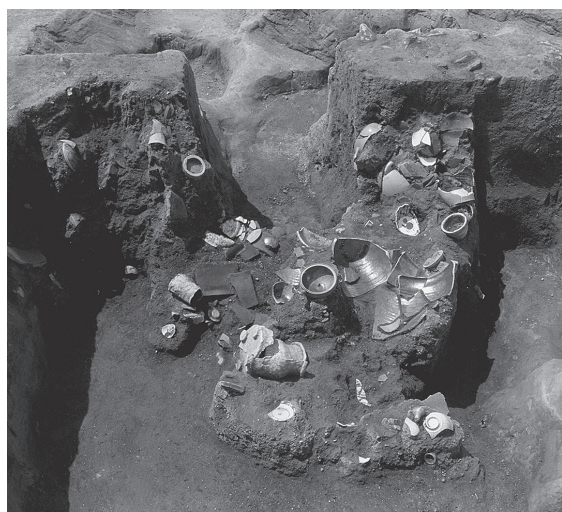
2 平安時代中期の井戸S E28（北から）



1 S E 28出土, 2 中世土坑 S K 29出土, 3 中世井戸 S E 26出土
(1は寿福滋氏の撮影による)



1 S K15上面（西から）



2 S K15遺物出土状況（北から）



3 S K15遺物出土状況（北東から）



4 S K15遺物出土状況（北東から）



5 S K15遺物出土状況（東から）



6 S K15下底部（北から）



S K15出土遺物（1 蓮月焼, 10・13・16・20～22蓮月焼模倣陶器）



34



35



37



36



43

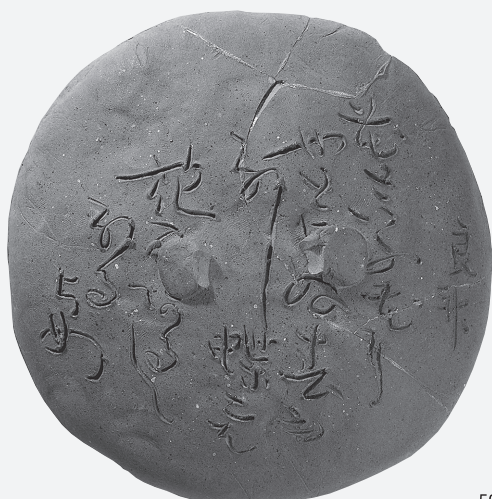


44

S K15出土遺物 (34~37・43・44蓮月焼模倣陶器)



51



52

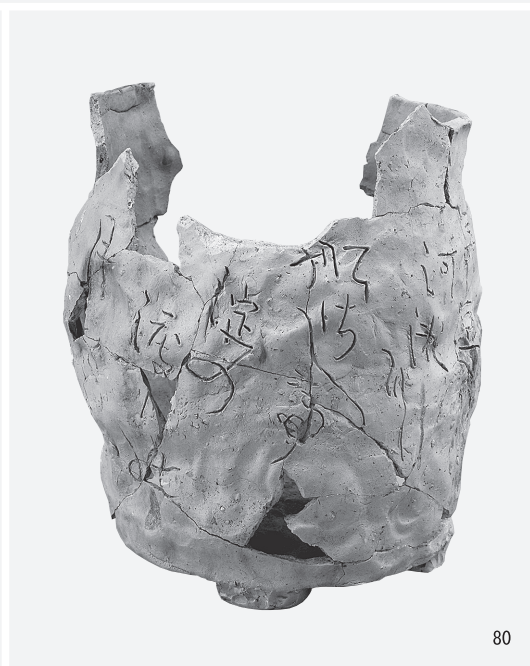
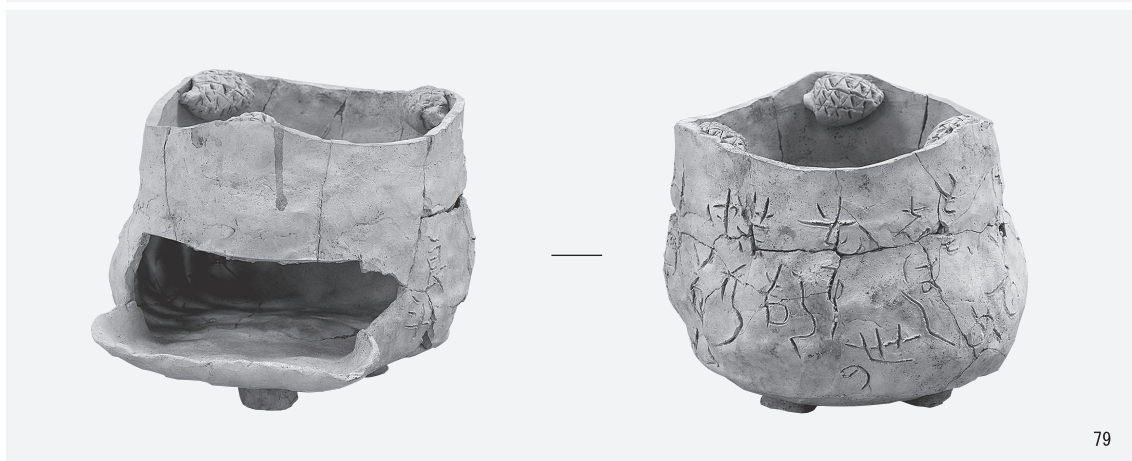


64



68

S K15出土遺物（蓮月焼模倣陶器51・52・64・68）



S K15出土遺物 (76・79~81蓮月焼模倣陶器) 縮尺1/3



S K15出土遺物 (87~89・91・92・94・98蓮月焼模倣陶器の土型)

2018年3月30日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2016年度

編	集	京都大学文化財総合研究センター
発	行	京 都 市 左 京 区 吉 田 本 町
印	刷	三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
製	本	京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300